明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十二年四月一日發行
（毎月一回一日發行）

女學世界

第九巻
第五號



博文館發行



觀櫻と
高等化粧用美顏水

元祿時代の觀櫻は、如何に艶麗嬌態を極めたであらうか、しかしそは、確かに高等化粧用美顏水を用ゐた明治美人の淸秀なる、風姿には劣れること疑を要せぬ。

【特効】色を白くしきめを細かにしつやを美しくす又化粧下に用ふれば巧妙なるはたらきにて白粉心のまゝにのび殊にあれ性の方には最もよろし

○本品御購求の節は化粧用美顏水と御指名を乞ふ
▲東京市內は勿論日本全國各地到る所の有名なる化粧品小間物店にて販賣す





四月一日より

一第十七回新柄陳列會

一懸賞課題光琳式明治模様陳列

一寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右弊店内に於て盛大に開會致候間御誘ひ合され賑々敷御遊覧被成下候様奉願上候

一兒童博覧會

右三越呉服店内特設陳列場に於て開會致し大方の御縦覧に供し候

東京日本橋

三越呉服店



女學世界第九巻



第五號目次

新製

御料たつた

純無鉛白粉

◉此白粉出でゝことしの春こそ



◉お顔の艶の一際見違ふべく候


四月一日より開會
女子手藝品展覽會
豫て募集致せし造花、刺繍、編物、袋物、
押繪、摘細工等總て女子の手藝に成りし最新の品々を陳列
して御高覽に供し候間何卒賑々敷御來觀の程奉願上候
東京南傳馬町
大西白牡丹

女(いの一)

裁縫おさいくもの

新刊（附實用小物）新刊

共立女子職業學校教師 伊藤文子 小川錠子 高田久子 共著

誰れにも手輕に出來ます

手藝中で最も手輕に複雜な道具を使はず普通裁縫の心得のある方には誰れにでも習得さるのは（おさいくもの）であります本書はその製作順序を細説した上石版色刷と寫眞版、木版などで外形から分解圖までも示し實物大の原型圖を掲げ説明と相助けて懇切に書いてあります本書を手本にして寸暇を利用すれば立派な美しい家庭要具が製作されて趣味と實益とを兼ね得られます

和裝美製 全一冊 正價金九拾錢 郵税金八錢

金子文江子 三好幸子 石川壽美子 共著

家庭造花術全書

（第二版）
和裝美製全二冊
正價壹圓六拾五錢
郵税金十二錢

女子高等師範學校助教授 神田順子著

裁縫新教授書

和裝美製上卷
正價金六拾錢
郵税金八錢

東京日本橋

大倉書店發行

振替貯金二三八番

女(いの二)

國民文學は民族の血脈、國家の生命也。わが國民文庫は過去三千年の歷史を作り又我民族と共に萬代不滅なるべき日本古文學の精粹を鍾む

即ち學者稱して國民文庫と云ふ。これ汎く國民に讀まるべき我國古來の名著傑作を網羅せる一大文庫の謂也。校訂の嚴正なる、印刷の鮮明なる、將たまた裝幀の堅牢高雅なる、優に書齋の裝飾ともなすべし。思ふに世の愛書家は之によりて其渴を醫すべく、また家庭の趣味を養ひ、高尙なる娛樂の料を得んとするものは之によりて其望を滿たし得べき也。……（往復端書にて御申越次第規定書送呈）

國民文庫刊行會

會員募集

略則

△會期　滿二ヶ年　△入會期限　來る四月末日　△入會金　金一圓

△會費　一ヶ月金二圓　△製本　中村不折畫伯意匠 菊判クロース約八百頁　△定員　三千名

書目

- 源氏物語　二冊
- 枕草紙、竹取物語、伊勢物語、土佐日記　一冊
- 方丈記、徒然草、寶物集、砂石集　一冊
- 大鏡 增鏡 今鏡　一冊
- 萬葉集　二冊
- 和歌八代集　一冊
- 山家集、金槐集、新葉集、其他數種　一冊
- 源平盛衰記　一冊
- 太平記　一冊
- 平家物語、保元物語、平治物語　一冊
- 曾我物語、義經記、お伽草紙　一冊
- 謠曲五百番　一冊
- 狂言集　一冊
- 落語集　一冊
- 近松集　二冊
- 八犬傳　三冊
- 西鶴集、其磧集　一冊
- 川角太閤記、甫庵太閤記、其他三種　一冊
- 德川時代小說集　五冊
- 俳句俳文集　二冊
- 淨瑠璃集　一冊
- 弓張月　一冊
- 心學本　一冊
- 狂歌、狂文、川柳集　一冊
- 近世歌文集　一冊

計卅六冊（一冊一圓卅三錢餘の割）

評議員（イロハ順）

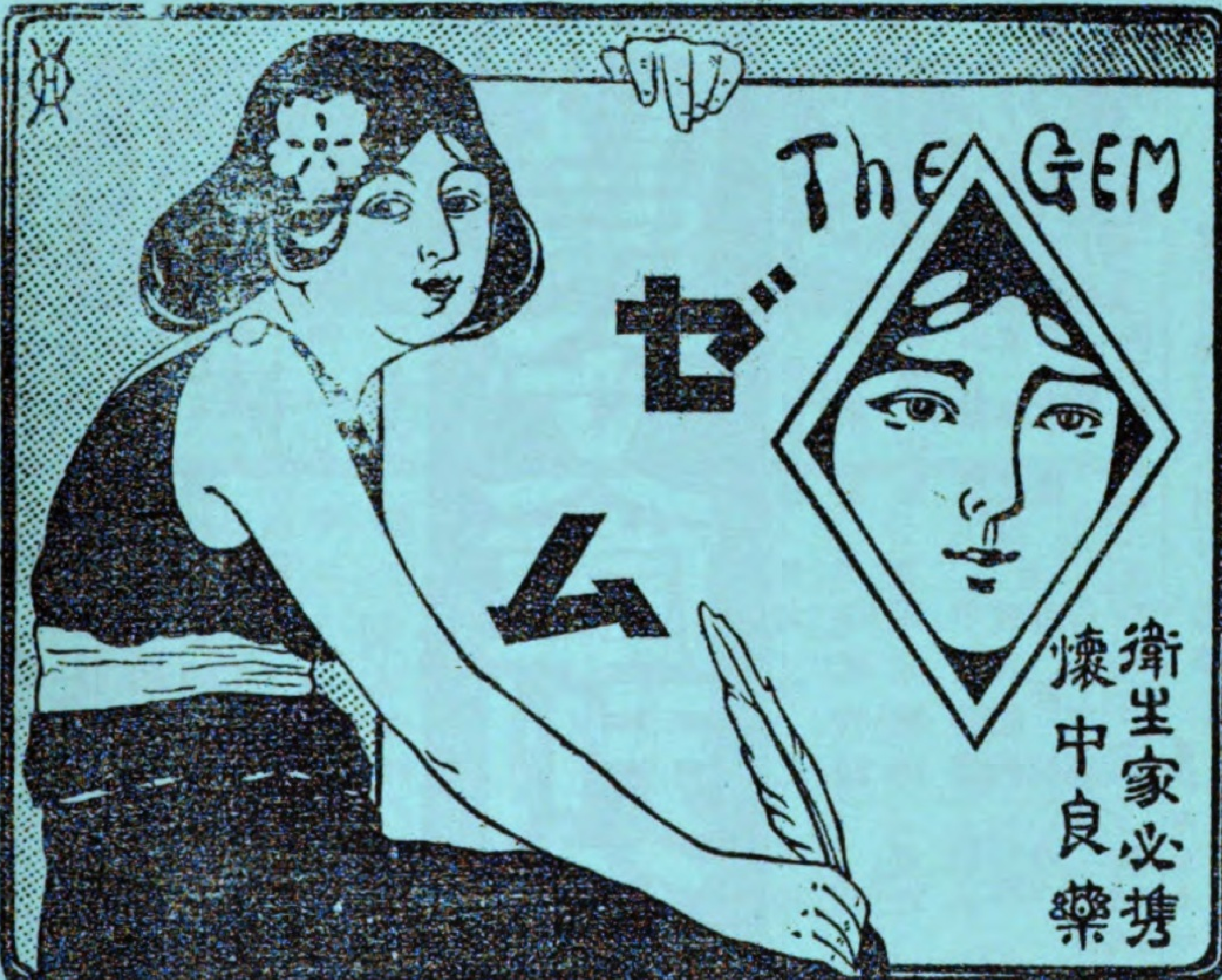
- 文學博士　芳賀矢一
- 文學博士　萩野由之
- 國學院大學講師　畠山健
- 帝大圖書館長　和田萬吉
- 文學博士　上田萬年
- 山路愛山
- 高等師範教授　松井簡治
- 文學博士　藤岡作太郎
- 文學博士　小杉榲邨
- 朝比奈知泉
- 高等師範教授　佐々政一
- 東宮侍講　本居豐穎
- 女子高等師範教授　關根正直

▲申込取次所　東京堂、至誠堂、上田屋、林平、東京大阪寶文館

東京市神田區小川町一番地（電話本局七三二番）（振替東京一八五七二番）

國民文庫刊行會

女（いの三）



嬢の持てるゼム

ゼム定價
七十五粒入十錢
百六十粒入二十錢
四百粒入五十錢
九百粒入一圓
容器入
ゼ 八十錢

主効

◎消化を能くし○食傷○宿醉○頭痛
◎氣分を爽にし○眩暉○水傷○喉喝
◎音聲を美くす○舟車醉○時候傷

一粒含めば元氣爽快
二粒忽ち消化を能くし
三粒にして惡疫を防ぐ

妾の描きましたのは誰の顔でしょう?
御存じの方はあて、御覧遊ばせ、
『春の女神でしょう』
い……ゝ……え
皆様よくお馴染の癖に!?
ホヽホヽヽヽ、ホラ……アノ……
ゼム子嬢ですよ。

本舗 東京大阪 山崎榮三郎 本店 攝張前

女(いの四)

霓裳



田中製版所三色版



千代田白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令孃に愛用せられ高評嘖々たり。
白（大瓶卅五錢 小瓶二十錢） 水製 廿五錢
粉
香（大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢） 特製 七十錢
油
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

女（ろの一）

女(ろの二)

專賣特許 マセギペン發賣（安價ナル上等萬年筆）

内外泉ペン類の缺點を完全に補ひ我國に於て始めて特許を與へられたる調節自在堅牢優美なる

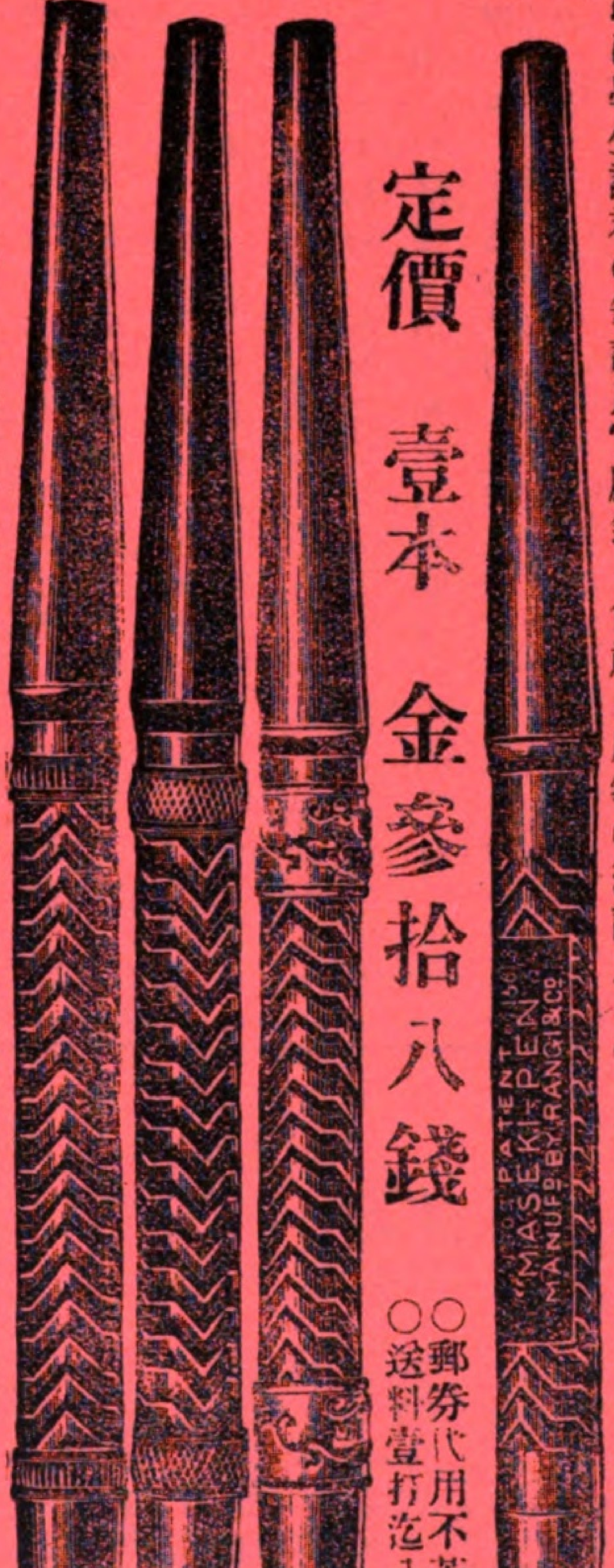
世界無比の實用萬年筆

なれば學生諸君の筆記用官廳銀行會社商店等の簿記用其他旅行用携帯用には最も適切なる必用具也

並製 定價 壹本 金參拾八錢

○郵券代用不苦 ○送料壹打迄八錢 ○壹打已上割引

別製



（壹號 貳號） 參號 四號

定價 一壹號金張金具付金壹圓貳拾錢○貳號純銀金具付金壹圓 參號金鍍金具付金八拾錢○四號金鍍金具付金六拾錢

● 近來泉ペン類の實用に適せざる類似品續々有之候間特許 **マセギペン** の特色を御見認めの上御購入被下度候也

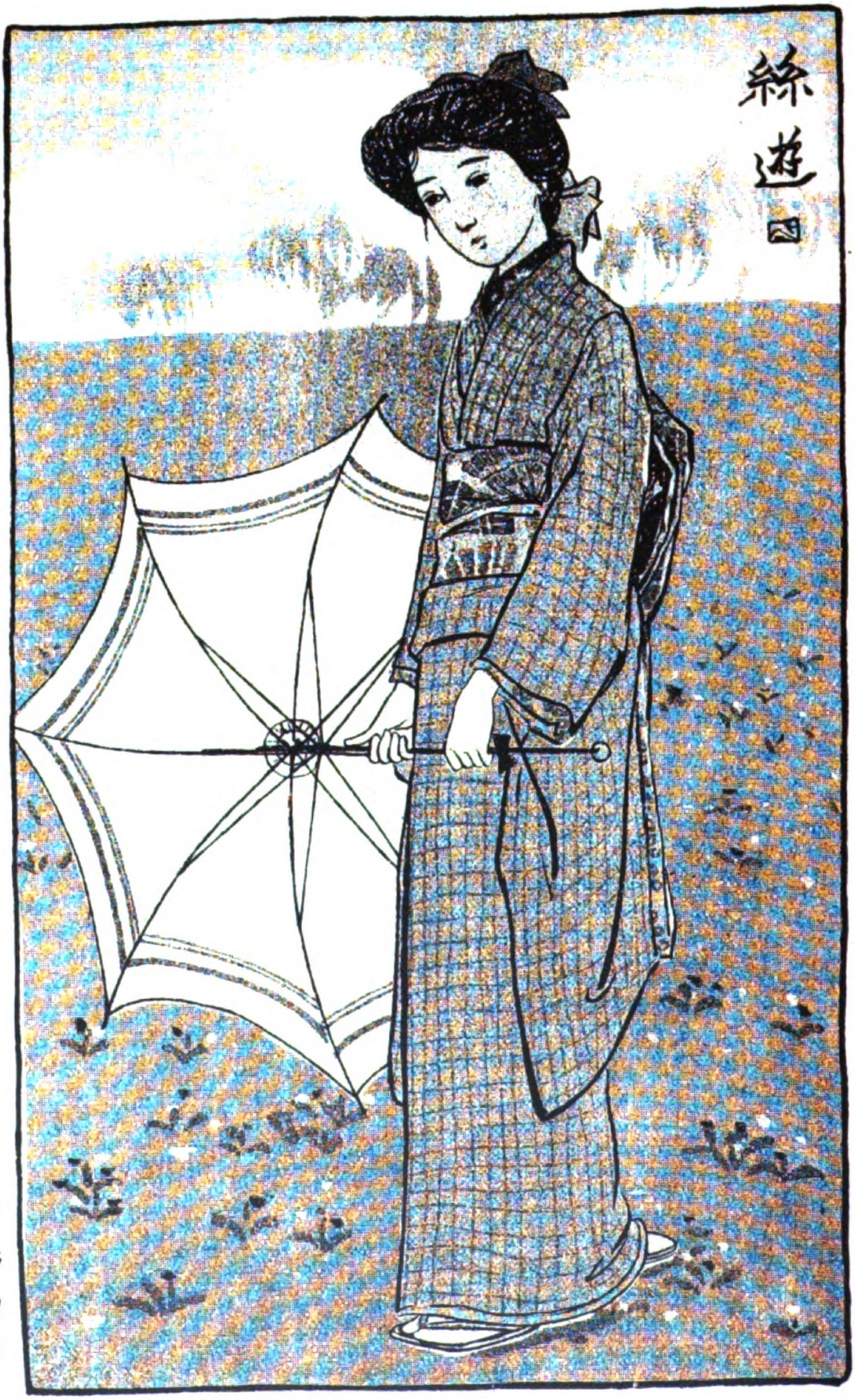
○販賣御希望の方は便宜御相談に應ず
○説明書御通知次第進呈す
○賣捌所は到る所の文具店洋品雜貨店等にあり

特許如意軸 ランギペン發賣本舗 東京市神田區鍋町六番地 **欄木商會**

長二六 電話本局二一七番 振替貯金口座六〇四參番

女(ろの三)

女（その四）



日高嶋助筆

女(はの二)

新流行指環



(1) K18	中天ルビー兩端ダイヤ十入	金參拾圓
(2) K18	クラブ形眞珠入	金拾貳圓半
(3) K18	櫻爪眞珠入	金拾貳圓半
(4) K18	眞珠入	金拾圓半
(5) K22	菊花透明	金貳拾參圓
(6) K22	梅花彫白金入	金拾五圓
(7) K22	月ニ梅白金入	金拾參圓
(8) K20	竹彫白金入	金拾圓

商品目錄出來仕候(送料四錢)

東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西
電話本局二〇四〇番振替口座一五二一四番

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最稱實…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて**帝國大學**病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の**月經**閉止月經**滯**り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛



●肥滿病新藥（米國新輸入）



小供の折**美愛**と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〱肉太りたる爲め上圖の如く**醜婦**となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人◎ぶと〱ふとり◎血太り◎肉太り◎酒太り◎水太り◎顏赤◎にきび◎ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり誓て**美顏**窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

肥藥價 一劑一圓五十錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 四劑五圓半 送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七七番 **小宮愛生堂**

女(はの二)

[illegible]

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥なを配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する亮等丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮はへぎはまゆげひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し抜毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ●●●

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

本舗

●●大取次右ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市

本郷六丁目赤門前	瓜生藥局
麹町區紀尾井町三	齋藤藥局
日本橋檜物町十八	龜田藥局
京橋區八官町八	野田藥局
神田淡路町二の四	森田藥局
芝田町四の一二の二	加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二	岩本商店
赤坂田町四の一	竹内藥局
同青山北町五	四井藥局
本所吉岡町廿五	小島藥局
四ツ谷大傳馬町二	永野藥局
高松市片原町	新明藥局
堺市大寺南門東入	一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角	福知藥局
京都市下京區五條通り富小路行當り	安江洋反物店
大阪市平野町二	丹平商會
丸龜市本町	櫻井藥局
名古屋京町三丁目	飯田藤七
同 同	荒川長太郎
同 同鐵砲町三丁目	谷田藥局
神戸元町一丁目	西村開東局
廣島市橋本町	萬代藥堂
神奈川青木七軒町	水崎藥店
仙臺市新傳馬町	櫻井藥局
岡山市橋本町	加藤藥店
弘前市下土手町角	菊地藥店
大津市菱屋町	磯崎藥局

大槻如電先生序
原田竹外先生書

(第七版)

習字女子用文

本書は竹外原田先生が最も得意の草書體なもて揮毫せられし女子習字本にして筆勢漫りに高尚に失せず又卑俗に流れず彼の婦女子に應しからぬ偏畸磊落の字體を避け專ら優美淸節を旨とせられたれば本書に依りて習得せらるゝ時は自ら心裡の淸操淑節を其文字に蘊蓄し以て雅の氣風を其筆端に髣髴せしむるを得べし又本書の文章は簡潔明晰にして懇切篤實應用を主とし徒に繁冗粗漫の言辭を藉りて無用の虛飾を施すを爲さず實用を貴しとすれば即ち本書は女子作文の軌範として亦最も好適の良書たるを失はず此一本を座右に供へんか習字作文兩ながら同時に修め得べき一擧兩得の良書なり

木版刷和裝全一冊
定價金貳拾五錢
郵税金四錢

倉田紙登編

(再版)

女子用文資料

本書は女子用文を類別して許多の辭句を蒐めたるもの、されば此書に據りて何人も容易に簡潔なる書信を爲す事を得べし、日用文を漫然蒐集したる書は數多あれど辭句を蒐めて用文の資料とすべきもの本書をおきて未だ之あらず

四六判洋裝全一冊
紙數三百餘頁
定價金二十錢
郵税金四錢

村松清蔭先生著

(第四版)

女子書翰文

手紙は用事を辨ずるを第一の目的とす、高尚ぶりてひねくれたるは見にくきもの、女子に於て殊に然りとす、此書著者が意を用ゐて日用適切の題下に流暢簡明の語を選みて實用を專とせられたれば、女子書翰文の軌範として右に出るものなきを信ず

和裝美本全一冊
行書活字
紙數六十餘頁
定價金十五錢
郵税金四錢

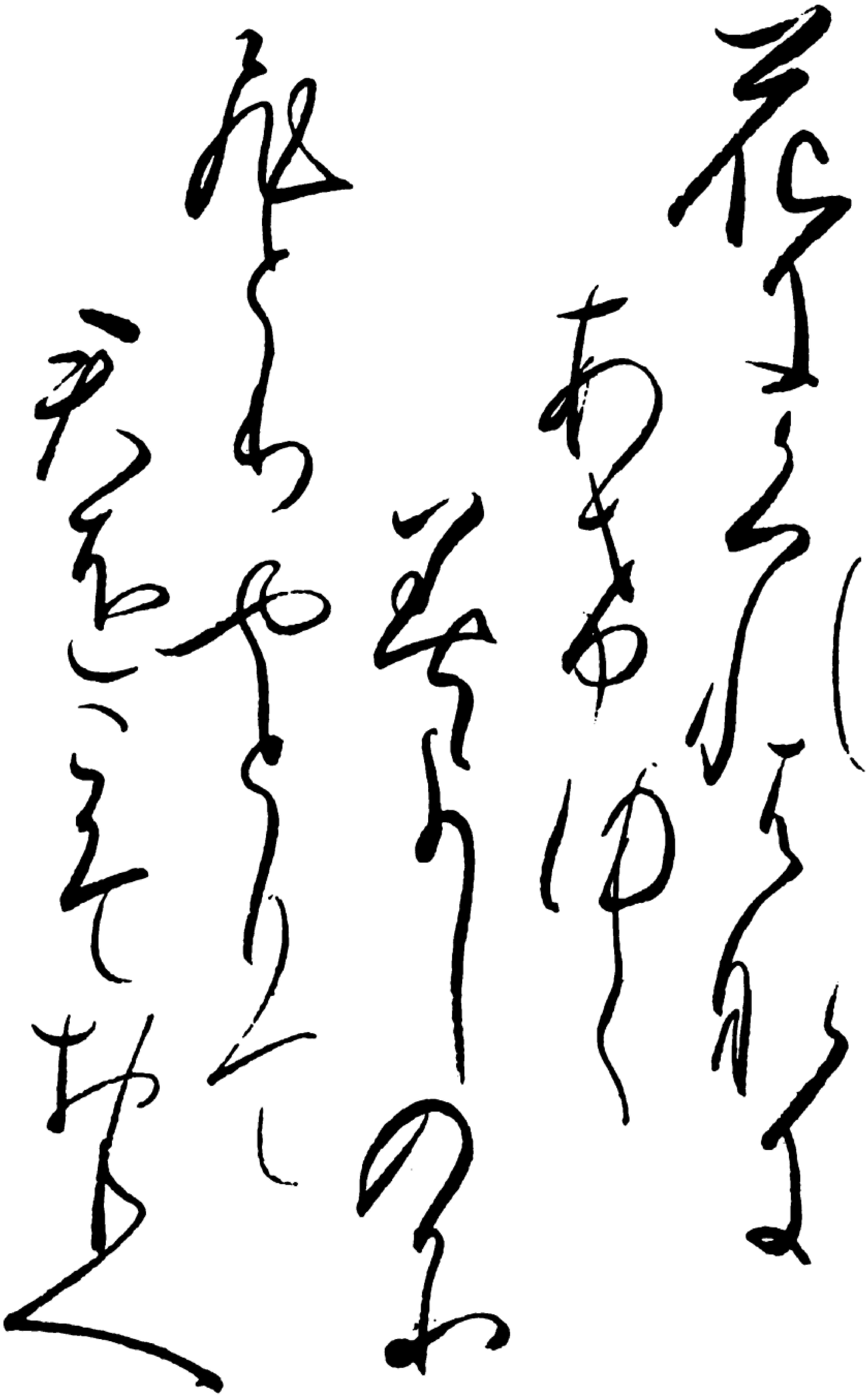
發行所 東京神田小川町四一 振替口座(八四六一) 文錦堂書店

女(廿の三)

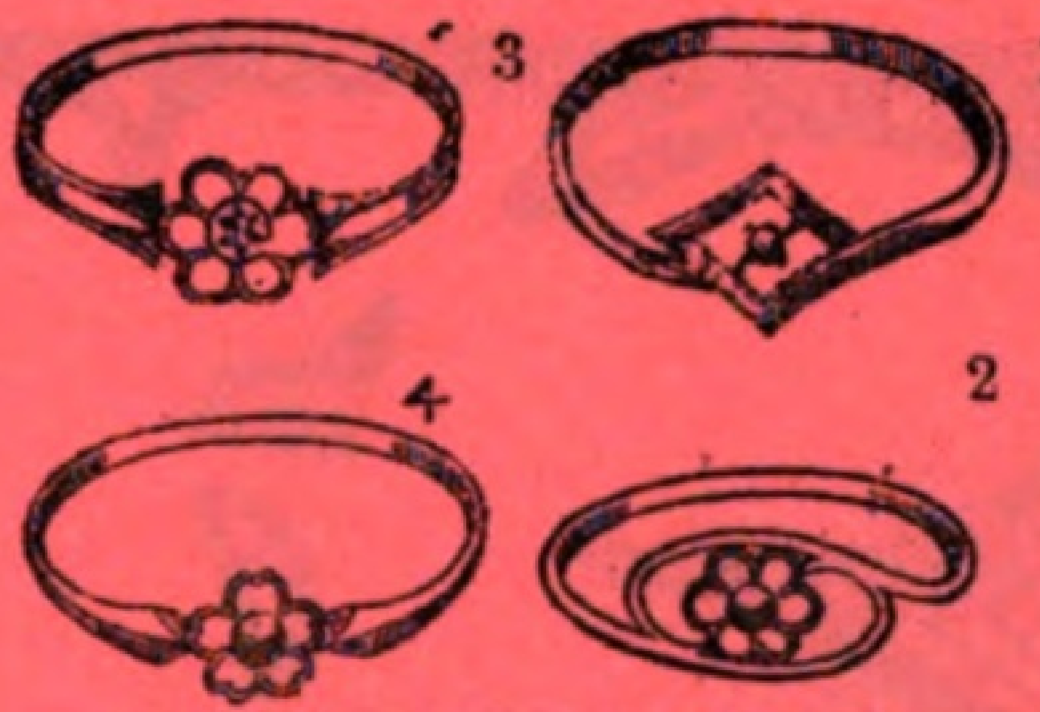
女（はの四）



河崎蘭香筆



塚原こよ子筆



金製指環

(1) 十二金製電形眞珠入 指環 價一圓八十錢

(2) 十二金製水形眞珠入 指環 價一圓四十錢

(3) 十二金製中劍形光石入 指環 價一圓四十錢

(4) 十二金製櫻形眞珠入 指環 價一圓三十錢

（但何れも絹天箱付）

●電話又は「ハガキ」にて御注文之節は郵送料市内五錢地方十二錢申受候



金側時計

銀彫側片硝子十一形中蓋付器械ニツケルシリンドル頭引鍛廻シ龍頭巻 時計 價金四圓九拾錢

銀斜子側無双十二形中蓋付器械流金石入シリンドル龍頭巻 時計 價金六圓五拾錢

銀彫側片硝子十三形中蓋付器械ニツケルシリンドル頭引鍛廻シ金屬繪當龍頭巻 時計 價金五圓七拾錢

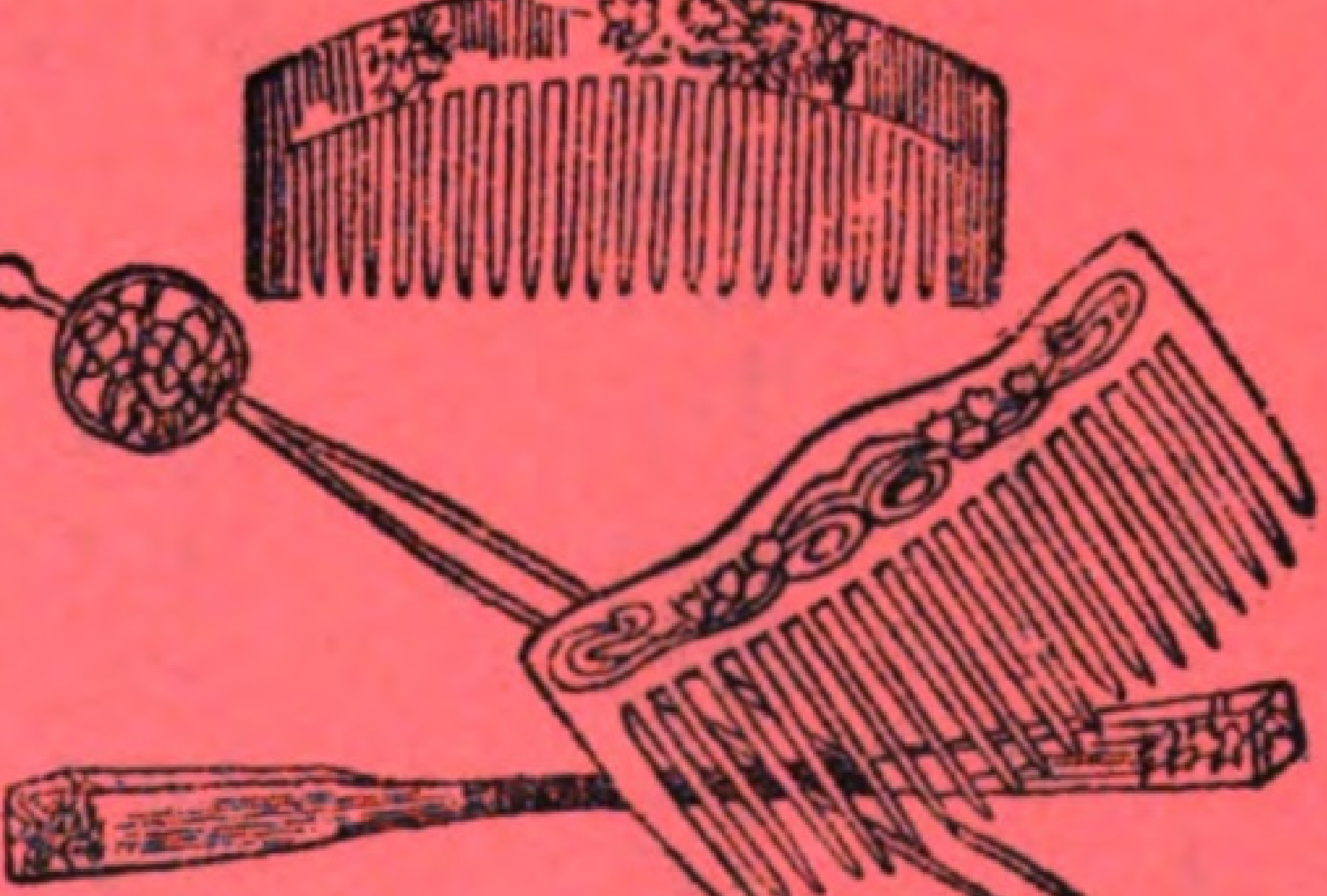
東京淺草區茅町二丁目六番地

時計眼鏡貴金屬指環類

大隅商店

電話下谷六五七番

▼意匠斬新破格廉價正札附▲



儀式用鼈甲 櫛笄

象牙蒔繪 櫛中差

金銀寶石入 簪指輪

佛國製季節向

巾廣珍柄 リボン

米國製差心持好新形 タボ櫛

珊瑚珠本場土州ヨリ直輸開始

市價ヨリ一二三割方慥に安價願候

御持古シノ小間物交換仕候

神田須田町（電話本局二〇七六番 振替口座二八一一番）

鼈甲小間物商

三井屋德次郎

京橋新橋際 博品館内支店

神田裏神保町 東明館内支店

女（にの二）

従來の長唄中文句の極て卑猥なる者或は文句の誤れる者少なからず本書は斯道諸大家の垂教を乞ひ改竄又は訂正せし者也

●改良美濃用紙、半折、木版印刷、和綴美本、毎編上下貳册壹册拾五錢

懐中稽古本 長唄大全

一編（上）翁（千歳三番叟）鶴龜、賤機帶、吾妻八景、筑摩川、吉原雀、松の綠、土蜘、
一編（下）老松、勸進帳、鞍馬山、角兵衛、西王母、山姥、花の友、秋色種
二編（上）羅生門、綱館の段、櫻狩、助六、外記節猿、玉藻前、石橋、
二編（下）若菜摘、木賊刈、時雨西行、望月、小鍛冶、越後獅子、蜘蛛拍子舞
三編（上）橋辨慶、喜三の庭、五郎、花見踊、常磐の庭、淡島、英執着獅子
三編（下）高砂丹前、竹生島、鷺娘・狂亂、安宅の松、一人椀久、浦島
四編（上）安宅勸進帳（問答入り）娘道成寺
四編（下）矢の根五郎、靱猿、雛鶴三番叟、淺妻船、犬神、蓬萊、大原女、猿舞、七福神
五編（上）船辨慶、三曲松竹梅、汐汲、忍車、舌出し三番叟、正札附根元草摺
五編（下）傀儡師、供奴、傾城、與作、鳥羽繪、連獅子、高尾ざんげ
六編（上）六歌仙、不動、岸の柳、操り三番叟、濱松風、初しぐれ
六編（下）紀州道成寺、俄獅子、舞扇、枕慈童、新松風、月の巻
七編（上）新曲浦島、紅葉詣、今様小鍛冶、初子の日
七編（下）今様百夜車、巽八景、松竹梅、梅の榮、熊野
八編（上）目利安廿餘番

以下引續發行仕候間何卒御購求の程願上候、本書は演藝會おさらひ等の御携帯には、頗る便利なる稽古本兼用のものなり

長唄大全 合本

右は是迄發行せし綴別十册を美麗なる和綴全二册に合本とし稽古本用に製本せしものなり

一編より五編迄
改良半紙全二册
上製 金一圓七十錢
並製 金一圓五十錢

懐中 長唄百番

右は長唄大全第八編迄の番組惣數一（百番を活版にて調製せし懐中用なれば演藝會又は旅行携帯に頗る使なる珍本なり（目下印刷中近日發行仕候間何卒御注文被下度奉願候）
歌舞音曲會校訂

立五寸、横三寸六分
洋綴美本
上製 金五十錢
並製 金四十錢

●富本全集

全八册第一編漸次發行

第一編目次 長生、淺間、玉川、くらま、乙姫、老松

改良美濃半折（一册正價金廿五錢八册金貳圓也）（豫約前金 金壹圓六拾錢）
改良半紙大形（一册正價金卅錢八册金二圓四十錢）（豫約前金 金貳圓也）

發行所 東京市日本橋區住吉町二十番地 法木書店
發賣所 東京市日本橋區通油町十八番地 水野書店

女（にの三）

大學白粉

鉛の無い

芳香の高い新化粧料

明治の美人には明治の化粧



春の化粧には大學白粉

女(にの四)

和氣藹々



諾威國皇太子グスターフ、アドルフ殿下と妃マーガレット、ヴヰクトリヤ殿下並に二王子

學習院女子部紀念會



記事参照

毛髪を黒く長くふさくする
椿油にて精製したる

女學世界愛讀者に限り本店は一割引

ランラン香油

毛髪の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衛生大家及び毛髪を大切にせらるゝ御婦人方の實驗證明せらるる處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランラン香油は最も純良なる椿油に毛髪の營養に必要なる藥劑を加へローズバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髪の助育を専一としたる香油也

發賣元 大阪西區新町通三丁目 福田源次郎商店 電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番

東京販賣所

日本橋區通鹽町 佐野大和屋

日本橋區橫山町 森本支店

日本橋區橫山町 脇田盛眞堂

神田區橋本町 松井號支店



色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる

兩種共一瓶定價各廿五錢送料八錢づゝ

ランラン化粧水

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆様の御承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あることと發見せられましたランラン化粧水は牛乳とレモン液とを調配したる最新最良の美顔劑を加へて色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日焼け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

女（ほの一）

ムレー及ランマン製「フロリダ、ウオーター」はハンカーチーフに撒らし又は化粧、沐浴等の使用に向つて最も高尙適當なる上品にして香氣優雅常に心身爽快を感ずるを以て洽く世界各國に高評を博せる香水なり

本品は芳香馥郁なる花卉及薫氣を蒸溜して採取せる純粹の原料を精選して鑒造せるものなれば四時其香氣を變ずるの憂あることなし、是れ本品が殆ど過去一百年間貴紳淑女間に其聲名を認識せられ世界的流行の高等化粧品として賞讃愛用せられし所以にして決して偶然に非るなり

近時本品の成効を羨み粗惡品を僞造し廉價を以て之を市場に販賣せんとする奸商輩出し本社が古來貼用し來れるレッテル即ち蝶と小鳥とが花の飾環に息ひ中央の花壇上に噴水奔騰し右方には一青年の音樂を奏し左方には一少女の小鳥と遊べる等の繪畫を僞造し且つ英文にて印刷しある「フロリダ、ウオーター」、ムレー及ランマン、紐育市ランマン及びケンプ特製」等の文字の配置を巧みに模倣するに至れり

之に依つて本社は前記の弊害を防がんが爲め玆に圖を以て示せる如く「ランマン及ケンプ登錄商標」と記せる白色のレッテルを各瓶毎に貼付せり御購求の際は深く御注意あらんことを希望す





本社製造の「フロリダ、ウオーター」は日本帝國の各都市に於ける化粧品販賣店及び西洋小間物店等にて販賣す

女(其の二)

□□□家庭と文學を調和せる、最好無類雜誌（內容は實物に就て見よ）□□□

女子文壇

四月一日發行（毎月一回）五卷第五號　一冊拾五錢　郵稅壹錢五厘　半年（八冊）壹圓參拾四錢

口繪

原色名畫 薔薇　石版 古洞氏着色畫　肖像 正岡秋子、國木田治子、竹內政子三作家◎生田葵山、尾上柴舟二夫人◎功勞ある外國二婦人◎誌友面影◎和洋料理實習の十葉入

○○人間一生の大事業 良き頭腦をつくる事……▲▲▲羽仁もと子▲▲▲

○○作中に現れたる女性……▲▲▲現代文士五十餘名▲▲▲

○非論理……戶川秋骨

○君……服部躬治

○新派和歌の趣味……窪田通治

○月の[illegible]人……三木露風

○抒情詩……森川葵村

○苦勞性の女……福光東衣

○花言葉……水野葉舟

○嬉しき想出（英文）……河井道子

○無垢の處女を陥れんとする恐るべき誘惑……かげろふ

○○學校を出てからの實行……▲▲宮川壽美子▲▲

○○實業教育を起したる動機……▲▲嘉悅孝子▲▲

▲青春の女子が熱血を注げる文章

詩歌無慮數百篇雜誌界唯一盛觀

▼投稿自由懸賞確實

衞生問答 醫學士北島孝夫擔任

新年號より本社に取揃あり希望者は速に申込を乞ふ

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社（振替口座壹七貳九番▲電話本局六百七番）賣捌所全國到處にあり

女（ほの三）

文字が上手に書ける程喜しいことはありますまい

悪筆と能書の人

とは其身一生に及ぼす損徳はどんなに大した事でせう

本會獨特の特許速成通信教授の方法に依れば如何なる悪筆の方にても短日の練習にて頗る上達すること全く機械的であります、

顧問 伯爵東久世通禧閣下 一草行假名共六ケ月卒業

女子部書者 小野鵞堂先生 外講師大家數名

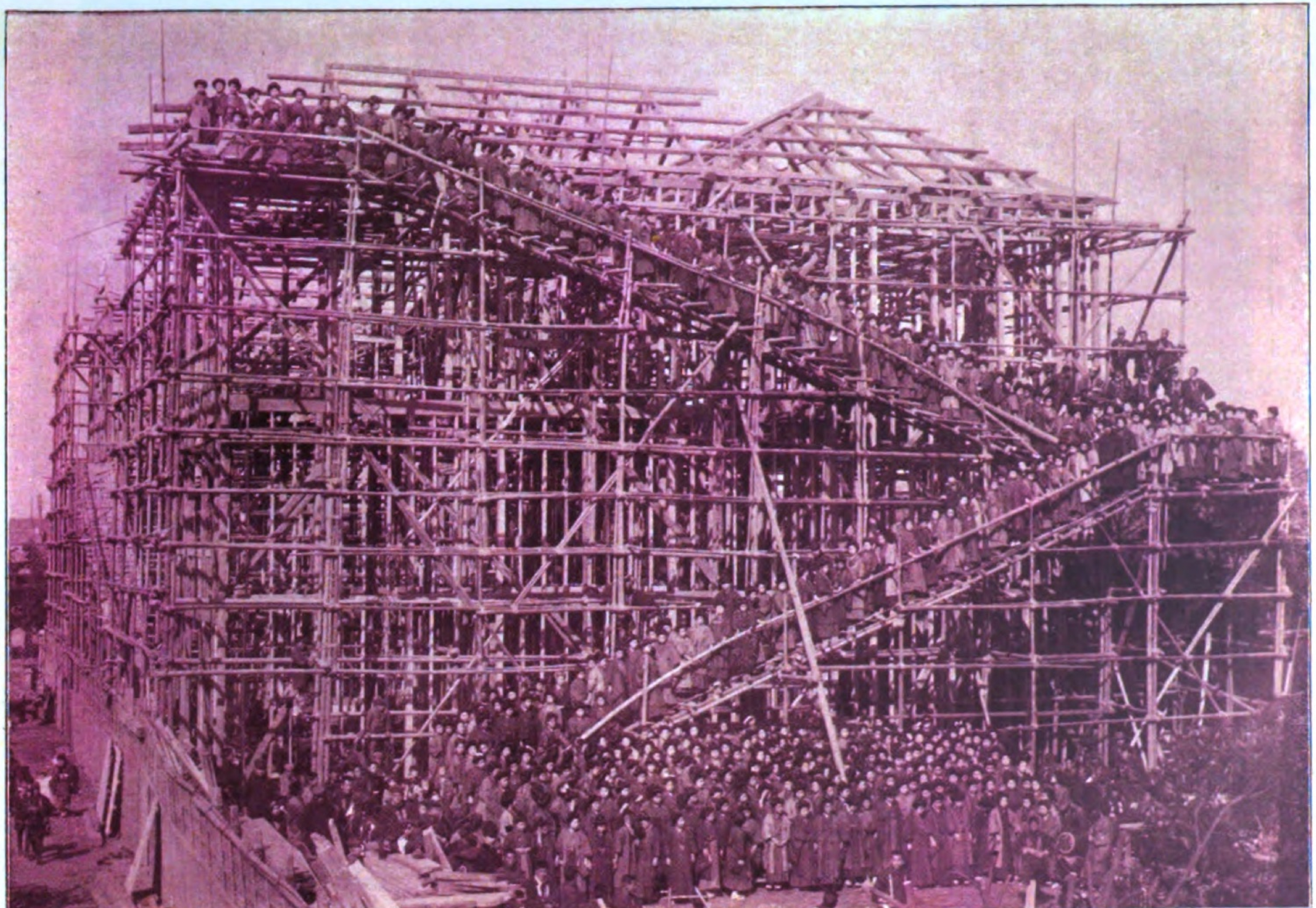
男子部書者 文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生 一楷行草三體六ケ月卒業

見本 詳細會則無代進呈 一 東京本郷森川町壹 電話下谷三〇一一

帝國習字速成學會

女(ヱの四)

女子美術學校上棟式



昨年祝融の災に罹りし本郷弓町なる女子美術學校は今回同區菊坂本妙寺境內に建築工事を起し上棟式を擧げたり

雲雀



石　油　厨　炉

經濟輕便之炊具!!

久能木式石油厨爐

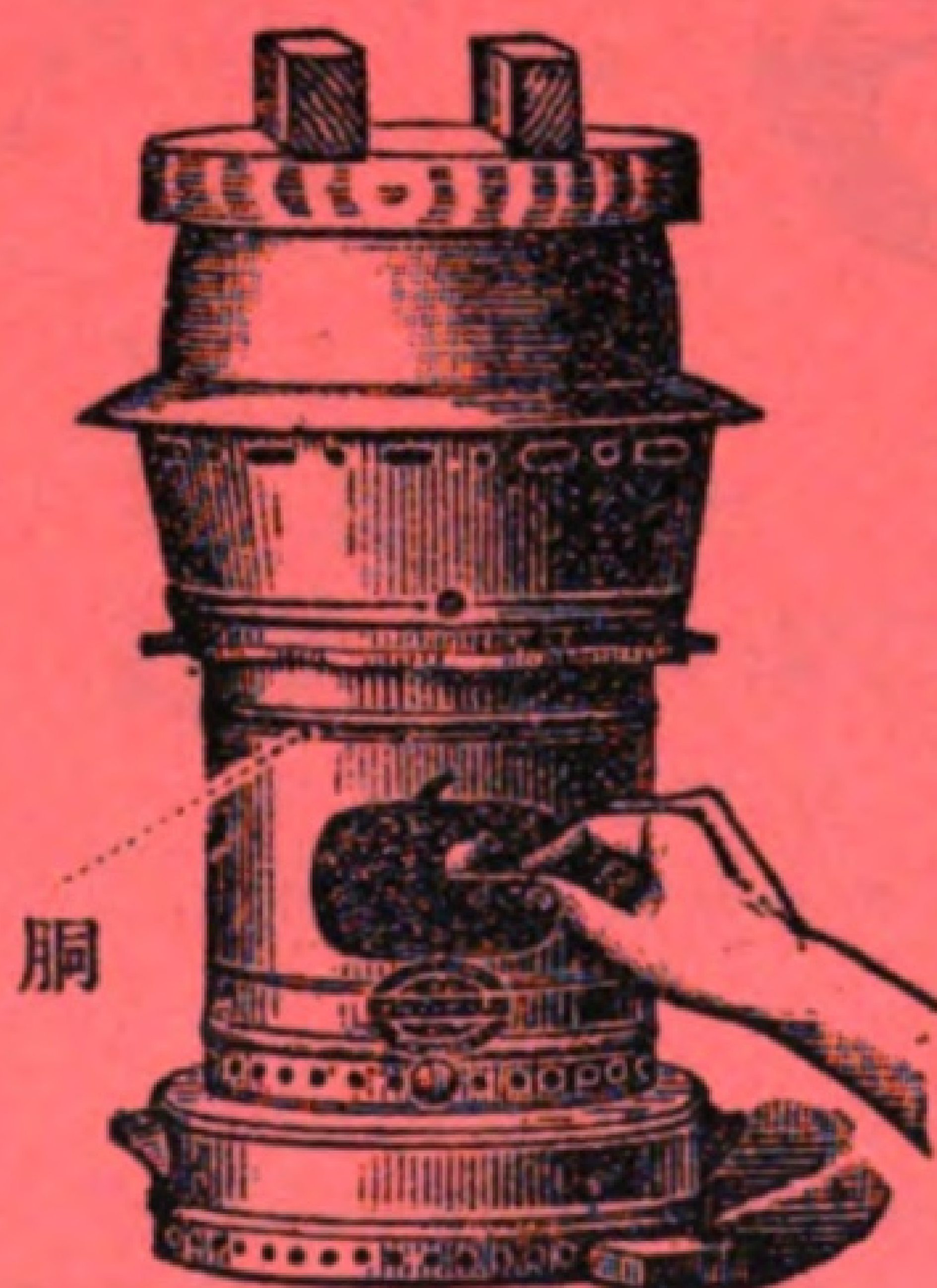
◉專賣特許第一〇三三二號

二號形厨爐にて僅二十分間に二勺の石油で一升の飯が炊け如何なる者を煮燒するも決して臭くなく石油は通常の品を使用して無烟無臭を保證す、且つ火力強大なるは實に弊店二十餘年此の業に從事研究の結果なり、

定價

第一號形　金二圓廿錢より
第二號形　金三圓廿錢より
第三號形　金三圓八十錢より

注意　目錄は御申込次第發送仕候



◉胴を取外さず點火し得るは本器の外無し

使用之樣々!!

◎飯炊き及肉類の煮燒其他一般の料理特に西洋料理には應用最も廣し
◎各學校理化學實驗の熱用硝子管等は忽ち熔解し酒精代用として費用十分の一なり
◎藥局にて一般の熱用殊に浸劑に用ひて最も迅速に辨じ又强度の熱を得らる
◎和洋服の火熨用大小鏝及革細工用鏝印刷用平鏝等を燒き自由の熱度を得らる
◎室內煖爐に代用し美麗にして溫度均一なる故木炭、石炭の比にあらず且つ養蠶室煖爐に最も適當す



▲販賣所は全國主なる都會にあり

●久●能●木●商●標●に●御●注●意●を●乞●ふ●

各地方よりの御注文は

●●●●振替口座又は代金引換にて御申込みあらば即日發送いたします、振替口座御申込は最も運賃が廉價です

製造發賣元　久能木商店　東京日本橋室町三丁目

長電話本局二八九一番　振替口座一四五七番

女(への一)

女(への三)

レックス

●英國製 化粧用 **レックス浮石鹼**

英國ボゾン、エンド、シブソン會社

レックス浮石鹼は小角を接續したる實用浮石鹼の卒先者なり



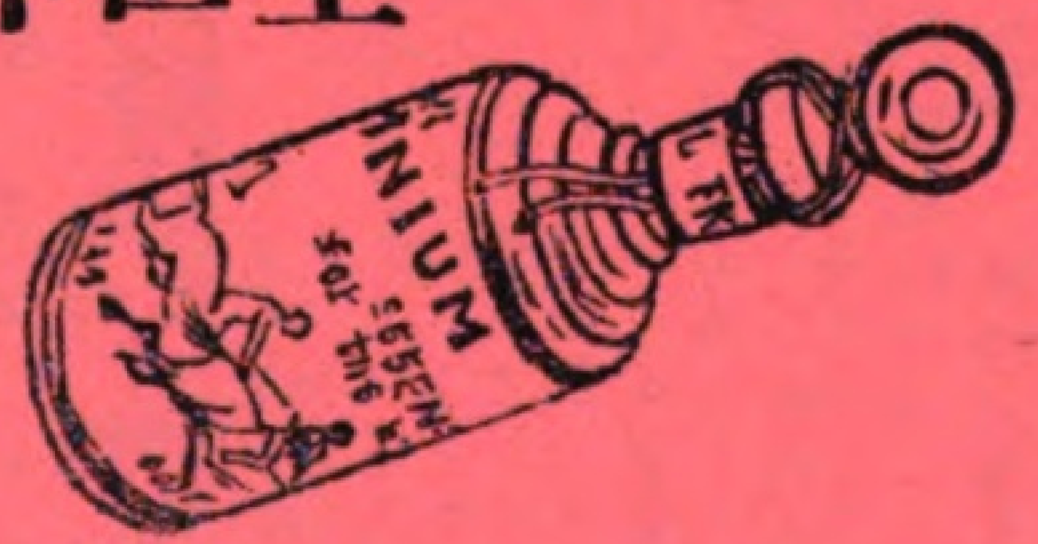
品質優秀香氣馥郁價格低廉等製造元の特に自慢とする處にして昨年八月初めて輸入せしに本邦人の化粧用に適せる爲め非常好評を博し引續き入荷ありしも忽にして賣盡すの好況を呈するに至れり

近來僞造にもあらず、模造にもあらず、覺束なくも**レツクス**浮石鹼に稍々眞似たるものを舶來と詐稱して顧客を瞞着するものあり、購求の際は十分御注意あらんことを希ふ。

●賣捌所……は全國到る處の化粧品販賣店にあり

全世界を通じて流行品





定價
小瓶金廿五錢
中瓶金壹圓
大瓶金貳圓
特瓶金五圓

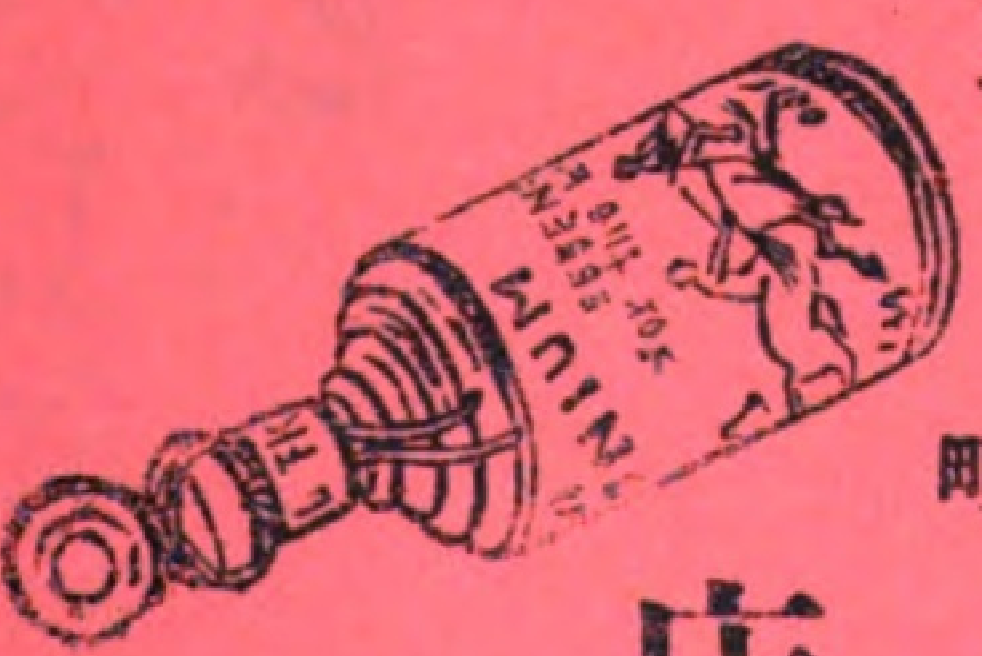
ケーバー香水

東洋一手

代理店

東京市日本橋區橋町

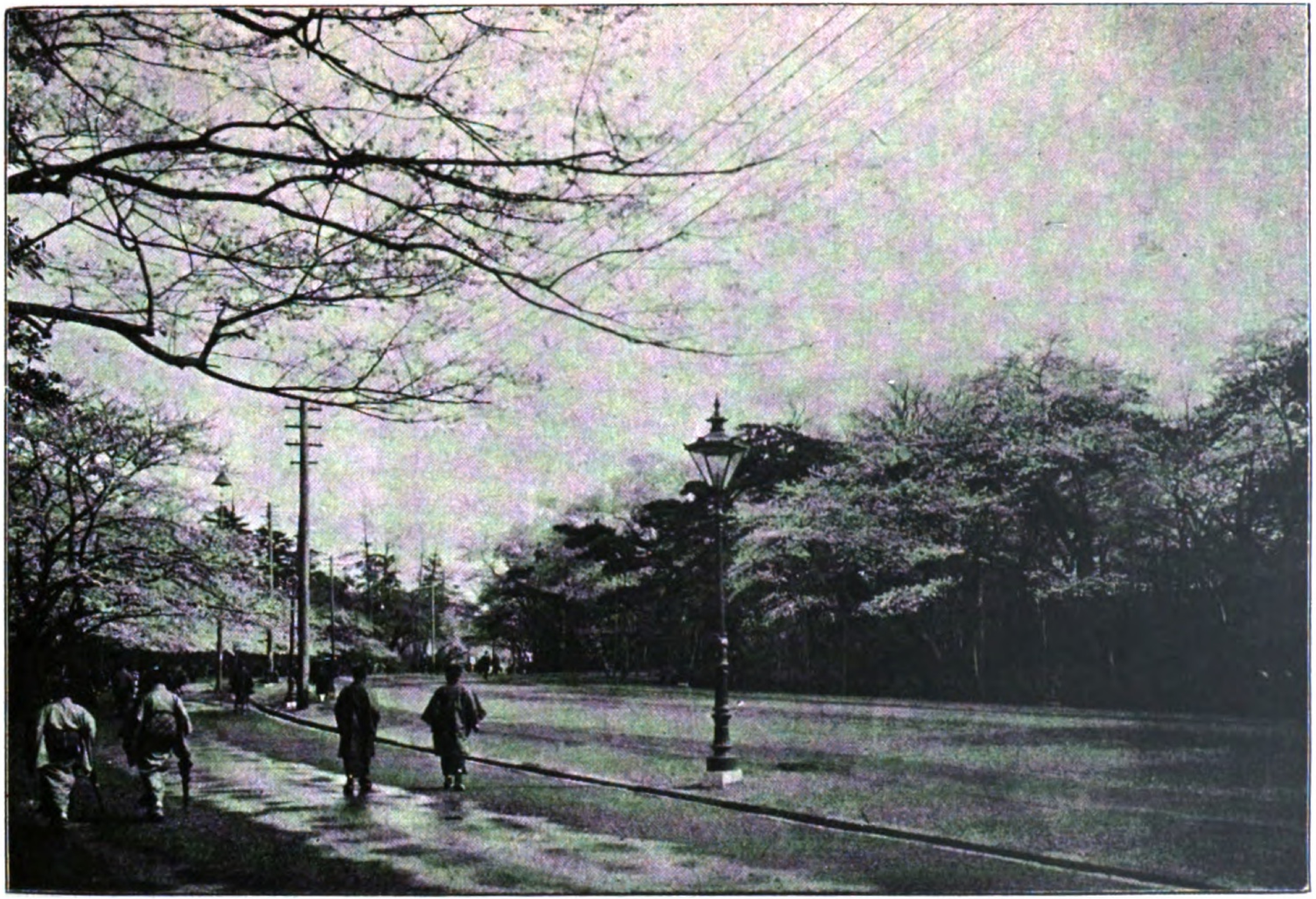
竹間商店





女(への四)

東臺の櫻雲





享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
卸小賣
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、帯留、ブローチ、手釦
紀念品一式
最新の流行品目録郵券六錢封入御申越次第進呈す
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(文)コ八
振替口座七八〇七
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

女子手藝教育會主事　田中晋先生著◎◎最新版◎◎

女子造花　花たば新書

◎色刷版仕上げ圖及雛形圖數多挿入　菊版　金五十錢　送料八錢◎圖と數多の雛形圖を附す

近來造花術は盛に行はれつゝあれども其の最も必要なる花たばの製作法を完全に指南するものなし。本書の內容は材料器具の撰擇及染色艶出し混色の方法製作法より成る製作實習法には花の意味實物の形態鑁當組合せ等叮嚀に記述せらる且つ色刷版仕上げ

世に持囃されつゝある
梶山先生と女子技藝叢書

刺繡術新書

雛形圖按百三十餘個挿入　菊版一冊
大和綴美本　金五十錢　送料八錢

摘み製作新書

雛形切圖百三十四個挿入　菊版一冊
大和綴優美高尙　金五十錢　送料八錢

袋物製作新書

雛形圖按大阪八十餘面挿入　大和綴
菊版全一冊美本　金五十錢送料八錢

編物新書

本書は梶山先生が幾多の苦心と勞力とに成れる百數十の編方と從來から行はれて居る編方の高尙なる物百餘とによりて完全なる編物の出來得る樣百數十の雛形圖を添へられたれば在來の編物書とは趣きを異にせる者なり。

大和綴美本
金五十錢
送料金八錢

造花術新書

造花摘みの如きは近來實に流行の勢烈しく刺繡袋物等の優美なる技藝も進步せしめんとす、然れ共未だ其美の絕頂に至らず只だ粗惡に流れ高雅たるものなし本書は先生が多年教授の傍ら學理と實際とにより自然の儘に造らるゝ樣記述せらる

雛形圖百五十
金五十錢
送料金八錢

發行所　東京市京橋區南槇町十八番地　振替貯金口座第四六八四番　廣文堂書店

（此廣告切拔二冊以上御註文は郵稅不要）

名家の令孃



三井三郎助氏令孃多都雄子



相馬子爵令孃元子



懐中要薬
清心丹
清心丹特有
の効能を常に食
後食後に服用
すれば消化を速
にし胃腸を健
全ならしむる
にあり
登録商標
高木
東京市日本橋區元大阪町八番地
本舗 髙木與兵衛

女(ちの一)

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥

サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手専賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓廿錢也

らい病根治新劑

癩病患者の新福音――最新發見藥――(レプロイス)

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すると到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を究ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

血塊流下

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續續怪しき無効なる**類似僞藥**現はる用藥者は深く注意ありて「専賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者に速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割増しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 専賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

(ちの二)

女(ちの三)



畏き邊りの御料に召させ給ふ高貴御化粧料
御園白粉
東京 芝 伊東胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橘町四丁目 丸見屋商店
發賣元
御園白粉
御園クレーム
御園の蕾
御園の露
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
御園香油
御園香水
御園歯磨

女(ちの四)

伯林宮城内溜の間



產科婦人科専門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病自宅療法

無代進呈（但送料貳錢を要す）

目次（婦人病の總論◎血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき塲合姙婦の攝生、つわりの養生法

女の一番つらい病は。しもの諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である●●●●●⊙著者は多年の實驗と。最近の學說を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳說せり⊙病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

●當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

發行所（東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三六〇一番）笹岡省三

造花原料

東京九段坂

吉住商店

電話番町二〇五六番
振替口座六六七九番

●營業目錄◎＝御入用ノ方ハ二錢切手封入東京九段坂＝吉住商店宛申込マルベシ直ニ進呈可仕候

女（りの一）

はい病

東京府下大森入新井村

私儀多年肺病にて九死の際偶ま一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵貳錢封入御照會あれ

川名助次郎

大日本發賣元祖

明治四拾二年新品發賣



●定價

金五拾錢

同貳拾錢

同拾錢

同五錢

▲遠國送料 金貳錢

▲郵劵代用にてよし

●

圖書目錄

東京日本橋本町 博文館小賣係・

御入用の方は往復ハガキにて御申越次第即時送呈す

●見よ青年諸君の好侶伴!!

四月一日

ハガキ文學

六巻四號

●毎月一回一日發行●定價送料共 一冊 金拾壹錢

記事概要

和田三造君を送る……滑稽なる俳優の襲名……櫻花爛熳の好機……蘇民將來……人間止め給へ。其他花外、醉夢、等諸氏の新作、小品、詩、評論等材料豐富なり。

▲募集懸賞拾一種毎號發表

●選評懇切嚴正試驗後休養の學生諸君好讀料なり

發行所 東京小石川久堅町 精美堂

賣捌 東京堂 東海堂

女(りの三)

女(りの四)



中野屋洋服店

(本　店)…横濱市辨天町通り四丁目八十番地(電話三四四番)
(東京出張所)…東京市鍛冶町廿七番地(電話本局二九〇一番)
(韓國出張所)…韓國京城

注意

地方の御方は御年齢と豫算とを御知らせ下さいますれば最も流行なる形で作つて御送り致します

愛兒の新入學と洋服

廿世紀の小學新入學には必ず洋裝ならざるべからずである、袖長く裾の纒はる和服では勇壯活潑の運動が出來ぬのみでない、衣服の適否は心身にまで影響し、兒童の發育を阻害するは勿論遂には優柔不斷の氣風に陷らしむる恐があるから愼むべきである。

花見と男女小兒洋服

明治の觀櫻は、須らく彼のヒヨツトコで顔を隱くし揃への衣裳で派手を衒ふが如き、舊習は廢棄せざるべからずである、苟も樂しき家庭を作れるものは、假令團隊隊伍は辭脱しても、妻子同伴心豐かに氣閑かに、一日の歡を執るのが至當である、而して夫妻の間に立たしめたる愛兒をして、優美高尚なる洋裝ならしめ、兩者その楓の如き手を執り緩歩散策の親の心は、感如何と問ひたいと思ふ、又その花の如きボンチツト、漆の如き半靴は、櫻花をして一層の美を爲さしむる所以ではあるまいか。

右二者の希望を急速に滿足せしむべく當店には新柄にして體裁よろしく堅牢にして格安なる、男女子供洋服の出來合品を澤山揃へてありますから、何時でも間に合ひます、何卒御來店一覽の上、お子供衆に恰好の品御擇み下されお買上けの程願上げます又東京市内御注文のお方は、電話本局二九〇一番、端書ならば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下さらば、畵形と切れ地見本とを持參早速御伺ひ、御容姿に恰好いたすやう調進いたします。

卒業生の面影



平尾利尾子（精華女學校卒業）



練木すみ子（東京音樂學校卒業）



三好三洲子（學習院女子部卒業）



女（めの一）

（ぬの二）

實用女學講義錄

新學期開講

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に六ケ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ケ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は毎月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲毎月機關雜誌『新國民』を發行して會員に限り毎號無料進呈す『新國民』は現代知名の專門教育家及び斯道大家の訓話學說創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ケ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◉講義錄第一號 四月一日發行……此際至急入會者には入會金を全免すべし◉

見本つき規則 無料進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

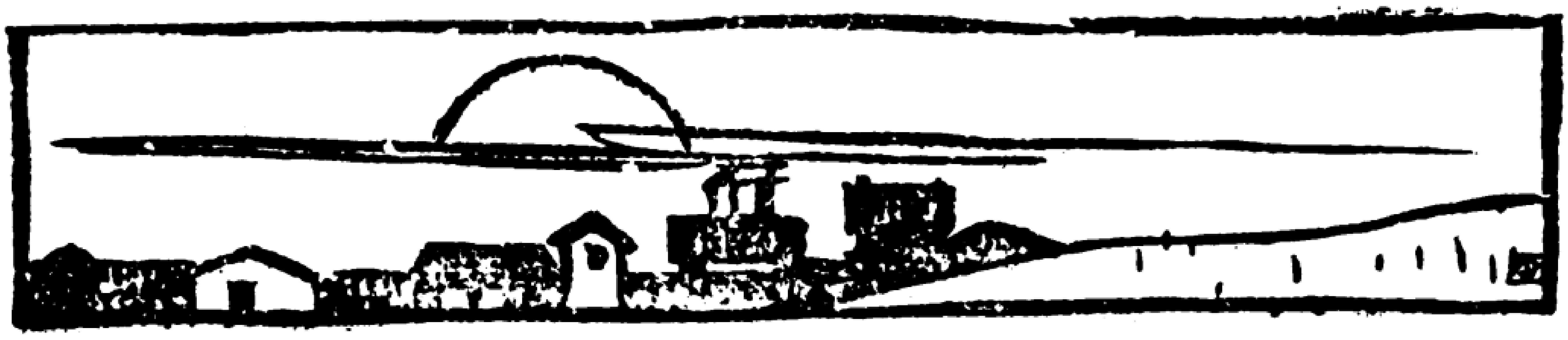
電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

女(ぬの四)



野に立てば

九十の春光は、ながれそめぬ。
霞と見てし、櫻の山邊より、
春風吹いて、青柳の糸のしぐれ、
紫の水に、岸の菫の溶けてぞ流るゝ。
菜の花道を、ゆれてゆく繪日傘や、
うら〳〵霞む大空に、
希望、平和、永遠の文字を見ぬ。
あたゝかき色。柔かき風。
ほがらかなる聲。世を掩ふ清香。
春の女神がほゝゑみか春陽の氣よ、
かくぞ、永久に、大和女子の心
たらましば。——萩花



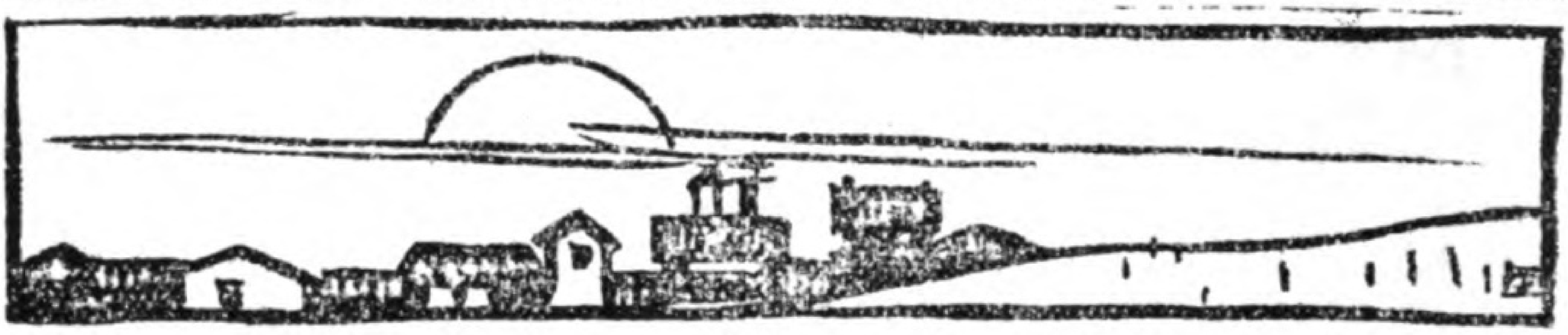
今日の婦人に必要なる智識の程度

男爵 牧野伸顯

▲十四五年前と今日

何れの國でも、女子教育の發達は男子のそれに比して幾らか遲れて居る。尤も一二の例外が無いでもない。例へば、古代の埃及などでは、男子が家庭を守り、女子は外に出て、商業に從事したといふやうなことがある。が、概しては矢張り女子教育は男子教育よりも遲れて居る。我が日本でも女子教育の盛になつたのは眞の近頃のことで、十四五年前までは高等女學校などは誠に寥々たるものであつた。其頃は寧ろ女子教育失敗の時代とも言ふべきで、幾多の女學校は閉鎖され、女子師範學校は合併され、或は女子部が廢止されたりなぞした。それに比べると今日は非常な相違で、公私立の女學校が全國で百以上もある。外形上に現はれた女學生の多いといふことを以ても其の盛況が察せられる。十四五年前の失敗は何に因るかといふと、女子教育の結果が家庭の教育と調和しなかつたが爲である。それが今日に至つて此の盛況に達したといふのは、單に流行の所爲ばかりではない。社會の要求が必然的に然らしめたので、誠に賀すべき次第である。

總じて戰爭後といふものは、あらゆる方面に發達を促すものではあるが、殊に女子教育は非常な發達をした。日清戰後には女子教育の失敗の後を受けたにも拘はらず、高等女學校が非常に殖



えた。それから日露戰爭の後には又一層の勢を以て女子敎育の發達を促した。是れは必ずしも女子敎育の成績が良くなり、信用が增した爲めではない。國運が發展し、進步したが爲めに、女子敎育の必要を感じ、從つて進步したのである。畢竟國家的の趨勢である。然し事物の盛衰は必ず由來する所がある。決して偶然ではない。是は敎へる人も習ふ人も善く注意して貰ひ度いものである。

▲女子は總て將來敎師となる

女子敎育は實質を旨とし、又其の目的に叶ふやうにと盡力しなければ、迚も永遠に健全なる効果を擧げることは出來ない。却て國家不幸の端を開くやうな事になるものである。それ故先づ女子敎育の目的は何處にあるか、女子敎育の必要は何處より來れるかといふことに、着目するが、何よりも大切である。私は是に就いて二三念頭に浮んだことを述べやうと思ふ。

先づ第一に女子は殆ど皆將來敎師になるものであると言つて宜い。直接の――小學や中學の敎師になると言ふのではない。私の言ふのは家庭の敎師――他人に對してゞなく、自分の家庭の主宰者、感化者としての廣い意味の敎師である。女子は一家の主婦として母として子供や婢僕の敎師とならねばならぬ。婢僕は多くは無敎育なものであるから、勢ひ主婦の多大の感化を受ける。主婦の善良な感化によつて彼等も亦善に導れ得ることは云ふ迄もない。して見ると主婦は普通の敎師以上の成績ある先生でなければならぬ。主婦としての心掛けは誠に大切なものである。それから又如何なる敎師でも敎へることの出來ない嬰兒までも母親は敎へ込む。殆ど無意識に敎へ込

む傾向がある。母の心掛けが善ければ其の愛兒に對する感化も亦大なる譯である。

▲思想の狹隘變窟に陷らぬ工夫

女子は又妻としては女の德を以て良人を助け、動かすといふことが必要である。男子は性質も荒いし、始終外で活動して居るから、苦勞も多い。だから妻たるものは朝に夕に良人の感情を和らげるといふことに力めねばならぬ。決して理窟一遍で事を處理してはならない。同情を有つて慰めねばならぬ。良人の思想の大體だけは理解して居て、良人が如何いふ問題に身心を苦めて居るかといふことを知つて、心から同情し慰めねばならぬ。それに就いては如何しても讀書の趣味があり度いものである。讀書といつても學者の逕路を蹈めと言ふのではない。時々讀書して自分の思想を働かす修養の爲めにせよと言ふのである。古今の思想の一般だけは窺ひ知つて、自分の思想が狹隘變窟に陷らぬやう、出會ふ所の問題を廣い思想で處理するやうになれと言ふのである。啻に妻としてのみならず、叔母としても、又友人としても女子は男子の相談相手となつて、無意無識の間に、男子の與へ得ざる、ヨリ以上の慰安を與へるものである。又時としては男子の最も有力な奬勵者鞭撻者となることがあるのは多少人事に經驗ある者の皆知る所である。男子の女子に負ふ所亦多しといはねばならぬ。それにつけても、是等の重大な任務を遂行するには、到底一通りの心掛けでは駄目である事を思はねばならぬ。世の所謂賢妻良母の理想も畢竟は是れに外ならないのである。

▲高等女學校各科目の目的

女子が是等の任務に當ると言つても、何も高尙な專門的の敎育を受けねばならぬと言ふのではない。程度を言つたら今日の高等女學校の學課に補習科を置けばそれで充分である。そして學校では各學科を通じて是を統一的に、學科の內容の徹底するやうに敎へ、生徒は又眞面目に學ぶといふ心掛けがあれば可いのである

學科の程度の高からん事をのみ望んだところで、學んだ學科が身に付かぬやうなことでは仕方がない。裁縫や家政等の學科も決して專門の學科ではない。他日家事上に便利が多いやうにと敎へるもので、要するに主婦の常識を養ふものである。常識を發達させて、四方に氣を配らせ、何事に對しても迂濶なことがなく、氣轉が利く樣といふのが理想だから、學ぶ者も其の心掛で力めねばならぬ。

高等女學校の課程は、文學的のもの、科學的のもの或は技藝的のものなどに分れて居る。修身國語外國語等は文學的のもので、古今東西の人事に關する知識道德を敎授するものである。物理、圖畫、地理、家政、化學、天文などは科學的のもので、人間の周圍に存在する物に關する知識を授くるものである。是等の知識が相合して理解力を養ふ。理解力が發達して始めて人間も本來の能力を發展さすることが出來るのである。

▲獨逸人は學科を活用す

私は曾て獨逸の女子敎育に關する授業內容要目といふやうなものを見たことがある。敢て日本の夫れと大した相違はないと思つたが、その語學の要目に、語學は正しい音を授けるものであるから、訛りなどのないやうに正しい音を用ゐねばならぬ。そして其の國の古來の大家の書いたものを讀ませるが宜いとしてあつた。歸着する所は自國の文學に依つて自ら愛國心を起させやうとするのである。又歷史の學科に就ては、先づ自國の過去のことを一通り心得させる。又自國の現在のことをよく知らせる爲めに萬國歷史も一通りは學ばせるが、それは自國に關係ある事だけに止めて置く。之れも一には愛國心を養ひ、二には過去の知識に依つて今日の國狀を解し、現在の事物を同情して理解し得る力を養はせる爲である。要するに一國に於て現在偉人が爲しつゝある事業を解するだけの知識は得なければならぬ、政事問題にまで涉つて餘り細かに敎へる必要はないが、古來の偉人の爲した大事業、寧ろ彼等が嘗めたる苦心を詳しく頭腦に入れ得るやうにならなけ

ればならぬとしてある。獨逸の女子敎育法の行屆いて居ることは、僅に一時間程歴史の授業を參觀してさへ英人が驚いた位で、實に能く其の精神の在る所を解して是を行つて居る。獨逸が今日の如き發達を遂げたのも、一には此の通りに、女子敎育が外形ばかりでなく内容が充實せられてゐるからである。

▲英國の女子大學校の出來

斯く言へばとて私は博識ばかりを造れといふのでは勿論ない。或る年限内は知識を充分に授けて、後ち追追道德を以て之を支配して行く樣にしなければならぬ。各科を通じて、統一して敎へ、經學の所謂道義心を授けて、道德的女子を養成するのが、女子敎育の骨髓であると思ふ。女子敎育に於ては學術の程度や主義の高尚といふやうなことを論ずる必要はない。其の結果が社會の事物と調和を得るといふことが何よりも肝心である。此觀念は正確に定めて置かねばならぬ。或る一部の人は、是非專門敎育を授けねば可かぬと言ふが、女子は男子の競爭者ではなく、何處までも家を修むるのを本體とし主眼とするものであるから、一般女子には決して專門敎育の必要は無いのである、元來女子敎育は國情の如何、時の古今に依つて變遷あり差等あるは免れ難いことであるから、よく其邊を注意しなければならぬ。例へば英國には女子の大學を置き女子に學位を授くることになつて居るが、然し是には特殊の理由がある。即ち英國では女子は男子に比して百萬以上も多くゐる。であるから自然數の上から妻になれず獨立の生計を營まねばならぬ女が生じて來る。然かる國情からして女子敎育に特點を與へたので、永い間問題になつて居ながらも、終に實狀には勝てずして、學位を授けるまでに進んだのである。何事を爲すにも其の國狀を鑑みなければ可けない。何處の國は何うだから我國でもと無暗と模倣されては堪らない。英國でも一般社會の女子に對しては高等なる普通敎育を以て足れりとして居るのである。大陸諸國も亦是と大同小異である。

△瑞西に於ける露國婦人

瑞西の如き女子教育の發達した國でさへ、大學に多數の女子を見受けることは見受けるが、彼等は多くは外國人である。殊に露西亞の婦人が多くゐる。是は露西亞の國柄として一般の教育が遲れ、特に女子の教育に就ては餘程怠つて居るのに、其の反動として女に伯林や瑞西の大學に遊ぶものが多いのである。又露西亞では往々女子が革命黨に加はつて働くと云ふ政治的の事情があるから、勢ひ大學教育を受ける必要が生じて態々外國まで留學するので、一般歐人は決して女子の大學教育を褒めては居ない。誇りともして居ない。只特別として居るのである。瑞西の或る有名な高等女學校には師範部や商業部などを設けてある。其校の校長に曾て私は女子教育の主義を問うて見たことがある。すると其の校長の答へに、私の學校の原則は、人の妻、主婦となるのを目的として居る。しかし良縁を得るまでに多少の年限を要するから、其迄の間に何か仕事をする人の爲めにと、特に技藝部、商業部、師範部等を置いたのである。主義は何處までも、母、主婦を造るにあると言つた。

△獨英の女學校の實況

獨逸の文部省の半官報のやうなものに揭げられた女子教育の意見を讀んで見ると、矢張り是と同じやうなことを言つて居る。一般女子の爲めには專門的の科學や大學教育の必要はない。普通教育が本位である。普通教育を等閑にして高尚なものゝみに進むのは、砂の上に基礎をつくるもので、決して健全なものではないとして居る。高尚な教育程度が設けられて居るのは、或る少數な特殊な關係からであるから、日本も少しく此點を鑑みたが宜からうと思ふ。實際獨逸や英國の女子教育の程度は割合に高くはない。六歲より十六歲迄の十年間は、日本の普通の高等女學校と同等である。それから上は音樂や語學を一年なり二年なり各自に方法を講じて行つて居る。或は日本の方が程度に於ては

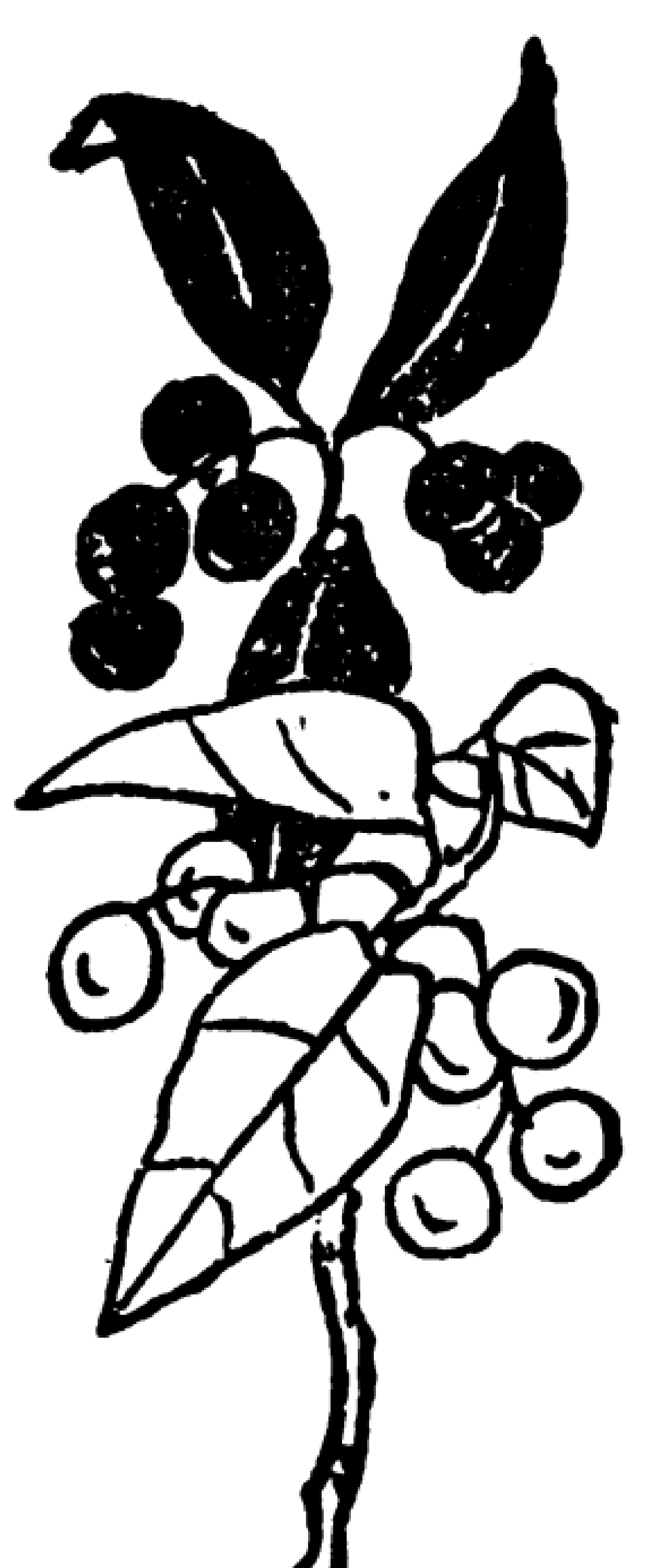
高いかも知れぬ。只西洋のは教授要目の内容が充分に正確に頭腦に入つて居るといふまでゝある。

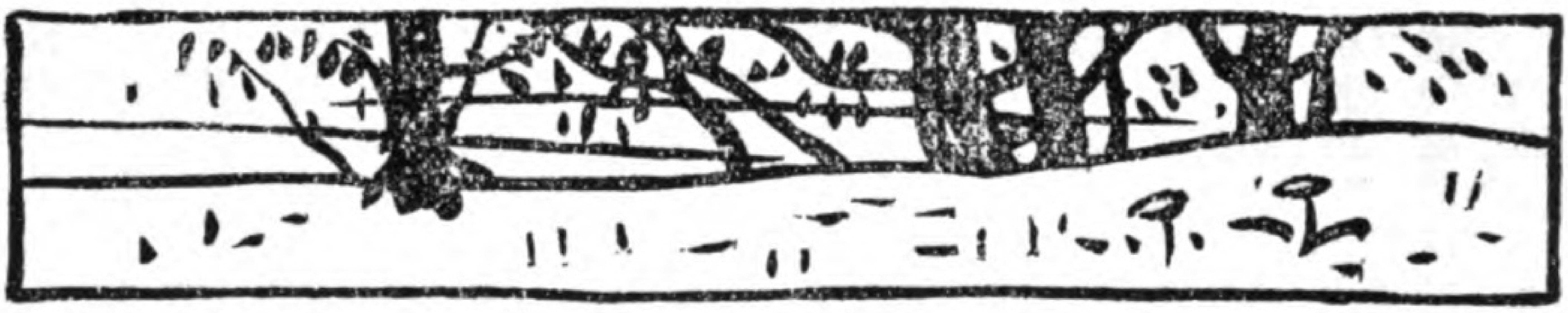
▲奈翁とスタール女史

奈翁一世と言へば、今より百年前歐洲全土を震駭せしめた英雄である。此の奈翁に就いて一の逸話が殘つて居る。當時佛國にスタールといふ女學者が居た。男では奈翁、女ではスタールと云はれた程有名な婦人であつたが、此人が或る時奈翁に會つて、當今の女子では何人を一流とするかといふ問を發した。スタールの考へでは或は自分に親切な言葉でも掛けて呉れることと思つて居たに相違ない。ところが奈翁は、「一流の婦人は良い子を澤山持つた人だ」と答へたので、スタール女史は大に失望して匆々に立ち去つたといふことである。是は餘り極端に失して居るかは知らぬが、眞相の半面は確に現はして居る。今日歐洲でも米國でも餘り高尙な男同樣の學問は婦人の本分に背く、女子の本分は何處までも家庭を造るにあるといふのが甚だ勢力ある論となつて居るのである。英國で女子に學位を授けるとか、又は女子が選擧權を得やうとて運動するなどいふのは、皆國情の然らしむる所で、何も文明進歩の影響ではない。獨逸や佛蘭西は是と大の相違で、獨佛の婦人の家政に巧みなることは隱れもない事實である。

日本には賢妻良母といふ入り易い大變良い言葉がある。内容は時代々々に依つて、國民社會の狀態に依つて變遷するであらうが、然し矢張り那邊迄も此の敎へを伸縮改良して施したが宜からうと思ふ。

（精華高等女學校にて講演）





地位と資產を目的とする婦人の將來

安部磯雄

△婦人に於て見る新曙光

現代の婦人に就て喜ぶべき點を擧ぐれば、決して少くはないが、婦人が漸次自己の位地を自覺する樣になつたと云ふ事は、其の著しいものであらうと思はれます。女子は凡ての點に於て男子に劣つて居るから、男子の下位に立つのは當然のことだといふ思想が、此頃まで婦人の心を支配して居た樣に思はれるが、それが段々と破壞されて來たのです。之れは實に喜ばしい現象で、此の思想が滅びない間は、到底婦人の位地を高むることは出來ません。今日の婦人が漸次自覺し始めたといふ事は、婦人も男子と同樣に高等敎育を受けることが出來るといふ考から女子大學や高等師範などへ入學する者の年々多くなつた事や、或は婦人が近頃種々なる職業に立ち入つて自活の途を求むる樣になつた事に徵しても之を知る事が能ます。

男子は婦人の生活の獨立を以て自己の勢力範圍を侵すものと考へて、非常なる恐慌を感じて居るのであるけれども、婦人の方より言へば、何うしても此處まで來なくてはならないのです。人生勿レ爲ニ婦人身ト、百年苦樂依ニ他人ニといふ樣なことで、何時まで婦人が滿足して居ることが出來ませう。婦人は決して男子の奴隷ではないのです。勿論、婦人は妻としては充分に夫に仕へ、母としては子女の爲に如何なる困難をも忍びませうが、併し婦人も矢張り人間なので、此點に於て

は少しも男子と異なる所はありません。若し男子が此人格を踏付くるが如きことをするならば、斷じてこれを甘受して居ないといふのが即ち婦人の自覺です。これは婦人問題を論ずるに當り光明の方面として私共が喜ばねばならぬ所でありますが、翻つて暗黑の方面を見れば、亦大に警戒せねばならぬ所があります。

△暗雲に覆はるゝ點

文明の進歩は實に喜ばしい事であるが、其の前途に對して何人も少からぬ心配を感じて居ることは世人が餘りに物質的榮華に醉ふの結果、終に國家の滅亡を來すことはないかといふことです。世界を通じて人々が餘り物質的快樂を貪ることに熱中するのは甚だ憂ふべき事ではないでせうか。人間が士農工商といふ風に階級が分れて居た時代に於ては、其當時の上流社會たる士族の中に、よし奢侈なる風俗が行はるゝにしても他の階級は到底これに眞似することが出來ないから、大概諦めてしまつたのですが、今日の社會では、人民一般が直に上流社會の眞似ができるから、男子は忽ち貴族とか富豪とかいふものを理想として、營々として財産を造ることに熱中し、婦人も亦安逸なる生活を以て其理想となす樣になつて來ました。

斯く言へばとて婦人が悉くこんな思想に支配せられて居るといふのではありませんが、十人並の容色（美貌は言ふまでもなく婦人の最大利器である）があつて結婚を希望して居る婦人の多數は、よし貴族富豪に嫁せぬまでも、多くの僕婢を使ひ家庭教師を雇ふ程の資力ある男子に嫁せんことを熱望して居るのではありますまいか。これは決して我國の婦人に限つて居るのではありません。西洋の婦人の狀態を見ても、矢張り其の理想は慥に安逸なる生活といふことにある樣です。故に妙齡の婦人が老男子に嫁すると云ふ事などは、我國では先日大分物議を惹き起したけれども、西洋諸國では餘り珍らしい事ではありません。婦人の考へがそんな風であるから、男子の間にも婦人の充分なる快樂を與ふることが出來ぬ位なら、寧ろ結婚しない方が宜

いと云ふ考が起つて、西洋では獨身生活を送る男子が少くないのです。露骨に言へば、西洋婦人の結婚する目的は、其夫に充分なる衣食住の供給をしてもらふといふに在ると思はれます。我國の婦人は今日は尚ほ泰西婦人の如く甚しくはないけれども、若し此の儘で進むならば早晩同一の狀態に陷ることゝ信じます。一葉落ちて天下の秋が知らるゝとすれば、先きに喧しかつた田中宮内大臣に關する結婚問題の如きは、現代婦人の思想の傾向を測量するに良き資料かと思はれます。

▲獨立の資格なき婦人の運命

昔は婦人は男子に養はるゝものと相場が極まつて居りました。娘の時代には父に養はれ、妻となつては夫に養はれ、母となつては子に養はるゝといふのが一般の通則でした。然しこれは單に過去のみの事ではありません。今日でも尚ほ婦人は男子に養はるべきものだと思つて居る人が多數を占めて居る樣です、勿論婦人が嫁すれば、婦人は家政を司どり、男子は職に就きて生活費を得るのだから、實際は男子が婦人を養ふのであるけれども、獨立生活の出來ぬ婦人が男子に養はるるのと、獨立生活の出來る婦人が便宜上男子に養はれて居るのとは、其間に大なる相違があります、一方は獨立が出來ぬから男子の厄介になるので、其の結果は種々なる屈辱を忍ばねばならぬ事になるが、一方は獨立が出來るのであるけれども、合意の上夫婦となり、妻は内政、夫は外務といふ樣に其分擔を定めたゞけのことであるから、夫に侮辱せらるゝが如きことはありません、これを見ても婦人が高等教育を受けるとか、或は何か一藝を修めて置く事の必要なことが分ります此等の點に心を留めず、單に美貌のみを恃として、位地あり資産ある男子に嫁せんことを求むるのは、危險も亦甚しと言はねばならぬ、此の如き婦人は既に自滅の途に一歩を踏み出せるもので、其前途も粗想像することが出來ます。

▲婦人の大なる弱點

美貌は婦人の一大利器であるけれども、其効力には限りがあります。青春の時期は永く續きません。或る歌人は何れか秋に逢はで果つべきと言つて居ります。美貌を標準として娶る位の男子は又決して永く其妻に全身の愛を注ぐことはありません。いづれは畜妾などに終るでせうが、之れは男子が妻に加ふる無上の侮辱で、婦人がこれを默許する限りは婦人は決して奴隸の境遇を脱することは出來ません。のみならず男子の墮落をも救ふことは出來ないのです、獨立の出來ぬ婦人は實際男子に養はるゝより外はないので、男子は此弱點を知つて居るから、又平氣で不品行をやるのです。實に殘念なことではありませんか。然し淺墓なる虚榮心の爲に身分不相應なる位地と資產を有する人に嫁した婦人は、よし獨立生活が出來る程の素養があつても是亦甚だ不覺です。と云ふのは斯る婦人は物質的榮華の位地を棄てゝ獨立生活に入ることが何うしても出來にくいと云ふ弱身があるからです。即ち一たび安逸の生活を送りたる婦人は、知らず〳〵に其安逸といふことに囚はれて、どんなに心に苦痛を感ずることがあつても、唯これを忍ぶより外は無くなるのです。而も之れは今日の一般の風潮ではありますまいか。要するに現代婦人の多くは物質的安逸の爲ならば精神上の慰安は棄てゝも構はぬといふ誠に憐むべき氣風になりつゝあるのです。之は自滅の第一歩ではありますまいか。

獨立自營の出來ぬ婦人が不幸にして寡婦となつた場合には、一層の困難が打寄せて來ます。若し子女を養育するだけの遺產があれば、婦人も安心して其の教育の爲に盡すことが出來るけれども、衣食に不自由を感ずるといふ時は、其困難は一と通りでありません。心にはどれ程貞節を守りたい、子女の爲に一生を費したいと思ふても、獨立の生活が出來ないから、貞操も何もあつたものではありません。止むを得ず其子女を實家の兩親とか親戚の人に托して、自分は又再嫁するといふ事になります。斯る實例は世間に多くあることですが、何たる悲慘な事でせう。自分の子を人に托して置いて、更に再嫁せねばならぬといふ婦人の境遇を考

ふる時には、何人も同情の涙を濺がずには居られません。然し獨立の出來る婦人が斯の如き運命に陷るのは寧ろ當然の話で誰を怨みん樣もないのです。

▲婦人の成金黨

なるべく地位あり資産のある人に嫁せんことを希望するのは現代婦人に通有の傾向らしい。殊に容色の優れた婦人は何爵夫人と呼ばれ、錦衣玉食を以て友人に誇ることを一の理想として居るらしい。婦人は概して自己の眞價を以て誇るよりも、其夫の地位と資産とを以て人に誇らんとするのです。婦人は恰も成金黨が投機に依りて資産を得た樣に。僥倖によりて地位と資産とを得んとして居るのです。自己の手腕と不撓不屈の奮鬪に依りて其運命を開拓するといふ樣な精神は婦人には殆んど見ることは出來ません。假りに男子が地位と財産とを當にして何處かの養子になるとすれば、彼を知る者は必ず彼を意氣地のない人間だと評するに相違ないです。今日は昔と異なつて二男でも三男でも自由に獨立して家を立つることが出來るのですから、自分で腕のあるものは決して人の家を嗣ぐ樣な間抜けたことはしません。其ですから、養子になる樣な人間は概して獨立心に乏しい薄志弱行の者が多いのです。これがため世間は何となく養子といふことに對して侮蔑の心を抱いて居るのですが、婦人が地位と資産とを目的として嫁することには少しも批評を加ふるが如きことはありません。然しよく解剖して考へて御覽なさい地位と資産とを當にして嫁する婦人の心も、他家を嗣ぐ養子の心も餘り異なる所はないのです。何れも自己の勞力に依らずして位地と資産とを得んとするのですから、實に墮落の絶頂です。然し婦人はどうせ自分で資産を造るのではないから、數萬圓の資産家に嫁するのも、數十萬圓の資産家に嫁するのも、五十歩百歩である。然らばなるべく大なる資産家に嫁せんことを希望したりとて何の差支があらう、と反對する人があるかも知れません。余は資産の多少に拘はらず、苟くも財産とか地位とかを當にして嫁するのは、婦人が自滅

に向つて進みつゝあるものと信じます。

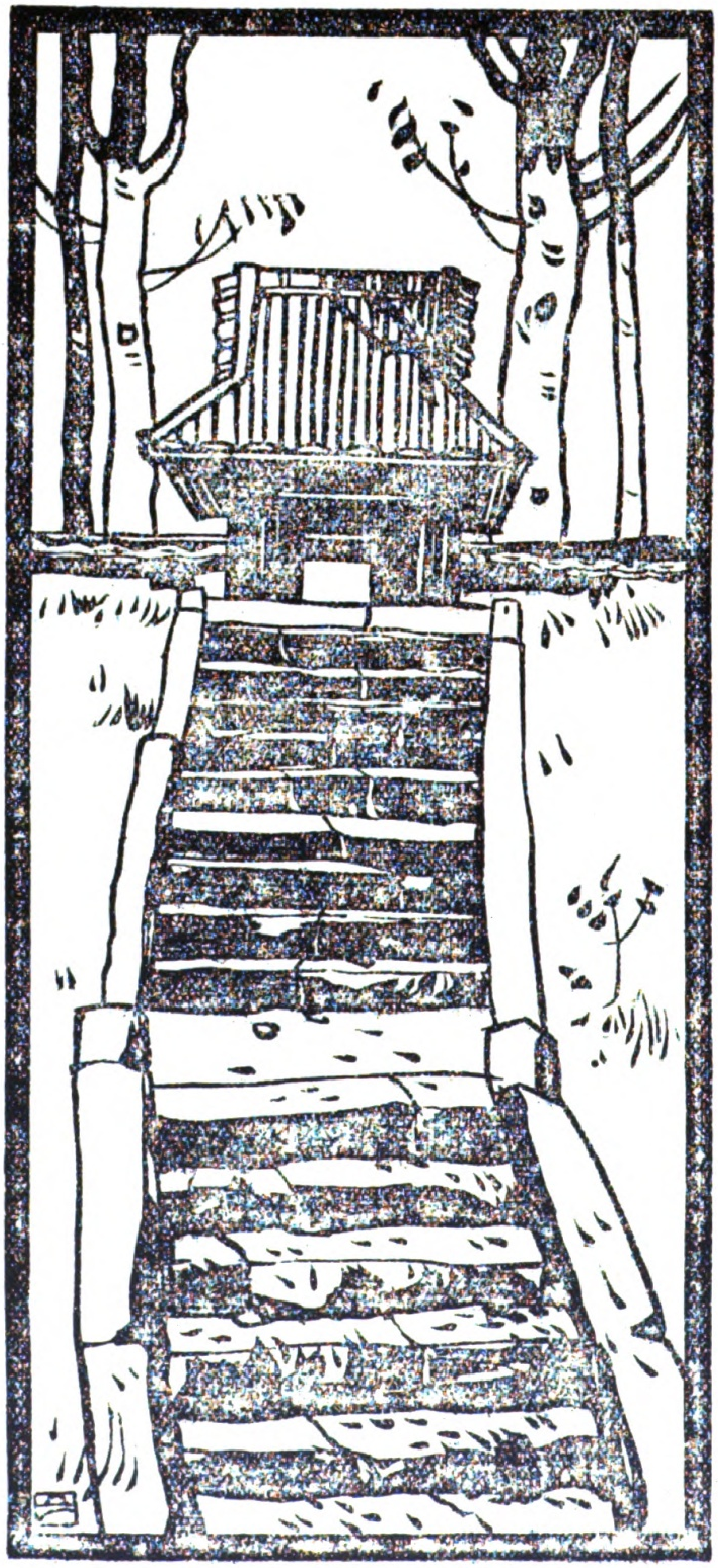
▲裸一貫にて奮闘すべし

男子にせよ婦人にせよ、親から資産を譲り受くるさへも大に注意せねばならぬことゝ思ひます。カーチギーの言ひたる如く、資産を子女に遺すことが果して大なる恥辱であるか否かは別問題として、遺産を受くる所の子女が決して幸福でないことは余の深く信ずる所です。親の遺産で衣食してゐる様な者は、何事に對しても奮闘する程の元氣がありません、實際の事實に照し見ても貴族富豪の内より大政治家、大學者、大實業家の出た例がないのです。運動をしない身體が漸次に衰弱する如く、奮闘をしない人間は終に薄志弱行の者となるより外はありません。斯く考へて來れば、婦人が地位と資産を目當にして嫁せんとする氣風が盛になればなる程、婦人は精神的に堕落することゝなるのです。男子が裸一貫で奮闘する氣慨を有して居れば國家の前途も實に有望であると等しく、婦人に若しこれと同じい熱烈なる精神があれば、必ず男子を助けて大なる財産を積み、高き地位に上ることが出來るのです。斯くてこそ婦人は其友人達に誇ることも出來るので、人から貰つた財産を以つて誇るなどは、實に片腹痛きことであります。既に地位もあり資産もある人に嫁すのは、恰も親から資産を譲り受けたと同樣で、氣樂には相違ありますまいが、其代りに精神的自滅といふことを考へねばなりません、富豪の妻君と呼ばれ、或は何爵夫人と仰がるれば、其婦人は全く立派な人になつた樣に思ふかも知れませんが、これは恰度黄金を背負ふて居る駿馬の如うなもので、寧ろ滑稽と言はねばなりません。此の如き婦人は全く地位と資産を以て其美貌を買はれたのだから、男子の爲に玩弄物視されても致し方がありません。

▲無資産の男子に嫁すべし

余は遺産相續は精神的に人を殺すものと信じて居るから、男子が資産を目當にして養子となることにも婦

人が資産と地位とを望んで嫁することにも反對するのです、地位もなき資産もなき男子は未知數ですから、將來如何なる人になるか知れません、若し彼の學識と人格と才氣とに於て賴むべき所があれば、婦人は寧ろ斯の如き男子に嫁して、協心戮力以て其運命を開拓するのが名譽ではありませんか、男子が裸一貫にて働くことが快事であれば、婦人が徒手を以て奮鬪するのは更に痛快事です。萬一物質的に其目的を達することが出來ぬとしても、慥に精神的自滅を免るゝことが出來ます。



私の實行する精力主義

○生々とした血が全身に漲る朝の勞働
○永久忘れてならぬ事柄
○我が理想の天眞の美人

嘉悦孝子

▲電話の使ひ方

私は一般の奥樣方に最少し忠實々々敷働いて頂きたいと存じて居ります。獨逸邊では相應の地位に在る妻君達でも、電話を使ふのに牛肉の値段を方々へ問ひ合せると云ふやうな經濟的の方面が主だ相ですが、日本の奥樣方は、何々の會へ出る御晴着の振合を問合せられる事などに多く電話を使はれるのです。こんな事を見ましても經濟思想の差が分るかと存じます。上流の奥樣方は先づ是でも濟んで參りませうが、社會に多數を占めて居る中流以下の婦人が經濟の道に暗く、又之を行ふのに冷淡で、一家を支へる力が弱々と致して居りましては、外に働らく男子は內顧の憂に手足を縛られて、國家のため社會の爲めを思ふ餘裕が無くなるので御座います。多數男子方の活力を一家財政の心配に挫けさせ、國力の發展を妨げますのは、經濟に疎き婦人の罪であると考へますと、私共は一日も安閑として暮すべきで無からうと存じます。

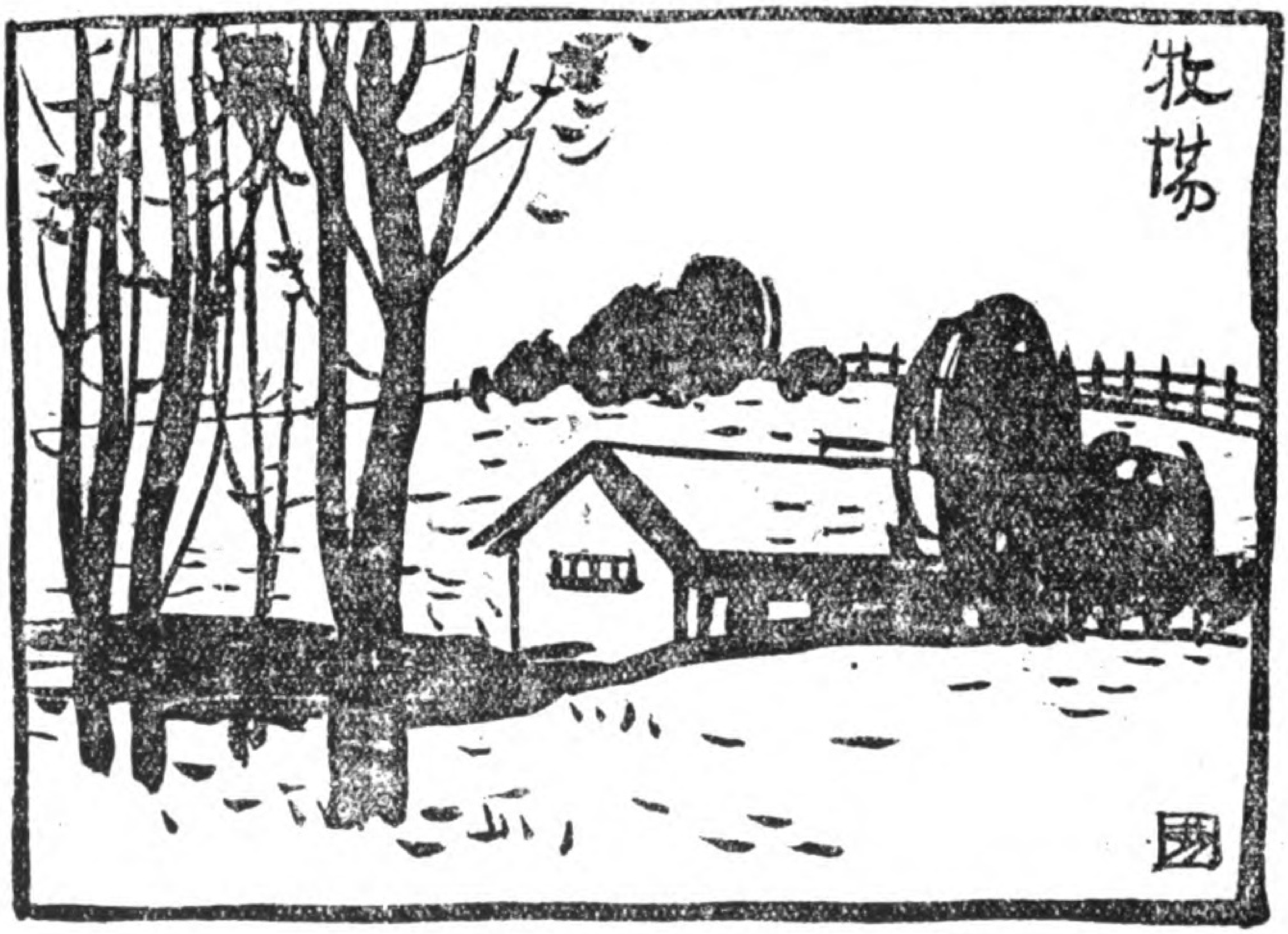
▲明晰な頭腦

一家の經濟を巧に致しますのには、數字や簿記に通じ、金錢の出納を明瞭に致し、又銀行や株式の事情を一通り心得て置き、日々の新聞を讀む際にも日用品の相場を善く注意すると云ふ風に、專ら頭腦を明晰にする事が必要と存じます。頭腦を明晰に致しますのには不斷精神を活々とさせて體力を壯んに致さなければなりません。理想の方ばかり發達しましても、體力が之に伴ひませんと、詰らぬ事を考へ込み、果は厭世的になるもので御座います。折角教育を受けた婦人が往々此樣傾向に陷りますのは誠に歎はしい次第だと存じま

す。體力を壯に致しますのには、各々身分に應じ境遇に應じて自分の與へられた責任を一生懸命に勉强するに限ります。斯様事を爲て居たつて後にどうなるか分らない詰らないナなぞと云ふ煩悶をカラリと捨てゝ、今日々々の勤を眞面目に働いて居りさへすれば何時も淸々といたす計りでなく、後日必す良果を結ぶに違ひありません。精出して廻る水車は凍る暇がないのですから、何でも一心不亂に働くに限ると存じます。

▲防寒に就て私の經驗

何方でも今年の御寒さは格



別だと仰しやいますし、實際左様に違ひありませんが、私は例年より餘程暖かい冬のやうに感じて居ります、それには一の原因があるので御座います。私は口で生徒を導くより實行で敎へる方が捷徑だと存じ、私の部屋で致す事を悉皆生徒に見せやうと云ふ考へで、御覽の通り寄宿舍や校舍の二階から一目に觀下ろせる處に私の部屋を置いたのです。夫れで部屋の周圍を硝子張に拵へる積りで御座いましたが、未だ其計畫が出來ませんので夏冬明放に致す事と定めました。舊臘は少々寒さを感じ、是で一月の寒風に堪

へ切れるか如何かと存じました處、慣るに從ひ段々樂になつて參り、唯今では此明放しが心地よく、是迄にない身體の暖かさを覺えて居ります。年を取ると反對に却つて斯樣に寒氣に負けなくなりましたのは、毎日怠らず勞働いたすからで御座いませう。

▲拭掃除

夏分は四時半、唯今は六時に起きまして、寢衣の儘で當番の寄宿生と一緒に校舍から寄宿舍をぐるりと掃き雜巾がけを致します。雜巾がけは寒中だけ生徒には湯で致させますが私は冷水で致し、夫れから又一通り「から拭」を致します。私が力を入れて拭くのを見て居りますから、生徒は皆一生懸命の力を出して雜巾をかけ、二階の縁側が光るとか廊下の方が光るとか申し合つて競爭して居ります。私は雜巾がけを致して居る内に身體中がポカ〳〵として參り、掃除を仕舞つて冷水で顏や手足を洗ひ、吹通しの部屋で髮を結ひ初めます。時、冷々した朝風に吹れますのが何とも言へぬ好い心持で、生々とした血が全身に漲るやうに感じるので御座います。而して七時半の食事が待遠しい程御腹が減き、粗末な味噌汁も貴い藥に勝る味を覺えます。一ケ月七圓位の賄でやつて居る生徒と同じ食物で斯樣に丈夫に暮せますのも全く勞働の御陰であると感謝して居ります。

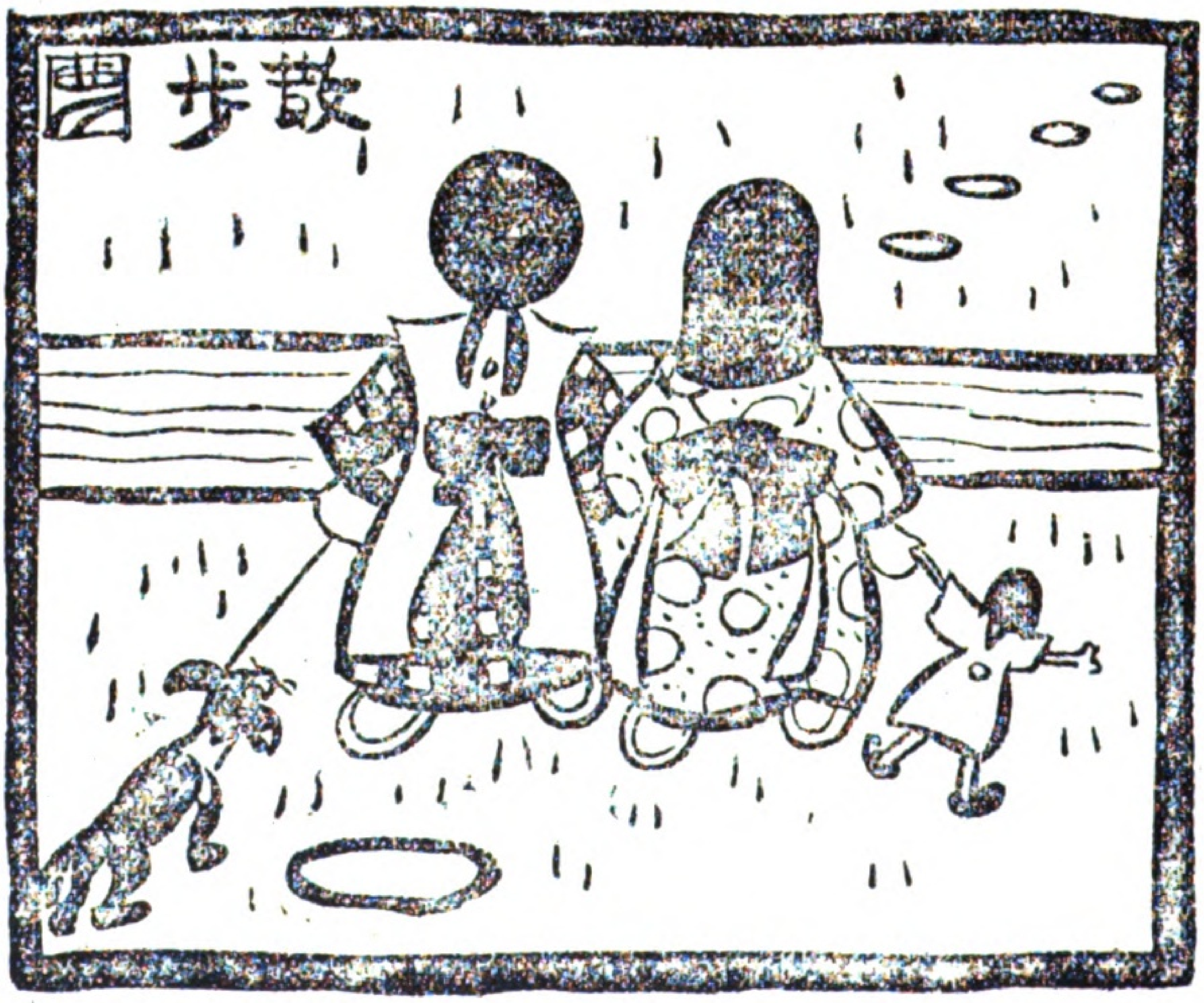
▲勞働は容姿を活かす

寒中の明放しなぞは、ちと極端で一概に皆樣へ御勸め致す次第にも參りませんが、臺所の冷たい用事は下女に任せ切りで、隙漏る風も厭ひ、朝から炬燵へ入られるやうですと、心身共に衰へて一寸した外氣にも侵されますから、成る可く老實に働いて氣候と戰ひ體力を壯にされる事を呉々も御勸め申上げます。餘り勞働すると容姿が惡くなるとか、寒い時には手に胼、皸が出來て人の前に出られぬとか仰しやる方も在りますが蒼白弱々しい容姿に比べますと血液の循環が盛で活々とした肉色の方が、どれ程天興の美人に見えるか知れ

ません。且つ手まめに髪を取上げ、身のまはりを清め、寒い時分には夜よく手を洗つて、リスリンを附ける事なぞに注意致せば、決して見苦しくなるものでは御座いません

△何でも彼でも實行する事

粗末な校舍も整然と拭掃除を致し、猫の額程の庭も掃き清めて水を打ち、滑かな緣側に腰を掛て愉快相に眺めて居る生徒達に、「貴女方は自分の手で仕上げた物を見るのは嘸嬉しいでせう。其貴い悦びを行末忘れぬやうに爲て下さい」と申して居るのです。料理の稽古を致しても香の物の漬加減が分らぬやうでは困りますから、年末には澤庵



も御菜も私が先立になつて悉皆生徒に致させますが、菜漬は鹽水の充分上るまで强く壓石を載せて置き、水が上りましたら直に輕くして了ふと、菜が軟らかに漬くなぞと云ふ、一寸した加減も實地に手を下しませんと注意が屆かぬもので御座います。

△女子の天職

此學校を事務員養成所と速斷される方もある相で、私は遺憾に存じて居ります。女子は或る特別な場合の他は主婦として家庭に立ち、高尚な思想の下に第二の國民を養成するのが眞の天職で御座いますから、是用意のために經濟思想と常識を養ひたいのが

私の微旨で御座います。併し境遇に依り事務員となつた場合には、養成された智識を應用して忠實に働き、天職を全うするが宜しう御座いますし、若し下婢となつた場合にも矢張此考へで主人に盡し、下婢の天職を全うすべきだと存じます。私は豆腐屋や八百屋の妻女が甲斐々々しく天職を全うする樣を見ます度に、敬慕の念を禁じ得ないので御座います、嫁姑の問題なぞも大分近頃八釜しいやうですが、忠實に身體を動かし忠實に姑に仕へて、嫁の天職を盡くして居れば、如何に姑が意固地でも終に誠心に感ずるやうになります實例は私が屢ゝ見る所で御座います。

▲私は下婢にでもなります

私は女子の獨身主義を絶對に御止め申し上げますが自分は此境遇を天職と感謝して及ぶ限り働くつもりで御座います。併し萬一不幸にして立ち行かぬ場合になりましたら、下婢になつて働く積りで居ります。私は偶ゝ歸省いたしても忠實に家事を働きますので、重寶な伯母さんとして家族に悦ばれて居りますから、此心掛で勤めましたら下婢だけの務は全うする事が出來やうと自信して居ります。

▲穩健な經濟思想

御話は色々別道に入りましたが、私の希望は勞働の神聖である事を婦人の頭腦に銘して、何事に當つても忠實々々しく働き、良人の收入を大切にして不相當な支出を防ぎ、年一年と、僅かづゝでも家を裕にするやうに勉強して頂きたいので御座います。不斷攻寄せる虛榮の惡魔に打勝つには、忠實な働きと穩健な經濟思想が一番の利器で御座います。



十年間晴れの足袋一足で濟せし奥樣

宮川壽美子

婦人が敎育を受けて高尚な理想を抱きますのは、誠に立派な事でありますが、先づ一家を興す覺悟を致しませんならば、良人の地位を高める事も出來ず、子女に充分な敎育を與へる事も出來ず、遂に老後の始末さへ出來兼て社會の厄介物となり果てぬとも限りません假令父祖の遺產があつて生活の困難が無い家柄でも主婦の覺悟が確乎として居りませんと、追々身代を耗り減すばかりですから、況して新しく家を持つたものは非常の勇氣と忍耐を以て基礎を作らなければなりません。是に就て私が敬服して居る知己の細君が御座いますから一寸御參考に御話申上ませう。

▲花嫁が古足袋の始末

此細君が嫁入したのは十六歲の時でした。良人は幼少から父母に分れ親戚の世話でどうにか人となり。極薄給な屬吏を勤るやうになりましたので、廿五歲の時細君を迎へたのです。何に致せ永い間男世帶で暮して居たのですから、家中が汚くて、亂脉で、何處から手を付て宜か分らぬ位であつたのですが、年若な花嫁は早速甲斐々々しく働いて取始末に掛りました。良人も難儀した人だけに、永年の古足袋を屑屋にも賣らず、大きな袋へ一つぱい溜てありましたのを、悉皆洗つて叮嚀につぎを當て、平常は此古足袋で間に合せましたので、十年の間に晴の足袋を唯一足買ただけて濟んだ相です。新婚當時より夫婦心を合せて勤儉貯蓄いたした結果、一年經つ內に小い家を一軒買ひ求めたのですが、自分の家となりましても矢張家賃だけそつくり取除けて置き、貯が出來ると貸家を建ると云ふ工合に、追々手を擴げまして、唯今では一廉の財產を作り、多勢の子供達を夫々立派に敎育して居るので御座います。

▲愉快な借金

此妻君は一厘一錢を怨せにせぬと云ふ消極主義ばかりで成功したのでは御座いません。假令ば百圓の貯蓄が出來ると、二百圓借財して、三百圓の家を求めるのです。借財と云ふと無鐵砲に聞えますが、此妻君が借財するのは一日も油斷を爲まいと云ふ決心でいたすので御座います。手元に餘裕がありますと、つい彼も是もと細々した物を買ひたくなるのが通例婦人の情で遂に烟のやうに消費して了ひ易いものですが、或目的を定めて借財してまでも之を償かうと云ふ程ですと、何様な艱難をしても此借財を償ふとする勇氣を生じます。此妻君は不絶此勇氣を以て働いたので御座います。夫ですから可なりの家持になつても物見遊山に一つ出る事もなく下婢一人使はず、多勢の子供の世話から家事萬端を隙間なく働らき、時には疲れ果てゝ働着のまゝ寢床へもぐり込む事もある位でした。一代身上をつくらうと云ふには、人並に平な道を氣樂に歩いて居たり、姑息の滿足に甘じたり爲て居ては却々出來ないものだと此妻君は考へて居たのです。良人の收入も考へずに不相應の外見を張たり、働ける手足を持ながら下女を雇ふたり、金を使ふ工夫もせずにチビリ〳〵と消費して了ひ、先月も不足、今月も不足で借財するものは返濟の見込も覺束なく、夫こそ恐るべき苦痛の種となるのですが、確乎とした地盤を固めて奮闘しつゝ規模を擴張する此妻君の借財は愉快な借財とでも申すべきでせう。

▲暖簾をくゞる習慣

此妻君の眞實々々しい働を子供達が見習ひ、男の兒は水汲や庭の掃除、女の兒は臺所元を手傳ふと云ふ風で、學びの暇を仇に過しません。此妻君は家族の食物を善く注意いたし、相應な魚肉を膳に上せ、又折々は汁粉とか鮨とかを拵へて子供を怡ばせて居りますから子供達が買喰の念を起しません。物見遊山に出掛けて、飲食店に子供を連れ込むのは、無駄費をいたすばかり

でなく、幼少の内から暖簾をくゞる事を覺えますと、自然斯樣事が平氣になり、成長してから男の子は惡い場所の暖簾をくぐつたり、女の子も茶漬屋入りが道樂にならぬとも限りませんから、少々面倒でも母親が手づから拵へて清らかに樂しませたいものと存じます。

▲戰賞金の使ひ道

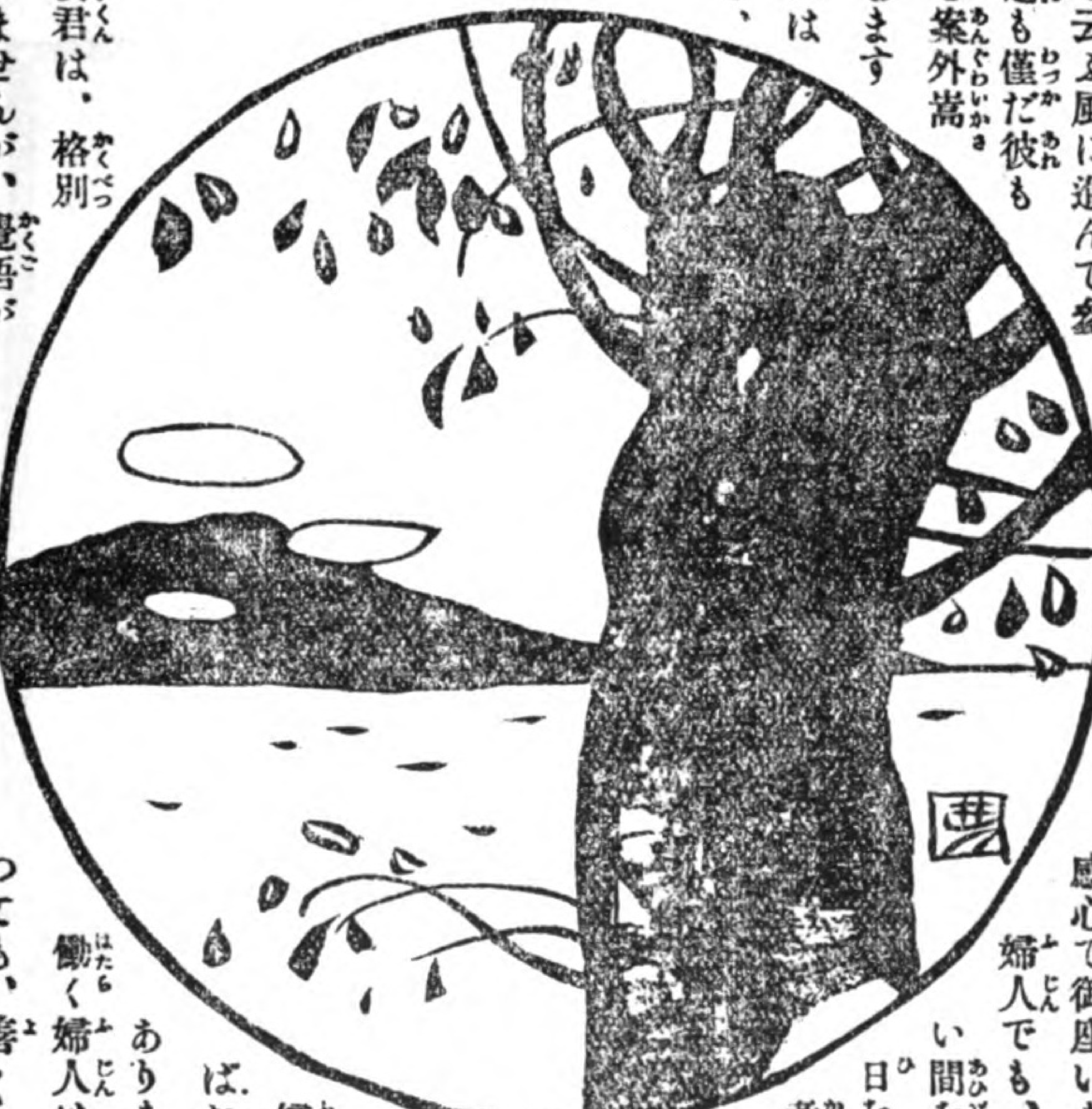
此妻君の知人が日露戰爭に出征して凱旋いたし、二百圓の賞金を貰ひました際、此金を何に用ゐたら宜からうと此妻君に相談いたしました。妻君は例の主義で、「失體ながら貴方が若し借家住ひで居られるなら、三百圓を借り足して五百圓の家を御求めなさい。而して向何年間其家相當の家賃を負擔して、奥樣も非常に働かれて返濟なすつたら如何です」と勸めた事が御座いました。戰賞金に限らず不時に纏つた金が手に入りますと、心の緩むのは普通の人情で、特に婦人は平常我慢して居た衣類が眞先に念頭に浮び、斯う云ふ時こそと御召の一重ね位を良人にねだりますと、良人は愛する妻のために收入の幾分を割て買ひます、妻君の衣服を求める序に自分の外套も古くなつたから一枚注文する、子供の物も一つ二つ拵へる。扨家族の身なりが一



寸揃つて見ると、何處ぞへ遊びに出掛たくなり、出掛れば相應に飲食もすると云ふ風に進んで參るもので御座います。是も僅だ彼も僅だと使ふた金も積ると案外嵩が高くなり過半を消費しますと、最早性立つた方面には用ゐられなくなりまして、遂に無意味な使方の下に無一物となつて了ふやうな例は隨分有勝なもので御座いますから、此邊は婦人の最も注意すべき事と存じます。

△學費の基礎

私が御話し申上げた妻君は、格別敎育のある婦人でもありませんが、覺悟が確乎として居たために一家を起し加之子女の敎育も甚



だ熱心で、皆高等の學校へ通はせて居りますのは誠に感心で御座います。相應の敎育を受けた婦人でも、新婚當時から子供の少さい間を快樂一方でうか／＼と月日を過ごし、學費の用意なぞ考へません爲に、成長した子女も中途で廢學させ、僅かの月給取に取つかせて前途を塞いで了ふやうな例が往々御座いますのは歎かはしい事と存じます。一家に於る成功は夫婦共力の結果で、單に婦人ばかり責を負ふと申す次第もありませんが、思慮深く忠實に働く婦人は假令放縱な良人の許に在つても、善く一家を支へ得ると存じます。



▲女の收入の行衛

千人位集るべき同窓會に、出席する婦人は僅かに七八十人位の割合が通例で御座います。服裝も立派に飾り、子供を下婢に抱かせて出られる位な身分でなければ、同窓會に參り難いと云ふ處から出席者が少いやうに思はれます。此少數の得意な婦人を見まして、他日家庭を作つた際の理想といたす女學生達が在りましたなら、夫こそ大きな心得違ひで御座いませう。身分よき家の令嬢、地位ある妻君が立派な體面を保ち得られますのは、大抵其父君や良人が鐵砲玉をくゞつた勳勞の餘澤で御座いますから羨望すべき價値はないと申すべきでせう。前にも申す通り婦人は兎角一時の情實に驅られて無意義の金錢を使ふ傾がありますから、男子ならば妻子を養ひ一家を維持するだけの收入を、婦人が稼ぎ得ましても、過半は虛飾的の費に消失して了ふのも畢竟意志の弱いためで御座いませう。今後の婦人は何卒眞面目な考を以て自から鐵砲玉を潜る覺悟を定め、地盤を固める事を吳々も心掛けて頂きたいので御座います。

青葉のかげ

彌生

梢にふき拂散らせし春風は、夏と名乘りをかへて垣ほにてりし卯の花月夜の風情れたしとてか、日々にひろがり行く青葉の蔭なほも吹き靡かせて、今はあやなくもさ月闇となりぬ。

すげの小笠に揃ひの紐つけて、赤のたすき樺色の股引、裳高くからげて、早苗とりつゝ歌ふ、ふりに似あはぬ美音をこゝかしこに聞も是よりなり、今度誰の嫁、かれの娶の衣は何、新家の花嫁の生家は、一とせの蓄へにも足らぬ小作人の娘なるを、若旦那の容色好みの目にとまりて迎へ取られしなりとよ、いかに果報よき者ならずや己れも今少しみめよく生れたらば、かの人には奪はれじ、御新造と人にあがめられ、新らしき手織衣に繻子の帶しめて、一生安くありなんをと、四十女が片頬笑みつゝいへば、いかで〳〵其の籤おしんさんに引かせはせじ、わが身の愛嬌には新家の嫁御も及ばしものをと、言ふた、まことよお里さんの顔はゑくぼの珍なりなりけるよと、人わるく一人がいふに隱居のくま婆までも笑ひのゝしる、中に年若きが、あの嫁御の聲を聞きしや、聲の低きと、毛の少し細きが疵よと眞顔になりていひじらふ、さすがに嫉きなめりとをかし。



單衣の袂重げにゆすりて、あま風一陣、又しても雨かと思ふ間に、はや、空くれてポツリポツリ果はそゝと千しもあへぬ若竹の葉に打ちそゝげば鳴かみの音さへまじりて聞こゆ、緣に出でゝポチに戯れ居りし弟は、閃めく稻妻にまづ驚けば只頭の上を甍も砕くる計りおどろおどろと響き渡るに膽奪ほれ、姉君よとも得言はず跳せよりて腕に確と縋りつゝ只目のみ圓う目たゝきもせぬが、やがて音鎭まり、人々の唯今の音は如何なりしかといふに、こゝに、始めて潰えし膽を癒やしわづかに笑む樣の罪なさよ。

ふりてはやみ、やみては又一しきり斜にやゝ強く降れば黄ばみし梅の實二つ三つホト〳〵とこぼれてかたへの池にまろび入りゆるく輪をゑがく、水に漂ふ河骨は[illegible]りし花の色失せて雨よぶ蛙の、浮葉の上にひとりゐをしめたるが、折々四方の靜けさを破りては聲ふりあげて鳴く、汀の紅杜鵑色褪せて、なやめる海棠の姿[illegible]はし、袖かろしと喜びしも暫時、日をふる五月雨に、羽織藏れて火桶に炭さしそふるもいと煩はしきや。

雨やうやく霽れ、日な宛ら池の底より湧き出でけん様に、色深き千筋の糸に、かゞられたる毬の如く岸の柳にかゝりながら水に浮べば、岩間に潜めりし大鯉緋鯉、子らかき連れて、嬉しげに黄金の玉を呑みては吐く。

雨後の青葉は中天より金矢を射かけくれてきら／＼と輝き、絲長く垂るゝ蔓草より散りかゝる白露は美しきうなゐの髪に水晶の玉つられたるにも似て、こゞしき岩根に咲ける苔の花、うなだれし撫子の、めづらしき影なつかしと頭擡ぐれば、さと、まともに日を浴びてまぶしげなるも愛らし、かきつ、花あやめの上には、待得がほにすがる胡蝶の羽たゆげなるも、春のかたみと哀れなり。

かじかとは河邊にすむ鹿とのみ思ひゐしなと宣ひし光子の君に、鹿ならぬかじかの涼しき聲聞かせまゐらせん、とはせ給へと消息して待つ宵、ほと／＼と柴の戸水鶏にたばかられしも、むげに憎くからざりき。

思ひ出多き頃なる哉。乳母が郷に行きて山百合の香に衣そめしもこの頃、垣の姫百合かざしにさしゝも、澤に螢追ひしもこの頃よ、夏來にけらしと詠ませ給ひしもこの頃ならん、光子の君はいかに、乳母は恙がなくてか、雨もあがりなば暑さ強からんを、心せよやとぞ念ぜらるる。



軒の釣しのぶに風すきて緋の短册ひらりと返しつゝ音たつる風鈴の月にふと心動かされて、やをら簾を卷けば葉櫻にかゝる夕月の層の匂ひいと清う。

花ちれる水のまに／＼とめくれば
　山には春もなくなりにけり
　　深養父

聲たえずなけや鶯一とせに
　二たびとだに來べき春かは
　　よみ人しらず

沖風

我やどの池の藤波咲にけり
　山ほとゝぎすいつかきなかむ
　　伊勢

さ月まつ花たち花の香をきけば
　昔の人の袖のかぞする
　　友

夜やくらき道やまどへる郭公
　わがやどをしも過ぎがてになく

五月闇の空もとゝろに郭公
　何をうしとか夜たゞ鳴らむ
　　貫之

婦人が一人前となるべき能力を試驗する機關

婦人記者

▲歷史科（西洋史）

F氏

◎勉强の方法

私は度々うけて失敗いたしましたから、勉强の方法なども種々考へて試みましたが、別にこれと申すよい方法もありません。矢張り誰でもする方法の順序を立てゝ勉强するのが一番よい樣でございます。まづ重要なる事件出來事とその年代を五十なり六十なり順序正しく確實に覺えて置くのです。かやう致しますと他の問題はこれを中心として前後の關係をつけて考へられるから、大抵わかります。どの事件とどの事件との間と云ふ事がわかれば世紀をはかる事も出來るのです。

それから勉强をするには一冊の本を通讀するよりも、一事に就いて同時に種々の書物を讀んだ方がよく事が呑み込まれてよろしいと思ひます。

◎參考書

參考書はどの科でも同じ事ですが、試驗委員の著書を讀むのが一番よいのです。西洋史の方の委員は箕作さんと磯田さんとですが、箕作さんのには西洋史綱と同詳解と云ふのがあり、磯田さんのには世界歷史と云ふ古く出た書物があります。この外和田萬吉さんの世界通史（カールと云ふ獨逸人の著書を譯したもの）、坪井博士の西洋歷史、瀬川さんの西洋通史などは大變よい本で御座います。なほ近世史の參考書として外交史を讀む必要があります。早稻田の出版にかゝる有賀博士の近事外交史と云ふのは大變わかり易いよい本で御座います。同じ早稻田から出て居るので酒井さんの歐洲外交史といふのもあります。坪井博士の世界近世史はまだ上卷しか出て居りませぬ。

それから系圖と地圖とを見る必要がありますが、參考として私は萬國讀史系譜、西洋史便覽、歷史地圖、及び坂本さんの外國地名人名辭典西洋歷史新辭典などを見ました。

◎試驗問題

豫備試驗の問題は

一、デロス(Delos)同盟の起原、規約、及結果

二、ルクセンブルグ(Luxemburg)問題の顛末

三、左の人々の事業

甲、キケロ(Cicero)

乙、ドレーク(Drake)

丙、ミラボー(Mirabean)

四、左の地の所在及歷史上の事蹟

甲、アッカ

乙、リッサ

丙、オルミウツ

右の如きもので御座いましたが、此の答案を一時間半で書き上げるのはなか〳〵骨で御座いました。何うして淨書などをいたして居る暇は御座いませんでした。

◎最後の勝利

で、今度私共と共に東京で豫備試驗を受けた者は十三人御座いましたが、合格いたしましたのは僅かに三人で御座います。而かもこの三人が、本試驗では一人になる事やら、或は殘らず落ちて了ふ事やら、それはもとよりわかりません。本試驗には筆記試驗と口答試驗とがあつて、筆記試驗に及第した者が口答試驗に應じられるものとなつて居ります。口答試驗は主に教授法のやうなもので、時には隨分意地惡くきかれると申ます、私の知人で口答試驗に應じたものが、試驗官から何な書物を讀んだかときかれて、實は讀みもせぬ本を讀んだと答へたはよう御座いますが、それでは何な事が書いてあつたかと問はれて、大層まごついたとか申して居ります。とにかく準備を確實にいたして置

くことが最も必要で御座います。急ごしらへの仕度では到底望みがありません。初めて試驗に應ずる人が、必ずしも準備が不足だといふ譯もありますまいが、一回目で合格して了ふといふやうな人はまづ無いと申してもよい程です。何方かと申せば、私のお仲間は多い方で試驗場には年々お馴染の顏が見えて居ります。まあ二三年も其上も根氣よく受驗しようといふ人ですから、其間に實力も充分につき、終には目出度合格も致しませう。

▲圖畫科　G氏

G氏は女子職業學校の出身、今は同校にて教授の助手をつとめて居られます。さる卅八年に於て、巳に圖畫科の毛筆畫と用器畫とを受けて合格せられたのですが、今回は更に圖畫科の方で鉛筆畫を、手藝科の方で刺繡と袋物とをお受けになり、何れにも首尾よく合格せられた方です。

私は一度圖畫科の方の試驗を濟して居りますため、今回は豫備試驗をいたすに及ばず、直ちに本試驗に應ずることが出來たので御座います。それ故豫備試驗の方は、たゞ問題を御參考に供するまでとして、自分の受けた本試驗の方に就き少しく御話をいたして見ませう。

◎圖畫科の豫備試驗問題（毛筆畫）

墨　畫

一、提燈の釣りあるものと下に置かれたるものとを畫け

但前者は軒下に吊したるものを下より斜に見たるもの、後者は床上にたゝみ置きたるものを上より斜に見る處とす、而て兩者とも提燈の枠は黑色にして紙張の部は白色なるを以て全體の濃淡に注意して畫く事を要す

圖　案（着色）

一、丸形陶製の菓子皿の内部に左の題によりて考案

したる模樣を畫け
題、蝶
但次項に注意すべし
模樣は實物より美化したるものとす
一、菓子皿の直徑は曲尺五寸五分として平面圖及立面圖を要す
一、立面圖は高さを隨意とし圖を折半して其一方に切斷面を示せ



用器畫

一、圓錐と圓柱との相貫體を如何なる位置に於て投影せば其切斷線の正面圖が二直線を表はすか、又其場合に於ける平面圖は如何

二、一邊一寸五分の正八面體を左の位置に於て投影せよ
甲、八面の一が水平なる時
乙、對角線の一が畫面に直角なる時

三、任意の五角形を畫き、其一邊に於ける一點を通じて引きたる直線を以て、五角形の面積を二、三、四、の比にて分割せよ

四、東方に面し三十度の勾配ある丘の中腹を東北に走る小徑なり、其勾配幾許なるかを圖解せよ

五、直立せる方錐と横臥せる方柱との相貫體の圖を求む

但錐の底邊は立畫面に四十五度傾き柱の長方面は平畫面に四十五度傾き畫立體の軸の間には若干の距離なるものとす

右は毛筆畫の方の問題で御座いますが、鉛筆畫の方も之れと大同小異のもので御座います。

◎本　試　驗

本試驗は寫生、圖案及び教授法、黒板畫等で御座いましたが、それらの問題に就いて、次に少し委しく御話いたします。

○寫生――之れは鉛筆畫と水彩畫との二種で、鉛筆畫の方は少女のモデルに依つて、其の上半身を寫生するので、御座いました皆でモデルを取り圍いて、各方面からそれを寫すので御座いますが、各自の席は抽籤で定められます。場所に依つて寫し易い方と寫し難い方とがあり、光線の工合にもよしあしを生ずること勿論でありますから、不利益な場所に當つた人こそ不仕合な譯で御座いますが、私などは運わるくも最も六つかしい眞正面を寫すことになつたのでした。モデルには時々休息いたさせませんければなりませず、休息いたさせますと其度毎に幾分か形も違つて參るといふ風ですから、斯ういふ寫生をいたしますには、早く其の要點特徵を呑み込んで輪廓をつくることが必要と存じます。水彩畫の方は海老と蛤と笊、この三つをあしらつて寫生するので御座いましたが之れは畫き方のよしあしと共に、位置とか配合とかいふ點に注目されるので御座いませう。

○圖案――硯箱の蓋の模様で御座いましたが、圖案の問題は毎年斯ういふ風に一寸注意の及んで居ないといふやうなものが出ます。昨年はたしか寄木の圖案であつたと思ひます。

○○○教授法——之れは色の配合及び色の性質に就いて教壇に立つて說明するので御座いましたが、答の當否といふよりは寧ろ說明の簡單明瞭にして、態度の落ち付いて居ることを悅ばれたやうに思はれます。

○○○黑板畫——この問題は二つで其一は黑板面と正圓と正方形とを描くのでありましたが、正圓を一度で立派に畫くといふことはなか〳〵出來ないものであります。成程よい問題であると思ひました。他の一は林檎を紙に描くに當り、二つの時はいかに置くかまた三つの場合は如何にといふので、矢張り黑板へ描かせられましたが是又位置配合に就いての考を試されたもので御座いました。



◎觀察を廣くして要點を捕ふべきこと

圖畫科の試驗を受けるものは、何ういふ勉强の方法をとれば一番有望であるかと申しますに、まづ凡ての事物に亘つて常に廣く注意して居るといふこ

とが最も大切で御座います。そして物を見るにもたゞ漠然と見ないで、よく要點特徴を捕へて記憶するといふ風にすることが必要であります。日本畫の本試驗には記憶畫といふものがありまして、犬の頭を描けとか、馬の足をかけとかいふ問題が出るので御座いますが、これらは畢竟平生馬と牛とは何處が何ういふ風に違つて居るとか、朝顏の花は菖蒲の花といかに異るかといふ風に、そのもの〳〵の特徴要點を捕へて記憶して居れば、問題を見て忽ちそれを念頭に浮べられるといふものです。

◎モデルの研究をいかにすべき？

それから實物にあたつて、幾度も寫生をすることは無論必要なことで御座いますが、人の描いたものを見るといふことも亦、非常に參考となるものであります。モデルの研究をして畫くことも甚だ太切で御座いますが、さて何ういふ風にすれば最も好都合で御座いませうか、試驗の準備位に一々モデルを雇ふといふやうな事は出來ず、さればとて人樣に願つては此方の思ふまま十分に寫さして頂く譯に參りませず、私はモデルの研究には一番困りました。仕方が御座いませんから、まづ人樣と御話をして居るやうな時に、其の御樣子を見て置いて後で描いて見るといふ風にし、また上手な方の書いたものを見て、其の特徴要點を覺えるといふやうな事にして居りました。

◎教育的に研究する必要

圖畫の試驗を受けますものは、たゞ繪が巧みに描けるからそれでよいといふことはありません。其繪を教育的に研究するといふことが最も必要だらうと思ひます。それに就いて思ひます事は、檢定試驗を受けようとなさる方が、その準備のため先生へでもおつきにならうといふ場合に、やゝもすれば成るべく上手な大家を撰んで其門にお入りになるといふ事で御座います。これはもとより單に繪を研究するといふ上より見れば

大層結構な事で御座いませうが、受驗準備のためとしては必ずしも當を得たる方法ではなからうと思はれます、寧ろ私の考では技術はさまでなくとも、よく教育的に教へて下さることの出來る、秩序的頭腦をもつて居らつしやる先生につきました方が、遥かに有益だらうと思ふのであります。

◎圖畫はすべての技藝の根本

私は圖畫は凡ての技藝の土臺であると思ひます、刺繍などはもとより糸で繪を描くやうなもので御座いますが、造花とか細工ものとかいふものも圖畫とは離れがたき關係をもつて居るもので御座います。私は今度袋ものをいたしましたに就ても少からん圖畫のおかげを感じたので御座います、何うして裁縫の如きものでも圖畫の思想のあるとないとでは大變な違ひで御座います。私は職業學校で初め刺繍をいたして居りましたが、刺繍には何うしても圖畫が必要なので畫をやり出したので御座いました。つまり初めから畫才があつたと申すのではなく、いはゞ餘儀なく畫を學んだので御座いますが、其後學校で先生の御手傳をいたす事となりましたので、教へるといふ責任に對していろ／＼研究して居ります中、だん／＼興味が湧いて參ること〻なりました、今迄はたゞ試驗を受ける準備にのみ追はれて居りましたけれど、之れからは少し專門的の繪の勉强をもいたして見たいと思ふて居ります。





卒業生への注文

▲第一　お辭儀をして貰ひたし
▲第二　人權論を棄てゝ貰ひたし
▲第三　流しに立ちて貰ひたし
▲第四　早く結婚して貰ひたし
▲第五　客を迎へて貰ひたし
▲第六　滑稽を解して貰ひたし

青柳有美

僕を女性苛めの鬼でゞもあるやうに思ふてる女學生諸君もあるか知らんが、女に對しては却々親切な男で女學校に敎師たること實に十四年、女子敎育にかけては隨分の古狸である。玆に並べ立てる女學校卒業生への注文も皆な此の十四年間の長く且つ深い經驗から割り出したるもの故、讀んで被下て決して損は無い。若し、苦いと思ふところがあッたら其れは良藥なためである。

▲お辭儀をして貰ひたし

これは、何故だらうか甚だ解しかぬることであるが一般に、女學校の卒業生といふものは、學校を出てしまふと、途中で舊い先生に（僕の曰ふのは男の先生のことなのだが）遭ふやうな事があッても、一應の挨拶はおろか、お辭儀をさへ碌々せぬものがある。殆で、吳の國の人が越の國の人にでも際會した時のやうに知らん顏をして、成るべくは其の舊い先生の眼に留まらぬ工夫をし、横を向くとか何んとかして、通り過ぎやうとする。殊に、甚いのになると、その面と出會ッた舊い先生の顏をヂロ〳〵と孔の穿くほど睨みつけて置

きながら、そのまゝ頭も下げずに行き過ぎてしまふのだ。こんな面の男は一度何處かで見たことはあるが、ドウも其の名は想ひ出せん、さて誰であッたか知んといッたやうな態度である。若し、それまで極端な態度に至らなくとも、途中で遇ふた舊い先生には、一禮も無く面を下に向けて地を見つめたまゝ、急ぎ足で通り越さうとするのが、女學校卒業生の舊い男の先生に對する殆んど一定の不文律のやうになッて居る。その癖、學校に居るうちは、隨分うるさいと思ふ程、その先生に搦み廻り甘ッたれるやうな調子で、一にも『チー先生!』二にも『チー先生!』と言ふた連中なんだから、實に先生たるもの唖然として驚かざるを得ざる次第で、全く女といふものは學校を出てしまふと、これ程までにも變るものか知らんと思ふて、長大息をせざるを得ざることになる。殊に、女の卒業生が昔の男の先生に、お辭儀をしてくれぬのは、その先生が見すぼらしい白くなりかけた黒紋附の羽織に小倉袴か何かでテクテク歩みなぞをして居る時に最も多い。こんな男を教師として仰いでたとか、こんな男に知合があるとかいふ



のを、そこらの路行く人々に知られては女の名折ゝ實に恥かしい至りだといふ氣にでもなるものだらう。夫かあらぬか、堂々たる扮装で威勢よく人力でも走らして驅けてる時でゝもあると、お辭儀をしてくれるから不思議だ。これでは、なんぼなんでも餘りといへば不人情極まるでは無いか。又朋友を連れたッてあるいてる舊い生徒といふものも、途中で男の先生にお辭儀するのを殊の外厭がるものである。先生は男なので、若し之にお辭儀すると、變に友達に腹を探ぐられるとでも思ふてるのか、誠に以て情無い次第である。學校に居るうちは、一緒に飯も食ひ遊びもした師弟の間柄故今更朋友と一緒の手前があるからとて、何も急にハニカムにも當らぬでは無いか。學校で四年五年せッせと汗を流して敎へて置いても、途中で遇ッてお辭儀一つさへして貰へぬとあッては、いくら男は鼻の下が長く人がよいからとて、先生たるもの世の中が味氣なくなり、女子敎育をやるよりは猫の子を飼ふ方が益だといふ心になる。されば、女學校の卒業生には、先づ第一に途中で遇ふた舊い男の先生にお辭儀をして貰らひたし。

▲人權論を棄てゝ貰ひたし

今の女學校卒業生といふものは、何を學び何を得て學校を出るか。横文字も少しは覺えたらう、舞踏の眞似も出來るだらう、西洋料理の加減や洋式簿記の記入法や何かも少しは心得て出るだらうが、何よりも學校に居る間に頭に詰め込まれるのは、人權論といふ大變なものである。即ち、今の女學校といふものは、何んにつけ彼んにつけ、兎角女生徒の頭に、女も亦人間であるといふ思想を吹き込む事になッて居る。これが耶蘇臭い女學校になると、殊に激しいのである。女だからとて素より人間たるには相違無く、猿でも鬼でも又ベストでも無いに極ッては居るが、「女も亦人間だ」といふ其の「も亦」が非常に女の身に取ッて大毒なので、これが頭の中に這入ッてると、いくら女學校を卒業した女でも、その品性のうちに女といふものゝ美點が無

くなッてしまふ。今の女學校卒業生には昔の封建時代の女に見たやうな溫順貞淑な處が見當らず動々ともすると、女に最も尊むべき犧牲献身の精神が缺けて、可成世間の陰に隱れ大功無名の實を擧げようとする殊勝な優しい氣を失ひ、切りに出シャばりたがりで、妻たる身にありながら、夫に達衝くのを人道擁護でゞもあるかのやうな心得違ひなしたり、處女としては萬を控え目にする内輪な點が無く、妻としては夫に仕へ夫に奉ずる點の薄くなつたのは、皆な女學校に居る間に、歐羅巴では此うの亞米利加では



彼あの、ミッス・ウヰラードは何したの、女は地上の天使で候の、責任の大なるものがありて男子も女子も人に變りは無いのとつまり何時となく人權論を吹き込まれる爲めなので、ドウも、今の女學校出の女には、自我といふものを沒して他に奉ずるといふ氣が薄く、夫は素より言ふまでも無く、有らゆる男の一寸した失策にも直ぐ眼に角を立て、何んでも自分の權利といつたやうなものを、少しでも壞されまい〳〵として、「女も亦人間だ」と力み出すのが通弊である。かうなると、女は地上の天使どこ

ろか非常な厄介物で、其の極端な例は、目下英國の社會を惱しつゝある婦人選擧黨員に見らるゝやうに、天下の鼻つまみものになつてしまふ。昔の武家の女なぞといふものは、其處に至ると實に豪かつたもので、力めて自我といふものを沒して男の顏を立てるのをのみ心掛けてたものだ。戰爭の時に夫たる將校が、出發に臨んで其の行先きを曖昧不明にし秘密にでするやうな事があるものなら、『郎君は、そんなに妾を御信じにならんのです乎。女だからて矢張人間です。妻にまで御隱しになるとは何事です？』とお出でなさるのは、今の女學校出の細君である。全く以て、やり切れ無い。されば、女學校の卒業生には、第二に「女も亦人間である」といふ人權論を頭の中から棄てゝ貰ひたし。

▲流し元に立ちて貰ひたし

近頃行はれて居る室内運動具にエキサーサイザーといふものがある。是れほど馬鹿氣たものは、天下に少ない。而も、女が之を用ゐて身體の運動を取るなぞといふに至りては、實に沙汰の限である。何も高い錢を出して護謨仕掛のエキサーサイザーを買ひ込むまでにも及ばぬことで、流し元に立ちて水仕事をすれば可いのである。頗る運動になるでは無いか。擂鉢の中で擂古木を動かすのと、護謨のエキサーサイザーを使つて身體を動かすのとは運動になることに於ては、毫も變りが無いのだ。擂鉢の中で擂古木を動かす方が、何方かといへば、寧ろ興味もあり運動に精が出ることにもなる。ドウも、今の若い女たちは女學校でも卒業すると、僅かばかり生學問を嚙つただけの癖に、餘程の優等人種にでも成り濟ましたやうな氣で、兎角、氣位ばかり高くなり、流し元を穢ながり、之に立つのを厭がつて、水仕事を成るべく自分で爲ずに間に合せよう〳〵とするから困る。水がHの二と〇の一とで出來てることなぞは知つても知らないでも何うでもよいのであるが、水仕事は女の是非とも爲さねばならぬ天分である。之を爲ぬと女の日常の仕事が半分以上は無くなつて、甚だ閑なものになつてしまふ。閑暇でツウして運動欠

乏と來れば、ドウせ碌なことは無い。今の若い細君たちの神經過敏は、皆な此の流しに立つて水仕事をせぬところから來るので、忙しく無いために氣がマギれず、亭主の一寸した事を氣にかけて心配したり、運動欠乏から消化器に虚弱を來し、續て神經系に故障が起ることにもなるのだ。女學校に居る間は瑞典式の體操とか舞踏とかで跳ねたり飛んだりも出來やうが、嫁になつてからまで女中の手を取つて庭前に瑞典式體操や羽衣ダンスでもあるまい。女は流し元に立たぬと、ドウしても運動欠乏になり、暇が多



くなる。其の結果は、學校に居る間に受けた文藝中毒といふ病を募らせて、益〻神經過敏に陥るより仕方が無くなる。これは、唯に一家の不幸のみならす、當人に取つても非常な不幸である。ドウも今の女學生は大抵この文藝中毒といふに罹つて、その病殆んど膏盲に入り、卒業しても容易に癒え難いので困る。兎角閑暇であると、三文の役にも立たぬ人生問題なんかといふものを考へ込んで、迷に迷を重ぬることになるから、女學校なぞでもバスケット・ボールの競爭よ

りは味噌摺競爭でもやらするやうにして、何より水仕事に慣らすのが肝要な位のものだ。是に於てか、女學校の卒業生には、第三に流しに立ちて貰ひたし。

▲早く結婚して貰ひたし

男の書生でも、中學を卒業してから、直ぐ、高等學校試驗に及第が出來ず、長く何處の學校にも這入れずにウロ〱して居るやうなことがあるとか、大學を卒業してからでも、餘り長らくの間業務が無くつて、ブラついてるやうなことでもあると、ドウもグレ出し易く、兎角、其の間に取り返へしのつかぬやうな身を誤まつたり、身を持ち壞したりすることが有勝なものだ況んや、意志の弱い迷ひ易い女に於てをやで、女學校の卒業生といふもの〻、遂に身を過まつて終身取り返へしのつかぬやうな目に遇ふのも、多くは卒業後餘り長く結婚もせずにブラ〱して獨りで居るところから來る。種々色々の恐るべき禍は總て皆な此の間に萌すのだ。女は結局、結婚すべき筈のものである。女學校の卒業生と雖ども、結婚すべき筈のものである。十九か丁年になれば、人妻になつても、決して早い齢では無い。よく、あの男などは氣に合はぬとか理想に合せぬとか、色々と八ケましい理窟を捏ねくつて、亭主の擇り好みをしたり、是非、なにがしの男を夫を持ち度、あの男と添ひ遂げるやうにして欲しいなぞと、無理を言ふ女學校出の若い女もあるものだが、これは以ての外の心得違ひで、父兄や保護者が認めて以て相當とした男でさへあれば、誰と結婚しても能く末永く添ひ遂げられて　一生を愉快に暮して行けるものである大抵の男と女となれば、これが夫婦になつて巧く暮らせぬといふ筈の無いもので、話のありかけた當初には少し厭氣のあつた位な男でも、永く連れ添ふてるうちには、其の間に愛が出來て、自然、棄て難くなるものなのだ。決して、理想は何うの彼うのと理窟を並べて詮議立をするにも當らぬことである。父兄や保護者の推選した夫に末永く連れ添はれぬやうでは、當人がイクラ好き好んで擇り好みをした揚げ句の亭主とでも、

矢張り末永く連れ添はれぬのみならず、却て早く破鏡の歎を見るやうなことに成り勝のもの故、何んでも、卒業後に縁談があつて相當の處だッたら、成るべく早く之を纏めてもらうやうにし、餘り相手を選まず身の片付を計るのが、上分別である。兎角、擇り好みをしたり難癖をつけたり、理想を高くしてとまッたりしてなぞ居ると、そのブラ〳〵して居る間に、萬の禍が生じて來ることになる。されば、女學校の卒業生には、第四に早く結婚して貰ひたし。



▲客を迎へて貰ひたし

今の女學校卒業生の細君になッた連中たちが、ドウも家庭に客の來るのを、厄介者か貧乏神でも舞ひ込んで來たやうに思ふて、兎角厭がる傾向のあるのは、甚だ以て心得違ひの事である。客も無く姑もなく小姑もなく、又食客や居候も無く、夫婦二人限で水入らずに暮して見たく

若し來客でもあると、之が爲に家庭の幸福や快樂を侵害されでもするやうに思ふのが、女學生上りの今の若細君たちに通じた氣風であるが、それは、甚だ宜しく無い。中には、二三人の來客でもあると、天下の一大事でも湧き出たかのやうに、テンテコ舞をして立ち騷ぎ、「アノ！　郎君！」の連發で夫を煩はす者なぞもあるが、實に醜い限りだ。人の住んでる室も餘り閉め切りにばかりして置くと、その中の空氣が沈滯腐敗して惡しい有機物が籠りて惡臭を發し、其の極人體を害するやうに、人の家庭といふものにも、外から來る人が皆無で、家內の者ばかりで、殊に夫婦ばかりが、年から年中閉ぢ籠つて居るやうでは、家庭の中の空氣といふものが、矢張り沈滯して來て陰氣になり、甚だ面白く無くなッて、不愉快勝になり、隨て若い夫婦の間に能くあるスチルとか、一寸ジレて喧嘩をして見るとかいふ事が、絕え間なく起るやうになッて來るものなのだ。かういふ弊を防いで家庭のうちに常に新らしい健全な空氣を入れ、新陳代謝を行ふとするには、家庭を開放して客を絕えず迎ふるやうにするのが何よりである。來客の多いのは實に一家の幸福たるのみならず又その家の名譽ともいふべきもので、始終新らしい人に接して居ると、氣が腐るやうな憂も無く、家庭の空氣が新らしくなッて一同皆なイキ〳〵することになる。客の二人や三人あッたからとて、何も上を下へと立ち騷ぐほどの事でもあるまい。苟も女たるものが、これしきの事にマゴつくやうでは、到底、終生、家を守り事に處してゆく事なぞの出來るものでは無いので、來客を迎へ之を接待する間に於て、能く繁忙に處して泰然自若たる心意氣を鍛錬することが出來るのである。殊に、居候を置くなぞは、家內の者が犧牲獻身の實物敎育を受くる便になッて、至極結構な次第である。故に、女學校の卒業生には、第五に、常に客を歡迎する心懸がありて貰ひたし。

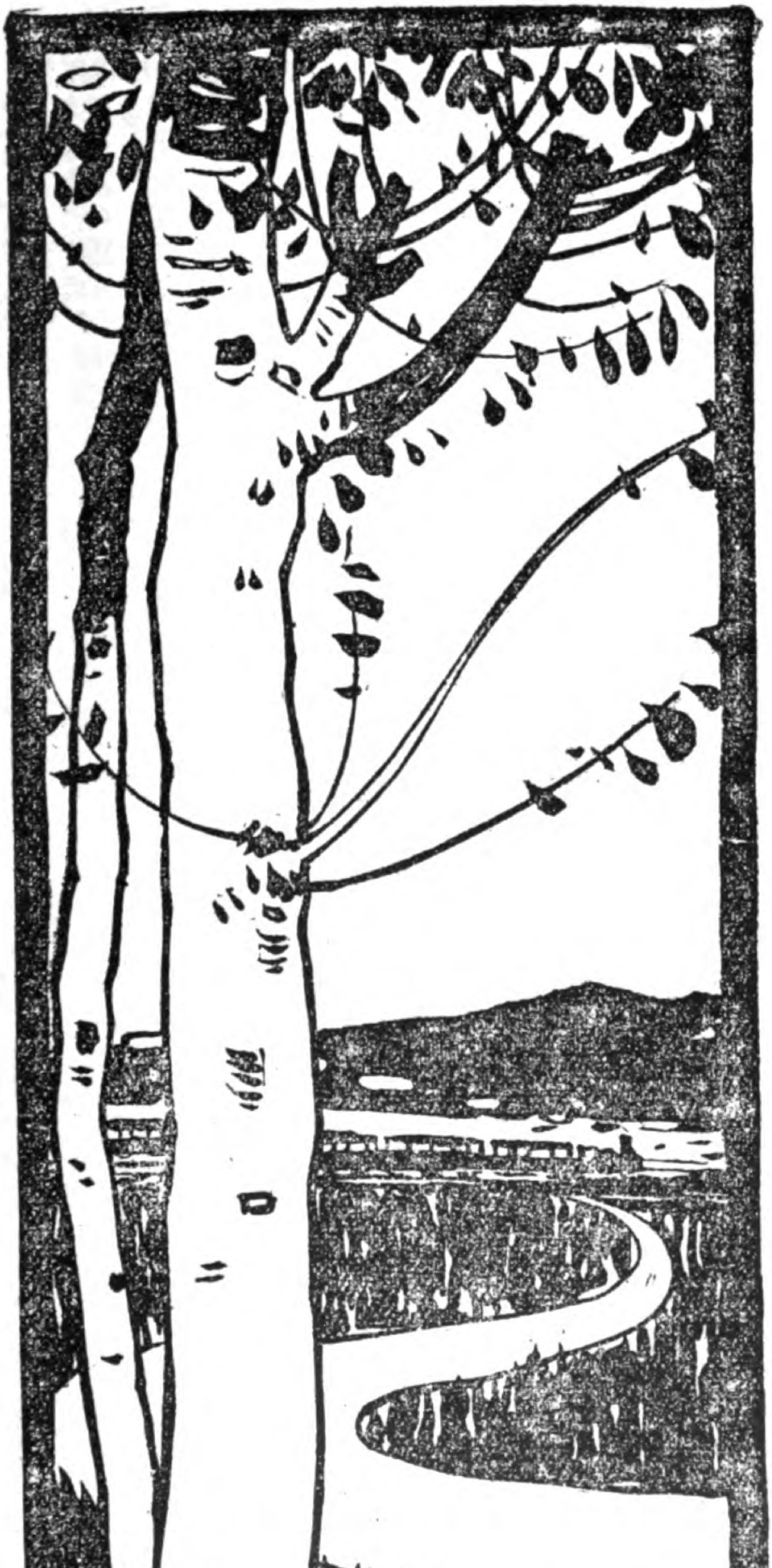
▲滑稽を解して貰ひたし

女學校で生嚙の學問をして、卒業免狀なんかを手に

すると、兎角に合理々々と走りたがる癖のある爲めか今の女學校出身の連中だちには、一般に滑稽思想といふものが乏しいので誠に困る。一體、滑稽思想とは何ういふものかといふと、不道理、不秩序、不調和、不統合、若くは、美ともつかず醜ともつかざるやうな總て矛盾の間に美を發見して、之に興味を持つことをいふのである。ところが、今の女學校卒業生には此の面白い滑稽思想といふものが無い。或る意味から言へばこの又滑稽思想といふものは詩想と稱することも出來るもので、泉鏡花の「湯島詣」にある何とかいふ華族のお孃さんには、この滑稽思想が皆無で、谷中の墓地から人玉が飛ぶといふ話を聞くと、直ぐ夫れは燐火と申すものですと一本槍に極め込んで來る。それが祟となつて遂に自らも悲慘な境遇に陷り、許嫁の夫をも同じく悲慘な境遇に陷らしむることになつて居る。滑稽思想がありさへすれば、世の中の大抵のことには腹の立つものでも無ければ、又氣を惡るくするものでも無い。不道理不調和な物を觀、また同じ種類の事に接しても、總て心持を惡しくせずして濟む。却て之を面白いものとして趣味を持つ事が出來るのであるが、此の滑稽思想といふものが無いと、何か一つ間違ッた事に出遇ひでもしたり、又は之を見せられでもすると、直ぐムキになッて腹を立てたり氣を惡くしたりする事になる。今の女學校卒業生が非常に神經質なのも、一つには滑稽思想の無いのが原因である。一寸戯談を言はれても、直ぐ目の色を變へるやうでは、兎ても此の錯綜した世の中に生きて行かれるものでは無いのだ。世間の事は、ツウ〱角を立て赤身を張つて力まずとも談笑の間にスラ〱と解決もされ、運んで行けるのであるが、然し、滑稽思想が無いと到底是れは出來ぬ相談なのだ。能く下女と折合はなかつたり、つまらぬことにヤキモチ喧嘩をしてヤキモキしたり、友達と疎遠になッたりするのも、皆な滑稽思想の無いためで、滑稽を解し得無い女には、ウッかり戯談も言へず、年から年中「左樣然らば」の打ち通しで、つき合ひもし應對もせねばならぬといふことになッて、その女は甚

だ索漠な面白味の無い人になッてしまひ、一言一行すべてに角が立ち、物事を圓滑にまるく納めかぬるといふ事になる。されば、女學校の卒業生には、第六に滑稽を解して貰ひたし。これが、最後の注文である。

この外、色々注文もし注意もしたい事は澤山にあるが、それは敢て僕のやうな古狸を煩すまでも無く堂堂たる女子教育家先生だちが、堂々と垂訓せられるであらうから、敢て出しや張らずに玆に擱筆し、謹んで、斯の春王の三月目出度卒業せられたる女學生諸君の御健康を祝して敬意を表す。



音樂の名手 藤井環女史

あき子

自轉車美人として評判の高かつたのは昔の事、今日藤井環女史といへば「あのお聲のお美しい！」と誰れでも直ぐにうなづかれます。それも其筈、女史が演奏會にこの世ならぬ美音を振ひたまふ時は、滿堂の聽衆はたゞ醉はされたやうに聽きほれるのです。

女流藝術家の面影に接する、それいと面白きことなんめりと思ひ立つて、一日女史を麹町三番町なる御宅を訪れました。ピアノの音にまづ御在宅の事を思ひはかりて、いそ〳〵玄關に刺を通ずると、早速御面會の御許しを得ました。女中に導かれてお座敷に通りますと、女史は今しも一人のお弟子に稽古遊して御出での處でしたが、靜かにピアノをはなれて手づから友禪縮緬の座蒲團をすゝめて下さいました。お髮を前高の束髮にお結げ遊し、荒い銘仙矢絣の綿入に、大きい匹田形メリンスの下着をかされ、紋羽二重コバルト色のお羽織を召して居らつしやる處、いさゝか派手過ぎるお化粧とも思はるれど、何處までも華奢な御身柄には至つてよくお似付で、恰も廿歳前後のお孃樣と御見えになります。「お稽古の處をお邪魔いたします、お濟しの後で結構なれば、お構ひなく……」と申上げれば「イエもう丁度濟みました處で御座います」とて、さすがは玉を轉がすやうな美しきお聲もて、隔てなく物語られた女史のお話は、まづ次のやうな事でした。

◎先生に勸められる

私は六歳で芝の巴小學校に入學いたしましたが、それと同時に踊を習ひ初め、十四歳の頃まで長唄のお稽古をいたして居りました。お琴も女學館時代には習つて居りましたが、今日ではもう忘れた位のもので御座います。別に何ういふ風に音樂が好きであつたと申すこともありませんが、唄や三味線の拍子調子には特別な興味を覺えて居りました。小學校を卒業いたします時に唱歌の先生から「あなたは音樂學校にお入んなさい、あの學校に入ると必然偉くなれる」と仰しやつて頂きましたが、父は何うせ勉強をするならば、高等師範へでも入つて獨立が出來る丈けの學問をした方がよからうと申すのでした。ともかくいづれにしても高等女學校に入つて置くことが必要と存じまして、其時實家から一番近かつた虎の門の女學館に通ふことゝいたしましたが、女學館の先生も亦、矢張り音樂學校に入ることを勸めて下さいました。それで遂遂一生歌をうたふ身にならうと決心いたしたやうな譯で御座いますが、事實もう自分でも歌の上手な事を大の自慢にして居つたもので、今かう思ふと愧かしい樣で御座います。

◎歌をうたふ時の心もち

それはもう音樂程人の心もちをよくするものはありません、それを

して居ります間は心が高く擧げられて、此世の事など一切忘れて了ふので御座いますもの。私は海岸で獨吟するのが一番好きで御座います。つひ先達も鎌倉に參り、由井ヶ濱邊に立つて心ゆくばかり歌つたので御座いますが、實に何ともいはれぬよい氣もちで御座いました。と申しても、よく御わかりになりませんでせうけれど、私共はさういふ氣もちになれる丈け仕合なので御座います。先達は神戸に音樂會が御座いまして、幸田先生ユンケル先生など五六人の方と御一緒で參りましたが、神戸にはホテルに立派な講堂が出來て居りまして、聽衆は西洋人の方が多い位で御座いましたから、全然で西洋へでも參つたやうな氣がいたしました。大勢の前で歌ひます時は、初めは一寸心配でも御座いますけれど、一旦歌ひ出しますともう人も我も念頭に御座いません。すべて何時何處で歌をうたひます時でも、何も彼も忘れ果てゝ、たゞ自分ながら自分の歌に恍惚として了ひます。

◎一藝に達するは難し

妾が音樂學校に入りました頃は、隨分自惚れて居りましたもので、幸田先生位には直になれるやうに考へて居りました。處がだん／＼勉強いたして參ります内に初めの自慢は何處へやら消えて了つて、成程一藝に達するといふことは實に難しいものだと悟りました。斯うして歌をうたつたり、ピアノを彈いたりいたして居る處を、人樣から御覽になると、隨分呑氣のやうに思はれませうが、これでなか／＼苦心で御座います。骨を折つて曲を考へたり、聲を出したりしてゐると言ふにいはれぬ樂みもありますが、何うして一寸油斷をすれば忽ち退歩いたします。何なに上手な方でも矢張りさうだと見えまして、幸田先生のやうな方でも始終御勉強なさるので御座います。

◎音樂家と適不適

ハイ、音樂學校の方へは毎日參ります。大抵朝の八時に家を出て午後の三時頃歸宅いたしますが、自宅でも四五人の方にお稽古をして上げて居ります。ピアノでも歌でもまづ譜を讀んで頂いて置いて、わるい處を直して上げるやうにして居りますが、何うも天才のある人でなければ不可ない樣です。それは勉強いたせば或る程度までは達しえられるでせうけれど、それ以上の處になりますと天才のある人にはかなひませんことにこの歌の曲節など申すものは、教へやうにも教へられず、工夫しやうにも工夫の出來ないといふ處があるもので、よくその妙味を味つてズン／＼上手になり、先生も跣足といふのも御座いますが、又何時まで經つても何なに教へられても出來ないといふのもあります。ですから專門の音樂家にでもならうといふ人は、まづ自分が其器であるか何うかといふ事を考へなければなりません。それに西洋音樂になりますと、いかに頭腦は音樂的でも手が惡いために不可いといふ事もありますから、專門家に手を見て貰ふ必要が御座います。西洋人などは手が大きう御座いますから、ピアノなども極樂に音を出すのですけれど、私などは



園遊會とシンガーミシン

二番汽車で某所の園遊會へ出掛けやうと、車は門前に待つて居る、急いで洋服を着る途端に過つて服の腋下が綻びた、早速奥さんがミシンの有る方へ往つたと思ふ間もなく、すぐに引つ返へして來た時に、手に持つて居た洋服は、美事直されて、先づ今日の耻をかく事を免れた

家庭用婦人向

シンガーミシン

月賦販賣

京、濱、阪、神無料出教授
其他の地方臨時出張講習
裁縫書及使用法書進呈

シンガー會社

横濱市山下町六十一
神戸市明石町
東京市銀座通尾張町
大阪市南區心齋橋筋

●明細書御申越次第無代送呈す●

女(ろの一)

●赤帯封の商品には悉く金參拾錢以上金五拾圓までの商品引換券封入いたし置き候間御運御試めしかた〳〵賑々しく御來遊爲被下度く奉希上候　敬白

四月一日より十五日まで

寶さがし賣出し



日本橋區通旅籠町

大丸呉服店

電話浪花　八三三番　六〇五番　大六三番

女(その二)

女(ろの四)

婦人画報

毎月一回一日發行 **四月の卷** 四月一日發行 定價一部二十五錢 六冊前金郵税共一圓五十錢 十二冊同二圓八十八錢

畫報……讀物

▲菜の花（彩色石版美人）（畫岡落葉筆）◎天覽の女生徒製作品
◎御渡歐の久邇宮妃殿下と二王子殿下……
▼珍らしき露西亞人形數種▼華道奬勵會の活花大會と盆石
▼猿橋に於けるお茶の水高等女學校生徒▲青年會館の雛祭り
◎女學校のバザー ◎女子美術學校上棟式
◎診察室に於ける女醫の診察
▼女學生が演せし活人畫
▼治庖會卒業生一同…… ◎庭園に於ける鳩山博士一家
◎名家の花の如き令孃 ▼花下の少女 ▼各國小兒風俗 ◎三十年前の同窓者
▼來朝の韓國女官 ◎師弟の愛 ◎其他珍らしき寫眞滿載

◎女子の容貌と德操を診ず（井上博士）▼訪問日記 ▼鷲山女史の育兒法
▼姙婦の心用ゐ一つで立派な子供を擧げし實例（下田歌子）▼龜井女史料理談
◎迷ひの淵に沈みかゝりし私の苦き折の追懷（某富豪夫人）▼衣服の紋（水口）
▼いゝワいやだワ（大町桂月）◎小說高さん（岡田八千代）▼流行……▼應募和歌……
◎浮田博士夫人の理想臺所（女記者）◎妾腹に生れし某子爵令孃の告白
▼東西家庭の特徵（海老名彈正）◎四月の歌に就いて太田水穗
◎現今の婦人は果して戀愛し得る（中島德藏）▼其他趣味豐富の記事滿載……

花のすがた

四月十五日發行定期増刊

如何に美しきか？
如何に面白きか？
如何に愛らしきか？

東京神田 **東京社** 小川町四十一

女（ろの五）


驚天動地
▼文藝倶樂部第十五卷第六號增刊
講談
武勇鑑
洋裝菊判
紙數三百二十頁
口繪寫眞版豐富
正價二十五錢
郵稅（本誌に限る）八錢
四月十五日發行
サア評判々々、是れは今度このたび「文藝倶樂部」の增刊として、來る四月十五日發兌致しまする、「驚天動地講談武勇鑑」は、これまでのとは全く其の趣を違へまして、それこそ看板に僞りなく天をも驚かし地をも動かす武勇談の總まくり、口演者は名にし負ふ講談界の眞打揃ひ、其の面白さは到底も茲には述べられぬ程なれば、篤と左の目次御熟覽の上、發兌の日を待たれ賣切れぬ內、御愛讀を願ひ上げ奉る。
目次
△天正三大刀……秦々齋桃葉
△岩見武勇傳……眞龍齋貞水
△勇婦板額……寶井馬琴
△笹野權三……桃川如燕
△坂上田村麿……猫遊軒伯知
△塚本源藏……放牛舍桃林
△荒木又右衛門……一龍齋貞山
△柳川庄八……西尾麟慶
△佐野の鹿笛……清草舍英昌
△皆鶴姫……錦城齋典山
△武松の虎狩……神田松鯉
△北越の鬼神……柴田南玉
△幽靈船……桃川若燕
△古寺の怪……邑井貞吉
△山中鹿之助……田邊南龍
△神免二刀……神田伯山
發兌元 博文館
東京日本橋本町三丁目
振替貯金口座東京二百四十番

女（ろの六）


ウヅラ石鹸
發賣元
東京横山町
天野磯五郎


髪あらい粉
嶋椿
伊豆七島より産する椿の實より製したる
植物性髪洗粉なれば椿の油同様に毛髪の
肥料となりますから赤毛ちゞれ毛の長く
房々となることは不思議に非らず
袋入三回分五錢 罐入八回分拾貳錢
發賣元 東京横山町二丁目 花王白粉本舗 脇田盛眞堂
振替口座四四七七

女(ろの八)

サンと指を擴げなければなりません。西洋の人は手ばかりでなく身體が大きう御座いますから歌をうたつても音量があつて美しう御座います。

◎可愛くて仕方が無い

しかし私のやうな音樂專門になつて了ふと云ふ事は、家庭の人となるべき、またならなければならぬ運命を持つてゐる女の身には、或は考へものかも知れません。私などは幸ひ音樂の趣味を有つ人と結婚したから斯うして勝手に好きな事をいたして居られますが、もしも結婚のために音樂と離れなければならぬやうな事にでもなつたら實際氣の毒で御座いますから幸田の妹先生などはお仕合せで御座います。安藤さんへ御嫁きになりまして後も、音樂の方は相變らず御熱心で御座います。そして學校からお歸りになると赤ちやんへ歌をうたつてお上げになりたりして、いかにも御樂しさうにお世話遊してゞ御座います、先達神戸に音樂會が御座いました折も、赤ちやんと守とをお連れになつて御出懸で御座いました。私には子供がなくていけませんけれど其代り自分の子供のやうに可愛がつてゐるのが二人御座います。それは私共へ歌のお稽古に參ろ近所の子供で御座いますが、それぱかりよく覺えますので可愛くて仕方が御座いません。何うも音樂などをいたして居りますと感情が强くなつていさゝかの事にも直ぐ涙がこぼれるといふ風ですから、子供でも可愛いと思へば、たまらなく可愛いので御座います。

◎自轉車で通學



自轉車で御座いますか。此頃はもう止めて了ひました。何うも私の自轉車は大分皆樣の御目障りでしたと見えて、方々から攻擊されました。一橋の高等女學校のある先生などは、わざ〳〵御忠告の手紙まで下すつた程でした。あれはたゞ芝の實家から上野の音樂學校に通ふための道具に使用つたまでゞ、何も生意氣で珍らしいまねを致した譯では御座いません。何しろ私が音樂學校に入りましたのは卅四五年頃の事で、まだ電車といふものが御座いません。尤も鐵道馬車が御座いましたけれど、私はこの馬車が大の嫌ひで、乘ると氣分がわるくなるといふ騷ぎでした。さればとて俥で通ふ程の身分でもありませんでしたから、いろ〳〵協議の末遂々自轉車を買ふことになつたので御座います。二日許り庭でお稽古いたしますと餘程乘れるやうになりましたから、三日目には大膽に出かけて學校まで順齊な出しに參りましたが、初めは父が心配して後からついて參り、私が途中で落ちたりものにつき當つたりするのを色々助けてくれました。



現代衣食住の大勢

戸川秋骨



日本の現在の狀態は何事も和洋混合の姿である事は、今更云ふにも及ばぬ事である。云ふ迄もなく衣食住に就ても其の通りである。洋服も着れば日本服も用ゐる。御膳の上にはお刺身の皿と並んでビフテキが付てゐる。家屋も中流以上の人の家に行つて見ると、玄關が二つある。一方は日本式ので一方は洋館の入口である。此れは體裁から云つても宜しくないし、第一利害の點から云つても不經濟極まるものである。さりとてこれを何れかの一方にすると云ふことは、今の所は所詮出來まい、然し大勢から見れば段々西洋式が日本式を蠶食して行く樣である。善い事か惡るい事かと云ふ善惡の問題は別であるが、兎に角之は止むを得ぬ事である。結局は西洋の勝になるであらうか。私は此の變遷を如何かしようと云ふのではない。其の可否を云ふのではない。唯衣食住の現在の有樣に就て一言して見たいと思ふのである。衣食住の事などは、門外漢の私の知る所ではないが、其れが軈て家と云ふ事家族と云ふ事に關係して來ると思ふから、多少其れに注意して見たいと云ふ迄である。

▲衣服

先づ衣服に就て見るに、今の日本の衣服位不便で不經濟に出來て居るものはない。外出の時若しくは仕事の時には洋服で、家に歸へると靴から靴下からぬぎかへて日本服になる。宴會などに行くとなると、是又西洋式の宴會ならフロックコート、日本式なら羽織袴が

要る。然も其れほど澤山の衣裳の必要のあるに拘はらず、禮服と云ふものがない。羽織袴は略装である。フロックコートの如きは平常服で禮服ではない。經濟から云つても、禮法から云つても、便不便から云つても、今の吾々の衣服の狀態位不都合のものはあるまい。是れが西洋であつてみれば、着のみ着のまゝで上衣でも引懸ければ外出が出來る、外から歸つて來る、直に其の儘で机に向へる、仕事が出來る、夕食の時でもドレスコートに着替へる丈ですむ。便利で經濟で、然かも容易に禮に適はせる事が出來る。

殊に着のみ着のまゝで外に出、家に歸へると云ふのは、頗る都合の好いことで、第一は其れが爲に勤勉になる譯である。殊に婦人の場合に然であると思ふ。今前に述べたのは男子の場合であるが、是れが女の場合であるとすると、更に大變である。一寸外出するにも襦袢から替へてかゝらなければならぬ。髮の飾は勿論足袋もはき替へる。腰の廻りには幾筋かの——聽て七本も有らうか——紐を締める。之れでは仕事も何も徹活に行けるものではない。昔し婦人の働かなつた時代には、其れが却て好かつたであらうが、今日ではこれ位妨げになるものはない。

素より此れ程のことは、誰も知つてゐることであらうが、私は西洋風の如何にも簡略なのを見て感心したのである、西洋では家の中が冬でも暖かになつてゐるから、働く者は寒中でも夏の裝で腕はまるで出してゐる。働く者ばかりではない、誰でも夏若しくは春の裝である。其れが一寸外出すると云ふ事になると、中以上の人になつたら如何かしらぬが、普通の人であると其の夏の衣服の上に一枚でも二枚でも冬着を引掛る。其れでもなほ寒ければ外套様のものを引掛る。寒ければ上へ上へとはおることが出來る。頗る簡便で經濟である。日本で若し綿入れの下に單衣物が見えてゐたらば其こそ物笑いであらうが、西洋のは其の單衣物が見えないのである。誠に都合が好い。之れは羨ましい次第であるが住居が何にとかならぬ内は到底眞似の出來ないことである。

然し大勢は微細な所にも現はれるので、すでに今日の婦人の風は大に西洋式になつてゐる。昔の風では婦人は襟を擴げて衣服を着たものである。然し今日の婦人別けて教育を受けて居る婦人連は襟を堅く引きしめてゐる。之れが非常に西洋式になつたので、今一歩進んだら下着の襟は見えない樣な着方にもなり、衣服のこしらへ方も其れに適する樣に變つて行くであらう。現在多くの人の提供する改良服なぞはそんな物であらう。

然し猶此所に注意したい事がある。日本の衣服であつてみると、其の縞柄とか模樣とかに非常の長所がある。今衣服を改良して行くに就いて、其等の長所は如何なるであらうか。女學生なぞの服裝を見ると、其れが著しく減却されてゐる樣に思はれる。袴も至極よいが少し其にも趣がなくてはならぬと思ふ。西洋人の衣服や又袴は眞に殺風景なものである。然るに彼には又彼で長所がある。即ち彼の袴（スカート）等は一種優美な感を與へる。禮服の裾の長いのは別として、平常服のでも其の袴のさばきは曲線的になつて見る人に快感を與へる。殊に其が其の歩き振りに從つて動搖する所は、一種の趣である。所が足の短かい日本人には其の趣は得られない。其の邊は如何な物か、私は衣服を改良しろとも云はず、又改良といふ事を考へなければならぬとも云はぬ。唯現在の衣服には此んな不備な點があつて、西洋には其んな長所があると云ふことを注意して置くばかりとする。何となれば衣服の事は家の事にも關係し、家の事は道路其の他交通機關の事にも關係し、容易に人爲的にかつ簡單に決せられるものでないと思ふからである。加之其れは無論精神上にも關係を及ぼすのである。然し大勢は日々西洋化して行く、これ丈けは慥かな事實である。

△食物

食物の嗜好も大に變つて來た。變ては來たが、甚だ惡く變つて來た。まづい物を好む樣になつた。羊かん、、、きんつばと共にマシマローとバナ、ケーキなどが出來

たが、頗るまづい。然し旨いまづいは兎に角として、此處にも西洋式の入つて來たのは大したものである。又私は旨いまづいに就ては何とも云ふまい、唯食物の供給も西洋風になるのではないかと思ふ所を述べて見たい。

其の前に一言して置たいが、私は此の五六年此方流行して居る料理の稽古と云ふものに就て甚だ了解に苦しんでゐる。一家の妻君が料理を知らなくては勿論困るが、何も料理屋で拵しらへる樣なものを稽古しなくても好ささうなものだ。お客が二人三人あつた場合に、稽古してゐなくては其の料理が出來ない樣では人間として價値がないのである。又少し金のある家ならば料理屋からとれば好いのだ。其の方が經濟だ。多數の客に對してならば、其は無論料理屋に命ずるのが至當だ。第一今の世は妻君でも客に對して應答してゐなければならないのではないか。其れが料理を拵しらへると云つて臺所に引込んで居ては仕方がないではないか。私は料理の稽古は其の點に於て殆んど無用と思ふ。



唯一つ必要なのは、御飯をたく事と香の物をつけること、是丈は如何しても上手になつてゐなければなら

ぬ。これは料理屋に命ずることは出來ぬ。如何しても主婦が監督しなければならぬものである。若し學校なぞで料理の法を教へるとすれば、其れはめしたきとぬか味噌に手を入れると云ふことでなければならぬ。然し學校では其んなことは出來まい。結局料理の科は無用なことであつて、かつ女が働かうと云ふ今の時勢と矛盾した事である。私に云はせると料理は宜しく料理屋に命ずべしと云ふ事になる。

私は之れが大勢であると思ふ。又外國の例を引くが、西洋では大抵の人は自宅で食事をしない。自分の所に臺所を扣へて居るなぞは非常な贅澤な事で金持のする事である。如何な老人でも子供でも、大抵めし屋即ち料理屋へ行つて食ふ。めし屋に行けば安直に喰へる。米國では十仙でも食へる所があるさうだ。二十五仙も出せば充分に食へる。自宅でやる樣にうまいものは喰へないかも知れぬが經濟ではある。實は吾々の樣に好きな物を膳にのせて、時には小鍋立なぞをやるのは、贅澤極まつた話だ。尤もテーブルの側で料理しながら、物を食ふなぞは世界無類で所謂おつな所ではあるが、實は少し滑稽かも知れぬ。私は亞米利加の此の料理屋の風が段々行はれて來るで有らうと思ふ。此頃下女が拂底になつたと云ふ事を聞くが、其等も自宅で料理することを少なくする一つの原因となるであらう。現在何處かにめしを炊いて毎日配達する仕組が出來たと云ふ噂も聞いたことがある。加之仕事をしてゐる人々は少なくとも晝飯丈は辨當を食ふであらう。中には洋食店なぞに行く人もあらう。私の知つてゐる人の中にもさう云ふ人が澤山ある。妻君も働く亭主も働くと云ふ場合には、食物を家でこしらへてゐる譯にはゆかない。即ち之れも早晩西洋式になるものであらう。

又繰返して云ふが、斯う云ふ大勢と料理の稽古とは一致しないものである。今では料理屋に命ずるとか、料理屋で食ふとか云ふのは贅澤の樣であるが、實は自分の家で食ふ方が贅澤なので、恰度下宿屋のめしを食ふと、自分の家のめしを食ふのとの比較にあたる。恐

らくは料理屋で食ふ方が經濟になると云ふ日が遠からず來るで有らうと思ふ。否今でも細かに計算したら其の方が經濟かも知れぬ。實際下層の人は繩のれんでめしを食つてゐる。之は少し難有くないことであるが、吾々の食事は段々に高等繩のれんでやる様になるのであらう。

▲家屋

私は今の世の中に最も六ケ敷い問題は家であると思ふ。無形の家は勿論の事であるが、實際有形の此の家も甚た厄介なものである。初めに云つた通り、中流以上でなくても隨分書生の家にでも日本式の机と並べてテーブルと椅子とが置かれてある、家に因ては暖爐を用ゐてゐる、盛に西洋式が入つて來てゐるにかゝはらず、普通の建築は在來のまゝで、然も拙劣なものになつてゐる。西洋館なるものに至ては殊に陋劣見るに堪へられない。日本銀行位を外にしては凡て嘔吐を催させる様なもの許り、即ち建築はその外觀が實に醜いのみならず、實際時勢に適してゐない、如何にも整はない不安な狀態にあるが、此の不整頓な不安な狀態が今日の日本の有樣であるかも知れぬ、何れの時代を見ても其の時代々々を代表する立派な建築があるが、後の時代から明治今日の建築を見たならば、如何であらうか、明治時代の建築と云ふものは一つも有るまい、若し有りとすればペンキ塗りの西



洋まがひの醜劣なものゝみで有らう。

一方には家に水道がついてゐる、瓦斯がひかれる、電氣がつく、凡ての物は西洋式を以つて壓迫して來る時、建築が何日迄此の儘で居られるで有らうか、之れも或は軈て西洋流の勝利になるかも知れぬ。

ローマ字が軈て採用される事ともなつたなら、凡てのものが横になり、建築も變つて來るで有らう。其れでなくとも商店は段々西洋式に化してしまつた。或は遠からず吾々の家屋も一變するかも知れぬ。

然し家と云ふものは、又無形の勢力を持つてゐる。婦人の用が多くなつて家事が出來なくなる。女中が減つて一家を持つて行けなくなる。經濟上の關係から昔の樣に親族相助ける事が出來なくなる。親子の關係が變化して來る。種々の事が起つて家が變化しこれが社會を一變させるものとなるであらう、今其精しい事を云ふ暇はないが、考へれば家と云ふものに食も衣も集中し此の三者を以つて、世が革新されるであらう。實際此の三者が人間に最要なものである。然して其の家の中心は婦人である。然う考へてみると今の婦人は面白い位置に立つてゐるのである。衣食住の大勢と婦人との關係は、更に精しく考へるべき問題で有らう。





妙齢の婦人と手紙道樂

内海月杖

一時、あの繪はがきの、大變に流行した時、どこの繪はがき屋でも、第一のお客樣は、女學生の人たちであつたといふ、——この一事でも、僕のこゝに掲げた問題の意味はわからうとおもふ。

この頃、獨逸人のワグチルといふ人の著した『令孃交際の秘密』といふ書を讀んだが、その中に、『いかにして、令孃の歡心を買ふべきか』といふ題目があつてその一節に、『手紙によつて』といふのがある。そこに、かういふ風なことが書いてある。

『——手紙によつて、——何も、今はじまつたことではない、又、ひとり、こゝにしてのみの問題でもない。しかし、この武器の、かくまで有効に、かくまで普遍的に使用されるといふことは、まだ嘗て聞いた事がない。青年男女交際の危險をおもひ、その救濟の道を念とする人たちは、まづ第一に、この武器のそのおそるべき威力について、そのまことの意味をたづねることをつとめなければならない。——この頃の若い人たちは、新聞の廣告によつて、戀を求める。勿論、戀といふべきものではない。ほんの退屈しのぎのすさびごと、——少くとも、できる限の仕方で、ローマンチック道への冒險旅行を企てようといふのに過ぎない。しかし、その道中で、事件は、更なる事件の上に、さま／＼の形で發展する。して遂に、避くべからざる、終生の運命に、みづから束縛されてしまふことになる。』

『新聞の廣告には、大抵かう書いてある、——「容貌端麗の青年紳士、敎育ある、妙齢の淑女と、信書の交換を望む、」——まことに、無意味の廣告だが、これがさて、妙に、若い婦人たちの胸にひゞくので、——ま

づ第一に、「教育ある」といふ條件が眼を射る。なるほど、自分は、高等教育をうけてゐる。――年も若い、勿論、淑女に違ひない。――容貌端麗の青年紳士と、信書を交換する、事がらそのものが、根本的に考へて見て、決して、わるいことではない、少くとも、罪のない快樂である、……から考へてくると、もう、矢も楯もたまらない、薔薇色のにほひゆかしい用箋へ、さらさらと、筆をはしらせる。――勿論、はじめはたゞ、喜んで、御求に應ずるといふだけのこと、――しかし、これが抑も、そのおそろしい夢路への門出で、やがてしば／＼になる、まるで小説でも書く氣になつて、花やかな用語か、ゆかしげの文句に苦心しては、これをただ今のかくてあるすべての生命とばかりたどり入る。面影はまぼろしにして見えそめる、さゝやきは現にして聞えてくる。あこがれの念は、日ごとに切になつてくる。おびかれて、さてわれ知らず踏み込む、して遂に、日を期し、場所を期して、相逢ふことになる。その結果は想ひ知るべきにあらずや。……」から書いてある。

日本にしての風習は、おのづから、歐米のとは違ふ。従つて、ワグナルのいうてゐるほどのことは、また見えないやうである。しかし、その意味は、よく似通うて居る、その危險も、同じ程度である。手紙文學ともいふべき、一種特殊の文章が、そのおそろしい勢を以て、青年男女の間、ことに、若い婦人たちの間に發達しつゝあることは、何人も、否定することのできない事實である。

現代の教育が、とかくに、その實効を擧げることができず、學校教育が、學校の門の外へ出ることのできないのを見て、これを慨する人たちは、よく、かういふことをいふ、――「手紙も、ろく／＼書けやあしない」――その通りである。しかし、かういふ人たちに、現代の青年男女が有つてゐる、その手紙文學なるものを見せたら、まあ、どんなに驚くだらう。

實例がある、――自分は、嘗て、さる學校で教へてゐた、一女學生から、相談をかけられたことがある。

ふとしたことから、ある青年學生との信書交換となつて、心にもない、——むしろ無意識的に、例の美文流のゆかしい信書を交換したあげく、遂に、先方から、急轉直下的に、そのまことの返事を迫られたのである。はじめて、長夜の夢からさめたやうに、今更に驚いて、さて何うして遁れたらよからうといふ相談であつた。もとより、深い意味はない、たゞそれだけのことで、何事もなく過ぎたが、をかしいことには、でも、その受けた手紙の數々を、そのまゝ長く身に



つけて、燒けといふても、破り棄てよといふても、決して聞かなかつたことである。

もつと進んだ例がある、——ある良家の令孃が、結婚の約成つて、あすを式の日といふ前日に、ふと家出をした。家人の驚は、いふやうなものではない。何かの手がゝりもといふので、その手箱を開いて見ると、あるはあるは、しかも、五六人から、同時に、殆ど連日のやうに、例の美文調のたけなすばかりなのが、數しれぬほどでゝきたといふこと。その令孃のざんげ話がおもしろい、——ふとしたきつかけで、例の手紙文學の趣にき

そはれた。して何がなし、その趣に驅られて、同時に、散人に向つて、殆ど同文の信書を贈つてゐたのだといふ。意味はたゞそれまでのこと、勿論、逢うてしみじみ、うちあけの物語をしたこともなければ、せつない淵に墮ちたのでもなかつた。ところへ、急に、親の手で、結婚問題がきまつた。きまつた時は、別にいやとも思はなかつたといふ、――さうに違ひない、いかな場合でも、結婚といふことばは、その意味を抽象的にして、若い婦人の胸に、限ないゆかしさを强ひるものである。――だが、いよ／＼きまつて見ると、さて何となくさびしい、――落寞の感に堪へない、何の歷史もなく、何のゆかりもない、あだし人の手によるのは、いかにも落寞である。一方では、又今を盛の「少女」のその誇が、かくして消えてしまふのかと思ふと、何ともいへないつらさが、身にしみる、――そこへその、夢にして耽つた、例の手紙文學の趣が、今をとばかりあらはれ來て、つと、うしろ髮を引く。折も折、おそろしい激烈な調子で、さそひが來た、おびきが來た。何の思慮する遑もなくその手にすがつたのだといふ。さて覺めての今になるともうその方には、少しの心のこりもないといふことであッた。

形は、もとより千差萬別、折により、人によつて、違ッてゐようが、意味は同じい、かういふやうな例は、隨分、世間に澤山ある。自分は、この上からして、いつでも、「妙齡の婦人と手紙道樂」といふ問題の、そのおそろしい意味をしのばないことはない。して同時に、今の世の妙齡の婦人だちの上に宿つてゐる、このおそろしい運命について、世の父兄、識者だちのまじめな考察を要求したいと思ふ念をとゞめることができないのである。

しかし、これは、決して、これのみの問題ではない。その根本においては、あの例の、識者の間に、やかましく攻究された、男女交際問題を顧みなければならないことがあるのだ。自分は、今こゝで、その上の卑見を述べようとは思はないが、たゞひとつ、かういふことだけは、胸に浮ぶ。

理想と現實とのあまりなる背馳、――かうでもいふべきものであらう。おのれといふゆゝしい力、そのゆゝしい意味を認めて、さてそのまことのおのれの上に立たうとする、――これが、當代の青年男女の人たちの胸に宿る、一大思潮である。つゞいて、意志の自由といふ問題がくる、戀の問題がからむ、かくして、當代の青年男女の心は、これを、十年、二十年の昔にくらべると、頗る複雜のものとならざるを得ないのである。

そこで、その胸にゑがき出される理想、――これが又、現實とは、非常な距離に

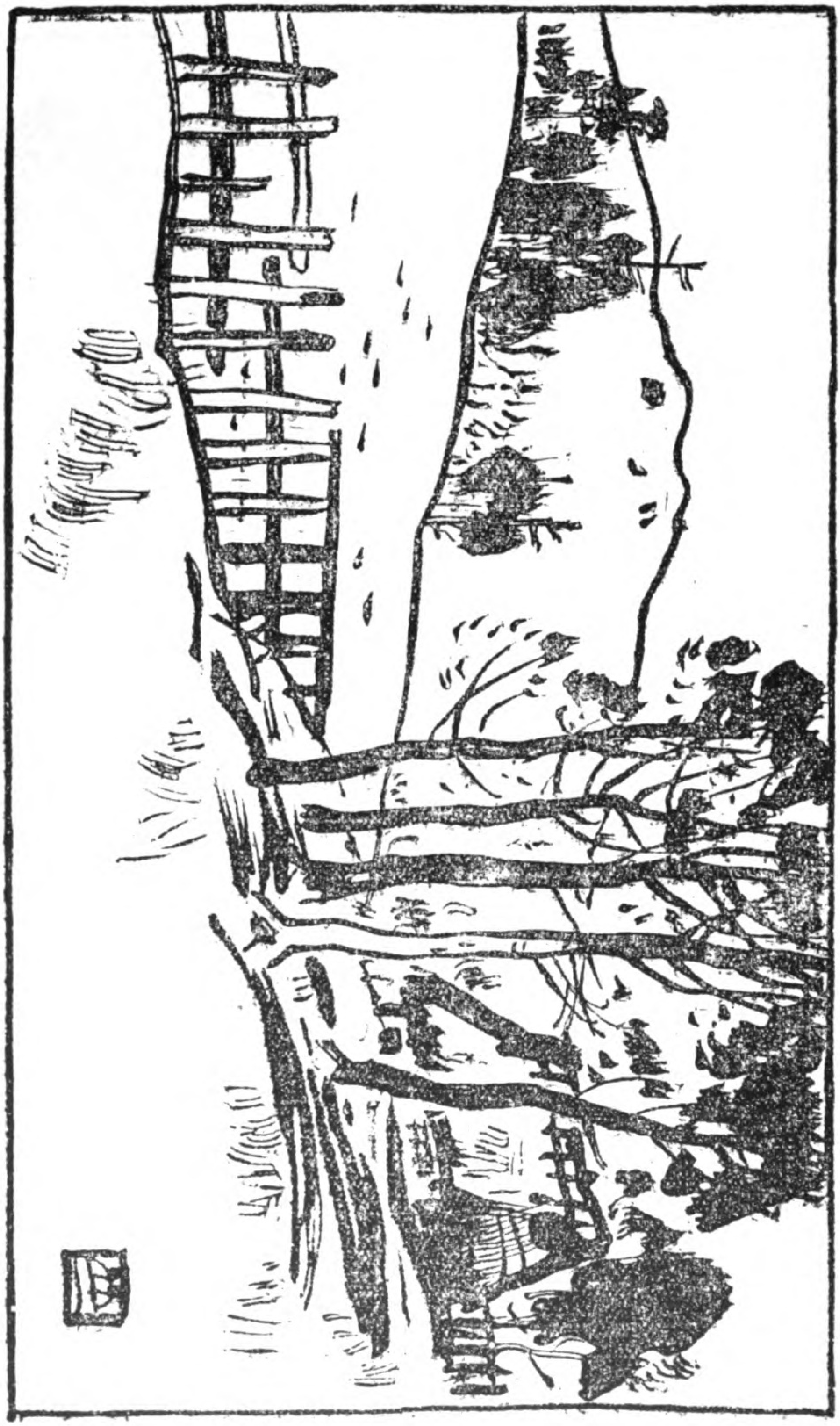


立つ。これは、過渡の時代における常として、まことに免れることのできないことである。

世には、この理想を、無意味の夢として、ひたすらに斥ける人がある。だが、無理な話で、誰れにしたッて、理想なしに、一日も生きてをられるものではない、況や、血ある、熱ある、若い人たちの上においておやである。これは、どうしても、そのゑがき出す理想そのものを、そのまことの途にと導くより外に策はない。なるべく多くの對象から、抽象して來た理想、――これが、まづ正しい理想に近

い。ところが、今日の若い人たちには、それが許されないのだ。いはゆる男女交際の道は、まだ、殆ど開かれてゐない。多くの對象に觸れるといふことは到底、できない相談である。從つて、かの人たちのゑがき出して、さてすがらうといふ理想は、てんで、その根據を、抽象的の對象の上においてゐる。でも、どうやらかうやら、おぼつかない理想の上に立つてしまふ。して、ふとしての折に、極めて狹い範圍において、ふとした對象に觸れる。危險は、いつもこゝに起る。胸にいだいた理想は、もとこれ砂上の樓臺である。全くの空想から築きあげられた標準である。して、經驗の乏しい心は、對象のそのまことの意を、さながらに解く力はとてもない。――これぞまことのと――そのそでないおびきこゝちにさそはれるのは、むしろ當然のことである。

自分は、どうしても、交際の自由を、ある程度まで進められるより外に、これを救ふべき道はないと思ふ。人は、よく、犧牲のおそろしさを說く。尤もである。しかし、犧牲なき進步といふものが、そも世の中にあらうか。日露の一戰役にさへ、われ〳〵は、幾十萬人の忠勇なる國民の犧牲をさゝぐることを辭せなかつたではないか。今、われ〳〵が、このおそろしい運命から離れようといふのに、多少の犧牲を顧慮するのは、抑も異なことだと思ふ。好んで暴論を吐くのではない、要するに、長く、このおそろしい運命の下に屈服されてゐるのに忍びないのである。勿論不幸にして、犧牲となつた人たちの上には、限ない同情の念をさゝげる。犧牲は、如何なる場合においても、犧牲である。戰場における犧牲も、この場合における犧牲も、その犧牲たるにおいて、かはりはない。即ち、その犧牲を犧牲として取り扱ふのは、――いひかへれば、できる限において、慰めもし、蘇生せもするのは、世の志士仁人たる人たちの、當然の義務である。



屋狐の杜



深窓に育ちし令孃の人知れぬ憂ひ

白百合

憂に沈む姉小枝子

昨夜の事が妙に氣に障つてとう〳〵夜すがらまんぢりともせず枕元に置いた小さな時計の針が三時を指した頃には、もうたまらなくなつてとび起きて了つた。いつものふだん着だけではふるへる樣に寒いので音を立てまいと氣を兼ねながら簞笥からあらいお召の被布を出して羽織の上から重ね着する。それでもまだ明けやらぬ冬の夜の身にしみ渡る寒さに堪へかねて深く埋けてあつた火桶の埋火かきおこし友禪縮緬の座ぶとん引寄せ紫檀の机に身をもたせて、くづれる樣に座をしめる。

あゝ毎日々〳々實にいやアな事ばつかり、お八重（父上の愛妾）が本邸に入つてからは一日だつて片時だつて心から樂しいと思つたことは夢にもない。昨夜だつてあんな失敬な事言はれてほんとにもう我慢も何も出來やアしないわ、一體お八重や奈津子達は私を何だと心得て居るのだらう、お八重なんぞ今でこそ御部屋樣とか何とかつて、召使どもからチヤホヤされて居るけれど御祖母樣御在世の頃は本邸へは出入も叶はなかつた身分ぢやないか。奈津子や美代子にしたところで、いくら腹は借物なんて威張つて見たつて矢張りあのお八重が產んだに違ひはない。私はどこまでも此の子爵家の正室の子、奈津子達とは位がちがふのだわ、それだのにあの御病身な母樣を人ぎゝの好い御養生といふ口實の下に體よく大磯の別莊に追ひ出してからといふ

ものは私一人を除け者にしてあとはお八重の我儘三昧奈津子美代子はいふまでもなく小間使、仲働などの御末社どもまで見様見真似に人を馬鹿にしきつてるとは何てエまあ憎らしい人達だらう、柔順にしてる私が可哀想だと云つて乳母が陰になり日向にかばつてくれゝばそれを亦目の敵にしてあの罪もない忠實な乳母に近々に暇を出すのださうなつて昨日一寸母様附だつた小間使の千代が秘密で知らしてくれた。

いゝわ、ちつともかまやアしないわ、いくら誰が何



と云つたつて生れた時から十九年が間永の年月世話になつた私の乳母だもの私が許さないのにお八重なんぞが勝手にひまを出せる譯はないのだから……

若しやお八重から表向私にそんな話でもあつた時には私は乳母と千代とを連れて大磯へ行つて母様のお側で一生くらして決して本邸などへは歸らないからちつとも困りやアしないのだわ。あんまり口惜しい時なんかいつその事お八重や妹達への面當に思ふ存分の書おきして華厳の瀧か淺間の噴火口へでも飛び込んでやりたい樣に思ふ時もあるけれどあゝそれさへまゝにな

らないとは……家名の身分のとつまらないものに束縛されてる此の身が實に恨めしい。なまじひこんな華族なんぞに生れずにたとへ九尺二間の裏店でも親子兄弟水入らずに樂しく嬉しくくらせたならば……

けふ此頃の有樣を、まさかに病みます母樣には申上げるに忍びないが、せめては共に泣いて頂き度いのは海原はるけき異郷の空のケンブリッヂ大學に御留學中の兄樣ばかり、いくら妹どもが威張つたところで此の○○子爵家の正しい血統を受けてる者は兄樣と私ぎり兄樣さへ早く御成業遊ばして歸朝して下されば私どんなに心丈夫か知れやしない。その時には兄樣と私と聯合して父樣にお願ひ申してあんなお八重なんぞ追ひ出してしまつて、母樣にも本邸に歸つていただくことにしたい……

思ひつめては堪へきれず、御心配かけてすまないと思ひながらも兄樣へ手紙したゝめる。レターペーパー三枚ほどの長い言葉をかき終へホーッと安心の吐息を洩らして漸く氣がつくと今まで夢中になつて居たのでサッパリわからなかつたけれどもう廊下をゆきかふ足音や召使達の話聲やら今朝は一際頭にひゞく。時計をみると七時もよつほどまはつて居る。折柄乳母が雨戸を引きに來てくれたので『乳母かい？お天氣はどう？』と小聲できくとスーッと障子をあけて入つて來て『お早う御座います。まあ姫樣御目がはれて……昨晩もまたお寢み遊ばしませんでしたね、お部屋樣だの奈津樣だのが御覽になると惡うございますから早く御化粧遊ばしませ』といつもながら親切に云つてくれる。お八重が母樣に代つて此の家に入つて勝手氣儘に采配を振り出してからといふもの多くの召使達はカラリと人が變つて皆すれつからしになつてしまつたのにいつも變らず私によく氣を付けてくれるのは乳母ばつかり。千代だつてまだ若いから斯うまでは屆はしないと思ふ。何だか胸が一ぱいなので朝の御飯にはとう〳〵食堂へ出ず先刻の兄樣行の手紙の上書して千代に出させてから圖書室へ入つて近松全集とり出して讀む。

御晝飯の時向きあつて腰かけに奈津子がもよい〳〵

あの大きなまるい眼で睨む様な顔をする。いやにゾロッとした服裝をしてお八重も美代子の側に座をしめて

「小枝様今日は大層お靜かでゐらつしやいますねえ、何か御心配でもできまして？」なんてまたしてもよけいな事を云ひながらヂロ〳〵見る。奈津子は、

「イーヱね八重、昨夜のことが姉様はお氣に障つてゐらつしやるのよ、惡かつたわねえオホヽヽヽ」と憎しい笑ひ様をしてお八重と一寸顔見合はせる。矢つ張り生みの母子つて爭はれないものだ。それからまた例の通り御飯たべながらつまらない事にキャッ〳〵とさわぎ始めたから私ひとりサッサとすまして席を立たうとすると奈津子が、

「姉様は午後から三越にいらつしやらないの？私達これから八重に連れてつてもらひますのよ」といふ。

、、、、、、連れてつてもらふが癪に障つたから、

「あゝお八重がお供で？私は今日出られませんから、どうぞ皆で御ゆるりと」と我ながら素氣ない言葉を殘して室を出てムシャクシャまぎれピアノでもと客間に入つてピアノに手を掛けると鍵がチャアンとかゝつてゐる。きつと奈津子のお手廻しだ。此の間からいよ〳〵妙な具合になつてしまつた妹のところへ、まさかに鍵を拜借とも云つて行かれないので、仕方なしに圖書室に引返して、手あたり次第よみ散らかす「沙翁全集」も出た、藤村の長篇「春」も五六ページのぞいて見た。それにも倦きてリボン織の美しいカーテンかけた窓際の安樂椅子に身をもたせて何としもなく考へ出すと云ひ知れぬ冷い涙が頬を傳ふて衿にこぼれる。

　御不幸な母様の御身の上、いゝお年遊ばしながら未だに止まぬ父様の御不身持、賴み甲斐ない妹の事、さては朝な夕なに氣まづい思ひをせねばならぬ我身の上など、それからそれへと、想ひの糸の亂れもつれて、果てしもない。嗚呼、この善美をつくした家に住ひ、流行の衣を身にまとふて、物質上には何不足ない私だけれど……

　あゝ爵位も要らない。富も捨てやう。たゞ〳〵親子兄弟むつましく、温かい空氣に充ちた家庭の中に、樂

しく憐しく暮せたならば……

浮薄に育てる妹奈津子

昨日の日曜には三越のかへりに銀座へ廻つたり何かして疲れたので今朝は大變寢坊してしまつた。

大いそぎで髮を揃へてしまふと丁度お八重も起きて來ていろ／＼着替の世話をやいてくれながら「奈津樣昨晩おそく御前がお歸邸になりましたからね此の間中からお留守居ばかりさせられた代りに今日歌舞伎座に連れてつて頂く樣に願ひましたんですよ、ですから學校なんぞお休業になつて早くからお仕度遊ばすと可いんですけれどね」「オヤ父樣が御歸邸になつて？ぢやア學校は正午までにして歸つて來てよそして今日は姉樣は？」「おすゝめ申しても駄目で御座いませうよ、先日から何だか御機嫌が惡い樣ですから」といふ。

「ほんとに妙にふくれてゐらつしやるんだねえ」ッて笑ッてると噂をすれば影とやらもの憂げな顏してスッと化粧部屋に入らうとなすつたが私達が居たので何にも言はず引返してゐらつしやる。あゝ矢ッ張りまだ御機嫌が斜なのだと見える、一昨夜私とお八重とで一寸大磯にゐらつしやる母樣のことを云つたらもう直ぐ怒つてしまつて昨日も終日すねてゐらしつたつけ。隨分奇妙な方もあつたものだ。

そしてまた私が八重のことでもよく云はうものならそれこそスッカリ空模樣が變るといふさわぎ、姉樣が母樣を大切になさると同樣、私だつてお八重が大事だそりや表面こそお八重は奉公人だけれど何しろ私や美代子を產んでくれた人なのだもの、お八重々々つて呼び捨てにしてるのも實は心苦しい樣なわけ、全くの心の內はと云へば母樣より八重の方がなつかしいのだから自然と八重になづく樣になつてしまふ。つまり姉樣と母樣との關係と少しもちがつたところは無いのだわあの變人な姉樣が妙なひがみ根性からお八重を賤しむ樣なことが有れば私はその面當になほ／＼お八重々々つて大事にしようと思ふ。

學校にゆくとクラスで一番お美しい艶子さんが今日

は珍しく唐人まげ、皆様グルリッ取まいて口々にほめそやしてゐらつしやる。仲好の秋子さんが一寸私の袂を引いて「艶子さんみたいにお奇麗な方があるのに此の學校では末廣さんが一番だなんと思はれて口惜いのねえ」とおつしやる。「ほんとにね。あなたの様なお美しいかたがゐらつしやるのにね」つてからかつて上げた。先生がお休みで國語の時間が自習になつたが誰一人まじめに自習なさる方はなく御近所どほしお話が始まつたり笑つたり遂敷室が賑はしくなる。二列目の毛利さんが小さくまるめた紙きれをポーンと笑ひながらお投



げになつたので開いてみると「昨日いゝところで末廣さん……ぢやアなかつたあの野津侯爵婦人にお目に掛りましたの、スッカリ奥様らしくおなりになつたので二級下だつた方とは思はれませんでした」と書いてあつた。

今日はこれで二度ひろ子さんのお噂が出た。きつとクシャミを澤山遊ばしたにちがひないわ。

正午限りで歸へる仕度して居ると國文專習科の佐竹さんが窓の外から一寸と云つてお招きになるのでなアに？と云ひながら出てゆくと

「昨日延枝さんからお寫眞が届きましたから、豫て

のお約束ですからお目にかけませう」とおつしやつて長い矢絣の袂からお出しになつた。それは氣取つた臺紙のキヤビネ形にお上品な立姿、派手な模樣のお重ねめしてお髮は丸まげ、原田樣と申上げて姉樣のクラスにゐらしつた頃よりは又一しほの御美しさ、まあと云つたぎり暫くみとれて居ると、

「千家さんのも水野さんのも頂くはずですからまたお目にかけませうね、その代り小枝樣のもあなたのも拜見な」と佐竹さんがおつしやつた。

迎への車で大急ぎで歸邸つてみると父樣は急に御用が出來て歌舞伎座へはおいで遊ばせないとの事、姉樣も御氣分が惡いとかなので今日の一行は私と美代子とお八重、それに家扶の牧原と女中の靜とを供に連れる事になつた。お風呂に入つたり髮を直したりめい〳〵仕度にいそがしい。

私達はお八重の計らひで思ひきつて華美に裝り新形のオペラバツグ持つて大勢の召使達に見送られつゝ大玄關から馬車に乘つて出かける。

歌舞伎座は隨分な大入だつたが宗行卿なんぞ私には少しも面白いとは思はれない、矢張りドロシーとかまたは此間見た坪内博士の初夢の樣なものゝ方がはるかに趣味に投合つてる樣に考へられる。

歸りがけ馬車に乘らうとする時チラと私の好きな岡田八千代女史のお姿をみかけたからまた近いうちにあの御麗筆になつた劇評が拜見できることだらう。邸に歸つたのは十一時すぎ。父樣が今日も夕刻からおでかけになつたといふのでお八重は少し機嫌が惡い。姉樣は私達が歸りましたとお知らせしても顏出しもなさらないとは隨分なかた。私の方から御居間に出かけてゆくのは何だか御世辭つかふ樣に思はれると口惜しいから知らん顏して毎夜の通り美代子と並んで床に就く。銀砂子をまき散らした樣に、またゝく星のかげ美しき冬の霜夜。

僞はらざる告白

菜陽花

女學校を卒業して相場師に
嫁したる妻君が其の良人に
對する不平を告白したる文

夫の外泊も此頃は大分はげしくなつたやうです。肝心の勤め先なる取引所の方の事情をちつとも知りませんから、實はわからないのですけれど、何か一寸まとまつた事をやつたと見えて、どうも懐の工合がいゝのに違ないのです。一體「自分の腕で自分が働いて、儲けた金なら、自分勝手に、思ふ存分の事をして使ふべしだ。無くなりや働いて又儲ける分の事だ」といふのが夫の主義――主義はをかしい、まあ持論ともいふべきものです。どの道相場師ならそんなものでせう。何言うても無敎育なのだから仕方がありません。自分が言つてる所によると、まるせ小學校も滿足に卒業してゐないらしいので、どうせラの字の一度や二度は、敢て詮議するにも及ばないのでせう。そんな事を思ふと情なくもなりますが、其代り怠け者ではありません働くといふ點に於ては、夫は實に見上げたものです。所謂「事實を以て事實を證明せよ」で、どんな事でも自分が言つただけの事はどし／＼實行して居ますもの私はそれがエライと思ひます。別に朝から晩まで、コセ／＼キヨロ／＼と眼も鼻も一緒に動かしてゐるといふではなく、而も眞面目にヅン／＼働くだけは働いて、そして幾何か儲けてゐるのです。かう言うとをかしいやうですが、實際私は、夫にどの位の收入があるのか、知らないのです。けれども三日に揚げず惡所入をする事を思ふと、相當にあるはあるのでせう。私共を養つたあとの金を使ふのでなくて、自分の使つたあとで私共を養つてる位なものです。――惡所入などゝ言ふと語弊があるかも知れませんが、まあ妻の身になつてみれば、さう言うのが至當でせう。けれど私も

別にそれについては何とも思ひません、思へないんです。夫は、所謂自分で儲けた金を自分の甲斐性で使つてゐるのだ――とかう思ふからなので。

私は決して例の持論に感心した譯でもありません代りに、また無理だとも思ひません。要するに嫉妬とか何とかいふやうな事は、冷酷に考へてみれば、隨分馬鹿げたものなのでせう。よく女將とか、仲居とか言つたやうな女が我家へ來る事がありますが、いつも私は、つとめて愛想よく、ニコ／＼して見せてやるのです。忌々しいのですけれど、ムツツリしてゐて、後であんな人等に笑はれるは、尙忌々しいのですもの。「あんな女等だつて、何も伊達や醉興で他人にチヤホヤしてる譯ぢやない。つまりは食はんが爲なのだ。資本金二億萬圓の滿鐵でも商賣なら、屋臺一つのおでんやでも商賣だ。儲けて食ふといふ點に於て上下はない」とはいつも夫のいふ事です。してみると相場師でも矢張り儲けて食ふとやらの商賣で、神聖なものなのですが書物なんかに氣の無い事、呆れるばかりです。かういふ職業の人に、何も難しい書物や、小說なんか讀まうとも思ひませんが、せめて雜誌だけでも――といふ所から、私のとつてゐる婦人や文學のものを、目につくやうに、わざと火鉢の縁へ載せて置いたりしても、見向きもしません。止むを得ず催促すると、仕様事なしに取上げて、一枚一枚皺をつけ乍ら機械的に口繪を見てしまつて、愈々本文にかゝると、グワツと小口を摑んで、下の方からどり／＼と飛ばしてしまつて、ポイと投り出す。つく／＼愛想がつきるやうです。しまひには、もうどうとも勝手にしろといふ氣にもなりますが、これが妻の務の一つかも知れないなど〻、妙な理窟をつけて、先々月からやつと二三種の實業雜誌をとらせる事にしましたが、それでも、めつたに自分の方から手を出すといふ事はありません、まあ前世で讀書した爲に、地獄へ突落された人かも知れない――位に思つて了ふより仕方がないのです。その代り「世智」といふものにかけては、私は一分一厘も夫の領分を犯す事は出來ません。幾萬卷の書物を讀み破つても尙將

る事の出來ん——況んや私なんか逆立しても及ばぬ「經驗」といふものがある。私のやうなものでも、思はず顔を赧める事があるのですもの、さういふ時、つくづく夫のエラサが思はれます。だから高等女學校卒業位の智識を鼻にかけて、隨分生意氣な事を言ひ掛け、一廉夫を遣込めたつもりで居た事もありましたが、私は何といふ馬鹿でせう、無邪氣な夫がフン／＼言つて聞いて居ればこそ、世は泰平です。此頃の私の生活はどうでせう。朝寝はする。芝居は變り目／＼に缺かした事はなく、大抵のものは此方の言ひなりに買つてくれる。本箱には新刊の書物や小說がギッシリ詰つてゐる。子供はなし、舅姑があるぢやなし、鬼だつて、千匹所か半匹も居やしない。夫は氣が大きくて、私に對して小言一つ言つた事はなく、いつもニコ／＼と愉快さうな顔をしてゐる人だ、隨つて結婚してから、喧嘩といふやうな事は、唯の一度もやつた覺えはない。面白いと言やあ面白い



無意味だと言ふも無意味、要するに他愛もない生活なのです。我ながらあさましい事だと思ふ時がないでもありません。假りにも高等女學校を出た身で、相場師なんかの細君になつて――奥様ちやない――火鉢の前にぺタリと坐つて、小説を讀んでゐる。時々兩の鼻の穴からフ――と煙が吹き出る……あの謹嚴な大村先生（女學校長）が御覧なすつたらどうでせう。恐らく氣絶なさるかも知れません。けれど私は平氣でした。こんな氣樂な面白い生活がまたとあるものかと思つて居ましたのです。徒らに良い所へ嫁いで、家風とか何とか言うやうなものに縛られてゐるのは厭だ。つまらん所へ嫁いで、明けても暮れても眞黒になつて働かねばならぬ、それも厭だ。と言つて小學校の教師になつて桃太郎や舌切雀を相手に、やがてオールド何とやら言はれるのは尚厭だ――とも思ひました。然しながら、今はもう此幸福らしい生活にも、つく〴〵飽いて來ました。成程夫は胸も廣い。胸が廣いとは言へないかも知れませんが――何しろコセ〳〵した人間でない事は確です。けれどもいくら胸の廣いのがいゝたつても、凡そ程度があるでせう。夫ばかりは、私が如何なる事を言つても、如何なる事をしても、未だかつて怒つたといふ事はないのです。怒らないと言つたら、それこそ眉一つ動かさないのです。「はつはつは」と笑つたらそれでおしまひ。いつかも、今日こそ一つ怒らしてやらうと思つて、試驗的に我ながら恐ろしくなる程ひどい事を言ひ放ちました。恐らくこの脈管を傳つて、赤い血が全身に漲つてゐる人なら、よもやだまつては居まいと思ひの外、夫は相かはらず平氣です。「ふゝゝゝ」と笑つただけなのです。「私の夫」としての夫なら憤然色をなしたかも知れませんが、唯「男」としての夫には何等の交渉もなかつたのです。私は――私は最初夫から頭の三つ位なぐられるのは覺悟の前であつたのですが、此時ばかりはほんとうに私の方からなぐつてやらうかと思ひました。私が男なら隨分やりかねなかつたでせう。いくら氣が大きいと言つたつて、夫が何も聖人ぢやなし、木石ぢやなし、それあ長の年月の間

には、腸の煮え返るやうな事も、随分少なくないのでせうに、どうして私にはかうも無頓着なのでせう。亡き國木田獨歩氏には「女子禽獸論」といふのがあつたさでうすが、夫はまさか禽獸とも思つて居ますまいけれど、まあ「女」といふものを床の間の生花に毛の生えた位にしか見て居ないのでせう。私も「女」ですけれども私は「女」の中の「妻」ではありませんか。一生苦樂を倶にすべき「妻」も、酒を呑んで、唯ワイ〳〵騒ぐだけの「藝妓」も、夫の眼には同じ「女」とうつツてゐるのでせうか。「妻」としての私は、殆んど——否全然其存在を認められて居らんのです。私はそれが忌々しいのです。私が何を相談したつて眞面目に相手にもなつてくれなければ、又夫も私に相談を持ちかけた事はありません。居つても居らんでも同じやうなものです。そして平氣で三日も四日も家を明ける事がありますが、私がムツヽリしてそこいらへ當り散らして居ても平氣です、私がニコ〳〵してゐても平氣です。こんな馬鹿げた事があるものでせうか。「あなたは人を侮辱するんですか」つて怒鳴りたいやうな氣がします。どうかして「妻」と「藝妓」との區別を悟らしてやりたい妻としての「私」といふものを、夫の頭に刻みつけてやりたい。「妻の有難味」といふものを痛切に味はしてや



りたい。一つ書置でもして、二三日姿を隠してやらうか。夫があはてゝ居る様を傍からそつと見たら面白い事だらう。いつそ掴み合つて大喧嘩でもやつたら、さぞ胸がスッキリするだらう――といふやうな事を考へる。随分馬鹿げて居ます。しまひには、どうかして一度は自分の權威の下に男を自由にしてみたい――と言つたやうな氣も起きる。現に夫は私の自由になつてゐる。西向きなさい、さうか、北向きなさい、よし、私の言ふ事に反對した事は一度もない。恐らく今度もなからう。けれども――けれどもそれは、小父さんが坊やに頭をはられて、あやまつてゐるのと同じ事なのぢやありませんか。あゝ男！羨ましいのは男に生れた身です。夫は男です、無教育だつて何だつて、浮世の荒浪にもまれ抜いて來た立派な男一匹です。やさしいうちに、犯し難い威厳があり、而も何の苦もないやうな、あの温い顔を眺めると、我意の命ずる所、行ふとして成らざるなし――「我は男ぞ！」といつたやうな、一種の名状し難い大なる「誇」が、ひし／＼と私のこの眼を射るやうで、實に心憎い限りです。

「あゝ眞面目になりたい」この考へは、近頃はげしく私の胸の裡を往來します。自分の今の生活がシマリのない、自墮落な、實に賤しむべきものだ、といふ事を、痛切に自覺しました。全然切りかへた生活がしてみたい。「人生」「奮闘」といつたやうな、勇ましい、華やかな言葉が、無暗に思ひ出されて、獨り譯もなう胸が躍る。何アに私だつて……これから働くんだ。此細腕も折れる所まで、浮世の荒浪を突……

而しながら、かうは氣が變つたものゝ、冷やかな眼で側面からそれと睨んで見りやあ、矢つ張り……いえもう止めませう。あとはお恥しくて書けません。



産婆を選むに就ての心得

醫學博士　榊　順次郎

◎産婆は醫者よりも責任重し

世間では、醫者の選定に就いては、十分周到なる注意を拂つて居るやうですが、産婆の撰擇に關しては甚だ無頓着であります。これは甚だ遺憾な次第です。もとより、醫者は生命を托すべきものであるから、其選擇に意を用ゐることは最も必要な事ですが、人の生命を預るといふ點に於ては醫者も産婆も變りはないのです。否、事實産婆の方が醫者よりも一層重き責任を有してゐます。何故かと言ふに、醫者に於ては同時間內に二人の生命を預るといふ事は難しいが、産婆に至つては當然同時間內に母子二人、時にはそれ以上の生命を預つて、其運命を己が掌中に決定するからであります。故に産婆の選擇には醫者の選定に於けるよりもより多くの注意を拂ふ必要があると申さなければなりません。それにも拘はらず、何故世間では産婆の選定をおろそかにして居るかと言ふに、それは恐らく産婆の失策が常に社會の裏面に埋沒せられて居るからだらうと思はれる。

◎産婆の落度は世間に知られず

世間に知られないと云ふ事には種々原因もありますが、産婆と醫者との關係といふ事なども、確かに其原因の主なるものといつて宜しいでせう。例へば産婆の落度で産婦や産兒に病氣をひき起した時には順序として醫者の診察を乞ふことゝなりますが、斯る場合に産婆は必ず其醫者の選定を病家にまかせないのです。理由は申すまでもなく自分の落度が病家に知れては不利益であるからなので、いろ〳〵と巧言を用ゐては自分の缺點を保護して與れる處の醫者を指定する、それ故産婆の賴ませる醫者といふものは大抵定まつて居る。

處で醫者の手に渡つた病人の結果は、常に醫者の責任に歸して了つて、產婆の落度は遂に問はるゝ事がない。それなら醫者の中には何故產婆の缺點をかくしてやる人があるかと云ふと、それは他でもない。遠慮なく申せば米櫃に影響が及ぶからである。內幕をいへば先づ斯んな風で、產婆の落度は見事暗から暗に葬られて居ります。

●不良產婆の恐るべき危害

不良拙劣なる產婆の危害は、縱令母子の生命を失はするまでに至らぬにしても、多くの不具者や癈疾者を社會に出して居ることは爭はれぬ事實であります。產時產婆の失策に依つて受けた損傷の爲に、後天性の畸形、不姙症、または神經病を惹起すべき生殖器內部の異狀等を發生して、永久に治しがたきものとならしむることは甚だ珍らしくないのであります。それにかの白痴、低能兒、或は後天性の畸形兒などは、一般には遺傳疾病等に基くものと考へられて居りますけれども、實は往々產婆の不正な取り扱ひによつて生ずることがあります。處が今日繁昌を極めてゐる產婆の中にも、新舊兩產婆とも各々極端に偏つた弊を有つて居るので、豫想外の危害を社會に及ぼして居ります。かの無學無識で產婆學的の實驗などは更になく、而も大膽に自己一流の取り上げ方を行つて居る處の老年の舊式產婆の危險なることは申すまでもありませんが、產婆の範圍を超えて產科學の區域迄侵入して居るやうな新式の似而非產科醫的の產婆には、更に恐るべき害を認めます。

●理想的の產婆の資格

一體產婆の行ふべき業務の範圍は、たゞ普通の安產の時に產婦を助けて產兒を取り扱ふ事にあるので、もし少しでも異狀のある時は、直ちに產科醫に依賴しなければならないのです。だから獨斷で妄りに產科醫的に手當をしたり、藥品を與へたりするやうな產婆は餘程警戒しなければなりません。それで如何なる產婆が

最も善良であるかといへば、まづ次の資格を有するものでなければなりません。

一、普通學の素養あるべきは勿論、產科學に立ち入らざる產婆學範圍の學科を十分に修得し、それを實地に當つて機敏にかつ遺憾なく行ふことの出來るもの

二、凡て業務に對しては醫者の與へた命令及び訓戒を誠實に守り、これを實行すべき溫良柔順なる良性を有するもの

三、頭腦明晰にして理解力に富み、事理を確的に辨別することが出來、かつ記憶力强きもの

四、體力の强健なるべきはもとより、人格高尙にして博愛慈善の心に富み、忍耐力の强きもの

以上の資格を具備するならば、まづ理想的善良の產婆といつて差支がない。

●誤れる產婆選擇法

然るに世人が產婆を賴むに就いての條件をきけば、曰く年を老つた產婆、曰く近所の產婆、曰く人に勸められたる產婆などであるが、これらの選定法は決して當を得たものとはいへない。

第一年を老つた產婆、これは經驗に富んで居るといへば成程お產の數は多く經ても居るでせうが、老產婆の多くは槪して無學無識でたゞ自己流を揮ふ處の舊產婆である。且つ身體が衰へて居るから、長時間の難產などに當つた場合には、產婆の方がまづ勞れて、手當が行屆かないといふやうな事になります。

第二近所の產婆、近い所なればいざといふ場合の間に合ふからといふのでせうが、これは必ずしもあてにはならぬ、何故となれば、產婆はたゞ一人丈けの產婦を預つて居るものでないから、もし同時に二つのお產でもあつた場合には、何の役にも立たなくなります。

第三人の勸めによるもの、これには知人朋友などの勸めによるものや、舅姑親戚のすゝめによつて心ならずもかゝるのがいろ／＼ありますが、これまた好ましくないことはもとよりです。其他素人の所謂流して

居るといふを聞いて頼むといふやうな事も多いのですがこれも安心して依頼すべきものではありません。すべて不良なる産婆は其技術の拙きに反して、お世辭には隨分巧みだから、人に取り入ることに妙を得て居る。さては一度頼まれた家へは時々出かけてお世辭をふりまき知合にお産のある場合には自分らを紹介して貰うことを依頼する。斯ういふ風で流行して居る産婆は世間に隨分多いから十分注意しなければなりません。

●産婆の選定と産科專門醫

一體産婆を選擇するといふことは、素人は勿論醫者でも普通の醫者では却々難しいのです。それは普通の醫者では産婆の失策によつて發した病者を診察することが甚だ少いからである。けれど産科婦人科專門の醫者となると産婆の良否を最もよく知り居るから、産婆の選定法はこれを信用すべき專門の醫者に托するのが一番安全な方法であります。然るに世間の人はさうはしないで、姙娠五ヶ月目に腹帶の式を行ふと同時に産婆をたのみ、其後醫者を頼む必要が起れば、即ち産婆と相談の上で選定するといふ有樣ですから、時によい産科醫を得ることもありますけれども、前にも申した通り、産婆の指定する醫者には間々産婆の缺點を蔽ふ處の人が多いから、よほど注意しなければなりません。縱令産婆が巧言を用ゐてとやかくいふても、姙婦の方で信用して居る專門醫を依頼することを忘れてはなりません。

●寒心すべき不良産婆の繁昌

産婆の失策が常に社會の裏面に葬られて居るので、世人は不良なる産婆を恐るゝの念に乏しく、從つて其選定をおろそかにして不知不識危險を冒つて居ることは既に申した通りですが、更に進んで不良劣等なる産婆の寧ろ歡迎せられて居る原因がある、それは世人が出費を恐れて、産科醫を頼むことを好まず、成るべく産婆の手で處置して貰はうと望む事です。そして産婆の良否を問ふはさておき、其産婆も出來る丈け安直な

ものをともとめて居る。然し儉約も時によりけりである。一文をしみの百失ひの愚を學んで、それで治まればまだしも仕合だが、遂に取り返しのつかぬ恐しい結果に立ち至ることが屢〻あるから、大に注意しなければなりません。なほ、日本の現今は、産婆に對する法律命令がまだ完備して居らないのと、政府の取り締り方が寛大であるのとに、依つて、不良な産婆が思ふさま跋扈して、かの下流社會及び不倫の私生兒を生ずる階級の歡迎に應じ、巧みに法網をくゞつては産科學的醫術を弄して、秘密に人工流産を行はせるなども随分ある事ですが、これなども何とか取締りの方法を設けてほしいと思ふて居ります。

●重大なる社會問題

私が善良なる産婆の養成を思ひ立つたのは十年來の事で、其間或は産婆學校のためにはかり、或は産婆開業試驗のことにも關係して盡力したのでありますが、種々の事情に妨げられてまだ十分理想を實現する事ができません。しかし世間の人が十分其選擇に注意するならば、不良の産婆はだん〳〵退けられて自然善良なる産婆が世に出る様にならうと思ふ。何うも色々産婆の惡る口を述べました。産科醫として産婆の歡心を買はないのは不利益であると云ふ事は私も承知して居るけれども、不良なる産婆の毒手が多くの婦人や小兒に如何に傷ましい結果を與へつゝあるかを實際に目撃し、其影響の及ぶ處を考ふれば、これは重大なる社會問題であらうと思ふのです。到底一身の不利益を顧みて居ることは出來ません。産婆の思はくなどは何うでも宜しい、私はたゞ世人に産婆の選定のいかに必要な事であるかを知せる事ができれば滿足です。兎にかく不良なる産婆の危害は非常に恐るべきものであるから、世人が産婆をたのむに當つては、十分嚴重なる注意を以て選定されむことを切望いたします。



女流歌人の近什

窪田空穂

最近の雜誌に散見して居る女流歌人の作の中から、私の好きな一部だけを拔いて見ませう。添へる事は讀んだ時に心に浮んだまゝの感じです。

○

天つ日をさして誓ひし僞りし忘れきたいにあるまゝに在り　茅野雅子

其年頃には其年頃の思がある、そして移り移つて行く、或る年頃になつては誠であつた事も、後になると何故其れがさうであつたかと、我と我を憎しむ、此れは誰しもの上にある事です。當り前の事だと云へば其れまでゝあるが、其當り前だとする中に既に限りなき悲みがある。我から進んで然うならうとして成つたのでは無く、自分では知らない或る力に押され〳〵してつい其所まで遣られてしまつたのだといふ心持がします。進んでより高い、より良く成つて行かうと思つて居た日々の努力、――顧みれば其志とは反對に私達の魂は汚され、壞され、亡びの道を辿つて居たのだと心附くのは、誰しも多少思はずには居られない悲みでせう。

或る年頃の或る時、――此心戀に燃えつゝ居た當時、我心は永劫變らない、天に輝いて居る彼の日、かの日の此世にある限りは變らないと、其れを印にして誓を立てた。しか信じても居た。が、其戀が成り、戀を通して我世も知つて來ると、何時か其戀にも背いてしまつた。僞としてしまつた。そして遂には忘れるともなく忘れてしまつた。見よ、今の我身を、戀もない、何もない、しかも依然として、安らかに生きて居る。

あの物思もなう生れて居る。生れるに任せて生きて居るでは無いか……。

情熱はさして多い作とは思はないが、強う云つてある所、何所となく冷かな調子を帯びて居る所、讀んで首肯かせるに足ります。



○

女とはさびしきものかおもはるゝ刹那を頼む命にはして

茅野雅子

長じて處女となつたといふ喜、美しう處女と成り得たといふ誇、あゝ此喜も誇も、身、女と生れた爲めに長く保つては居られない。心の底に微かに人懐かしい思が芽ぐんで來ると、やがて其一念に囚はれてしまつて曾て抱いた喜も誇も、盡く其犠牲としてしまひ、そして、一度に人に思はれるといふ時には、其等をも命をも容易く抛つてしまふ。考へて見ると、女といふ名の中に、既にはかなく悲しい、寂しい運命が含まつて居るのである

我と我を憐まずには居られない。

前の男々しく達觀したのに較べると、此れは女々しい歌です。さういふ中にも瞑想した調子があつて、言葉は單純であるが感じは割合に強く響きます。佳い歌と思ひます。

○　　　　　　　　　　同人

君が子の母てふのみに捨てられぬ幸にだに生きば生くらむ

戀人として人に待たれた頃、結婚する頃、我は喜の世界に住み、此喜は盡きる時なく、取るがまゝに取り得るものと思つた、妻となり、母となるに隨つて其世界はやう／＼に改まつてしまつた。今此所に立つて、其當時の心を喚起して今の心と較べて見る。我よ果して、君の戀人君の妻といふに足りるか、其れに適はしい喜を味ひつゝ居るか。否々、我は唯君が子の母といふに過ぎない。今の喜の如き、之れを前のに較ぶれば、捨てようとしては流石に惜しまれるといふ位のものに過ぎない。前の豊かなる喜に較べて今の乏しさ、此乏しい喜を糧として、我よ生きば生くるのであらう……。

結婚前と後との心の相違、複雜した、云ひ現はし難い感情が、短い言葉の中に不自由なく云つてあります其所が面白う思はれます。言葉は覺めた寂しさを云つてありますが、何所となく愛着の籠つた調子があります。其所が結句趣を添へて居ます。佳い歌です。

○

汝が母はをかしわが子よ汝を見れば涙するなり何ならなくに

自分を思ふ思に紛れて居た時、不圖我子の顏を見ると、自分は母だといふ心持が閃くやうに胸に起り、そして今更のやうに子を眺める。と、何と云ふ事もなく涙がこぼれて來る。我をあはれむ涙か、子を思ふ涙か其れも解らずに、唯涙がこぼれる。そして子を相手に「ね、をかしな母ちやんね……」とやうに呟く。

前のは變つて、染々した哀愁を覺える歌です。達觀した風、瞑想した風、さういふものが少しも離らず、

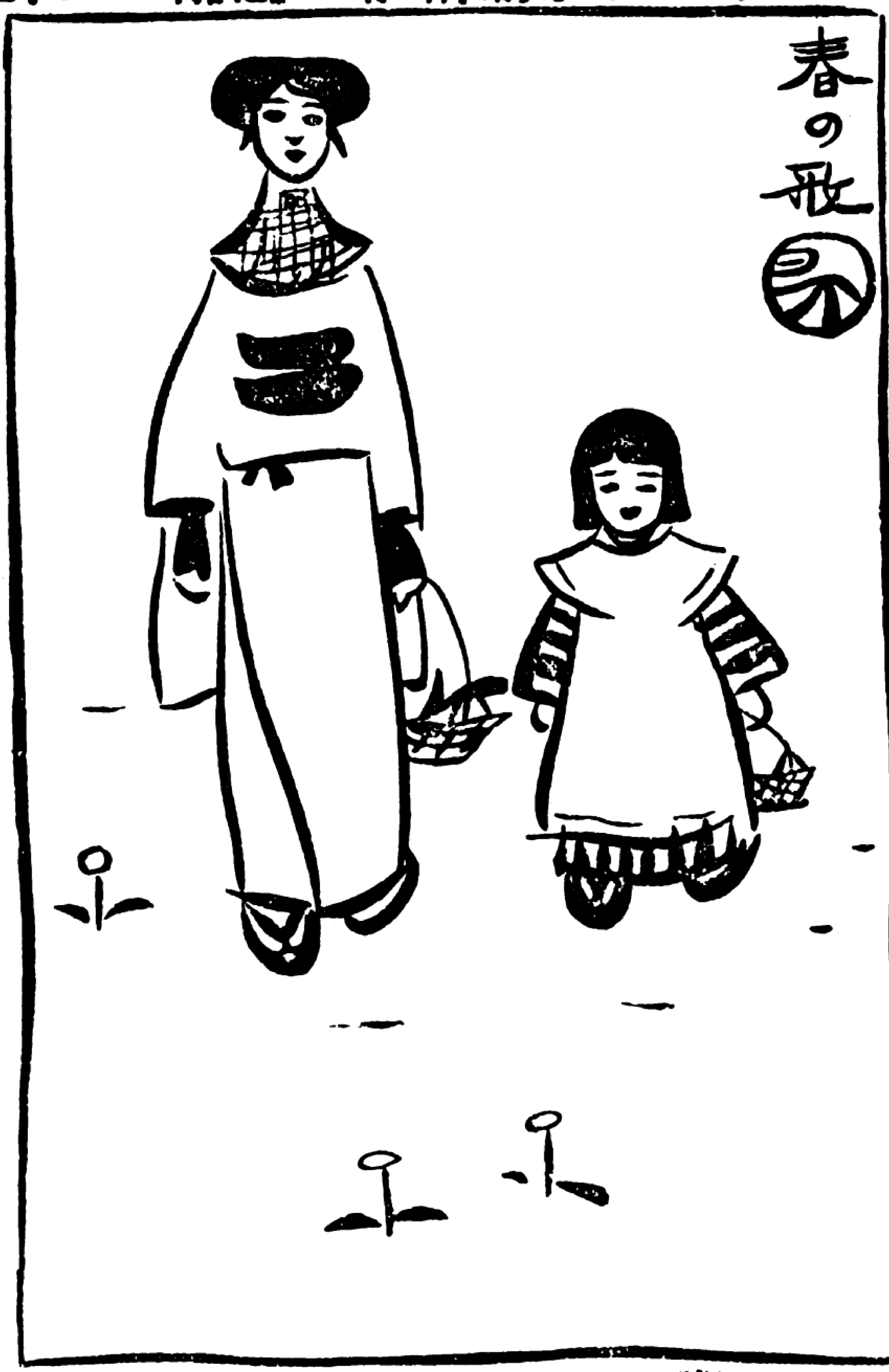
打つけに自分の情を歌つてある所に別種の趣が感じられます、云ひ現はし易くない所を、上手に云ふてあります。

○

北川英美子

秋の雨かし屋らに家つゞきたる小暗き街の軒づたひ行く

読んだ通り、別に何物もない。即興を歌つたものと思へる。が、おほらかに、餘裕を持つて、自分と自分の



周囲を描いてある中に、おのづから一種の感じがある。何となく侘しく寂しい気とも云ふべきものが起る。

適当に云つてあるといふ事が、読んで心持のいゝ第一です。此作の面白みは其所にあります。もつと突込んで誇張して云ひたいと思はれる事を丁度に、感じただけにして止めて置くといふ事は、抒情詞では案外しにくい

事です。其程度を守れぬ爲めに、折角の感を土臺から打ちこはしてしまひます。此作には其れが無い。

〇　　　同　　　人

朝なさな往來まれなる寺町に相見し君とまた
逢はぬかも

此れも打見た通り、朝々、學校の往き道とも云ふべき折、邊り寂しい寺續きの町かなぞで、云ひ合せたやうに毎度一人の男と逢ふ。逢ひ〳〵して居る中、ついに逢はなくなつてしまつたと云ふのである。

此作の面白みも前のと同様、突込んで云つてない所に餘情があります。度々逢ふ中には、多少の感も起るであらう、待つともなく双方其所で逢ふのを待つやうな心にも成つたらう、逢はなくなつたらば、何となく氣になり、寂しさに似た心もしたらう……など〻想像させます。單純な、何所か萬葉集などの口つきに通つた所が結句適はしく思へます。

〇　　　與謝野晶子

ふと逢かばふと別れむとたはぶれのやうにも
あらず云ひし君ゆゑ

男と共にある女の、逢初めたる當時を顧みた。或る時男は、ひよつと斯ういふ中に飽くやうな時が來たならば、ひよつと。然りげなに別れようでは無いかと云つた事がある、其れがまんざらの冗談のやうでもなく聞えた、――さういふ事があつたと思出した。さう云はれながら、其後幾年相共に住んで居る事を思ひ續けた……。

さりげなく、ちよつとした事を、ちよつとした様に歌つてあるが、其れを通して盡きない味に觸れさせる歌です。若し男の愛が執ねいものであつたならば、女は男の全體を虜にし得たやうに思ひ、勝ち誇つた氣がする。さうなると隨つて其愛の底も見え、もう此れだけ、此れ以上は無いと見透かされる。男は故意か故意ではないか其れは知らず、兎に角さらりとして居て底を見せない。女は危みつ〻も一部は興味に釣られるやうにして其戀を趁つて行く、――謂はゞ戀の戯れとも云ふべき境でせう。そして顧れば其戀の戯れが、や

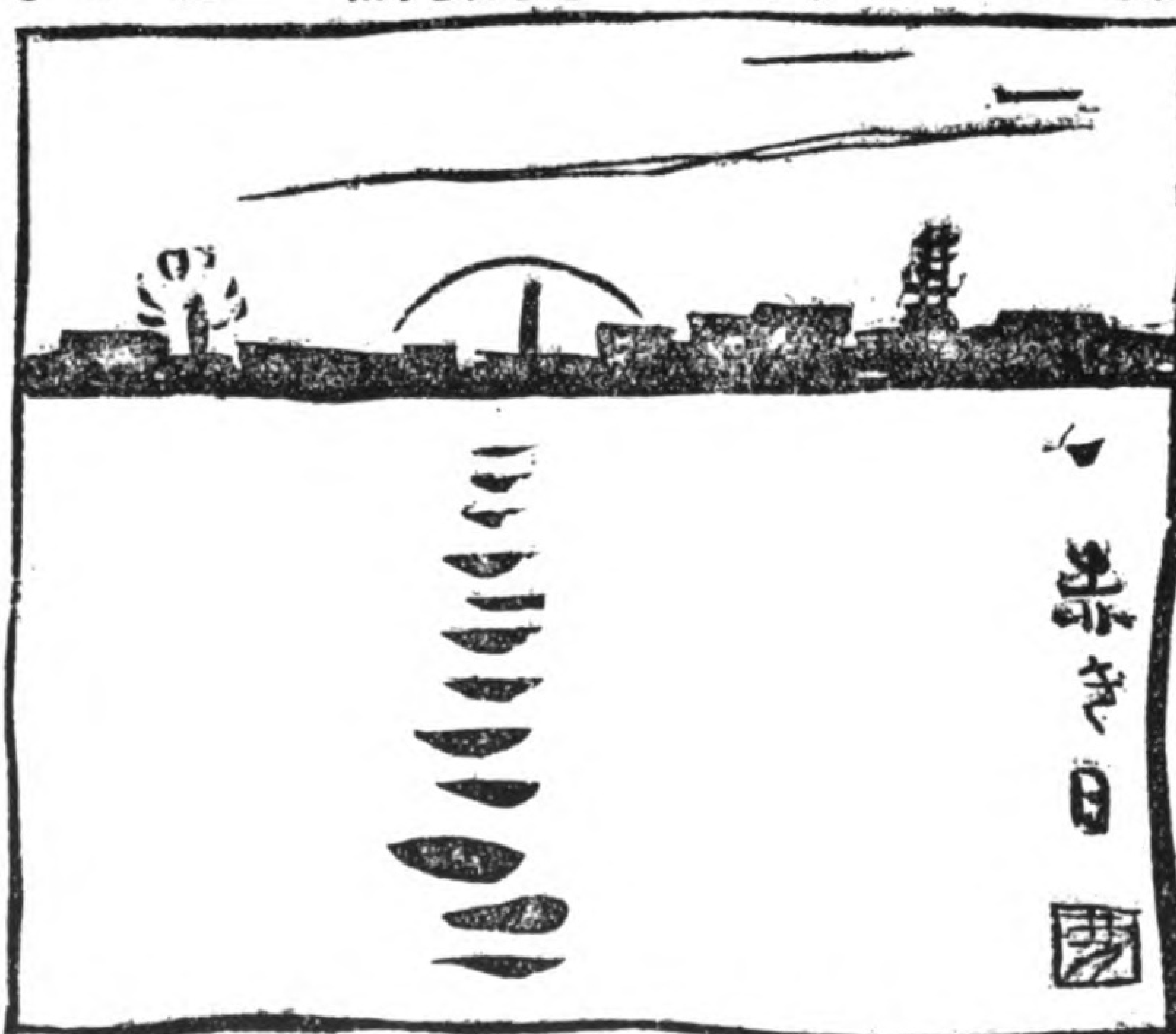
がて二人の生涯運命とも成つてしまつたと云ふのでせう。

心憎く思はれるまで巧みな歌です。一篇の小説を讀むやうな氣がします。

○　　同　人

逢はましと思ひしものを紅人手一つひろひてかへりこしかな

女は男に逢はうと思つて、濱邊へ出た。かう思ひながらも濱の景色に興を覺えて、貝など拾ふともなく拾つて遊んで居た。と、何時か男に逢はうと思つた最初の思も、辷るともなく心から辷つてしまつて、ぶら〳〵と歸つて來てしまつた。心附くと、手には拾ひ取つた紅人手が一つあつた……。



人の心の怪しさ不思議さ、淡々と云ひ捨てた中にそつくらと湛へて居ます。味の多い作です。唯紅人手と云つたばかり、他には何も云はずに、濱邊と、濱邊の面白さとを浮動させて居るあたり、サラリと云つてしまつて、何の巧も見せぬ所、アクの拔け切つた歌です。如何にも藝術だと思はせます。

○　　同　人

ほのかにも兼ねて心にありし聲のもの云ひにこし夜とおもひぬ

或る夜の程、兼ねてより然りげなく交つて居た男が、初めて女の許へ、其戀を打明けに來た戀を打明ける男の其姿、それを見て女は、此れは今初めて見る姿では無い、兼ねてから、ほのかながら幾度



となく心に想像して居た形だ、自分には一枚の繪のやうになつて居た形だ、胸にあつた繪が、今抽け出て、眼の前に展べられたのだ、といふやうな心持がした。

此れも言葉少なく、思の多い歌です。兼ねてから然ういふ時のあるものと心に描いて居たといふ言葉、如何にもよく女の心を云つてあります。その言葉で、前前の有樣も想像が出來るやう、又、男の初めて戀を打明ける有樣を、自分の想像した姿と對照させて見るといふ餘裕のある所で、一層其れが想像しやすい氣がします。打上つた、夢見心地をして居る女の姿までも自ら浮んで來るやうです。

此歌に限らず何れも〳〵、如何にも複雜した事を安安と、何の苦もなく云つてある所、多くの餘情を殘し得て居る所、此等を見ると、短歌の形式の短いといふ所からばかり非難しようとする人に、立派に反證を與へて居るやうにも思へます。

女學校評判記　三

學習院女學部

河岡潮風

△懸賞美人事件▽

頃は昨年初夏の候と覺てゐる。太平洋のかなた米國シカゴのトリビユーン新聞社が、世界美人競爭を思ひ立ち、普ねく天下に檄して、雲鬢花顏の國色を募集した事があつた。挑戰狀の一枚は飛むで東海姫氏の國の首府東京の時事新報社に入り、警報一たび同紙に掲げられて、美人寫眞の募集となり、吾と思はんものは出あへ〳〵と、焚きつけたからたまらぬ。大福餅の潰れた樣な顏の令孃やら、山本勘助を女にした樣な年增迄續々と送つてくる。夫れをお定りの粗製用紙に印刷するから、尙更デコボコになつて、一時は不美人展覽會の樣な始末。心ある士をして「美人あるなし、天下に美人ある無し」と三嘆せしめた。

處が果然！ 果然!! 萬龍はだし、小町も閉口と云ふ程な驚くべき尤物が出現した。潮風生に美女の形容なんか出來ぬから略するとしても、名前だけは云ふておく必要がある。姓は末弘。名はトメ子!!

豫選がすむで、いよ〳〵審査となり、一等が末弘とキマると、トメ子は間違ひで、ヒロ子であると發表せられた――と同時におこつたのは、後に所謂「懸賞美人問題」だ。

弘子孃は芳紀まさに十六、筑前小倉市長の令孃で、學習院中學部第三年生であつたから、サア、たゞでは濟まない。難くせつけたがる者は、名家の令孃の癖に輕卒であつたとばかり、六ケ敷屋は學習院の體面を汚すと四角張る。同級生は、末弘さんは寫眞うつりがよろしいが、お顏色は隨分にねえ。と棚おろしが始る。

ひろ子の辯明は、姉婿が江崎寫眞店主であるから、よく遊びに行つて寫したのを「ひろさん、是はよく寫つたから、時事へ投書さうよ」と云ふ「いやよ、兄さ

んー やアよ」と豫防線を張つておいたのを、聞き入れず、出したのだから知らぬと云ふのであつた。

時の院長乃木大將は、例の氣象とて、それでもオガント、論旨退校をさして仕舞へば、新聞は何とか蚊とか書き立てる、夫れは何ともないとも、相手が、女の美人とあつては下手をすると化けて出さうなので、流石の將軍も寢ざめの惡かつたものと見え、口を利いてやつて、野津元帥の令嗣の夫人に世話してやつた。いくばくもなく元帥薨じて令嗣その家をつぐやひろ子孃は一躍して侯爵夫人となつた！ げにや禍福は糾へる繩にも似たりと、悟りめかしき言葉の一つも云ひたい場所であるが、ひろ子孃の評判記でないのだから、よい加減に省略して、かくの如く規律の正しき、學習院の話をして見たい。

△名譽ある女學校▽

「お江戸學習院は稚子の山、櫻花
帽子の徽章に増す姿、ヨナナ
節も長らもあらし山、ヨナナヨー、アナヤヤヨー」

とは、一時男學生間に流行した男子部學習院の俗謠であつた。根が公達連の事なれば、豐顏蛾眉、消げなる少年多く、又た學校も立派である。昨秋目白に建てられた新校舍などは、三百人の學生を收容せんために、七十萬圓の建築費を投じ、八萬坪を領してる位。今、いはんとする女學部は總坪數五千六百餘坪よりないが校舍の壯麗なると、麗はしき少女を有せる事は、男子部以上であります。

所在地は麹町區永田町一丁目で、電車はすぐ其前を通つてる。もし人あつて本院を參觀するとせば、必ずや、その秩序整然たるに一驚を吃するであらう。門を入つて正面へ突きあたれば本館の赤煉瓦、即ち中學部校舍だ。左すれば小學校舍、更に裏手へまはれば、幼稚園あり、分館あり。花壇あり。植物温室あり。小使室あり(一)建坪總數は千六百六坪六合七勺八才と註されてある。簡單にその沿革を云へば、上流の賢母良妻を養成する目的で起つたもので、はじめ學習院に男子部、女子部と並びて設けられたのであつたが、十八年

九月五日、宮内卿より女子部を廢し、華族女學校を置く旨の達しがあり、教科を大別して小學科中學科とし、更に小學科は下等小學三年、上等小學三年、進んで中學科には、初等中學科三年、高等中學科三年とし、四谷尾張町皇宮附屬地に地を相し、生徒百四十三人を募集して、十月五日から始業を始めた。十一月十三日に
皇后陛下行啓あらせられ、親しく開校の典を擧げさせ給ひ、令旨を賜はつた。
十九年二月下田歌子女史學監となり、以來校運隆々とあがり、大した變動もなくて、三十九年四月學習院女學部に復活する迄は續いた。その時以後の事情は、後節にゆづゝて、略しおく。



何がさて、過去二十年には、畏れ多くも、現各宮殿下の御息所の九分迄は、よし一度なりとも本校の門を出入遊ばさぬはなき程の盛況であつた。現今にも、皇族御五方あらせらるゝ、但、畏れ多いから、本編には、各殿下の御行儀正しく、御勉學あらせられつつある事のみを謹記して、他は一切筆を染めない事と致しておきます。

△乃木式訓育法▽

現在の院則は、三十九年四月に發布になつたもので、左の三科を設く。

一、小學校　滿六年——滿十二年（六ヶ年）

二、中學科　第十二年──第十七年（五ヶ年）

三、專修科　第十七年──第二十年（三ヶ年）

右の外に幼稚園がある。すべて新學年は四月に始るので、一年を別つて三學期となし、華族に非ざるものは、入學受驗料を徴せられ。尙ほ許可になつた曉にも、一學期に小學科は五圓、中學科六圓、專修科七圓の授業料を納附する義務が生じる。

專修科には文學部、技藝部の二つがあつて、前者は國文、英文、佛文の三科に、後者は、裁縫及刺繡、繪畫及習字、音樂の三科に分たれてゐる。現在學生數は專修科四十四名、中學科三百三十九名、小學科二百三十六名、幼稚園一百名、計七百十九名の姬君達は就學中なのである。名簿を御覽なさい。德川で御座る。黑田、兒玉、樺山、松平、伊達、西鄕、蜂須賀、なんど云ふ、一寸聞いても、頭が自然に下る名前が大部を占めてゐる。

現在各科生を通じての族別は

皇族　御三方　華族　三百二名
士族　二百七十八名　平民　百三十五名
外國人　一名　計　七百十九名

である。

本院の職員としては、松本女學部長を始めとし、幹事に大東氏あり、御用掛一名、書記四名、其他雜務六名、教授十八名（婦人は兩三名のみ）奏任待遇の囑託七名（男子ばかり）助教授十二名（內婦人五名講師）二十五名（內外國婦人一名、婦人十名）助手三名（皆な婦人）外に醫官一名ゐるのだ。院長乃木大將の監督ぶりは實に行き屆き過ぎる程で、質素にせよ。勉强せよ。活潑にせよ。と奬勵される。そのセイか近頃は皆な却々身輕で、放課時間にも、ハネまはる生徒が多くなつた。新聞のポンチ繪投書家は、女學部生徒に正帽させて、鐵砲持たし、ランドセルを荷はした處などを書いて、「かうすればお氣に入るだらう」とか何とか冷かしてゐるが以ての外の事だ。四十年五月の學校生徒體格檢査の表に據れば、

專修科	強十七パーセント 中三十八パーセント 弱四十五パーセント	
中學科	強一九パーセント 中三十四パーセント 弱四十七パーセント	
小學科	強一九パーセント 中五十四パーセント 弱三十五パーセント	
全員平均	強一六パーセント 中四十二パーセント 弱四十二パーセント	

とあるではないか。其他、胸廓、體重など普通の女學校生徒と較べると確かに劣る樣である。撫で肩や、蒼白色を誇とした時代は過ぎ去つた。なんでも人間は強壯になるがよろしい。たとひ身は女でも、まかり間違つたら、雪中富士登山位は平氣でやる意氣込を持つべしである。赤くなつて力むでも、ビールの栓一つ拔けぬ良妻や、いつ〳〵迄も小間使に炬燵の火をイケてもらふ樣な賢母では、香しくない。乃木大將が極端な訓育やるのも、藥にこそなれ、チツとも毒にはなるまいと思ふのである。

△諸名媛の成績しらべ

本校は上流子女の粹を集めたものであるから、出身者には時めき給ふ貴婦人多からんとお思召す方もあるか知らぬが、何を云ふにも年月が少ないから、取りわけて云ふ程でもない。

中學科が第一回卒業生を出したのは明治二十二年七月で、三十九年三月迄(即ち學習院女子部になる前まで)の累計は三百三十六名である。女子部になつてからはメツタ二年より經ぬが、夫れでも百十五名を出した。今後は幾何級數で増加する事であらう。いづれも名家の姫君であらせらるゝから、酉の市でも何でも賣口はある。各華族の若奥樣と呼ばれて、可愛きもの〻一人や二人ある新夫人は三十三間堂の佛の數より多い位だ。

中學部卒業生を族別すれば、

皇族	御一方	華族	百廿五名
士族	二百十一名	平民	百九名
外國人	一名	計	四百五十八名

である。

伯爵夫人の名はいかめしけれど、夫の風流遊びのはげしさに、あつたら豐頰やつれて、かこち給ふもあらむ、丸髷頭へのつけては、流石に閑日月なく、舊師への玉章にも「當家へ參りゐてよりは文みるまもなく〳〵」などかこち言せし實例も聞いた。外交官夫人として外つ國の交際場裡に、學窓の理想を現實するもある。先頃物故された稻垣暹羅公使夫人ゑい子なども其の一

人で、在學當時は、少し勝氣すぎて教師も凹むでゐたのぢやさうなが、公使夫人となつた後は、任國陛下の御信任も淺からぬ迄の、良貴婦人となつた。在學當時で未來の推せぬといふ例になつてるとやら、序に座右の成績表から同夫人を始め外兩三名流夫人の卒業試驗の成績表を抜き書して見れば、

成績學科	國語	漢文	歌學	歴史	家政	習字	圖畫	裁縫	理科	手藝	卒業年度	
第一學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲			卅年	故稲垣夫人 山口ゑい
第二學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲				
第三學期	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲				
第一學期	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]	卅五年	嘉納治五郎夫人 竹添須磨
第二學期	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	[illegible]	—	九二	一〇〇		
第三學期	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	一〇〇	—	一〇〇	一〇〇		
平均	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]		
第一學期	丙	乙	乙	乙	乙	甲	乙	乙			廿八年	某名家令孃
第二學期	丙	丙	甲	丁	乙	甲	乙	乙				
第三學期	丙	丙	乙	乙	乙	甲	[illegible]	乙				

また〳〵あるが、一斑に止めておきませう。成績は生涯つきまとふものなれば、現今の學生たるものは勉强せねばなりません！

△三分の一は金紋付の車▽

本校の特色は、生徒がお大名の姫樣らしきにあり。言葉づかひの如きは實に美しくて、床しい位「お姉さまが、かう遊ばした」「おたあ樣（母樣といふ事）の御意に隨つて――」とか「おもう樣（父樣といふ事、猛の字を書くならんといふ）に拜領しました」と云ふ風な鹽梅式だ。尤も時には御丁寧すぎると先生が笑ふのもなきにあらず、足をオミアシと云ふは通過しても、腹をオミオナカと呼ぶの類だ。何にしろ、下ざまなれば、云ひにくい言葉を、ごく流暢に繰るは感嘆に價するのである。

次が服裝――邸では友禪や縮緬を着てゐても、昇校する時には所謂「學校服」なる質素なのを着てくる。普通の女學校の學校通ひの服が、家着より勝れてゐるのとは、丁度アベコベだ。とは云ふものゝ、本校の學校服は決して粗末なものではなく、清く美しきものである。

衣服に對する心得は、四十年七月十日に制定された曰く、

一、衣服の地質は（羽織袴とも）綿布、麻布、毛布、紬、銘仙及交織（凡て廉價なるものに限る）の類に止む。

二、袴地は綿布、カシミヤ、メリンス、紬、及交織（凡て廉價なるものに限る）の類に止む。

三、衣服の模樣、形、紋等は華美又は、奢華なるものを用ふ可らず。

四、幼稚園の幼兒及び小學々生の衣服は簡易の仕立を用ふべし。中學々生も成るべく袖の短きものを用ふべし。（以下略）

なぞゝあるが尼樣ではあるまいし、さう〳〵。



愛嬌のない服裝は、當人は勿論、父兄から嫌ふので●乃木大將の勤儉主義も、旅順の攻擊程に成功しない●

學校の往復はなるべく徒步を奬勵してゐるが、元來が家に馬車や手車のあるのだから。昔は三分の二以上今とても三分一强は金紋つきの車を走らせてくる令孃が多い、同校門前の車寄せには、ピカピカ光つた車がいつも竝んでゐる。尤も近頃は電車が通じたからその便を借るのも少くない樣だ。

夫の特色はチト有難くないが、生徒一班に、語學數學に拙にして、手藝、圖畫、習字に巧みな一事だ。聞く處によれば、上流子弟の數學思想ときたら憐れなのが多く、落第者の中には、滿點を百點として、夫れで十數點も取れぬのもゐるさうな。處が習字と來たら、頗る能書家に富み、匂ひこぼるゝ樣な筆蹟のが多い。學課にはなつて居らぬが。ピアノ、ヴァイオリン、琴なども却々妙手がある。月前に奏する時は、行く雲が止まると迄は保證が出來ぬが、深更の茶室でおさらへを遊ばす時、鼠が驚いてコロげ落ちる位な事はあるさうだ。

學生氣質は氣品が高く、俗調のない處を誇つてる。シカシ、夫れは舊華族の令孃に多く、新華族——特にお母さんが『わたしや華族でありんすよ』と平仄の合はぬ顏付で澄してる樣な方だと、娘さんはきつと生意氣で、野卑ださうな。

敎授連の特色を云へば、賄賂と名のつくものを拒絶する事。生徒は樣づけにして呼ぶ事などであらう。かの圖畫の荒木敎授が、お茶の水から轉校してきたときに此の規定あるを知らねば、大音あげて、あつたら姫君の名を片つ端から呼び捨にした——中にも德川公の令孃を！ 德川と大喝したので、生れて以來、例のない事とて、驚くまい事か、可愛い眼をパチクリさして、返事もせずに先生の顏を覗たなどは、無邪氣なる滑稽であつた。

以上が、從來本校の特色とした處であつたが、最近數年に、急轉直下の大革命が續演された結果、今では何彼につけて高等女學校と大差なき樣になつてきた。かつて同校敎授たりし某氏大呼して曰く、

『華族女學校は學習院女學部となつて、特色を失へり是れ、文部省に降參したによる。』

ハテ、人聽がせな言を吐いたもの哉。いざや少しく過去に遡つて、消息を明に仕ませう。

△定評ある下田歌子女史▽

明治年代に才媛多しといへども、才貌ともに具備す

るは、下田歌子女史の右に出づる者は少なからう。その經歷は確かに「一大驚嘆」に値するものがある。安政元年美濃の岩村藩の儒者、平尾鍒藏氏の家に生れて天才肌の少女として、つとに鋒鋩を露はしてゐた。十五歳の春、しきしまの道をそれともわかぬ身に危ふくわたる雪のかけ橋なる即吟と共に、宮内省に入り、觸るゝ處として斬れざるなき鋭才に推服する者多く、畏きあたりより歌子なる名さへ賜はつた。



明治十二年緣あつて、劍客下田猛雄氏に嫁いだが、神の運命と思ひの外つらく、間もなく先だゝれて仕舞つた。

女史が活動し始めたのは此後である。十六年女子敎育取調として渡英し、ヴヰクトリア女皇に謁して、優渥なるお言葉を賜はつた、歸朝後は華族女學校學監として實踐女學校々長として、盡したのは世の知る處、不撓、不屈、不休不眠の大向上心は、何ものを犧牲に供しても遂げではおかぬ。これが原因とな

つて千波萬波生ずる事となつたのだ。讀者は此事だけを記憶に留めておいて下さればよい。

△二十餘名の討死▽

時は明治三十九年三月二十八日の晝下り、細川校長は華族女學校の敎授室に入り來つて、淺岡幹事の前に立つた。

「淺岡さん、大變な事になりました。私は辭職をせねばならぬかも知れません！」

「エ？　何です、辭職？　飛でもない！」

と幹事は叫んだ。校長の聲は沈痛の調を加へて、

「イヤ、私は今ンま宮内省で聞いて驚いたのですが、本校は一時廢校になるかも知れぬさうです。私は辭職とキメました」と、瞑目して、白髯を撫した。その表情には「醒來る五十餘年の夢」といふ風な樣子がありありと見える。諸敎授は不意の事に驚いて、夫んな譯なら、校長獨りを辭職さして、吾々がゴマつて居れぬと騷ぎ出した。その時、

「私も御一緒に止めませう」と下田女史が進み出た、校長は靜かに力ある聲で、

「下田さん、何も貴女が、おヤメになる必要はない。宮内省でも、跡は貴女に一任するからと云ふ話でしたよ——」と。

一座白けわたる處をキツカケに、幕は降りて、大詰めになる。場處は矢張學習院敎員室、時刻は四月九日午前八時、幕あくと、大勢の男女敎授、ガチヤ〳〵と硯箱や、引出しを整理してゐる。

「あゝ旅順だ〳〵。」

「二十有八人枕をならべて討死だ」とは男敎員。

「殘るのは歌子女史と四天王（原田、山口、大宮、佐野諸敎授の事）と外二三人ださうですね」

「今から考へて見りや、去年の暮、九月の入學期が改正されて、三月になつたのも今の下ごしらへだつたんですよ」と是は女敎員。

一同「何にしても滅茶無茶苦茶だ！」

と騷ぐ處へ、下田女史、まろび入るが如く登場。

「ホンニ皆様は御姉妹の様に願つて居りましたのに、私一人犠牲に殘されまして、悲しう御座います！」と聲涙ともに下つて、果ては卓に身を投げかけて哭く。

「タロコダイルチーヤース」と、誰か一と聲囁いた外は寂又寂、中には女史の赤誠に動かされて、眼を潤ました正直な漢文の老先生も御座つた。一座しばらくは暗默。

給仕入り來つて、校長室へ順々に行つてくれと云ふ夫れを機會にパラ／＼と立つ、これにて幕。

△吹けよ嵐散れよ花▽



手つとり早く事實を申せば、三十九年四月九日、宮内省よりの達しによつて、華族女學校は閉されて、同時に學習院女學部となつた、細川校長は退き下田女史は改めて女學部長となり、敎授連は大半以上廢官を命ぜられ、新らしき人が續々任命される事となつたのだ。由來本校は敎授の更迭少なきを自慢してゐたに、今此の大地震に遭つたのだもの、一同驚いたのも無理はない、校長室で、三ケ月分の俸給に廢官の辭令を添へて受け取れば、モウ縁は切れたのだ。多年親みし學び子に、今一度のあふ事もがなと希へども、夫れも叶はず、溜息ついて佇立したとは道理である。今日を限りと顧みる校庭は、咲き揃へる櫻の雪に埋

もれて、巍々たる黌舍は匂ふ朝日に聳えてゐる。過ぎこし方を想へば、我知らず涙が溢れる樣だ。エ、無念無念、この恨は生涯忘れるものか。疎ましき世よ春も絲瓜もあるものか、嵐よ荒め、花よ散れ、照る日も曇れ。と、チビた足駄を引ずりながら還り行く。

『貴郎、戰には負けたくないものですねエ!』とその時の一教授の話しだ。潮風生には未だに以てその意味がわからぬ。

△牡丹の花と古名劍▽

その翌日は四月の十日、生徒は新らしき希望、新らしき教科書を携へて登校してくると、例刻になつても教授連は來ない。

『私の先生はお出でになりません』『私の方の先生も—……』

と相呼び、相應へて、俥や見ゆると、門前へ雪崩れ出る。すゝり泣く者もあり、蛾眉を顰める者もあり。止めても〳〵靜まらばこそ、其の一日は鼎の湧く樣な騷であつた。

特別困つたのは新事務員で、以前三人ゐたのが、皆んな罷められ、引つぎする間もない程急に去つたのだから、後で調べてもわからぬ事が澤山あつたとやら、又た廢官になつた連中は木村貞子女史が梅香女塾を開いた事を手はじめとして、各〻適當な職について、ここに、一段落をつけたのであつた。

四月十一日には畏れ多くも、かしこくも、皇后陛下から令旨を下し賜はつた。

此度その校を學習院に併合せらるゝは時を度り宜しきを制して教務を統一せしめ給はんとの
叡慮なるべし教育の趣旨にありてはいさゝかも從前と異る處なければ在學の生徒はよくその旨を奉體します〳〵學藝を勵み婦徳を修めて女子の本分を全くせんことを努めよ

これを拜した職員一同は衿を正して、令旨に添ひまつらん事を誓つた。當時學習院長は山口鋭之助氏で、十一日の日曜で、女學部の職員一同、その職に任せられた。たゞ此時不思議なのは、社會の耳目と稱せらるる新聞紙が、揃ひも揃つて、この事件につき少しも餘

計の想像を書かなかつた事だ。されば、當時の細事は知る人がないのだ。

四十年一月二十二日山口院長は圖書頭に任ぜられ、その後釜は軍事參議官陸軍大將伯爵、乃木希典氏となつた。一方部長は牡丹にも喩へつべき女天才、而して乃木院長は難攻不落と稱へられし旅順を陷れた、古名刀の樣に鋭い將軍だ。天の配劑奇々妙々サテ行末はどうなる事か。

△名士才媛の鼬ごつこ▽

此頃、今の文部次官岡田良平氏は、宮內省御用掛で、



學習院勤務であつたどう云ふ譯か下田女史と折合よからず、何かにつけて院長の意見と云名義で、女史の權限內に立ち入る。所謂女史の四天王以下、關係淺からぬ敎授連も、惡夢にでも襲れた樣に、或壓迫を感ずる樣になつてきた。シカも惡い時には惡い事が續くもので、社會主義者の機關新聞として、一時は非常に紳士閥を兇つた、平民新聞は、四十年二月二十四日の紙上より、女史攻擊を開始し、勿論ウンだらうと思ふが、何にしても、ヒドイ事實を暴露した。そして同年四月十四日、發行禁止の宣告を受けた頃さへ、

まだ二分の一を餘してた位だ。如何なる英雄にでも凋落の時機は來るもので、さしも根蒂深かりし女史の女學部長の位置もぐらつき始めた、參謀長の原田稔甫氏以下、ポツリ／＼休職になる朝に一壘を拔かれ、夕に一城を屠られる心地して、男まさりの女史も武藏野を吹きまく秋風身にしみて、吾にもあらで悵然とした事も幾度。ついに、十一月廿八日非職を仰せ付られて仕舞つた！　いづれか秋に逢はで果つべきの故事も思ひ合されて、ひそかに襟を搔き合せた女教授もあつたとか。云ひ忘れたが岡田良平氏は、女史の非職になる少し以前辭して、京都大學へ走つたのであつた。

新たに任せられた女學部長はキクチオカダ系とやら呼ばるゝ、前山口高等校たりし、松本源太郎氏下あつた。

こゝまで書いてきて、潮風生は何となく紀元前一世紀のローマ帝國を想ひ起さゞるを得ない。ポンペイやシーザーや、アントニーや、クレオパトラや、相互に逸足驥の如く、旋風の如く角逐したが、竟に顚き、才に斃れて、有終の美を濟し得なかつた。獨り石心鐵腸なるもの、アウグスタスあり。つひに四海を併せて建國の大祖となつたとは、明治のある事件に似てるでないか。要領不得の稿を終るに臨み、晩翠氏の五丈原の時の一節を拜借して結んでおく。

擊たるゝ者も擊つ者も
今更こゝに見かへれば、
ともに夕の峯の雲
風に亂れて飛ぶがごと
蠻觸二邦爭ひの
蝸牛のたとへおもほへば。
世々の姿はこれなりき。

——（終）——

虎の門評判記を讀みて

春がすみ

先月はお茶の水、今月はさて何校であらうと待ちこがれて、發行の朝篠着く雨を冒して錦町まで買物に行つたのを幸ひ、例の雑誌店迄わざわざ廻つて見ると、早いこと〳〵最早發行居る。

「あら虎の門だわ」と嬉しくつて着更もせず、火鉢の前に摚乎坐つてしまつた。

孰でも好いと云へばそれ迄だけれど、先月のお茶の水のなんかより隨分大變な事を書かれてしまつたものだ、我とても嘗ては五年の春秋外國のカレージ然たると云はれた薄暗い校舎に學んで、緑なす廣々たる運動場に小羊の様に群つて、花の蔭には胡蝶と狂ひ、青葉茂る新樹の蔭には漫々として湛へた堀の上を渡つて來る風に長い袂をあふらせた身、自分の居た頃はリボンも一インチ位、それも三年以下の稚に見る垂髪でなくては人の目につく様な蝶には結ばなかつた、當今は如何？　二十の聲がかゝつた上級生迄皆流行の幅廣リボンと來てる。加之海老茶の袴も氣の勢かぐつと短かくなつて、紳昇諸の三枚草履の重々しいのでなく、靴の足もと輕々と。退ける頃に俄かに雨が降り出しても、今は電話で自宅へ迎車呼ぶ者が少なくなつて、停留場まで一町餘の道を從容として漫歩する様子、聢かに文明式だと思ふ。紅に紫に菫に五彩色映しを幅廣のリボンは宛らば舞る色々の葉も擧らんばかり。

生徒一般の氣風はこの五六年にずつとハイカラになつて、西田先生が何と仰有らうとも、奢美に流れ輕薄に傾いて來たのは爭はれぬ事實だ、と思ふ。然し辨當包みの小さいのに甘んじて、西田先生から御目玉頂戴したのは最早ずつと以前の事、自分が入學した當初の事、優美な遊戯をした昔はそんな事もあらう、現今の様に袴を膝で括り上げて、あの宛で男の様な先生の指揮の下にテレ瑞典式だの、バスケットボールのつてピョンピョン跳れ返る生徒は迚もそれではやり切れぬと思ふ。

教員も數年前から見ると大部分變つてそれのみならず、以前は決して袴を穿かなかつたが、當今では規則として穿く様になつた、教員の事について一言陳べたいのは國分操子女史の事である。既に述べられた如く抑々のやり手――本校一のやり手である。總べて本校教員の名前の聞えた方とは云へぬとあつたが、同女史は實に本校一の名ある教員だと思ふ。去る廿八年來本校教員として是に十數年、然も主として高等科乃至五年に全力を注いで居るゝ處より、數百の卒業生は皆同女史の手にかかつたものと云つて好い、女教員の中では最古くつて勢力があつて、何事があつても先生へ持つて行くと直に解決せられる。少し大問題になると西田先生と御相談の上にて、餘の先生は更に此勢力に比すべきものがないと云つても好い、

そこで少しく辯論しなくつてはならんのは、外國教師崇拜――否矣に憧れたと云ふ事、成程眼いだには違いない、殊に自分の級の前後はすばらしいものであつた。然し是實に一級事つてゝなく、僅に數人の事、然

し狂熱の極あらん限りの手菓を求めて、放課後自宅へ英語を習ひに行く者はあつたが、其門前に用もないのにうろついたのが先生のお耳に入つて叱られたと云ふことは事實無根、たゞ當時の外國教師此一人に止らず、語學に熱心なる生徒は、毎日花束を贈つたり、學校から歸らるゝ時芝蘭乃至門迄從つて行つたことは事實、其數人の狂熱者の爲に講堂で一寸御小言を承つた事はあつたが――

音樂教室の綜覈み實否はさて置き、とんだ鐵面皮漢もあつた、曾て音樂の時參觀に來た禿頭と、印度人の樣な妙な若紳士とが思出されて可笑しい。

所謂唐人の寢言の會の如何は知るを得ないが、試に來つて春毎の卒業式を見よ、ハイカラ茶番の數の多い事、其假裝の大袈裟にして、臆面なく高い舞臺で妙な服裝して、日常つまらぬ事を可笑がる令孃が大眞面目で得意の英語を操る樣子、見てる中に恍惚としてしまふ樣、あの卒業式の餘興としては今少し嚴肅にやつて欲しいと思ふ、同窓會は一歩くつろいであるから、盛なもの、各自の藝で賑やかす樣なもの、藝を見るに忙しくて、たまに寄つても碌々話する暇もない、昨秋の祝祭は盛大であつた、然し此紀念祭はたまの事とて問ふ迄もないが、春秋二回の同窓會にも過半乃至八分邊まで白襟紋付或はお振袖と來ては、華美も寧ろ隨分度に過してると思ふ、だから卒業した當初こそ喜んで集るが、古くなればなるほど一級毎にあるおきまり(富貴？)の方以外は再影を見せん事は事實である。

さて虎の門紳賢の數學式が立てられて、其見本として某名家の息女を擧げられたのは、何より異な感がした、逝きにし校友、名家の令孃に對し云ふを欲せざれども、彼の令孃などは寧一級の中でもさのみ取り立てて云ふべき人でなく、學も普通科切で更に一枚の見本として擧げられる方でない事を證言する。然し彼の令孃も瀕さんと同じく肺病で失くなつたと云ふぢやないか、自分は其見本を取消して、更に誰もが首肯する處の才色兼備の名媛を紹介するのである。他なし十五銀行頭取園田孝吉氏の長女峰子孃である。今は早十年に近い昔となつた、孃が高等科在學時代の名聲一枚に洽く、才貌の秀でたること當時は勿論前後其比を見ることか出來なかつた人、嘗て某女學雜誌に、「英佛獨(少しはおまけもあらうが)の三國の語に通じ、ピアノに妙に、繪畫に巧に、歌文又來に秀でたり、館中推して明治の紫式部と稱す」とあつたが、卒業の後にも時々來らるゝ時、「それ紫式部がお見えになつた」と後が後迄如何樣に囁いだか、然も意附誰も否認する者がなかつた、數年前故林伯爵令嗣夫人として二女を擧げたが、不幸にも其優れし才學、手腕世に現るゝ時無く病みて一昨年五月鎌倉の別莊に於て「嬋の世の憂きことも白浪の寄する渚に安くれふらむ」の歌を止めて逝いたのである。彼の國分操子女史、多かる卒業生の中、殊に望をかけし花の樣なる君の逝かれたのを人より殊に痛まれて、彼の辭世に對し御詠があつたと聞いたが、遺憾ながら今は忘れて了つた、嗚呼此孃こそ實に我校の代表者であつた、今は誰？好箇の模範たるべき人は誰？　詮索して以て後日紹介する時があらう。

はなごよみ

汐干狩

春季の亙滌潮の干ること常よりも甚だしき海濱に出で、干潟を涉りて、潮に殘されたる貝類などを掘出しつゝ、拾ひ集むる遊びなり、昔しより攝津住吉の浦、和泉堺の濱などこの遊び殊に賑はしかりし、東京にては品川沖、又は大川口などにも四月上旬大潮、の日これを催ほすを例とす。其最もよろしきは陰曆三月三日前後なり、此日はいづれもおもひ〳〵の船裝ひして親戚朋友相誘ひ、同僚相率ゐて海に出で、汐の干ぬ間に船を繫ぎ、その干るを待ちて、老若男女、手に〳〵熊手笊など携へて漁る樣は若草萌ゆる春の野に摘蹴するにも似たり、船には旗又は衣服など、長き竿に結びて高く揭ぐるなど其目印の思ひつきも樣々にして、幾百千艘と並びたるは昔しの壇の浦もかくやとおもはる、やがて潮滿ち來れば、幾千萬の人々獲物小籠に抱へて、我先にと己が船目がけて歸り來る、潮滿ちて船浮び出づると共に舳をめぐらして家路につくなり、汐干狩にて多く獲らるゝは蛤、蛤蜊等にて所によりては烏貝、馬刀、牡蠣、蝦等亦多し。

青柳の泥にしたるゝ汐干かな　芭蕉
輕風といふ風の吹く汐干かな　樗堂



歸らふといふまで人の汐干かな　成美
清風は松に殘りて汐干かな　楓竹

やなぎ

柳は、楊柳科の落葉喬木にして幹の高さ十丈に達するものあり濕潤にして輕鬆なる地に適し、生活力强盛にして、枝を折りて地に挿すも容易に根を生じて成長するなり、種類甚だ多く、本邦に産するもののみにても四五十種に上る、就中枝垂柳は多く路傍庭園などに植ゑ、幹の高さ三四丈、枝の長さ丈餘に達し地に向ひて垂れたる樣頗る可憐なり、葉は細長くして綠色を呈し、夏は日蔭を生じて殊に市街の風致を添ふること大なり、邊材白く、心材は赤褐色を呈し、柔かにして割れ易く、粘質にして削り易し、材は張板、俎板、其他箱の類を造るに適し、又枝は挿花にして賞翫し正月など餅花、張子、繭玉、造花等をつけて飾りとなす、又行李柳は多く但馬、安藝地方より産出するもの、落葉灌木にして幹は叢生し細長ぐして七尺ばかり、本末に大小の差少きによりこれを皮剝して漂白し、柳行李を編む、又白楊は幹の高さ十二三丈、周り一丈に達し、多く東北地方より北海道に産す、材は桐材に次ぎて箱類の製造に適す、故にこの名あり、又古來佛像を刻むに用ゐしを以てほとけ柳の稱あり、鐵道細工、印板摺所道具の盤、杓子等の製造に適し又製紙、燐寸の用材に供せらる。

春の風吹かぬたえ間もしら露の
　むすべばなびく青柳の糸　新叡吉

今日もまた暮きく〳〵て永き日の
　夕べにかゝる青柳のいと　景樹

かへりきてとけども解けず成にけり
　結び置きつる青柳の糸　同

青柳や芹生る中の芹のなか　蕪村

月の影の長くかたふく柳かな　千秋

さくら

櫻は日本特有の名花にして一般に花の王と稱し、支那の牡丹、若しくは海棠と並び稱さる、其種類は頗る多く殆んど枚擧に遑あらず、中に就て最も著はるゝは山櫻、彼岸櫻、八重櫻、垂櫻等なり山櫻は又犬櫻ともいふ、幹の高さ六七丈、圍り又五六尺に及ぶ、花は一重にして吉野山は其名所なり。

櫻は花の美を賞翫するのみならず、その幹、その葉、皮及び實に至るまで皆それ〳〵の効用あり、幹はその質緻密にして堅く、その色も又優美なる淡赤色を帶ぶるを以て、盃、椀、木駒その他諸器具を作り、又屋根の造作、版木、定木等となし、皮は强靱にして皮細工に用ゐて印籠、煙草入等を製し、曲物、膳、盆等を造るに用ゐらる、葉は鹽漬として櫻餅の皮に用ゐ、花も又鹽漬として



湯に點じ櫻湯と稱して飮用せられ又、料理及び菓子に用ゐられ、その實は酒に釀し、ジャム、ゼレー等をつくる。

東都歳事記によれば單瓣櫻は立春より六十日頃(四月三日)より追々開き初むべしとあり、上野淸水堂の前後寄宍松院、四軒寺町の邊最も多し、大よそ都下の花を見るもの上野を以て第一とす、水あり山あり、翠樹花を擁し、香風衣を襲ふ、眞に人間最上の樂土といふべし、百萬紅塵の市中にありて此一大公園を有するは海外諸國になきところなりといへり、又墨田堤は、枕橋より木母寺に亙り、十里の長堤餘木を交へず、花時の盛觀濠内に冠たり中にも長命寺の邊は花枝天を覆ひて寸碧を見ず、殆んど水晶宮裏に遊ぶがごとし、飛鳥山は都下を距ること大約一里とす數廓の芝生古松亂立し、花樹其間に挿み、遠眺は關東の靑巒を指點すべし春光の明媚なる又墨堤上野と其趣を異にせり、又小金井は上水の白堀ありて花樹を其兩岸に植ゆ、故に一目千株の觀ありて頗る奇絕なり、其他淺草、芝、深川の公園、靖國神社、星ケ岡、愛宕山日暮里、小日向、江戶川端、目黑邊所々觀花の地少なからず。

なかなかに霞まざりせばてる月の
　光に花やまがひはてなむ　景樹

山里の花のさかりはかはられど
　年々ひとはこずなりにけり　同

ちる花は山のしづくにあらなくに　同

つもれば浪よ立さわぐらん

花はたゞ霞わたれる縁間より
　しらみそめたる曙のいろ　薫庵

色に香にめでずば花のさがの山
　めぐりもあはじ法の輪の寺　同

花の山下りて見れば風もなし　一具

花くもりかけぬ松なし嵐山　一音

花の雨風を靜めて明にけり　荷兮

桃

桃は薔薇科に屬する落葉の喬木にして丈け二丈餘に至るものあり、早春、李と同時に花をつく、花は一重あり八重あり、また紅白、紅白咲分けなるもあり、初め種を下してより三四年にして花を開き、果實を結ぶ、諺に桃栗三年柿八年といふほどにて生長極めて早きものなり、果實は夏の頃熟するものと秋に至りて熟するものとあり。

桃の種類は極めて多し其重なるものは蟠桃、水蜜桃、天津桃、白桃、就中水蜜桃は果實大にして多漿味亦美なり天津桃は果肉眞紅にして多漿なれども味稍や劣り且つ少しく澁味を帶ぶ、又白桃は水蜜桃の晩種にして皮は紅緑色に斑點を交へ肉は淡紅色にして味ひ頗る佳良、桃中の絶品なれども收穫甚だ少きを以て價又貴し、桃は接木によりて繁殖するを常とす、盆栽などには紅白咲分けに接木したるものあり、三月頃、幹を地上三尺ほどの所に切詰め、根廻りの小材を除き二間四方に一本位の割合に栽植すべし、栽培上の注意は古枝を剪ること、、脂の漏れ出るを防ぐにあり、桃樹の成長は甚だ盛にして新梢にのみ開花するものなれば芽の將さに發育せんとする時、嚴密に枝を剪定するを要し、また樹脂を防ぐには根部に至るまで皮をたてに淺く切り壞すべし、砂壤土を好むが故に、河畔又は海邊によく適し、肥料は人糞、尿にして、餅粕等を混ずるもよし。



桃は庭園に植ゑて花を賞し、又果實を採る、花は白桃、緋桃、姫もゝあり源平桃は一花の中に紅白の二瓣相交はり或は一木の中に紅白兩種の花をつくる、又枝垂桃とて枝は下垂し恰も柳のごとき狀を呈するあり又菊桃とて花瓣長くして菊花の如き形を為すものあり。

夢の事いふてはもゝの花見哉　大江丸

牛の背に酒ありかざす花は桃　白雄

百姓の茶ハ濃き色や桃の花　沾德

白桃や雫もおとす水の色　桃隣

桃の花心やすさに見てあるく　蒼虬

咲くまでも忘れて居たり桃の花　茶舒

山吹

山吹は薔薇科に屬する野生の灌木にして幹は高さ四五尺に至り叢生して常に綠色を呈し、多く川沼の汀に生ず、三四月新芽を出して後花を着く、花は黄色にして徑一寸ばかり、一重と八重とあり、また紅白、絞りなどの變種もあり一重なるは黑き小豆粒形の實を結べども八重に咲くものには實なし、八重山吹は花殊に大にして閑く時ならぬ頃に返り咲をなすことあり、この花は萬葉集中にも歌見ゆ、靑くしなやかなる枝に黄金色せる愛らしき花の咲き出でたるさま、雨の後など殊にうるはし、されば庭園に植ゑてその花の美を賞すること今もむかしも變ることなし、この花を陰干にしたるものはよく血止めの効あるよし古き書に見えたり。

山吹や宇治の焙爐の匂ふとき　芭蕉
山吹にあぶなき岨の崩れかな　越人
山吹や鮎に豆腐の座敷ぶり　嵐朗
山吹の雫の下の小家かな　樗堂
光ある里は玉川山ぶきの
　さかりはひとのむれてこそとへ　蘆庵
しめ結しまがきもみえず山吹の
　八重にかさなる花の盛は　同



筍

筍は竹類の根莖より生ずる新芽なり、初め籜につゝまれ、生長するに隨つて脱皮す、暖地に産するもの最も肥大なれども、寒地に産するは生育十分ならず、種類の重なるものは孟宗竹、眞竹及び淡竹の三種なり、寒竹及び布袋竹の筍亦上品なり、就中孟宗筍は生ずること最も早く味又佳品なり、この孟宗は支那の原産にして昔し支那に孝子あり、寒中筍を掘りて其母に獻ぜしより二十四孝の一に數へられ、其竹亦この名を得たるなり、筍は掘取りて直ちに煮て食せば味殊に美なり、其脱皮したる籜は編みて笠になし或は下駄の鼻緒に用ゐ、或は草履を造り又物を包むの料とする等其用法多し。

筍や兒の幽壑のうるはしき　嵐雪
筍の伸びや椿の小暗がり　丁知

蒲公英

至るところの原野に自生する菊花(菊花多年草)にして其繁殖の盛なる恐らくは此花に及ぶものなし葉は缺刻ありて車輪狀に地を這ひ、其中心より梗を生じて、黄金のごとき頭狀花を開く、稀には白色もあり、蝶蜂等に受粉せられ、花の乾燥後萼は白色の冠毛となりて放射線に開き、風に乘じて諸方に飛散す、葉莖全體に苦味

の白汁を含む、春季新芽を摘み胡麻あえとして食す、健胃の効あり、亦圃に養ひて賞翫せらる。

蒲公英や先は小高き芝の山　　草南

蒲公英や花には風も吹かぬふり　　風所

紫雲英

俗に蓮花草といふ、荳科に屬し原野、堤塘至る處ろに生じ、殊に陽春三月、田地に苗を生じ葉枝一面に繁殖し、梗端に紫花をつけて一面に蔓延する有樣頗る美觀なり、花の形狀小蓮花の如く、色は淡紅紫色多けれど變種して白色なるもの、圃養して珍重せらる亦良好なる綠肥となす。

櫻草

花の櫻に似たるより此の名あり、櫻草科の宿根草にして冬の始め發芽し、翌春に至り印狀心臟形の葉を四方に射出し、其中心より長梗を抽んで、淡紅色の繖狀花を開き且つ微馨を放つ、實生のものは三年に及びて花を着く、又春の彼岸頃に根分し油糟を肥料とし、其培養法によりて種々の變種を生す、花に中輪大輪あり、其色、紅白、裏紅、底白、淋紅、裏絞、染出等あり、日光山中に野生せる雛桜小櫻と稱するは古來有名のものにて高さ三寸に及び單瓣の紅白又は白花を着く。



我國は草も櫻を咲にけり　　一茶

はまぐり

東海及び內海に多く產す、伊勢の桑名は名物の燒蛤及び時雨蛤を出すを以て名あり、蛤肉は甚だ美味にして、煮炙共に適す、殊に松の毬果を燒きて炙る時は一段の風味を添ゆといふ、又スープにも作らる、介殼の外面は暗褐色をなせる太き放射狀の帶紋あり、內面は白色にして光澤あり、大さ三四寸なり高さ二寸に至る介殼は堅くして蝶番の工合よろしければ膏藥など容るゝ器に用ふ、また其大なるものは碁石に製す。蛤蜊は蛤と同類なり介殼は蛤に似たれど、稍や三角形をなし、薄くして小く、且つ膨らみあり、其外面には輪層ありて種々の斑紋を具ふ、淡水の注入する海に多く大抵蛤も同所に棲息し三月頃より八月頃までの間に產卵蕃殖す、又一種沖蛤蜊といふがあり、その介殼厚質にして粗く種々の斑紋あり、蛤蜊の味は蛤に及ばざれども、又甚だ惡しからず或は水に入れて砂を吐かせて殼のまゝ吸物となし、或は剝身として煮て食する外、天麩羅、酢あえ等ともなし又串に刺して乾したるものは永く貯ふるを得べし、多量に產する所にては大釜の中に入れて水と共に煎じ、其汁を以て肥料とするところあり、すべて蛤類は生きたる儘にて置かんと欲せば、淡水をかけぬやうになすべし。

春の風吹かぬたえ間もしら露の
　むすべばなびく青柳の糸　　新綱古

今日もまた暮しくて永き日の
　夕べにかゝる青柳のいと　　景樹

かへりきてとけども解けず成にけり
　結び置きつる青柳の糸　　同

青柳や芹生る中の芹のなか　　蕪村

月の影の長くかたふく柳かな　　千秋

さくら

櫻は日本特有の名花にして一般に花の王と稱し、支那の牡丹、若しくは海棠と並び稱さる、其種類は頗る多く殆んど枚擧に遑あらず、中に就て最も著はるゝは山櫻、彼岸櫻、八重櫻、垂櫻等なり山櫻は又犬櫻ともいふ、幹の高さ六七丈、圍り又五六尺に及ぶ、花は一重にして吉野山は其名所なり。

櫻は花の美を賞翫するのみならず、その幹、その葉、皮及び實に至るまで皆それ／＼の効用あり、幹はその質緻密にして堅く、その色も又優美なる淡赤色を帶ぶるを以て、盃、椀、木皿その他諸器具を作り、又屋根の造作、版木、定木等となし、皮は強靱にして皮細工に用ゐて印籠、煙草入等を製し、曲物、膳、盃等を造るに用ゐらる、葉は鹽漬として櫻餅の皮に用ゐ、花も又鹽漬として



湯に點じ櫻湯と稱して飲用せられ又、料理及び菓子に用ゐられ、その實は酒に釀し、ジヤム、ゼレー等をつくる。

東都歳事記によれば單瓣櫻は立春より六十日頃（四月三日）より追々開き初むべしとあり、上野淸水堂の前後寒松院、四軒寺町の邊最も多し、大よそ都下の花を見るもの上野を以て第一とす、水あり山あり、翠樹花を擁し、香風衣を襲ふ、眞に人間最上の樂土といふべし、百萬紅塵の市中にありて此一大公園を有するは海外諸國になきところなりといへり、又墨田堤は、枕橋より木母寺に至り、十里の長堤餘木を交へず、花時の盛觀、海内に冠たり中にも長命寺の邊は花枝天を覆ひて寸碧を見ず、殆んど水晶宮裏に遊ぶがごとし、飛鳥山は都下を距ること大約一里とす數畝の芝生古松亂立し、花樹其間に挿み、遠眺は關東の青巒を指點すべし春光の明媚なる又墨堤上野と其趣を異にせり、又小金井は上水の白堀ありて花樹を其兩岸に植ゆ、故に一目千株の觀ありて頗る奇絕なり、其他淺草、芝、深川の公園、靖國神社、星ヶ岡、愛宕山日暮里、小日向、江戸川端、目黒邊所々觀花の地少なからず。

なか／＼に霞まざりせばてる月の
　光に花やまがひはてなむ　　景樹

山里の花のさかりはかはられど
　年々ひとはこずなりにけり　　同

ちる花は山のしづくにあらなくに　　同

つもれば浪と立さわぐらん

花はたゞ霞わたれる絶間より　　蘭庵
しらみそめたる曙のいろ

色に香にめでずば花のさがの山　　同
めぐりもあはじ法の輪の寺

花の山下りて見れば風もなし　　一具

花くもりかけぬ松なし嵐山　　一音

花の雨風を靜めて明にけり　　荷兮

桃

桃は薔薇科に屬する落葉の喬木にして丈け二丈餘に至るものあり、早春、李と同時に花をつく、花は一重あり八重あり、また紅白、紅白咲分けなるもあり、初め種を下してより三四年にして花を開き、果實を結ぶ、諺に桃栗三年柿八年といふほどにて生長極めて早きものなり、果實は夏の頃熟するものと秋に至りて熟するものとあり。

桃の種類は極めて多し其重なるものは椿桃、水蜜桃、天津桃、白桃、就中水蜜桃は果實大にして多漿味亦美なり天津桃は果肉眞紅にして多漿なれども味稍や劣り且つ少しく澁味を帶ぶ、又白桃は水蜜桃の晩種にして皮は紅綠色に斑點を交へ肉は淡紅色にして味ひ頗る佳良、桃中の絶品なれども收穫甚だ少きを以て價又貴し、桃は接木によりて繁殖するを常とす、盆栽などには紅白咲分けに接木したるものあり、三月頃、幹を地上三尺ほどの所に切詰め、幾週りの小材を除き二間四方に一本位の割合に栽植すべし、栽培上の注意は古枝を剪ること、脂の漏れ出るを防ぐにあり、桃樹の成長は甚だ盛にして新梢にのみ開花するものなれば芽の將さに發育せんとする時、嚴密に枝を剪定するを要し、また樹脂を防ぐには根部に至るまで皮をたてに淺く切り壞すべし、砂壤土を好むが故に、河畔又は海邊によく適し、肥料は人糞、尿にして、鰊粕等を混ずるもよし。



桃は庭園に植ゑて花を賞し、又果實を採る、花は白桃、緋桃、姫もゝあり源平桃は一花の中に紅白の二瓣相交はり或は一木の中に紅白兩種の花をつくる、又枝垂桃とて枝は下垂し恰も柳のごとき狀を呈するあり又菊桃とて花瓣長くして菊花の如き形を爲すものあり。

夢の事いふてはもゝの花見哉　　大江丸

牛の背に洞ありかざす花は桃　　白雄

百姓の茶の濃き色や桃の花　　沾德

白桃や雫もおとす水の色　　桃隣

桃の花心やすさに見てあるく　　蒼虬

咲くまでも忘れて居たり桃の花　　茶靜

山吹

山吹は薔薇科に屬する野生の灌木にして幹は高さ四五尺に至り叢生して常に綠色を呈し、多く川沼の汀に生ず、三四月新芽を出して後花を着く、花は黄色にして徑一寸ばかり、一重と八重とあり、また紅白、絞りなどの變種もあり一重なるは黑き小豆粒形の實を結べども八重に咲くものには實なし、八重山吹は花殊に大にして開く時ならぬ頃に返り咲をなすことあり、この花は萬葉集中にも歌見ゆ、細くしなやかなる枝に黄金色せる愛らしき花の咲き出でたるさま、雨の後など殊にうるはし、されば庭園に植ゑてその花の美を賞すること今もむかしも變ることなし、この花を陰干にしたるものはよく血止めの効あるよし古き書に見えたり。

山吹や宇治の焙爐の匂ふとき　芭蕉
山吹にあぶなき岨の崩れかな　越人
山吹や鮎に豆腐の座敷ぶり　鳳朗
山吹の雫の下の小家かな　樗堂
光ある里は玉川山ぶきの
　さかりはひとのむれてこそとへ　蘆庵
しめ結しまがきもみえず山吹の
　八重にかさなる花の盛は　同



筍

筍は竹類の根莖より生ずる新芽なり、初め籜につゝまれ、生長するに隨つて脫皮す、暖地に產するもの最も肥大なれども、寒地に產するは生育十分ならず、種類の重なるものは孟宗竹、眞竹及び淡竹の三種なり、寒竹及び布袋竹の筍亦上品なり、就中孟宗筍は生ずること最も早く味又佳品なり、この孟宗は支那の原產にして昔し支那に孝子あり、寒中筍を掘りて其母に獻ぜしより二十四孝の一に數へられ、其竹亦この名を得たるなり、筍は掘取りて直ちに煮て食せば味殊に美なり、其脫皮したる籜は編みて笠になし或は下駄の鼻緒に用ゐ、或は草履を造り又物を包むの料とする等其用法多し。

筍や兒の齒莖のうるはしき　嵐雪
筍の伸びや椿の小暗がり　丁知

蒲公英

至るところの原野に自生する菊花(菊花多年草)にして其繁殖の盛なる恐らくは此花に及ぶものなし葉は缺刻ありて車輪狀に地を這ひ、其中心より梗を生じて、黄金のごとき頭狀花を開く、稀には白色もあり、蝶蜂等に受粉せられ、花の乾燥後萼は白色の冠毛となりて放射線に開き、風に乘じて諸方に飛散す、葉莖全體に苦味

の白汁を含む、春季新芽を摘み胡麻あえとして食す、健胃の効あり、亦園に養ひて賞玩せらる。

蒲公英や先は小高き芝の山　草南

蒲公英や花には風も吹かぬふり　鳳所

紫雲英

俗に蓮花草といふ、荳科に屬し原野、堤塘至る處ろに生じ、殊に陽春三月、田地に苗を生じ莖枝一面に繁殖し、梗端に紫花をつけて一面に蔓延する有様頗る美觀なり、花の形狀小蓮花の如く、色は淡紅紫色多けれど變種して白色なるもの、閑養して珍重せらる亦良好なる綠肥となす。

櫻草

花の櫻に似たるより此の名あり、櫻草科の宿根草にして冬の始め發芽し、翌春に至り印狀心臟形の葉を四方に射出し、其中心より長梗を抽んで、淡紅色の繖狀花を開き且つ微薰を放つ、實生のものは三年に及びて花を著く、又春の彼岸頃に根分し油粕を肥料とし、其培養法によりて種々の變種を生す、花に中輪大輪あり、其色、紅白、眞紅、底白、裏紅、眞紋、染出等あり、日光山中に野生せる雪割小櫻と稱するは古來有名のものにて高さ三寸に及び單瓣の紅白又は白花を著く。



我國は草も櫻を咲にけり　一茶

はまぐり

東海及び內海に多く產す、伊勢の桑名は名物の燒蛤及び時雨蛤を出すを以て名あり、蛤肉は甚だ美味にして、煮炙共に適す、殊に松の毬栗を燒きて炙る時は一段の風味を添ゆといふ、又スープにも作らる、介殼の外面は暗褐色をなせる太き放射狀の帶紋あり、內面は白色にして光澤あり、大さ三四寸なり高さ二寸に至る、介殼は堅くして蝶番の工合よろしければ膏藥など容るゝ器に用ふ、また其大なるものは碁石に製す、蛤蜊は蛤と同類なり介殼は蛤に似たれど、稍や三角形をなし、薄くして小く、且つ膨らみあり、其外面には輪層ありて種々の斑紋を具ふ、淡水の注入する海に多く大抵蛤も同所に棲息し三月頃より八月頃までの間に產卵蕃殖す、又一種沖蛤蜊といふがあり、その介殼厚質にして粗く種種の斑紋あり、蛤蜊の味は蛤に及ばざれども、又甚だ惡しからず或は水に入れて砂を吐かせて殼のまゝ吸物となし、或は剝身として煮て食する外、天麩羅、酢あえ等ともなし又串に刺して乾したるものは永く貯ふるを得べし、多量に產する所にては大釜の中に入れて水と共に煎じ、其汁を以て肥料とするところあり、すべて蛤類は生きたる儘にて置かんと欲せば、淡水をかけぬやうになすべし。

蛤や口をあけれは京の水　椿室
蛤や大きく見ゆる濤のこり　濱吉
我がちに數あるものを蜊とり　白雄
飯時をのばして遊ぶ蜊かな　小叢

ひらめ

通常鰈に似て種類も至つて多し、體は長楕圓形にして扁く、右側は白色にして左側は淡黒色を帶ぶ、兩眼は此の面にありて、眼球は隆起し頗る轉視の自由を得、體長大なるものは二尺以上に達す我國にては常に近海の砂泥中に潜伏し、僅かに其頭部のみを露出し鰭を以て四近の砂を濁らせ、其中にある小虫子魚の逃ぐるを妨げてこれを捕食す、體色は土質にして多少變更するを得るが故にこれを利用して容易に他の眼を眩まし、攻防の便に供す、又體を起して游泳することあり、五六月の頃、深さ三十尺餘の淺瀬に來りて産卵す、比目魚の調理法は刺身を第一とし、煮又は炙りても食す、古來鯛鰈等と共に魚類中の上品なるものとして尙ばる、この種の漁獲は皆網を以てし、稀には矠を用ゐてこれを衝くもあり。

鶉

鶉鶏類の鳥にして身長六寸許り體は鷄の雛に似て丈低し全身肥えて圓く頭は割合に少さく、其狀告天子に似たり、尾羽は極めて短かくして、殆んどなきがごとし、羽毛は黄褐色にして黒白の斑紋あり、雌雄共に其形粗々同じくして、識別し難けれども、概して雄は丈高きがごとし、原野に棲息して晝は草間に隱伏す、夜多く群れ飛びて鳴く、一雄にして數雌を率ゐ四五月頃草若しくは叢にて巢を草叢の中に營み、十數顆の卵を産む、性鷄類と同じく趾を以て土を掻きて食餌を求む、其食餌は多く昆虫なるを以て田畑山林の益鳥として毎年四月十六日より、十月十四日までこれを捕る事を禁ず、鶉は其の形ちの愛すべきと其聲の淸亮なるとを以て古來籠鳥として愛翫せられ、鶉合せとて其音を競はしむ、肉は甚だ美にして炙食に宜しく、又吸物に佳なり。



蓼深き道を横ぎる鶉かな　粘錦
名をつけて遊ぶ日もあり蓼鶉　久間蛟
蓼畑や何處を鶉の通路　靈水





女傑ジュアンヌ、ダルクの一生

剣影生

△四月十八日羅馬に於て祝典を行ふ

歴史は永く、人物は多しと雖も、佛蘭西の少女ジュアンヌ、ダルクの生涯の如く不可思議にして且つ偉大なる事蹟を止めしものは罕れなり。去れば渠は佛國人よりは、神の遣はされたる救主として敬慕せらるゝ所にして、渠を聖女に擧げんとの議は久しき以前より教會の間にありたる所なるが、愈來る四月十八日、伊太利羅馬に於て、其式（祝聖式）を行ひ、兼れて其の誕生五百年祭をも擧行すと云ふ。此の祝聖式は羅馬教會特有のものにして、即ち堅固なる信仰の下に一生を神に捧げ、國の爲に盡し、或は慈善、教育の方法に依りて大なる感化を世界に及ぼす等、眞に聖き生涯を送りし者を推して聖人の位に擧ぐる儀式なり。而して一旦此の位に上りたる者に對しては、羅馬教會に屬する全教徒は、以後毎年祝祭日を定めて、永久神に準じたる尊敬を捧ぐる例なれば、其儀式は非常に重きを置かれ、式を行ふ者は羅馬法王のみに限られ、且つ其の資格を認定する迄には、其の人の死後少くも五十年の間、一生の行爲に就て森嚴なる調査と審議を要する事となり居れり。殊に羅馬教會内には、「法王の不可誤」と云ふ語あり。こは、法王は神の意に從ひて其の聖職に在るものなれば、其の行爲には苟も錯誤過失あるべからず、との意味を有するものなり。此の語に對しても、聖人となすに欠くる所なきや否やの調査は最も詳細に渉るを要し、全主教の智能を集め、其の人の全生涯に就て、一言一行の微に至る迄考究したる上ならでは此の聖式を擧げずとなり。斯る名譽なる盛典に與るジュアンヌ、ダルクはそも如何なる生涯を送りしか。

△渠が生れし當時の佛蘭西

今を去る五百七八十年前、佛蘭西帝王シャール四世歿して男子なかりしかば、從弟フィリップ六世位を嗣ぎぬ。然るに英王エドワルド三世は、シャールの妹の子なりしを以て、其の位を爭ひ、一千三百四十年、兵を率ゐて佛國に上陸し、これより英佛の間に戰爭久しく引續きて百有餘年に及べり。世に百年戰爭と云ふもの即ち是れなり。此の戰爭は初め佛國の武運拙く、戰へば必ず敗け、土地は侵され、城壘は陷れられ、國王は邊陲に蒙塵して、誰れありて興復の偉業に當るものあらざりき。一千四百二十九年に至りて佛軍又大に敗れ、今は最後の根據地と賴みしオルレアン城も存亡旦夕に逼り、永く大陸の覇權を握りし佛蘭西の社稷も今を限りと見えたりき。此の時に當りて、若しジュアンヌ、ダルク無りせば、佛國は永く英國の屬國と成り果てしやも知るべからざりしなり。而かもジュアンヌ、ダルクは敎育も無く、門閥も無く、此の大事に當る迄は、其の家族隣人の外は佛蘭西國中何人も其の名をだに知らざりし一女子にして、其の年さへ僅に十八の妙齡なりき。斯く言ひたるのみにては誰れしも不思議に思ふべけれど、佛蘭西の運命を一身に擔ひて回天の偉業を遂げし者は、實に此の一少女なりしなり。

△ジュアンヌの生立

ジュアンヌ、ダルクは、一千四百十二年一月六日、英佛戰爭の方に闌なる頃、佛蘭西の片田舍、ロアール縣のドムレミと云ふ處に生る。此の地はローレーンに近きミューズの谷の間に在りて、羊飼の多く住へる一小村落なり。今日傳ふる所によれば、渠の生れし朝には、天に聲あり、地に喜びの氣滿ち、雞の鳴聲迄も歇りて、土地の者は甚だ奇しく思へりと云ふ。而して又此の日に恰も救世主基督が世に生れて其の星が東方の三博士に現はれしと云ふ所謂「公現」の日に當るより、佛國人間には、佛蘭西の救世主としての渠の使命の遇然にあらざるものの如く言ひ做さる。父はジュアック、ダルク、母はエザベル、ロメーと云ふ。大なる富者にはあらざりしも、又左迄貧しくもあらず、祖先傳來の所有地もありて、正直なる農夫なりき。同胞五人あり。三男、二女。ジュアンヌは其の姉なり。土地の者は渠をジュアンヌ、子ツトと呼びぬ渠は母の側に在りて、宗敎の道を聞き、家庭の業を習へり。而して盛は

女（その一）

女（その二）

實業少年 第三卷第五號 增刊

獨立成功案内

四月十五日發行

洋裝四六倍判 紙數七十二頁上等紙刷 正價金拾錢 郵税壹錢

◉社會は總ての人を歡迎してます 誇つけて坐つてる了簡でなければ成功の機會はどこにもあります

◉金貳百圓の資本で新に(帽子屋、西洋小間物屋、化粧品屋、煙草屋、氷水屋、菓子屋、呉服屋、薪炭屋、硝子屋、勸工場商人)になられませうか 開業土地の撰定法、店の飾付法、資金分割法、仕入道、商習慣等一々精探して實際を紹介してます

◉府下の職工(西洋菓子製造職、活版職、鐵工職、寫眞師、電燈工、ペンキ職、硝子職、ブリキ職、製罐職)になるには如何なる手續にて入り年期給金等の定めはどうでせう 有名各工場について實際精査の結果を公にしてゐます

◉苦學生の仕事としての業務は有りませうか 牛乳配達、點燈夫、配達夫等の實況を詳報してます

◉ポン引の毒爪にかかつた人の懺悔談

◉現今成功者の最も愉快なりし時の追想錄

◉赤貧より奮闘して運命を拓いた偉人の血の歷史は下記十六人の窮した時の實錄 牛乳王牧義雄、貯金王安田善次郎、木綿王柿沼谷藏、船渠王朝田又七、石炭王阿部香市、硝子王島田孫市、汽船王尼崎伊三郎、絹物貿易王堀越善十郎、酒王升本喜樂、寫眞王小川一眞、發明王エヂソン、實業王ジローン、金剛石王セシルローヅ、骸炭王フリツプ、金傑ハクロツプ、冒險商王ロスチヤイルド

◉成功座右銘 和漢洋格言の精華、以て座右の銘、懷中の箴となすべし

◉實業小說 差米籠、又にこれ大經濟少年、◉太平洋上六ヶ月漂流實談 酸鼻の極、又歡喜の極。

▼口繪…府下職業鑑、海外實業鑑 外挿繪數十面……密畫眞圖

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二百四十番

女(なの三)

數學世界第三卷第四號增刊

級數ト應用

洋裝菊判　紙數約百二十八頁　正價金拾五錢　郵税金壹錢

●四月一日發行●

人あり問ふて曰く、級數とは何ぞと、答へて曰く、例へば富士の山の如し、また西洋にてはピラミットの如しと、問者直ちに成程と頷く。我はその餘りに容易く頷かれたるに心平らかならず、斯の如き級數應用の妙例、實に萬人の未だ曾て曰はざる處、我を待つて初めて得たるに、一言の質疑をも挾まずして會得する所以なし、恐らくは解し得たるにあらざらん。級數には種類あり、曰く等差級數、曰く等比級數、摺鉢を伏せたる如き形狀をなせる富士の山の體積は、これを擬數の術にて得べし、扇を倒にしたる如く描きたる富士の平面積は、これ等差級數の算法にて知るを得、問者猶ほ深く質したらんには、我はこれを曰ふべかりしに、あゝ愚者度し難し、若かずこれを四月一日發行の數學世界臨時增刊『級數及其應用』に詳記せん、智者は必らずこれを購ひ見ん、あゝ度し難きは愚者なるかなア、!

●第壹號より再版取揃あり●

東京　博文館　本町

女(その四)

少女世界 第四巻第六號 増刊

櫻の巻

四月十五日發行

洋裝菊判
紙數百廿八頁
寫眞版口繪澤山
正價金拾錢
郵税金壹錢

東京本町
博文館
振替東京二四〇番

櫻花爛熳の候に、花の如き少女世界が、艶麗なる裝ひを凝らし、輕妙なる記事を滿載して發行する增刊『さくらの巻』を御覽なさい。表紙の美なる、口繪の珍なる、内容の多趣味なる、蓋し花と實とを兼ね備へたものです。小學校及び高等女學校程度の少女は、勉學のためにも、將たまた娛樂のためにも、必ずこれを一讀せねばなりません。試みに、記事の要目を左に掲げませう。

△さくら物語　△花園物語　△(少女小説)お手紙

△(少女小説)苦學生　△(少女小説)金の腕輪　△(少女小説)お見舞

△花日記　△草花の採集

▲(少女對話)そら病…… 巖谷小波作 鏑木清方畫

△花おとめ　△(お伽小説)兎のお禮　△新入學の記

△學校だより　△少女學修法　△國文學の話

△少女かゞみ　△少女のなさけ

まだこの外に、面白い有益な記事が澤山ありますし、全國の才媛の寄せられた和歌(すみれ)、短文(花)、笑話、謎なども、發表してあります。

また口繪は、太田三郎の筆になつた少女の彩色畫をはじめとし、誌友の面影、諸方の愛讀者令等の、鮮麗なる寫眞版が八枚もあります。



女(その五)

現代の婦人は

斯の如き書を讀まざるべからず



全一册三六判
紙數四百四頁
正價四十八錢
郵稅六錢

鳩山春子女子序文
前田雪子女史著

巴里婦人の交際振 奥樣の顧問

花園に下りて花の一枝を折らんとせば、先づ必ず其が中の精粹を取るならん、本書は歐米交際界に花の王と稱せらるゝ巴里婦人の輕妙なる應對振、訪問振、談話振、舞踏振を始めとし、宴會法、婚姻法、外出法等あらゆる禮法を網羅したれば、苟も文明の禮法を學ばんとする奥樣方、特に未來の外交官夫人とならるゝ淑女令孃方は一本を購求し給はゞ、二十世紀の社交界に立ちて華々敷く活動することを得べし。

田村江東君著

活動せる 實業界の婦人

全一册洋裝菊判紙數二百四十頁
卷頭實業家婦人寫眞版挿入
正價金三十八錢　郵稅八錢

（内容）

△勤勉力行の化身：三枝かれ子△文明の美化：菅川英子△發明家の妻：仁科終子△内願の憂なき婦人：山崎ため子△獨立自尊の標本：篠原よね子△隱れたる偉勳：川合こう子△黒リボン：伊藤なか子△時計の針の捲みなき妻：服部まん子：△夫婦共勵の醫師：篠田せい子△白牡丹の姉妹：松田八十子大西琴子：△寧ろ襯衣を縫はん：利舞子△準備教育を受けし嫁：佐藤歌子△才德兼備の良妻：龜井まき子△商業教育の産物：富成梓子△福德圓滿の内儀：橫田鍬子△商賣繁昌の秘訣：内田とめ子△夜店の女書肆：片桐なか子△實踐躬行の才女：山崎きみ子△白芙蓉：丸茂宗子△此母にして此嫁あり：大橋きよ子△妙齡の女書記：秋山德子△中洲の西大后：佐々木賴子△光榮ある襯衣の元祖：茂野蝶子△實業家の理想的婦人：雨宮信子、同てる子

福田琴月君著

當世 奥樣氣質 再版

洋裝四六判紙數二百頁　正價卅錢　郵稅四錢

（目次）

◎奥樣十種
◎人の噂
◎結婚前の某孃に答ふ
◎大みそか
◎土産日記
◎奥樣となる事は易く奥樣たる事は難し
◎あはれな誇り
◎會社員の奥樣
◎卅より
◎霜夜
◎奥樣の失望
▲餘興
◎滑稽緣の蒲燒

女（なの七）

東京本町
博文館
振替口座番號
東京二四〇

(その八)

厩に行き、畑を耕し、車を挽きなどして父の勞働を助け、夜は紡ぐ母を助けて深更に及びぬ。去れば渠は働き手として近隣に於て評判の娘なりき。性質淡泊にして多く物言はず、而かも非常に柔和なりしゆゑ、友との交情も亦頗る良好なりき。村に一つの森あり。おばけの森と云ふ。祭日等には村人相集りて踊る處なるが、渠も屢々此處に集へる一人なりき。家は寺院に近かりしより、渠は又時々此處に詣で、祈禱を捧ぐるを樂しみとなしぬ。斯る平和の國に、渠は永くたゞ田舍の一少女として暮しにき。

△ミカエル渠に現はる

然るに茲に渠の身の上に奇しくも又驚くべき事起れり。一千四百二十四年、渠が十三歳の夏の或る日の事なりき。熱くが如くに暑き正午頃、渠は常の如く後園にありしに、計らずも寺院の方に當りて三度眩き光を見、且つ何處とも無く聲ありて、『ジユアンヌよ、〳〵』と呼びぬ。渠いたく驚きて空を望めば、遙かあなたに、聖者ミカエルは、カタリナ、マルガリタの二人の聖女を從へ、無數の天使に圍まれて現はれ、『ジユアンヌよ、度々寺院に行きて祈れ、さらば神は汝を救ふべし汝は不日佛蘭西の難に赴きて王を救はざるべからず』と告げぬ。渠は恐れ戰きながら答へぬ、『聖ミカエルよ、妾は愚かなる田舍娘にて、馬に乘る事だに叶はぬ身なり、如何でかさる事の爲し得べき』と。されどミカエルは『否とよ、憂ふる勿れ、今より後、カタリナ、マルガリタの二人は屢々汝に現はれん、其の言ふ所を聽け、そは即ち神の言葉なり』と再び告げぬ。ミカエルは羅馬敎にて天使の上なる大天使の位にある聖者なりカタリナは有名なる女哲學者、マルガリタは巡禮者にして敎への爲に命を棄てたる婦人なり。此の二婦人は共に敎への爲に獨身にて世を送りし人々なるが、其の現はれし時、ジユアンヌは深く感じて又獨身にて敎への爲に盡さんと誓ひぬ。

△ジユアンヌダルク起つ

此の時より、二人の聖者は屢々ジユアンヌに現はれて、其の度毎に『汝の身を護らん、佛蘭西の難に赴け、將軍ボードリクールに行け』と渠に告げぬ。ボードリクールは、當時、佛軍の一方の指揮官なりき。渠は初めの程は、たゞ事の奇異なるに思ひ惑ひしが、斯る事の度々重なり

けれは、漸く心に一種の自信を喚び起し、終には母國の危難を救ふをば己れの天職なりと確信するに至りぬ。其の後渠は友と遊ぶ間にも獨り静に祈りて、他の嘲笑を買ひし事屢々なりき。ジュアンヌの父母は其の子の様子の年毎に異様になりゆくを憂ひて、さまざまに誡めしも其の効なく、却つて果ては狂氣の如き行ひをさへ現はしぬ。聖女は屢々現はれぬ。渠の決心は益々固くなりぬ。

一千四百二十八年五月十七日、渠は伯父を訪ふて其の希望を明かし、是非にボードリクール閣下の許迄連れ行く様にと請ひしが、伯父は取り合はざりき。却て厳しき叱責を加へられて追ひ還されぬ。「オルレアン城危し」との警報は此の時渠の耳に達したり。天上の聲は益々大きく渠に響きぬ。こゝに於てジュアンヌは「時到れり、一刻も猶豫すべきにあらず、我れは億光の母となるべき身なり」とて、或る日父母にも告げず家を出で、單身、ボクリユールと云へる所に陣取れる將軍ボードリクールの許に急ぎぬ。嗚呼、十七歳の少女が、赤手を揮つて國難を鎭めんとす。誰れか其の成る事を思はんや。

△將軍ボードリクールに會ふ

今や佛蘭西の運命はオルレアン城の上に懸りたり。されど大勢は如何ともすべからず、將士は皆な意氣沮喪し、到る處に敗軍を重ねて徒に憤慨の日を送りき。茲に將軍ボードリクールは一日佛國の前途を思ひて憂慮に沈みける折柄、佛蘭西の救ひの爲に來れりとて訪ひ來れるいと鄙びたる一少女あり。これぞジュアンヌダルクなりける。將軍は初め渠を飽く迄狂女と思ひて會はざりしが、ジュアンヌは前後三週日の間、日々請ふて止まざりければ、遂に渠を引見せり。ジュアンヌ曰ひけるは、『妾は神の示現によりて佛國の危難を救はんが爲に來れり』と。其の態度強ち狂人の所爲とも見えざりき。仍て其の求むる所如何と問へば、渠は次の如く答へぬ。『閣下よ、妾の言を信ぜよ、神は數年前より妾に現はれて、佛蘭西の難に赴きて此の國のまことの王を助けよと告げ給ひぬ、將軍よ、願くは妾に假すに一隊の兵士を以てせよ、妾はそを率ゐて直にオルレアンの圍を解かん。』熱誠面に顯はれしかば、將軍をはじめ並居る人々は漫に畏敬の情を起しぬ。されど、此の賤しき一少女の身を以つて、よしや神通の威力を具へたればとていかでか今日の危難を救ひ得んや、言ひ合せたるにはあらざるも何人も斯く思はざるはあらざりき。將軍も素よりジュアンヌの言を信じたりとには

あらざりしも、たゞ萬一の功を望み、渠の希望を滿たしめん爲め渠に數人の兵士を附し、當時シノンと云へる村に在りし國王シャール七世の許に遣はしぬ。曰ひけるは、「少女よ行け、汝の身の上に何事の起るも余の知る所にあらず」と。時に一千四百二十九年二月二十三日なりき。

△シャール七世との會見

當時佛蘭西の此の一帶の地は全く英兵の爲に蹂躪せられ、こゝを通過する者は動もすれば危險の身に迫る恐れあり。故にヴユアンヌは晝伏し夜行きて、三月六日シノンに着きぬ。途中時に英の伏兵に遇ひたるも、不思議にも彼等はヴユアンヌに對しては恰も釘の立てるが如くになりて、人も武器も全く力を失へり。

扨てシャールはヴユアンヌの不測なる力あるを聞き、其の實否を試みんと欲し、一從者と其の服を換へて我が座に坐らせ、自らは王座遙に從者の群に入り、而して後ヴユアンヌを引見せり。されどヴユアンヌは神の聲に導かれて直にシャールの前に跪きぬ。シャールは「余は王にあらず」と答へ、且つ從者の王座に着けるを指して、「シャール王は彼處に在り」と告げぬ。ヴユアンヌ頭を打振りて曰ひけるは、「否、佛蘭西の眞の王たるべき人は陛下を措て何處にか求むべき、是れ神の命なり」と。よりて王は人を遠ざけて其の名と何の爲に來れるかを問ひけるに、ヴユアンヌ答へて曰ひけらく、「賢明なる陛下よ、妾の名はヴユアンヌと呼び、陛下の戴冠式をランにて行はんが爲に神の遣り給へる處女(ヴユアンヌは自身の誓を立てゝ以來好んで此の語を用ふ)にて侍り」と。ランは歴代の佛蘭西王が戴冠式を行ふ處なるが、多年の戰亂の爲に英軍の占領する所となり、シャール七世は爲に未だ此の大禮を行はざりしなり。

△ジユアンヌの軍裝

ドムレミの一少女が佛蘭西國の救ひの爲に起ちしとの事は全國民の耳目を驚かせり。ヴユアンヌの信仰は燃ゆるが如き熱誠に滿ちぬ。而して佛蘭西には、「佛蘭西は一女子に救はるゝ事あるべし」との流言久しき以前より傳はりしが、ヴユアンヌこそ其の一女子ならめとの信念は何時しか多數國民の胸中に起りぬ。さるにてもジユアンヌは如何にしてオルレアンの圍を解くべきか、是れ萬人の均しく危み憂へし所なり。王は一隊の兵士を渠に貸し與へたり。而して渠の爲に特に燦爛たる軍服を贈りぬ。渠はそれを着して白馬に跨れり。其の帶ぶる所の劍は五個の十字架を刻める渠の秘藏のもの、その軍旗はかんれいしやの地に絹にて造りし百合の花を散らし、中央に聖像を畫き、尙ほ其の側に Thesus, Maria. の文字を記したるものなりき。此の旗は常に渠の軍の眞先に進みぬ。之れに續ぐは僧侶にして、嚠喨なる音樂につれて聖靈の降臨を呼ぶてふ快頌幽玄なるヴエニクレナトールの讃歌を唱し、渠の統率せる中軍は、堂々として其の後に續きぬ。此の嚴肅たる小軍隊は、當時英佛兩軍の規律な

きに比して、實に驚くべき整正と純潔とを保ちたり。されば先きには猜疑の念を挾みし兵士も、何時しか敬仰の情に打たれて、後には皆此の一少女の爲に喜んで身命を擲たんと誓ふに至れり。此の軍隊は、行々ジユアンヌの郷里なるドムレミを通過せしが、彼は實に大敵を控ふる身なる事を打忘れたるが如く、其の舊友なる村の嬢等と會し、事もなげに嬉戯して一夕を費せしと云ふ。

△英王に送りし書面

三月廿二日、ジユアンヌは英軍を攻撃する前に當り先づ敵に向つて一通の書面を送れり。

英王陛下。妾は佛蘭西を救ひて平和を見ん爲に神より遣はされたる處女にて侍る。今陛下は不義に佛蘭西を占領す。故に神は陛下に向つて退去を命じ給ふなり、陛下よ、佛國を去れ、而して國土を妾に委せよ。若し然らずば妾は陛下の軍隊の上に非常の損害を加ふべし。

英王陛下。妾は佛軍の指揮官なれば、陛下の軍隊を無事に還すと否とは總て妾の自由なり。陛下よ、妾の言を聽け。陛下若し之れに從はゞ其の軍隊は還すべけれど、然らずんば之を鏖にすべし。

英王陛下。陛下は佛蘭西を統治せんと思ふ勿れ。佛蘭西を統治する者はシャール王の外にあるべからず。巴里に公然入り得る者は我が此の王の外に無きなり。是れ神が妾に言はしめ給ふ所なり。去れば陛下よ、柔順に和を講ぜよ。然らずんば、陛下の軍隊は、恐くは空前の悲慘を嘗めん。

妾は陛下の自ら滅亡を招かざる事を希ふ。

千四百二十九年聖週の火曜日　處女より

英王陛下

△オルレアン城を攻む

去れど英軍よりは何等の返書も來らざりき。こゝに於てジユアンヌは軍を進めて四月末日オルレアン城の下に達せり。所在の將士風を望んで相會し、五月一日を以て愈々英軍攻撃に着手せり。此の攻撃は實に目覺ましきものなりき。ジユアンヌの馬を進めて陣頭に立つや、全軍は天來の靈氣に接せし如く軍氣を一變せり。

渠は常に全軍に先ちて進み、矢石亂飛の間を馳驅して叱咤督勵到らざる所なかりき。而かも、奇なる哉、渠に從へる兵士の敵丸に中りて數十百人立地に仆るゝが中に、渠は身一丸を受けず悠然として干戈の間を往來せり。渠自ら曰く、『我れは神の大命によりて此の國を救ふ者なり、我が前には矢も劍も其の力を失ふべし』と。而して其の戰場にあるや、只だ一挺の軍旗を提げたるのみ。未だ劍を拔きて人を斬りたる事なし。げに渠は不思議の力を有したり。一日櫓に登り、例の如く旗を振りて味方の指揮を爲す際、渠は珍らしくも敵丸に甲冑を破られて地上に落ちたれど、そは却て勝利の徵なりき。『英軍敗北！ 佛軍萬歲！』の聲は、此の時全軍に響き渡りぬ。斯くて英軍が七ヶ月間續けたるオルレアン城の包圍を渠は一週間にして之を潰せり。嗚呼是れ何たる快事ぞや。之を見しものは敵も味方も奇蹟の如く驚きぬ。ジユアンヌの名は忽ち全軍に喧傳せられ、既に絕望の淵に沈み居りし佛軍の士氣は、茲に一道の光明に打たれて、猛然とし振ひ起れり。こゝに於て渠は更に兵を進めてムーン、ボージヤンスイーの諸地に轉戰し、敵軍を追ひ拂ひて悉く之を佛軍の手に歸せしめたり。是れ實に驚くべき勝利なりき。此時迄凡そ百年間佛蘭西は國を擧げて英軍の蹂躪に委ね、一向屛息して其の鋒を避けん事を務めたりしに、此れより後英軍は勢頓に挫けて漸く振はざるに至りぬ。

次で七月十七日、ジユアンヌはシャール七世をランに迎へ盛なる戴冠式を擧げたり。式中渠は軍旗を持して嚴かに王の傍に立てり。而して其の王の冠を戴くを見るや、渠は嬉しさの餘り王の膝に接吻を爲し、且つ淚を流して曰へり、『陛下よ、佛蘭西は斯くて再び陛下に歸せり』と。天より受けしと云ふ渠の使命は斯の如くして全きを告げぬ。

△英軍に生擒せらる

顧みれば、ジユアンヌ、ダルクの働きは頗る悽壯なりき。渠の功績は頗る偉大なりき。而も痛はしい哉、此の佛蘭西國の大恩人は、其後英軍の手に捕へられて、

遂に火刑の刑に處せられたり。渠はオルレアン城の圍みを解き、シャール王の戴冠式を擧げたる後、己が使命は終れりと爲し、王に乞ふて郷里に歸らんとしたり。去れど、當時は、英軍は既に昔日の意氣無かりしと雖も、未だ全く佛國を退去するに至らず。巴里の如きは尚ほ彼等の占領に任せありて、ジュアンヌを要するの時機未だ去らざりしかば、王は之を許さゞりき。こゝに於て渠は再び兵を率ゐて更に巴里の英軍を追拂はんとせり、渠は先づ其の附近のプルジュを奪ひ、サンピエールとムスチエを取り、遂に彼等を巴里の外に追ひ出せり。後數日、渠は又英兵を追ひてコンピエーギュを襲へり。嗚呼、去れど、悲慘なる運命の手は此處に靜に渠を待ちぬ。此の戰ひにジュアンヌは城を出でゝ散々に敵を惱まし、凱歌を揚げて引還さんとしけるに、こは如何に城門の懸橋は既に撤去せられあり。さればジュアンヌは其の僅かなる手勢と共に城外に取り殘されて、遂に英軍の爲に擒にせられぬ。城内の佛軍が斯くジュアンヌの歸路を斷ちたる事情は、今に至るも明かならざれども、恐らくは叛逆人の所爲ならんと云ふ。されどジュアンヌは豫じめ其の運命を覺り居りしが如し。ジュアンヌは此の戰ひに行かんとする朝、彌撒聖祭に臨みて晩餐式を受けしが、渠は其時集れる人々に向ひて曰へり、「我が敬愛する朋友よ、我が親愛なる兒女よ、此の城内に我れを敵に賣る者あり、斯くて我れは死に處せらるべし、去れば友よ、我が爲に祈れ」と。其の夕刻渠は英軍に捕はれしなり。時は千四百三十年五月廿四日なりき。

△ルアンの軍法會議

ジュアンヌは既に敵の手に渡れり。渠は手足を鐵鎖にて縛せられ、ルアン（佛國內）の兵營に送られぬ、軍法會議は形の如くに開かれぬ。渠が敵に渡りてより茲に至る迄の間に、如何に甚しき侮辱と慘虐とを加へられたるかは殆んど筆紙に盡し難きものあり。而して渠を軍律に處する爲に種々訊問は試みられたれども、遂に罪科を見出す事能はざりき。されど英人はジュア

ンヌに對しては其の肉を食ふも飽き足らずとする所なり。故に渠は遂に左の如き理由を以て火焚の刑の宣告を受けぬ。

一、汝は天啓によりて神の大命を受けたりと自ら稱するも、そは全く虚説にして徒に人を惑はすものなり。

一、汝がシャール七世を佛蘭西國王の位に上げたる所爲は、甚だ僭越にして、英國人の威嚴を損す。

一、汝は聖者ミカエル、カタリナ、マルガリタの現はれし事を信ずれども、是れ迷信の甚だしきものにして、基督教の信仰に背くものなり。

一、汝は屢〻豫言を爲したるが、そは何れも卜占と同一にして、妄誕の甚だしきものなり。

一、汝は女子の身にして常に男子の服を着したり。是れ神に對して不敬にして、且つ教會の規則を無視するものなり。

一、汝が我が軍に送りし手紙に依れば、汝は殘忍にして亂を好み血を見ざれば止まずてふ頗る危險なる人物なり。

一、汝が無斷にて家を出でゝシノンに行し行爲は、親に對して不孝にして、且つ汝の父母を敬へとの神の命に背くものなり。

一、汝は死して神の救拯を得るものと自ら信じ居れり。されどそは單に自負に過ぎず。且つ汝の斯かる自負は他人を過たしむる恐れあり。

一、聖カタリナ、聖マルガリタに對する汝の崇拜は、其の實惡魔を拜するものにして、偶像崇拜と擇ぶ所なし。

其他尚は數ヶ條ありたるも、要するに多く之と異らざるものなりき。斯くてジユアンヌはルアンの地にあるビユーマルセの火刑場に導かれにき。

△ビユーマルセの火刑場

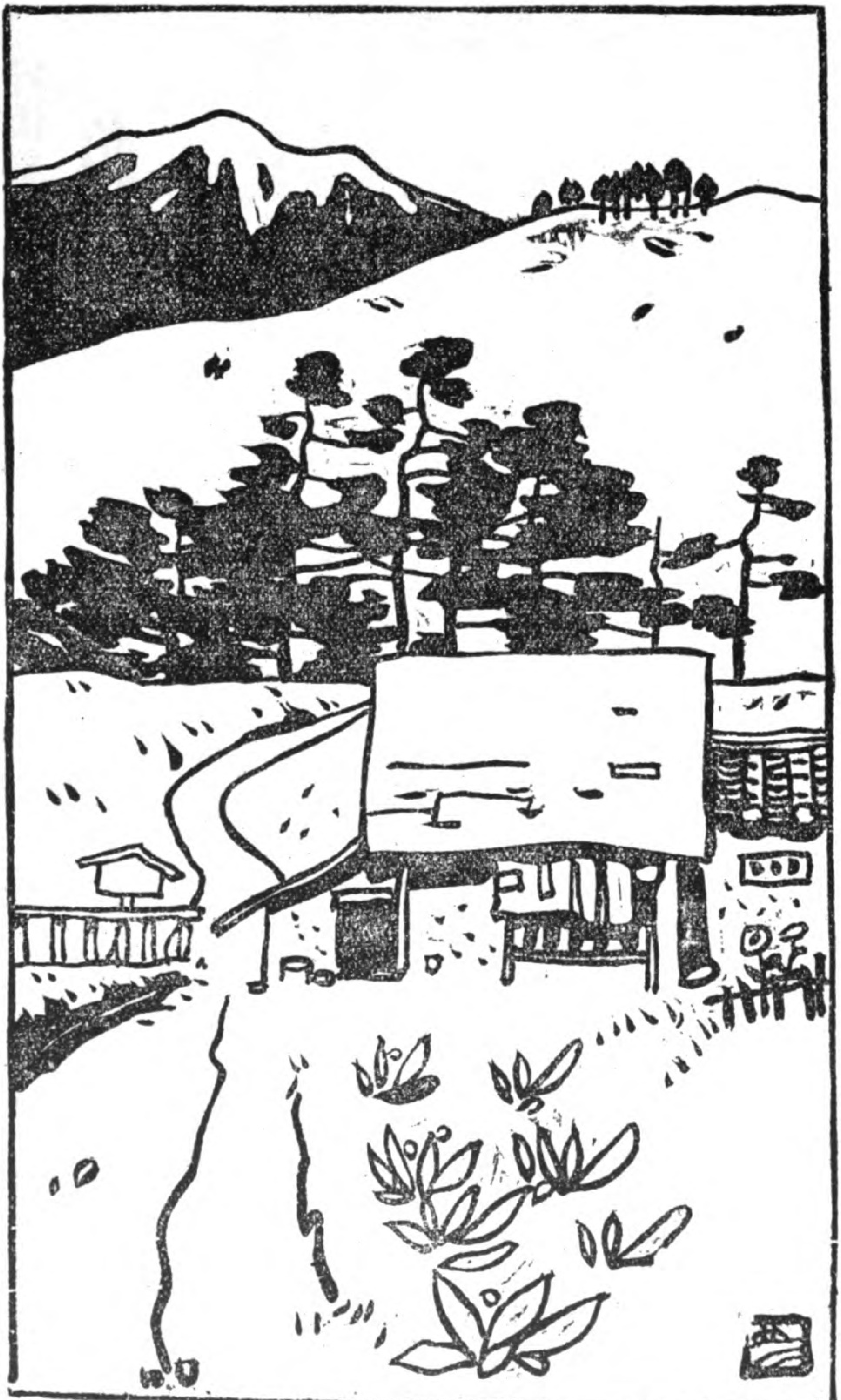
渠が刑場に導かるゝ時には、男子の服裝は婦人服に改められ、頭には、異端者、再犯者、排教者、偶像教者等の文字を現はせる冠を被り、七八百人の兵士抜

劍にて之に隨へり、オルレアンの圍を解きたる女丈夫ジユアンダルクも、今は流石に悲しみに絶えざりけん。泣く〳〵刑場に足を運びぬ。刑場には三つの高き臺を設けられたり。こは一は審判官の爲に、一は主敎の爲に、尙ほ一はジユアンヌを火焚に處する爲に設けられたるものにして、後のものには薪を堆く積まれ、尙ほ其の側に表札を立て、それに斯く書かれたり。曰く『自ら魔女と稱するジユアンヌ、ダルクは、虛言者なり、世を害する者なり、人民を欺く者なり、魔法使ひにして迷信者なり、神を冒讀する者なり、誇言者、慢心者なり、偶像信者にして正しき信仰に背く者なり、殘忍、酷薄、放埒者なり、惡魔を呼ぶ排敎者なり、離敎者なり、異敎者なり』と。ジユアンヌが臺に上るや、主敎の一人は立ち上り、聖書を引きて說敎を始めたり。曰ひけるは、『人若し肢體の一に傷を得ば他も亦痛むなり、ジユアンヌよ、汝は敎會の狼藉者なり、之を我が體の中より切り放たんは可ならずや、されば安らけく逝け、敎會は最早汝を保護するを得ず』と。ジユアンヌは默して之を聞き居りぬ。感果して如何なりしぞや。

△最後の祈禱

其の終れる時、ジユアンヌは靜かに薪の前に跪き、渠の最後の所禱を爲しぬ。曰ひけるは「至聖なる三位者よ、願くば我れを憫み給へ、我れは爾を信ず。愛する耶蘇よ、我れを憫み給へ」と。又曰く「嗚呼、マリヤよ、我が爲に祈り給へ。聖ミカエルよ、聖ガブリエールよ、聖女カタリナよ、聖女マルガリタよ、願くば我れを助け給へ」と。次で其の周圍に集りし者に向ひて曰へり。「此處に集れる人々よ、我が爾に許す如く爾も我れを許し給へ、又司祭者の君達よ。我が行ひし事はシヤール王の知る所にあらず、王には何の罪も無ければ、彼れを訴へしむる勿れ」と而して渠は其の被せられたる冠に就て憤慨して曰く、「我れは異敎者にもあらず、又離敎者にもあらず、善良なる基督敎者なり」と。又直ちに祈りて曰ひけるは、「嗚呼、マリヤよ、天に在ます聖人聖女達よ、願くば我れを護り給へ、我が肉體は今將に死なんとす」と、集れる者皆涙を流しぬ。ジユアンヌ又涙を揮ひて曰ひけるは「ルアン(火刑執行地)よ、ルアンよ、我れは此處にて死なん、汝は我が家とならん、されど、嗚呼、ルアンよ、汝は我が死に就て必ず悲しむ時あらん」と。集れる人々は今更恐れを懷きしが、火は既に渠の身邊に迫れり。渠は大聲に基督の名を呼びぬ。而して火が眼に及ばんとする時、渠は叫びぬ、「天啓は眞實なりき、我が使命は神より受けたるものなりき」と。更に最後の叫びとして、一聲高く又「基督」と叫びぬ。

佛蘭西國の救主、シヤール王の大恩人なるジユアンヌ、ダルクは斯くの如くにして世を終りぬ。時は一千四百三十一年五月三十日にして、年は僅に十九歲なりき。是れ女傑ジユアンヌ、ダルクの生涯なり。渠の一生は短く、渠の最後は不幸なりき。されど渠の功業は偉大にして比ぶべきなく、永遠に渡りて滅びざるべし。



殘雪

行儀見習中に見たる

伯爵家の三令孃

花散里

私が此の御邸へお小間使として上つてから、かれこれもう一月になる。思へば月日のたつのは早いもの。この頃ではあらまし御家内の事情もわかつて來たし、それに私が女學校もすまして居るといふ處から、折には御孃樣の御復習の御相手なども務めるので御主人の御覺えも殊にめで度いと言ふ樣な譯……オヤ大變、こんな自惚かいて若しや人に見られたものなら、それこそ朋輩に憎まれる原因だから、矢張りどこまでも好い子に成つて居ませうや。

上野の音樂學校へ御通學の靜香樣。お次は女學館に彼の君ありと聞えた芳香樣。お末は學習院へおいで遊ばす美香子樣とかう廿歳からお十八まで、ズラリと年子のお三方、それが又皆樣一とほりの御化粧で無いのだから朝の御化粧室は大變だ。それリボン、やれクリームをとおつしやるのを暫く御手傳ひしてから納戸に入つて、お三人のお召物やら御袴やらを一々揃へ、今度は皆樣御各々が御好きの香水をハンカチーフにしませていつもの通り移り香のする樣に御召物の御衿の邊に當てゝ置く。

『オイ三枝！』つて大きな御聲が耳元でひゞくからどツクリして振り向くと御次男の次雄樣が二本條の入つた眞新しい帽子片手に立つてゐらつしやる。

『アラマア……何か御用で御座いますか』つて手をついて伺うと『此の帽子を成るだけ汚くして置いて呉れないか』と何だか妙な御注文『あの汚しますので御座いますか』譯がわからないから御顏色をよみ乍ら念を押して伺ふと『頼んだせ』つてプーイと行つておしまひ遊ばす。いつもながら面白い方だ。だが一體どうした事かと首をかたげる。あゝさう〱、私は何てまあボンヤリになつたのだらう、昔から一高ぢやアからだに新しい品でもつけて行つたら、それこそ天下に聞え

た例の一高的獨裁の下に、忽ち頭上に鐵けんゝゝが降るといふ事は百も承知で居たくせに、今次雄樣の仰せに氣がつかないなんて隨分もうろくしたものだ。それは兎に角此帽子をどうして御注文どほりにしたら良からう、なる可く氣を付けて扱つても何かを汚して困る私だけれど(それがお目に留つての人選かもしれないが)今が今、サアとなつちやア却つて手がつけられやしない。仕樣が無いから次雄樣にはコッソリと御掃除番の佐平さんに賴んで置いた。矢つ張り譯が解せないのでお爺さん何だかをかしな面して居たつけ。だが次雄樣も今年から工科大學へお入りになるのだからあんな頑固な方だつて將來にきつとおしやれでも始まるにちがひ無いわ。十時頃から奥樣の御指揮で女中取締のお雛さんと私とお雪さんとで御雛樣かざる。土藏から運ぶのは執事さんや書生さんがしてくれるから大きに樂だ、けれども何と言つてもお三人のお孃樣のだから大した品數、それに奥樣御輿入當時のとかいふ古い大形のも交つてゐるし紫宸殿やら內裏樣やら、右近の櫻、左近の橘だけでも三對もある。

高麗緣の大廣間、二間の床に金屏はえて、もえ立つばかりの緞子の毛氈、紫縮緬の幔幕しぼる緋房のゆらぎ、あゝ此の我身も世が世ならばと先づ涙ぐまれる、だがいくらこんなぐちをこぼして見たつて今の此の身にや及ばぬ繰り言、いつそ思ひきりよく諦めて家の再興をはかるこそ、我等兄弟の急務なのだわ、だけれど斯うした奉公の身で兄樣だつて遠い〳〵北米の野にゐらつしやるのだものいつに成つたらと云ふ當途も無い……これも定まる運命なのだから。オヤ〳〵うつかりして居たら手許が御留守だ、空箱なんかをセッセと片付けてから奥樣の御命令どほり電話で靑柳へ御雛菓子の注文する。

土曜日なので皆樣御歸宅のお早いこと、文科大學で秀才の譽たかき一雄樣、慶應の普通部二年生でボートのセコチャン三郎樣、次雄樣も御孃樣方も續いで御かへり。

書郎だけで半ダースもゐらつしやる上に奥樣の御生

家から若様と美禰子様とがお越しになつたからお賑やかさも亦一しほで皆様御庭でテニスが始まる、私は紅茶の御茶碗と、うづたかく盛り上げたシユークリームの鉢とをあづまやのテーブルに運んで、お茶が入りましたからと申上げて引返さうとすると三郎様が『三枝はテニスのチヤンピヨンだつていふ評判ぢやないか、一ゲームやつて行かないかい』とおつしやる『まあとんでも無い……ちつとも存じませんので御座いますよ』すると今度は芳香様が『私が疲れたから代つて入つて頂戴よ、いゝぢやないか一寸の間ぐらゐ……』『おやアまた後刻に入れて頂きませう、お茶の冷えません間にどうぞ皆様……』と云つてうまくのがれて來て了つた、どこの世界を探したつて晝日中お上の方々と一緒になつてテニスなんぞして居る呑氣らしい奉公人はありやしないもの、だけれどあゝ云つて下すつた時には昔とつた杵柄ならねど眞實あのラケットが握つて見たかつた、それをお斷りしてまでにげて來るのも氣象の多い召使の身の上だから…………

殿様が御歸邸遊ばす、御客様がお見えになる、あちこちしてる間にもう夕方になつたからいつもの通り御夕飯の仕度にかゝる、仕度といつたつて御料理方は別にチヤーント控えて居るから私はたゞ食堂の方だけ。

細長い大きなテーブルに純白のクロースかけてガス暖爐に點火してから例の通り溫室に行つて此室の掛りの村井さんに選つて貰つて滿開の櫻とヒアシンスとカーチーシヨンと斯う三鉢借りて來てテーブルの上に程よく配置する。あゝほんとうに氣高い香りだ、マッチを擦つて花ガスを點すと廣い室內が一時にパッと明くなつて俄に光明世界へ出て來た樣、花の香に醉はされて暫くからウツトリとしてしまふ、お雪さんと二人で食器を運んで報知のベルをならすと皆様スリッパの音かろく順々にお揃ひになる、御給仕する間もいろ〳〵な名論卓說（と云つてはちと仰山かもしれないが）御若い方のお口々から洩らされるのを旦那様奥様はニコニコして聞いておいで遊ばした。

私も今ではかうして落ちぶれてしまつた樣なもの

の、それでもまあお優しい御主人に仕へて溫かい空氣に充ちた家の中に起臥することの叶ふのは、不幸中の幸福と思つてそれで滿足せねばなるまい。

世には親に捨てられ子に別れ、其の身まで賤しい里へ沈める人さへあるものを………

▲

この間お雛樣を出した日から昨日までといふもの每日每日御客樣やらお供やら、それに美香子樣が二三日おかげんが惡かつたので忙しい思の仕つゞけだつた、それでも今日は美香子さまも學校へお出まし遊ばしたから大した事もおありになるまい、まづ何よりも結構なこと、私はお雪さんと代り合つて髮を結ぶ、例の丸たぼに前がみふつくり。

奥樣の御居間でベルがなる。大いそぎで伺うと京橋の白牡丹に買物があるのだから御苦勞だけれど行つてくれまいか三枚でなければわからない事だとの仰せ、かしこまりまして御座いますと申上げなほ御用向委しく伺つて出かける、お孃樣のお供でないからちつとは派手でもかまふまいと、今はもうなけなしのトランクの底から紫矢がすりの秩父の綿入取出して着てゆくと辻待の車夫が「お孃さん電車までいかゞで御座います」と言つてどこまでもしつこくついて來る。

つまらない事だが今の此の身にしてみると半歳ぶりでお孃さんなんて言はれたのだから何だか妙に胸がをどる。全く運命の神の御戯ほど異變の早いものはあるまい。九尺二間の裏店にくすぶつて居た者でも忽ちにして千金の富を起すこともあるし、また我等兄弟の樣に僅か半歳前まではお優しい父樣母樣もゐらしつたものを、ふとした事が病みつきで御兩親が相ついで世を去られると惡い親類が寄つてたかつて幾萬といふ財產を橫領しようと謀る。心の淸い兄樣はそんなに欲しい財產ならそつくり奇麗にくれてやるとおつしやつたまま自らは遠い北米に渡つて、かよわい御身で馴れぬ勞働に從事遊ばすあゝこれだけでも胸は淚で一ぱいなのに多くの侍女にかしづかれて居た乳母日傘の私は今、もう人に使はれる身の上だとは………

御用を遂して歸つてからも何となく氣がふさいで途、いつとなく沈み込んで居たら奥樣が、

「どこか氣分でも惡さうだから遠慮なくやすんだらよからう」と御親切に云つて下すつたが、

「何とも無いので御座いますけれど、そんなに見えますで御座いませうかしら」つてさあらぬ體にしてしまつた。

芳香樣學校からお歸りになつて暫くすると源氏物語の花散る里にわからないところが有るから一寸みてくれとおつしやる。御遠慮しては却つて失禮だと思つたから自分の習つたまゝを申上げたら非常におよろこび遊ばしたつけ、金銀財寶は失つても身についた學問はほろびないからこれまでに學問をシツカリやらせて下すつた御兩親が今更ながら有りがたくて逐また胸が塞がつてしまつた。

夜は一雄樣が書籍の整理を手傳つてくれとの御召、洋館の南端の御部屋に上つて外から扉をコツ〳〵とかるくたゝくと内からカム、インとおつしやる。三枚で御座いますがよろしう御座いますかと念を押して伺つたら御自分で立つて扉を開けて下すつた。

それから小說、傳記、詩集、敎科書等とそれ〳〵一雄樣が分類して下さるのを私は順よく奇麗に書架に立てかける役、目と手とをセツセと働しながらなほ一雄樣は種々なことを御尋ねになる、私が沙翁全集を一寸のぞいてたら「シエキスピアの作品は大抵みたのかい」

「どういたしましてまだちつとも……でもマーチヤント、オブ、ヴエニスだのハムレツトなんかは一生懸命でみましたんで御座いますけれど……」

「なか〳〵話せるねえ、ゴルキーなアどうだい」

「露西亞のはさつぱり……」それからまた日本の作家ぢや誰が好きかの何のと根掘り葉掘りお訊になるのを私は又好きの道とて夢中になつて夏目先生もいゝが二葉亭さんが好きだの鏡花會に入りたいのつて餘計な事までおしやべりして、女中の分際でとんでも無いと後でハツと氣が付いた時きにはもうおそかつた。

山と積んだ澤山の書籍を漸く片付け終つて下らうと

すると御禮だよとおつしやつて御机の引出しから新しい絹ハンケチを取出して下さる、勿體ないと思つたけれど、恐入りまして御座いますと有難く頂戴して置いた。

靜香樣の御居間でいゝピアノの音が聞えるから御廊下で暫く立聞する、忘れもやらぬなつかしの曲、ムーン、ライト、ソナタ、お雛壇のぼんぼりへ油をさして春のおぼろ夜歌おもひつゝ夢に入る。

かしづきし乙女罷ん出桃ちりて
四日のひなの宮居さびしき



地方風俗誌

物質的進步の片影
名古屋附近の風俗

藤　葉

◎當地の名物

當地（熱田）にまゐり候てよりいまだ日も淺ければ充分なる觀察は勿論出來申さず候へども、先づ當地にての名物の一ッは蚊の多き事に御座候。

夜は申すに及ばず晝もこそ〳〵と足や手を遠慮なく刺し申候には實に困り申候、從つて夏はマラリア熱の流行多く大抵の人は之にかゝり候併しあまり激烈に御座なく幸な事に候。

蚊の多き位に候へば家の周圍は皆田畑にて肥料の匂ひに初めのうちは息もつまる樣に思ひ候ひしが只今にては肥料まきの無くなりしか、鼻のなれたる故か餘り氣にもなり申さず。

一體當地は名古屋の富豪の別莊多く十圓以上の貸家にて少し町よりはなれたるところは大抵別莊建にて、東京あたりのガラクタ普請よりは遙に高尙にて土地の廣きだけに庭も充分に取り手入れもよく行きとゞき風流なるすまゐ多く御座候、殊に嬉しきはいろ〳〵の植木の多き事にて之れは每年五月八日に熱田神社の境內にて植木屋の市開かれ候が多くは此折に安く買ひ求めては植ゑるにて、もみじ、つゝじ、つばき、ばら、松などを初めとして私の家の庭にも二十幾種の灌木、喬木欝蒼と茂り居候、夫れが爲一層蚊のひそみどころ多きわけに御座候。

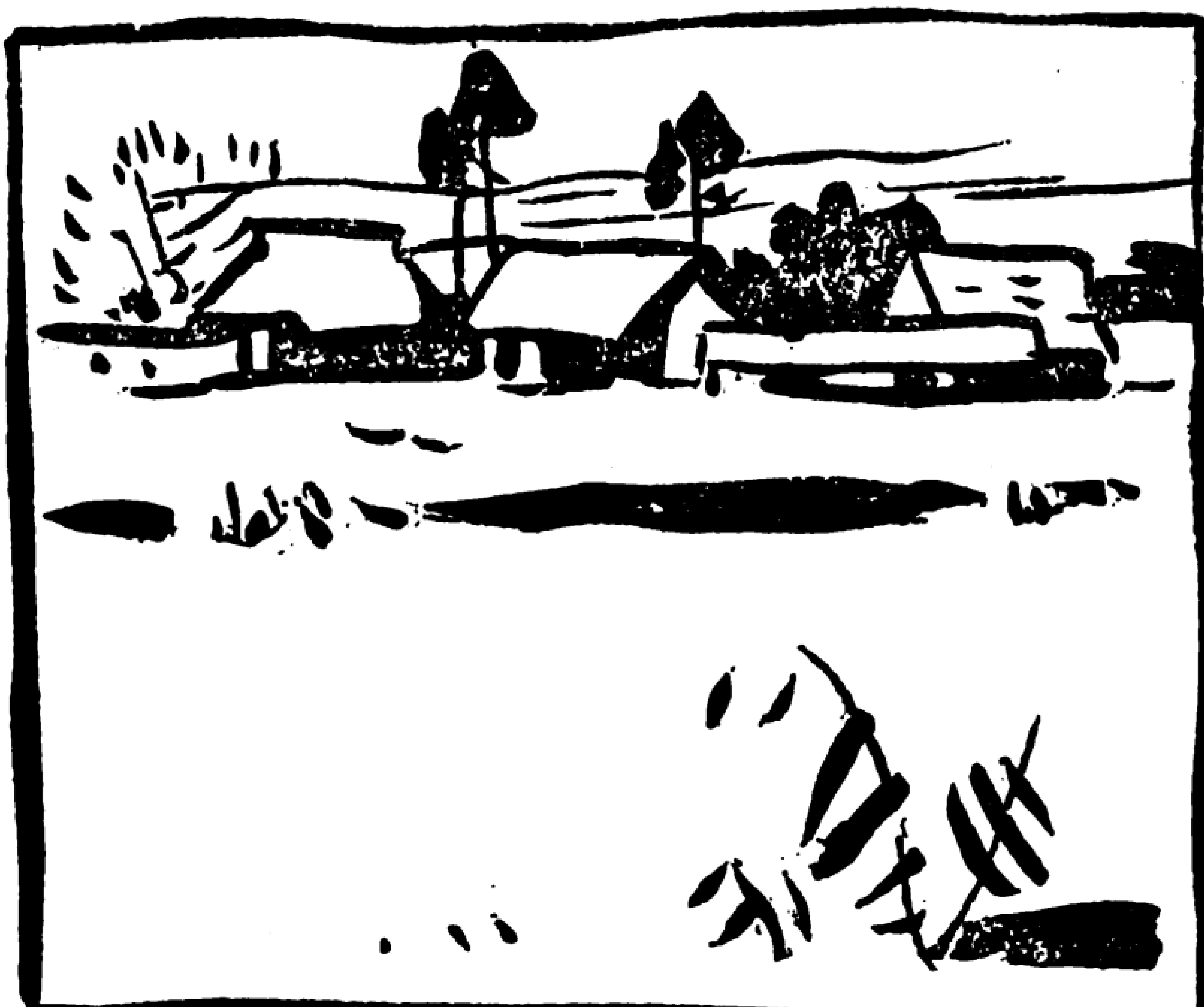
殊に六月のはじめ麥をかりたる後は其中にひそみ居たる蚊が隱れ家を取られたる爲遠慮もなく家の內に浸入いたし候まゝ此頃が一番蚊の多き時に御座候、夕飯時よりそろ〳〵といで來り、何の氣なしに痒しと思ひて足などたゝけば一時に三四疋もとれ候事ある位にて少し大口あいて暗きところに行けば容赦もなく口の中にどし〳〵飛び込み油斷もすきもなりがたく候故止を

得ず日の暮より蚊帳をつりて這入るか、くすべて追ひ出し戸をたて切るより外に致方なく時節がら少しにても涼しき風のほしきころ、此蒸しあつさには迚も堪へられたものにては御座なく候、斯んな位故蚊帳は五月の初めより十一月の初め迄つらねばならず候。

併し今より十年も前迄はとても此邊に住ゐかねたる程にて候ひしもおひ／＼人家の増すに從つて蚊の發生する處少なくなりし爲餘程凌ぎ易くなりたりと聞けば又次第に少なくなる事と存居候。

◎輕薄なる人情

人を見たら盗坊と思へとは實に此土地の事にて御座候晝間は若き下女と只二人にていまだ知人もなく心細



く暮し居り候を早くも嗅ぎ付けたる悪者どもいろ／＼と手をかへ、品をかへて金銭をゆすり取らんと致候には誠にあきれはて申候、或は何處の祭禮ありとては思召だけと寄附を迫られ、或は町内の貧窮者が病氣故に惠まれたしとか、何々孤兒院なりとか、何寺の開帳とか種々出駄羅目の口實を設けて多きは一日に二度も三度もまゐり候、今より思ひ合せば斯く名目こそちがひ、來る人は變り居り候へども之れ皆一ツ穴の狐にて、土地に不案内なる人を苦しむる惡奸なりしと誠に口惜しくも亦あきれ果てたる事に御座候。

人情の恐ろしく薄情なるは之れのみにてはなく、家内に死人にても有れば町内のものは皆呼び集めて御馳

走をせねばならぬよし、若し之れをせぬ時は見も知らぬ人々寄つてたかつて出棺の折邪魔を致し、容赦もなく臺所に入り込みて勝手に酒肴を造りて飽く迄飲み喰ひせねば滿足せぬよし、他の地方より來りしものはいと口惜しき事に思ひて警察に訴へんと致候てもなかなか昔よりの習慣にて警察の力にも及び申さずとか。

◎日用品の價

東京の如く煮豆屋、豆腐屋など絶えず來る樣な事は御座なく候へども朝と夕方位とには一回づゝまわり申候、其他此邊の百姓が俄八百屋となりて其時々のもの例へば、莢豌豆、里芋、大根などゝかつぎまはり候、此地の人々の大半はもと魚屋なりしとかにて其數も誠に澤山に御座候、朝本町通りに立ちて眺め居り候へば此處より名古屋に向ひて荷ひ行くもの引きも切らず浦風(西風の事)さへ吹かねば其價値も割合に安く新しきもの澤山に御座候。

此處にて魚半と云へば一番大きなる魚屋兼料理屋にて此處にもと名古屋の師團に魚を納めたるが初めにて夫れよりおひ〳〵大きくなり候ものゝよし、主人は誠に心掛よきものにて今日あるは皆陸軍のお蔭なりとて軍人をいたく大切に取扱ひ候よし。

昔より此地は尾張大根の產地と云はるゝ位に候へば土地は一帶に太り居り野菜ものは何にてもよく出來候と見えて價も安く候、先達東京より來客のせつは丁度茄子の出盛りなりしが一錢に十個も賣り候と聞きて其安きに驚き、東京ならば一錢に小さきもの漸く二ツ位より買はれ申さずとて歸りがけに土產にもち行き候五錢も買ひ候へば籠に入れて手荷物としてはもち切れぬ程にて候ひき。

斯んな事に候まゝ茄子に限らず他の野菜も都よりは餘程安き事となし、私共の好物なる薩摩芋も一貫目五錢にて得られ申候。

併し之等もうつかりとは買へ申さず私共の如く他の土地より入り込みたるものには法外のかけねを申候、先日洋傘一本買はんと致候に一圓五十錢のものを

二圓と申し、一寸見たるところ二圓の價値はとても無しと其まゝ買はずに立ち去らんと致候ところ、番頭があはてゝ一圓五十錢にまけ申候。

何品にても此通りに御座候、其上にお世辭はとても都の商人にかなひ不申、品物もなか／＼思ふ樣に見せてくれず、要らねば出て行けと云はぬばかりの樣子を致しこちらから却つて御機げんを取らねばならぬと云ふ樣な仕末、寧ろ滑稽なる事にては候はずや。

○土地の風習

此土地は皆樣も御承知の通り日本武の尊が御持ち遊ばされし草薙の劍を祭りし熱田神社のあるところにて人々は此處に參詣するを宮に詣ると申候、一體に社寺に參詣する事誠に盛にて、一日、十五日は申すに及ばずいろ／＼の名目の下に月に幾度となく老若男女參詣致候、若き女子は桃色か赤の腰卷をしめ裾を端折り居候、稻、麥などの青々とせる畑道に之等の人のぼつぼつと歩める樣誠に美しく御座候。

此宮のある爲に熱田と云へば我國の人大抵は知り居候程に御座候へども、其他には之ぞと云ふ目ぼしきところもなく昔の宿場にて小さき町に過ぎ申さず候ところ、明治三十八年の末頃陸軍省が此處に兵器製造所を設け候てより町の形勢一變致候よしに御座候。

何しろ此製造所が出來上ると同時に、二千人の職工が此處に通勤する事となり、其多くは東京の砲兵工廠より移り來りし者なれば俄に人口の增すと共に、家屋の新築を初めとして、日用品の需用も增し一般に活氣を帶びまゐり候。

從つて例の慾張り根性を表はして地價はずん／＼と上り、家賃は大方東京と變り申さず、而も猶家少なく中等の貸家はなか／＼見付かり申さず候まゝ法外の家賃を取られながらもおめ／＼と家主の慾望を滿し居り候事に御座候。

若き職工を相手に致す樣になり候ては自然一層人氣も惡くなるわけにて此邊にて下女に行くものは必ず下女の職務以外に其家の主人の或る特別の用をも便じ候

由奥様たるもの油断なり申さず、斯くしてお給金以外に收入を得て之れを嫁入仕度になすとの事に御座候。

少し器量のよきものは藝者に往くを此上もなき名譽と心得、之れを出世奉公と申候、成程氏なくして時には玉の輿に乘る事ある故にてや候はん。

少し心掛よきものは製造所の女工となり候、下女や藝者になるよりは數等ましにて候、大抵一日に三四十錢は得られ候よし、女子の職業としてはまづ適當のものにて御座候。

男工は大抵一日に五六十錢より多きは一圓以上もとり申候、然れども思慮なきもの丶悲しさ中には妻子あるものも周圍の墮落によりて、之等の者に有りがちなる大方は酒色に使ひはたし、罪なき妻子に憂目を見するものも有り候由、其證據には給金の渡る日には夫の歸るを工廠の門に待ち受けて其賃金を無理にも受取らんと致候もの澤山に御座候、然し夫が夫なら、妻も妻にて子なきものは大抵夫と同じく此處の職工となり居り候が、妻は亦不人情にも己が得たる賃錢は少しも夫に渡し申さず皆己のものとなし候よし、無敎育の者とて致方もなけれ共、此様子故見苦しき夫婦喧嘩の絶え間なきも當然にて候、斯る有様にては到底薄給の身にて此せち辛き世を圓滿に送る事出來申さず、どちらもあはれなればとて、購買組なるもの設けられ凡ての日用品を割合に安く買ひ得らる丶様になし其代價は工廠にて直接に賃金の内より差引く様になし候、其爲男工は大困りのよし、併し此購買組なるものも餘りに其組織完全せぬものと見え、此春より三度も請負商人が變り申候。

職工は朝六時頃より夕方は五時頃迄の限りに候へども猶夫れ以上一時間にても多く勤め候へば、割増金を得られ候ま丶大抵は七八時頃まで歸り申さず、夫れ故家にある子供などは年中父の顏を見ずに暮すと云ふ有様に御座候。

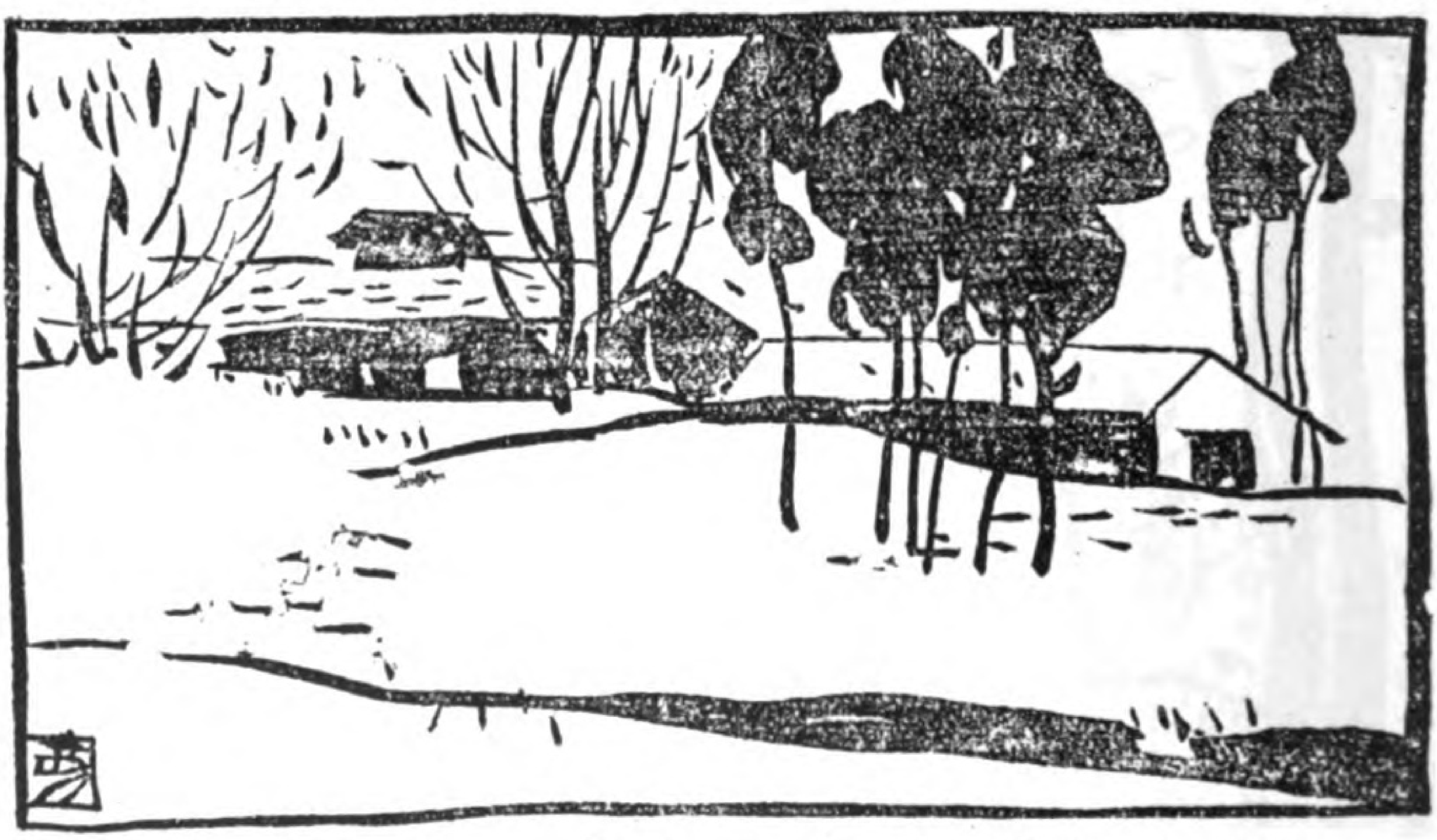
此處に勤むる下士以下のものは年末に至れば多きは八十圓以上の年末賞與が下り候、獨り士官以上のものは誠に割合の惡き役目にて炎熱燒くが如き日も規則に

は午前中限りとなり居れども、例の下士以下の者が割増金を得んとしてなか〳〵午後になりても休み申さず、其監督に止を得ず午後も五時迄は勤めねばならず、割増金も年末賞與も無くして眞に位倒れに御座候、而して高等官なる名義のもとに種々の出金意外に多く、昔の貧乏公卿と同じ様に御座候。

◎土地の人氣

朝定刻を過ぎたる工廠の門前には失望と墮落とあり〳〵と顔に表はれたる幾人を必ず見受け申候、之等は皆出勤時間におくれたるしめ出され者に御座候。

僅十分か五分の爲めに其日一日をむだに費さゝる可らず。



おめ〳〵と家に歸りて不甲斐なきを妻に嘲けらるゝもあるべし、親に責めらるゝもあるべし、何れにしても面白からぬ事なれば多くは家に歸らず、或者は空屋に一日を眠り、又或者は其仲間と市中をぶらつき居候小人閑居して不善をなすとか、あちらにも三人こちらにも、五人かたまりてくだらぬ立話をなし、婦女子にからかふなど之等が一層土地の人氣を惡しくするにてや候はん。

職工のみにては候はず道直しなどせる人夫の人の惡さ若き女などは晝にても側を通れ申さず、聞くに堪へぬ事を云ひ、或は道を遮りなど致し候、まして夜に入りては思はぬ耻を受けたるもの多く日々新聞に表はれ申候。

◎當所の言葉

當地は菊の名所にして東京の團子坂よりは數等勝りたるよし、十月の十五日より所々に菊人形の造り物など初まりて何處に行くも菊のうはさのみ、一人前十五錢とかに候由、天長節には猶値上げを致候、名古屋は昔より金持の多きところ、美人の多きところに候へば斯る遊興事には持つて來いにて、美しき人の、美はしき衣着て、賑かなる處には多くあつまり申候。

最後に當地の言葉の事を申候べし。頂戴と云ふ事を丁寧に云へば頂戴遊ばせと云ひ普通は何々してチョーヨと申候、朝香の物を賣りに來るものは香々イーキアーモーと呼びあるき、鰯賣は鰯が安いがドーダーと叫び申候、まだ居るかをまだゐりやしすか、何處々々へ行かぬかと云ふ處を行きやアせんか入らつしやるかと云ふ處を有らつせるかと云ひ、言葉の終りにもの字を付け申候、而うしてなも、斯うしてなも、有りがたうゑもなど、又感動詞、なも／＼と口ぐせの樣に云ひ、馬鹿と叱る時にだしけと云ひ候たわけのなまりたるものなるべしと存候



浦鹽航路が開けてからの 敦賀港の繁榮

在敦賀　はつ子

明け方から霰が思ひ出した樣に降る、まあ物好きな夫は午後から獵に出かけたきり、定めし今頃は此寒いのにエスと、雪の深い山や氷の張つた畷の田圃路を、夢中になりて駈け歩いてゐらつしやるだらう、山鳩一羽でも取れたら御機嫌も好からうが、サア何も無かつたらどうだらう、幸ひに鴨なり雁なり獲れたなら、今夜は御自慢で大變な事だらう。

、、サア賣のお豐婆さんが來た、門口から「お早うさん」と元氣な聲、六十の年して天秤のしなふ迄、兩方に青物や果物をかついで來る、ほうれん草が一束二錢、人參が三本で二錢とか、聞かぬ先きにしやべつて居る。直向ひの八百龜の妹娘が。店番しながらヂロ〳〵睨めて居る、商賣敵だから憎らしからう、まづ玉葱と芹を買ふ「蜜柑もいつもの樣にじやんこだらけのは御免さ」と云へば「今日は奥樣に似まして別ぴんさん」と籠から撰り分ける「人を馬鹿にして居るよ」と下女と顔見合せて笑つた。

此婆さんはいつも黑いマントを着て居るので、ハイカラだねえと云ふと、鐵道工夫をして居る息子のお古だつて、それでも雨の降る日は簑と着かへて、壹圓廿錢のマントだと自慢する、滿ない事言つていつも廿分位騷いで行く、左樣ならと出ていつた跡に、向ひから八百龜の母親が「お寒うおすな」と聲を掛けて、店の林檎や蜜柑を順よく並べながら、今日は雪に成るだらうと云ふ、是はまた娘と違つて、お飾りの下を澤山に潜つた丈けに如才無い。ゆふべ息子のお嫁さんが來たが、店先にはまだ姿がみえない、まあ此度が七人目だつて、驚いて了ふ、龜と云ふ男は何んといふ幸福者だらう、顔を見ると醜男の標本とでも言ひたい御樣子、おまけに口喧ましい姑、意地の惡さうな娘、といつでも此春出戻つた卅近い小姑、そこへ、まゐあの若い女がよく〳〵來る氣に成つた、尤も店は小さいけれど、敦賀

から浦鹽行の船が通ふ様に成つて、ドン〳〵野菜や果物を送るので、少しは内福だらう以前よりは、取引先も多く成つたらしい口振だ。

三四年前、私の始めて東京から引移つた頃は實際淋しい町なのに驚かされて了つた、田舍と言つても、北國では名の賣れた港、殊に名所や古跡の多い處だから、正可に是程とは思はなかつた、雪の多い爲か冬が來ると、家根に雪止といふものや家の圍りに雪圍をする、店先は皆腰高障子をはめて了ふから、何を賣つて居るのか、土地の人で無ければ分る筈がない、恰度東京あたりの質屋の様な格好、さうして何を買ひに行つても愛嬌の無い事、私達は、「旅の者」といふ尊稱を賜はつて、一割も高く賣られた揚句、お客様の方で「今日は」とか「左様」ならとか言はなけりやあ、手持無沙汰で仕方が無いと云ふ始末、なか〳〵見識の高い御



商人樣だと、笑ふ事もあつた、變れば變るもの、戰爭時分には、ロシヤ、グロンボイだの、リウリツクなど恐ろしい名に随分驚かされたものだが、今では一週間に三隻も浦鹽との往復があるので、僅かの間に會社が出來る、何々商會とか何々商店とかいふのが殖える今迄の樣に青い顔して前掛がけの人達と違つて、洋服のハイカラ連が多く成る。今ぢや昔の有樣は無い位、何處の商店もガラス戸をはめる、雜貨店は商品を陳列する、床屋はロシヤ字の看板を掛ける、欲しいと言つても無かつた洋酒や、西洋食品など賣る店も出來る、それからはホテルも設計される、去年から電燈がついて今年からは電話が掛る、まあ非常な陽氣な町に成つたといつてもよい位、それにしても變らぬものは北國の氣候で、何時も〱お天氣の惡い事、雪や雨の多いので氣迄晴々しない、其爲か此處では必らず肺病で、死ぬ人が多い、それも其筈此處でよい奧樣と噂される人は、まづお嫁に來た時の下駄が幾年たつてもへらぬ事や、遂一町許り先きに新らしくかゝつた橋も半年も一年もたつのにまだ見ないとか其が御自慢の一つにも成るわけ、そんな事で年中深窓に閉ぢ籠つて居られると云ふ處から、肺病も出るのだらうと思ふ、私達の樣に夏は海水浴もする、秋は山へ登つて茸狩もする、冬になれば雪見に出掛けるといふやうな女は大禁物、其代りピン〱して居る、それでも、日毎に土地の人の眼も馴れて、子供達でも毛唐が恐ろしいと言つて、逃げない樣に成つた、常陸山の洋行歸りの時や、モルガンのお雪が上陸した時など、稅關や棧橋附近は大變な人出があつて、小新聞の記事も、賑はされた、某國大使とか何々博士とか、有名の人が通過の時は、町の頭株フロツクで送迎する、中には十八九世紀あたりの珍物も拜見する。

いつか、何大臣とかいひ給ふお方が、敦賀へ御視察に御出といふ時はまあ大した騒ぎ、軍艦から御上陸といふ折は、稅關あたりは御通路に砂がまかれる、私共の門口も塵を散らすな水を打てと、喧ましく言つて來る私は買物もあるのに、いくら大臣樣のお通りでも、食

べるものも食べずに待つ譯にもいかないから青物屋迄一走りと出かけた、いかにも町は美しく掃除されて、一二町位の處に巡査が立つて居る可哀想に荷車は横町から出られずに、みんな立往生して居る、道行く人は左側を歩めと注意される、夏の熱い日だから照り付けられて、お氣の毒だが早く歩む事が出來ない、巡査殿どう思つたか私には何とも言はぬ「憚りながら天下の大道、たとひ僅かな月給取の女房でも、大臣様と大した變りはありますまい、犬や猫ぢやあるまいしさ、ホ……」と言てやりたかつた、



胸くそだから、青物の風呂敷包み片手に、左側も歩まずまづ最中をゆうゆうと歩んで、家の門口まで來ると、何十臺の車が騒がしい音をたてゝ來る、先頭が警察署長で次のは大臣様と直に知れた、新聞や東京パックでよく見るお顔、面長の目の細いお方だもの、續いて例の通りシルクハットやフロックの行列、私は洋傘もつぼめずに、立つて見て居た、後で夫が意地の悪いひねつくれた女だつて、お笑ひに成つたつけ。

午後二時髪結のおしげさんが來た、東京

から送つてくれた、すゝめ形を入れてみる、少し粋氣過ぎるつていふけれど、私には氣に入つた、夕方からは逐とう雪に成つて細いお砂糖の様なのが忙がしさうに降る、其中を寒い／＼といひながら、夫のお歸り、何が獲れましたと早速筒先きをみると鴨が三羽、是はまあ大獵と私も喜べば夫は一入の滿足、一つがひは明朝豫々お約束した、支配人の戸張様のお宅へ持參せよとの命令、すつかり草臥れたと宵の內からお休みに成つた。

明る月曜日は社へ御出勤前朝風呂にとお出かけに成る、ゆふべの雪はまだ止まない、もう五寸ばかり積つた、がや／＼と、小學校へ通ふ娘達が表を通る、悉皆同じやうに、縞の綿フランネルの頭巾を被つて、中には男のはく縞の袴をはいて居る、流石に女學校通ひの娘さん達は、メリンスや綿カシメルの海老茶だ、油氣の少ない束髪にひゝの切れた頰を眞赤にして足駄ばきの姿は、五吋のリボンをきつと結んで、品よくお着けに成つたお袴の裾から、紐靴のちら／＼見える東京の嬢様達と大した違ひ。

「奧さん、江戸屋のおかつさんが死にましたげな」と使にいつたあきが雪を拂ひながら、まあ可哀想にゆふべお產で親子ともいけなかつたとの事、おかつさんで思ひ出すが、敦賀ぢやおかつさんといふ名の多い處だと、始め或る人に話したらおかみさんの事を言ふのださうで、大笑した事があつた、規則でもなからうが、いくら第一流の大家の奧様でも、おあね様と呼ぶ、さうして僅か拾圓でも月給取となれば奧様と呼ばれる、私共も其お仲間で、奧様の尊號を頂いて居る譯だ。

お晝飯を濟せてから、戸張様のお宅へ伺つた、「どうぞ暫く」と入れられた應接間、石油ストーブの前に立つと、直に大姿見に自分の姿が映る、黑繻子の襟掛けた麻の葉つなぎの大島に、縞お召の羽織引かけたのが根の下つた髷にはよくうつる、私の好みと云ふものゝ此處の奧様、始めの程は、私の實家が日本橋あたりの町家で、潰し島田で師元のお稽古通ひ、雪駄でもチャラチャラさせた様に思召て、御交際上手の直に芝居のお

話など遊ばして、私を喜ばせ様となすつたのも無理の無い事、私もやつぱり海老茶のお仲間と、お分り遊ばしてからは大の御機嫌、それも其筈、虎の門の才媛で御實家は非常な財産家、お父様のお眼鏡で、たつた一人の愛娘を、戸張様にお上げに成つたとやら、文學好きのお方で、御書齋には羨ましい様にいろ〱と集まつて居る、『お待たせして失禮しましてね』とお出ましのお姿をみると、流石敦賀の花と呼ばれ、流行のモデルとならせらるゝ奥様だけあつて、目のさめるやう、パッチリした眼付と、肉附がよくつてスラリとしたお姿は、恰度夢二さん式の美人だ、差上た鴨が大變お氣に召して、是れから料理させて、夕飯を御一緒に致しませうと仰有る、私共も少し都合があるからと、お斷り申上ると、それぢや私の手製のシユクリームを一つと、進められて頂戴する、女學世界の「心の秘密」や、本郷座の雪子夫人なぞの御話で、大分長座して四時を打つたるに驚いて歸宅した、東京のお文さんから女の子が産れたと報せて來た、どれ着物をかへて是から鴨の料理に取かゝらう、雪は雨にかはつた。



白河の春

在天津　あづさ

○支那の正月、此國のならひとて、上は富貴權門の家より、下は埴生の小屋のいぶせき門にも、朱の紙の大きやかなるに、「前門發財」「出門見喜」其他祝意を表する古語等をかきて、年の暮ごとにはりかへ、さて三十日の夜となれば、過年と云ひて、つゝがなく年をこすを祝ひ、爆竹をあげ、酒をのみ、普通の家々にては、（ハヲチョーズ）とて、上皮は、うどん粉をねり、中に豚肉を入れ、我が國の、柏餅の如くなして、湯にて煮たるものを食し、此夜は、終夜寢ねず、其故を問へば此夜寢れば、死靈來るといひ居れり、いつの頃よりの迷信にやあらん、さて、明けて元日は、拜年々々とて、親戚知己朋友、互に行きかへど、我が國の如く、屠蘇よ、吸物よ、雜煮よと、來る人毎に、出ださゞる故、至極のんきなるさまなり。普通正月の食物として、暮より用意するは、まんぢう、（なつめの入りたるまんぢう）と、豚肉を種々調理する位なり。官衙より、商人に至るまで、短きは、五日、長きは半月以上も休みなりといふ殊に、意外なるは、汽車の運轉を中止する事なり、流石は老大國の名に、そむかざりけるよと、始めてこれを耳にしたる時は驚きぬ、二日に至りて漸く一回の運轉を開始するといふ。これは他國に類なき事なるべし。

○氷ひき　こは去年の一月中、わが實見したる事なりそは凍とぢたる白河に寒中毎夜氷を切りて、之れを程遠き氷室まで運搬するなるが、其さまなか〳〵に面白し。

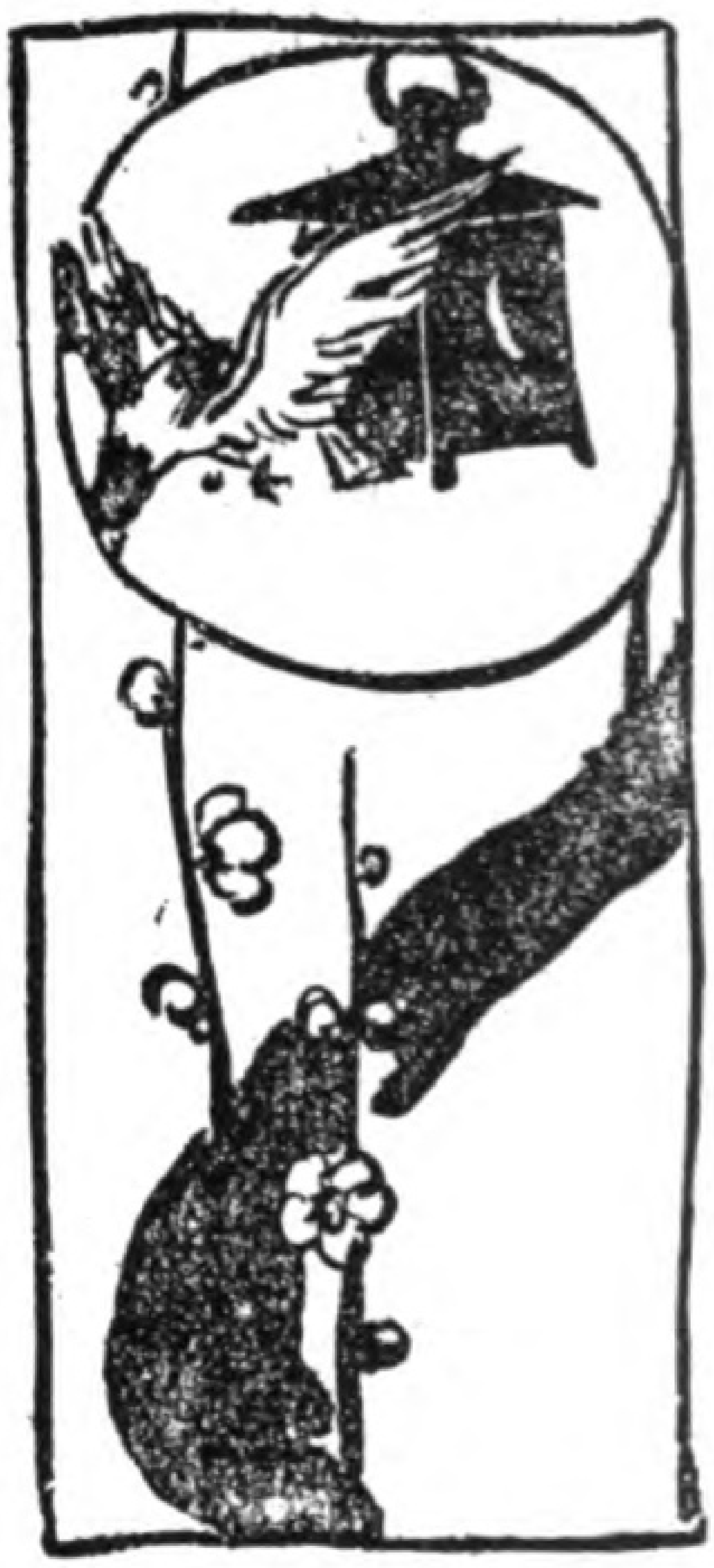
夜は十時過ぎ、或は十二時頃より曉に至るまで、我家の裏手にあたる小路を、荷車ひく如き音にて、始めのほどは耳につきて寢むられず、腹立たしさと、めづらしさとに窓よりみれば、氷をひくべき道には、前に水をまきて凍らせ置き、さて川にて切れる氷の、長さ凡そ三尺巾一尺厚さ一尺五寸（皆曲尺）位なるものを縄にて二つ或は三つと結びつなぎ、あらめの如き服つ

けたる支那人共が、あやしげなる聲ふりたてゝ凍れる道をすべらし行くなり。力のつよきものは一度に多くひきて、氷一個に付、二個銅錢を得るとか聞けり。

氣候少しく暖かき夜は、決して氷を取らず、かゝる夜の氷は、夏期までたもたざるが故なりとか。

○冬の白河　胡砂ふく風の一と度北漘の野をおとづれて、日ひと日、寒さまさりゆく霜月の末頃より、氷塊流れて、終に師走の十日前後、白河は結氷す。全く凍れりと見るや、から人は橇にて往來するもの多く、橇ひく人の、かなた、こなたに、客をまてるそが中に、人をのせたるは、まつしぐらに走りゆく早さ、雪の朝など、氷の上にいよいよ白く雪の積りて、例のはせ違ふ橇のゆきゝ、所謂大陸的の景色とやいふべき、實にも、白河は冬の名にこそあれ、冬こそ白河の名に負ひたれ、一夜春風の渡るあれば、春水一時に氷を解き、かくて白河の冬は、去るなりき。





人情科學

とし子

涙！

欠伸が誘ふ溜め涙、太陽樣の空涙、そんなものは扨措いて、腕と脛を楫に、浮世の波を漕いでゆく人間が、時といはず、日といはず、瞬くうちにも、事に觸れ、物に感じて、發表する心理狀態の數ある中に、これはまた見る目美くしい「雫」の形式を取つて、男といはず、女といはず、誰の目にも、誰が袖にも遠慮なく宿り、しかも一滴に千萬無量の意味を含むといふ涙、それを分析して見ることは定めて興味の深いこと、ある日公平な電流をかけて見た、結果は次の樣なものでした。何れ浮世の三面相、怒り、笑ひ、なみだ、のそのうちに女には最も分子の多い、涙は、實に左の成分から出來てゐるので御座います。

▲嬉し涙

○行けども〳〵山また山、辿れども〳〵野また野何處が果てとも知らぬ人世の夕、これも身を一杖一笠に傾けて、白雲流水そこはかとなくさまよう旅僧に會ひたる時。

○われから捨てゝ入りにし山里ならねば、浮世戀しの心は消えもやらず、さりとて、杣が木を伐る斧の音、里の媼が衣洗ふ溪の流れの響より珍らしきものもなき杉の庵を、何の氣まぐれぞ、ふるき友に門叩かれし時。

○故ありて暇をやりし亡母の乳母が、うき世の枠をめぐりめぐりて、なほ古への恩わすれもやらず、何よりの好物なる草餅充かお重に詰めて『孃樣、今日のは餡に、ちと鹽がかちましてなあ』と裏の枝折戸よりひそかにわが部屋に訪ね來し時。

○思ひきや、思ひがけなき驟雨に、小褄からぐるいとまもなく、許させたまへ暫し軒の蔭を拜借いたしますると心にこたへて佇む折柄、今迄鳴りし筑紫箏の爪音ハタとやみて、衣摺の音もしづかにあゆみ寄り「それはさぞお困り……そこではしぶきもかゝりませう、穢苦しけれど、澁茶一とつにお氣お安めなされては？、それともはづかしき破れ傘を、お髪の元結濡れぬ丈けの御用に立てませうか？」と知らぬ他生に情けの言葉かけられし時。

○背負ふわれはさほどでもなけれど、負はるゝ背の子はそもやいかばかりの寒さ、家内に居ても手洗の水が凍る霜の朝も活業なれば、休みもならず、昔しは人に羨まれし程、乳多かりし身もあはれきのふ今日は絞らねば出ぬかなしさ、それかあらぬかわが子のこめがみ窶れの見ゆるやうなど、それからそれへ、思ひ煩らひて納豆々々と呼ぶ聲さへも忘れ勝なるに、折柄とある路次口より「一寸おきぬさんおそかつたのね、今日はお客があるのですから餘計にもらひませう」といはれし時。

○過し日故郷の姉上よりの御文に「父上母上のなきわれ等、ことにそなたはまだ落つかぬ年弱なれば、定めし亡き人こひしの思に驅られて學問に身の入らぬ折もある可し、さり乍ら、そのやうなことにとは、ゆく末姉とも賴まれ妹ともたのむまじ、人は氣の持ち樣ひとつにて樂しうも悲しうもなるもの、よく／＼心して、そなた一人の成業を待つ姉あることを忘れたまふな、袴を新調なさるゝ由、度々兄樣に申上ぐるもお氣の毒なれば、常々ため置きし小遣の大分になりしがあり、そのうちをお送り申す可く候まゝおうけとりなされ、餘りたるは、足袋になりと靴下になりと見苦しからぬ樣なものゝ間におあはせなされ度候」とありしが世にかくもありがたき姉樣がおはすものにや、それを思へばとてもうか／＼しては居られずと夕日に彩る行雲を眺めて懷土望郷の情に咽ぶ折「高木さん書留が參りましたよ、あらお姉樣からですよまあ……」と置いてゆかれし文とりあげし時。

○粗忽とは云ひ乍ら、姫様あの様に御秘藏なされし此の九谷燒の花瓶、氣をきかして水とり替へんとせしばかりに、見る影もなく碎けて微塵、とてもお暇になるならば、潔うお詫申しあげてと、恐る恐る女中頭迄此由申せば『其のやうなお取次は眞平々々』と情なく斷られ今は絶體絶命、おもひ切つて涙片手に姫様にお詫申あぐれば、『まあ、きぬは氣が小さいねえ、花瓶ひとつと、人一人とどちらが尊といか考がへて御覧、それより今日はそなたに見せるものがある』と何やらうれし氣に、早や今の事は何處の風といふ様にもてなしたまふ御心の寛さ被りし時。



○お風呂召す間に火熨斗、あてゝおくと忘れたりとて、聞きやうもなきおしかり、それでもお年よられたお姑様なればとしひて笑顔にまぎらして只管詫る折柄、夫の君の何時歸りたまひけん、例の磊落に此室に入り來て、『おかあさん、今日は珍らしい人が社に尋ねて來ましてねえ……お母様に捧げて下さいつて何か土産をくれましたよハヽ、ハ、コラきぬあの包を持つて來て御覧』と事もなく場を外さして頂だきし時。

○人三倍、世話を燒かせし數へ子か、經つ年と共に大

人しうなりて、今は某家の若主人、しかも三拍子揃ふての敏腕家ときくうれしさまして、塵埃に反りかへりたき年頃になりても昔しの御教訓は今の實にも更へがたしと折々訪ひ來て、年老いしわらはをなぐさめ與るる時。

▲口惜し涙

○生れて初めて二十年の曉、封印といふ忌はしきもの家内の彼處此處に手當り次第貼り付けられてくちをしさ、數代榮えし暖簾は美事かくして傷けられぬと都の妹より言ひ越されし時。

○何の不足あつて此頃の父上が御振舞ひ、諫言するは易けれど、「親」と云ふ字に妨げられ、姑息なれど「愛」といふ絆にはやる心引きとめられ、後に〳〵とおもひ延ばし〻間に、何事ぞ、家は破產のかなしみに加へて母上はなすとも知れぬ御身の病らひ、もうかくなりし上はと、覺束なくたどりゆきし怪性の家漸々たづねあてゝきけば、現在父上のお履物、自堕落に伏せし、あげ板の隙より見ゆるものを、しら切つて、煙草吹かして玄關拂におはせられし時。

○「オット危險いそこは溝だよ」といはるゝまゝに、「それは御親切なと」杖をさきにやりて片足高う飛ばんとすればワーッと鯨波の聲あげて笑はれたり、眼暗なる身の誰れを怨みむよしもなけれど、おもへば闇の因果にうまれしかなしさには、此の先とても、幾度この樣な目に遭はさるゝことぞとおもひ限りし時。

○今も今故郷の野邊にすみれ摘むあたゝかき夜半の夢を劈きて「キヨシキトクスグカヘレ」の電報。今は萬事休せりと身ひとつを汽車に縋りて只管道を急げど、かゝる折は翼ありとも、もどかしきもの、とかくして吾が家に近くなれど胸の動悸のいや高きに、もしや〳〵と、敷居の外に立てば、パッと鼻を撲つ香の煙り、折しも我が聲に轉ぶやうに迎へたまひし姉上の「まぬさん、ひとあしおくれで……」あとは涙のうつぶしたまひしとき。

○など女子とはかく泣に執念きものぞ、卒業の席順がちがひしばかりがあゝも口惜しきものか、美くしかる

可き今日のまとゐに、何事ぞ列座の中に眞綿で首締むるあの毒口、いはれたりとて、なに一とつ顧りみるやうなことはなけれど、わが身故に何も知りまさぬ夫の君の御名にも關はるやうなことのありてはと、早速に言ひ破らん三寸の舌はあり乍ら、煮へかへる思を堪えて「そんなこともありましたつけねえ」と體よく其場を紛らせし時。

△感慨の涙

○二十年を異鄕に過ぎて、今日來れば昔しありし吾が家は何時か建て替へられて、黒かりし藏の壁も眞白に塗られ、葉分けにもるゝ月を見て「お月さまいくつ」とうたひし籔も今は影もなく伐られたるぞ口惜しき、時正に秋の暮つがた、入日の名殘りを惜みつゝ、匆忙極まりなき人生の今昔をしのびて佇むともしらず「ハイ退けてくらつせえよ」と心なき爺の駒引きわたる、見れば何時ぞやの夏、小魚掬ふとて誤つて川に水のみしとき救ふてくれし六や爺なり「あれ六さんぢやないか」といへば「アン？わしが名をよばつしやるは、ヤア？お衣さまつてか？、それ〳〵、そねいやまんだ眉のしたにほくろがあらつしやるげえ」と、やがて導かれて此里名物の鮎ふるまはれ、まだ健かなりし爺と婆とに一と夜まどろみもせでかたりあかせし時。



○ともかくも學の業卒へてあすは散る花の朧夜、幾年なれにし姉妹と一堂に會してかたみに抱負をかたりし時は、誰が眼にも前途の光明のみが輝き

しものを。人は知らず、わが身ひとつは秋風にさそはれて、こゝ須磨のかたほとり、浦ふく風にしたしむ可き運命となりぬ。人寢しづまりし三更、殘んの燈幽かなるをかゝげて、來しかたゆく末をつら〳〵追想すれば、希望は凡て泡沫夢幻、生きんとも願はず、死なんともおもはず、されば怨みなく、そねみなく、樂しみもなし、とてもうき世の苦樂、しらで去らんを幸とあきらめてせめて、千どりなく渚にありしむかしをかたらむかなと思ひさだめし時。

○嘗て吾が最初の知己なる友のわれ知らぬ間に此の世を去りたまひしを後に聞きて悔みせんとおもひしとき。

○肉やぶれ、骨あらはなる疊、障子の隙もれて身を刺す北風を、僅かに屏風一と重に遮り、四ッ一錢の西京燒をこよなき佳肴珍味と舌鼓うつかゝる境に、かゝる不遇に生立ちし身が今宵埋まらむばかりなる夜の具うち被きて、やすらかに暖かき夢結ぶを得るに至りたる時。

○われこそかうして堅氣な髷に、九重繻子の襟かけて店の番頭、中僧、小僧を小指のさきに掛引する身なれ今は世に亡き母さんといふ人の身上話ちらと乳母が水仕の暇にきけば、三筋の糸に浮世の義理と意地とを締めて、ゆく春の寂しさにも、ちる秋のかなしさにも、溜息もらす暇もなき全盛のおつまと名のる人なりしとか……それを現在の男さんが……えゝ物好な、當時三つのわれに店の暖簾をわけて、そのまゝ貰ひし三河屋の名跡。

不動さまへ參詣のかへさ、ふと足がむきて何氣なく袂とめし、こゝ柳ばしのほとり、春とは名のみ河風のつめたさも、しばしわすれて佇む時。

○短か夜のあくるにはまだすこし早き蚊帳のうちに、ほの見ゆる歌反古はりし衝立の文字ながめやる時。

（次號完結）

造花流行の新機運

愛花女史

△天然と造花

柿本人丸が歌を詠むのも、應擧が繪を畫くのも、皆天然を文字なり形態なりに發すに過ぎないのでありまして、之れが床屋の彌次六の腰折や、看板屋のこて塗繪と撰を異にするのは、畢竟天然を害せずに拵ゆるからでありませう。造花の道も同樣で、自然を離れては丁度杖なき座頭か、佛陀を忘れた法主の讀經、見え坊とか、體裁とかに何麼に凝らしても、此の精神が飛んでをつたならば、造花の本統の妙味は出やう筈がない。造花するのは唯機械的に布を切り、染色をなし、紙を卷き、針金をいじくるのが仕事ではない、天然を研究する一個の學者の態度でして欲しい、植物が日光を受ける、狀態はどう、季節に由てどんなに色合が變化するか、葉と枝との關係、花の位置、節と節との間隔、枝葉の變態など注意して拵へたら、造花の趣味も一際增す譯です。

△造花と科學

造花は一の科學の應用でありまして、即ち染色は幾等か化學の心得なくては出來ない、殊に植物學を離れては迚も完全な歩行は覺束なくあります。尤も好い造花教師に就いて學んだならば或はいゝ腕になれないこともないでせうが、自ら研究を積で先人の未だ發見しない所を發明改良して行くには到底駄目です、職人の拵へてゐる造花は年來の熟練と、賣物と云ふ目的から皆手奇麗に出來てをりますけれども、悲い哉學問上の頭がない爲に細に視ると笑止なものが多い、これは、まア、これでおいて、何々學校の展覽會など云ふ公式の場所にも、隨分如何はしき物を、左も麗々しく飾つてすましてをるのを見て、之れはと思ふことがあります。今日は昔とは違つて植物學上の智識が一般に普及され且草木を實見する機會が多くなりましたから、う

つかりしたものを拵へると皆さんに笑はれる、皆さんも乾度こんなものに出會つて、あら變だわ、と仰遊ばしたことがありませう。實際造花はまだ〳〵成人になりきりません、たとへ植物學では、かうだと知つてはゐても却々實地應用する迄には氣が廻はらないものです。例ば八重と一重に同様な裝を飾めるとか、紫陽花の蕚を、瓣だと思つてをるとか、或は白薔薇の莖を「マゲンダ」にて彩色るとか、知つてゐることが、場合が違うと全くいけない、尤も同種の花物でも、いろ〳〵の形態をしてをつて或一ツを見て一知半解に何々はどうだと斷定してしまうのは甚だ險吞の至りで、かめりやを見た或る兩人の昔話もありますが、實際七變化を見て、赤だ紫だと諍ふこともないとも限らない、併し消極的にてんから研究心のないのに比すれば寧ろ大變好いのです、皆さんは幸福に科學間上の智識がおあり遊ばすから、科學の實地研究だと思つて造花を遊ばして欲しいものです。

△造花と趣味の過渡時代

今日日本人の趣味は過渡時代に在ります、西洋式文化の御蔭を被つて大分變遷して參りました、つい數十年前迄は繪は繪、實物は實物と云ふ風に區別して考へ、唯寓意等に重をおいて全く別物取扱をしてゐましたが今日は全く寫生の世の中、小説に於ても御覽遊ばせ古へは勸善懲惡等一種の道德上の考から割出して紋切形の因果應報の事實を並立てゝゐましたが、今日では寫實小説てふものが流行してゐるではありませんか、造花の運命も矢張同一で在來の造花は葬式花見たやうな、きまつたものばかり作られてをつたのが、今日は實物模造の新時代を迎へたのでございます。それならば此動機を與へた西洋の趣味はどうであるか次に述べませう。

△日本人と西洋人の趣味

日本人の趣味殊に日本婦人の趣味は優麗温雅とでも申しませうか、其の影響は總ての事物に發はれ、爲すもの作るもの皆左様でないものはない、西洋人はこれ

と反對に寧ろ活潑の方で、之を花に例ふれば日本人は梅海棠に似て、西洋人は日向葵のやうなものであります、それで互に賞美する處も自づと異つて日本では梅萩のやうな淡白したものがもてはやされ、西洋では薔薇遊蝶花の様な濃厚な色合のものが珍重せられます、那體西洋人は極めて露骨なもので、文章書くにも一言片句の中に無量の意味を持たせることはせない、正直に長たらしく手落なく述べる。繪を畫くにも圓に直徑を引通して、圓周に一寸一點を打ちて、鍋蓋にて鼠を押へたところといふやうな風流な書き方はせずに、濃淡度合に注意して密に畫くのが其の特徴であります。西洋人の趣味は甚だ正確である、日本人の趣味は頗る妙味に富んでゐる。尤も頭には嘔吐するやうな派手やかな花帽に首には猛獣の毛皮を巻いて駝鳥のやうに足を宙にして歩むのを學ぶことは些と疑問でムいますがはにかんでばつかりゐて、思つた半分も人中に出て發表が出來んといふ有様では、これ亦甚不都合な次第であります。兎に角西洋の趣味の確實にあるとは、造花の上にて採用して、在來の風致ある心を融合調和して、益々光を増すやうに努めなければなりません。次に此の西洋の趣味は那邊から來たかといふ原因を述べませう。

△造花の將來

右に述べました西洋人氣質はどうして養成せられたか、是れは畢竟社交上の必要に淵源するものでせうと想ひます。從來の日本婦人のやうに深窓の下に成育ものならば、さう露骨に十二分に、派手々々しくはねまはる必要もありますまいけれど、彼等の國では久しい前から社會家庭の風が社交といふことに重を置き、皆人相當の喋舌をせねば人中に巾が利かなかつた、其場合顔を赤くして小聲で床の下より話すやうに言つても皆に通らう筈がない、又日常接せない人若くは多人數に向つて簡單な表示によつて、自分の考を充分徹底せしめようとするには之れ又甚だ覺束ない話、夫故に何事でも極く正確に明に發はすといふことになつたで

せうと想ひ升。御覧なさい、日本の現今は随分社交的になつて來ましたから、目に映ずるもの總て人目に付き易いものに變つて參つた、例へば裾模様のやうなもの、花簪のやうなもの、其他總てさうでありませんか、是れあながち虚榮でも、洒落でもない、世の中の事情が迫つてせしむるのであります。造花は此の點に於て最も人目を曳く一つでありまして、即ち交際社會の要具たる素質を完全に具備してゐるのでありま す、そして此點に於ては却て自然の花よりも重寶なところがありますから一入もてる譯でありまして、將來斯道の發展は益々豫想されるのであります。

△在來の造花の缺點

天然に追付かんとするのでありますから、永久缺點は無くなることはない、併し幾等かづゝ少くなりつゝあることは事實であります、在來の造花の最も非道い缺點は葉の色合と、枝組でありませう、通常造花は花を中心にして造るといふ一種の偏見から起つたものでありませうが、花の方には皆精を入れますけれども、葉と枝とは割合に顧みない癖がある、是れ大變な考違ひで枝振を規則正しく組んで初めていゝ枝振が出來、從つて花もあがる譯です、之等に甲乙をつけるといふ考は實に根本から誤つてゐるものでありまして、私の御望み致す所はこんな根本の謬見を改めることなんです。

以上は只例の一と端を示したに過ぎません。又爰に此等に就て詳しく申上げる餘白もありませんから略しますが、是等の點に就て深く研究したければ近々博文館より發行する弊著家庭實用新式造花術に就て御覧遊ばせ、要するに造花の道程入り易いものはない、お小さい方にも夫相應に出來ます、又嚴密に考ゆれば、之れ程六ケ敷いものはない、併しどうせ天然の模造、嚴く言へば他人の眼を瞞着する方法でありますから、顯微鏡的に微細に出來てゐる天然のものには迚も叶はない、併し亦人間の知惠も端ないものでありますから、研究してたはまねば進歩も亦無限で御座います。

汐干



小さな誇り

せゝらぎ女

今朝、森さんからのおハガキを見て、はじめて思ひ出した。今日は午後一時から、森さんのお宅で、懇談會がある筈。先月の末にお目にかゝッた時、是非入らして下さいと仰つしやつたので、都合がよかつたらお邪魔に參りませうと、わざと曖昧な返事をしながらも、心の中では喜んで居たのに、あんまり時日が經つたものだから、スッカリ忘れてしまつてゐた。

おハガキには、招待の文句を眞面目に記して、終りのところに「是非々々早くから入らして頂戴、そしてお得意の爽やかな辯舌で、何か面白いお話をして、會を賑はせて頂戴な、お願ひよ!」と書いてある。斯う言はれて見ると、まんざら惡い氣もしない。何のお話をしようか知ら?と、今朝からひそかに考へて見た。でも、どんなお方が入らッしやるのだらう? 森さんのお話では、私たちの學校のお方が主で、それから他の學校のお方が二十人ほど、都合五十人ばかりだとのこと。まあ安田さんに松本さんを筆頭にして、私の學校からは三年と四年とのお方が入らッしやるに違ひない。他の學校と言つても、森さんの御懇意なお方ばかりだらうから、さう驚くほどのこともあるまい。これまで、どんな會へ出ても、私はまだ一度もひけを取つたことはないのだから、今度の懇談會位には、たとへどんな交際家が入らッしやらうとも、恐れるほどのことはない。

尤も、毎日顔を見て居るものばかりでは、話の種だつてきまつて居るし、お得意の藝だつて大抵分つて居るのだから、なるべく知らないお方が澤山入らして、思ひもよらぬことで、驚かされて見たいわ。そしたら私も、お話に張合ひがあるし、交際ぶりにも隨分腕の揮ひ甲斐があつて、面白からうと思ふわ。その代り、もしさうだッたら、いつものやうな輕々しい眞似なんかせず、はじめは大人しく、全く朴念仁らしう見せか

けておいて、いざと言ふ場合に、アッと目を見張らさせる位に、眞實の私といふものを發揮したいわ。自稱交際家の松本さんなどの顏色はどんなだらう！

机に靠りかゝッたまゝ、森さんのハガキを眼の前において、取りとめもなく、こんなことを想像して居る中に、はや十二時も過ぎた。

そろ／＼お支度をせねばなるまいと、何だか心が急ぐ。けれども、あんまり早く行つて、皆さんに飽きられるのも氣が利かないから、なるべく遲く、さん／＼皆さんを待たせて、もう今日は來ないのだらう位に思つて居る矢先へ、しづ／＼と案内を乞はう。すると、





森さんが第一に玄關へ馳けていらして、「まア遲いぢやありませんか、どうなすッたの？でも宜かつた、ホントに心配して待つたのよ。」と、忙しさうに會場へ導いて下さるだらう。その一刹那會場の皆様の視線は、言ひ合したやうに、私の一身に集まるに違ひない。而も私は、悠々と迫らない態度で、しほらしく隅の方の席に着かう。……自分では、わざと皆さまの目を避るかのやうに！

それにしても、早く行つて見たくて、氣が急かれて仕方がない。正一時開會といふのだから、一時半頃には家を出なければなるまい。いくら俥を急がせても、小石川の森さんのお宅までだと、行くのに一時間はかかる。お支度に一時間、途中に一時間、先方へ着くの

が、かれこれ三時。ちやうど宜いわ。

頭髮はお下げに、思ひ切つて巾の廣い薄色リボンを二ツ、ちやうどハンケチでも、結はひつけたやうに掛ける。而して、平素とは違ふから、心もち白粉をつけて、頰のあたりに薄化粧をする。着物は紋お召の二枚がさね、紀念式にこしらへた鹽瀨の袴をキリ、と穿く。斯うキチンと身じまひをして、姿見の前に立つと、自分ながら、今日はよく似合つたらしい姿になつたと、うつとりする。これで花々しく押し出したら、さぞ會に光彩を添へることだらう。

さて、森さんのお宅に着くと、私が思つた通り、シヤリシヤリと敷砂を踏む靴音を聞きつけて、第一に出ていらしたのが森さん、それから岡野さん、村上さん、安田さんなど、五六人揃ふて玄關に出迎へながら、

『あゝ嬉しい！　ほんとに待つたことよ。』

と、何れも笑顏で交る〱私の手を握りしめ、下にも置かぬもてなし方。斯うだらうとは思つてゐたもの〻、私は嬉しさが胸に迫るのを覺えた。

『ズツド前の方へ入らツしやいよ、さア、そんな所おやアいけないわ。前へ入らツしやい！』と、しきりに皆さんが薦めて下さるのを、どこまでも辭退して、遠慮がましう右手のカーテンの陰に席を占める。あちらからも、此方からも、チヨイ〱私の姿を偸むやうに見てゐらツしやるお方があるので、私はわざと素知らぬ風をしてチンとすましてゐた。

ちやうど、園部さんのお話最中だツたけれども、皆さんは、お話なんか聞くよりは、この新來の客を見るのに忙しいといふ有樣で、またしても此方を振り向き勝ち。知ツて居るお方は、ニツコリと笑顏を見せて、目禮をなさる。森さんと安田さんとは、わざ〱私の傍に席を移して、會の經過を小聲で報告して下さる。私は、あんまり四方八方から目禮されたり、話しかけられたりするので、何が何だか分らず、たゞ無意識に會場の樣子を見渡す。思つたほどの盛會ではなく、會員は凡そ三十人ばかり、大したことでも無さ〻うなので、私は聊か張り合ひがなかつた。

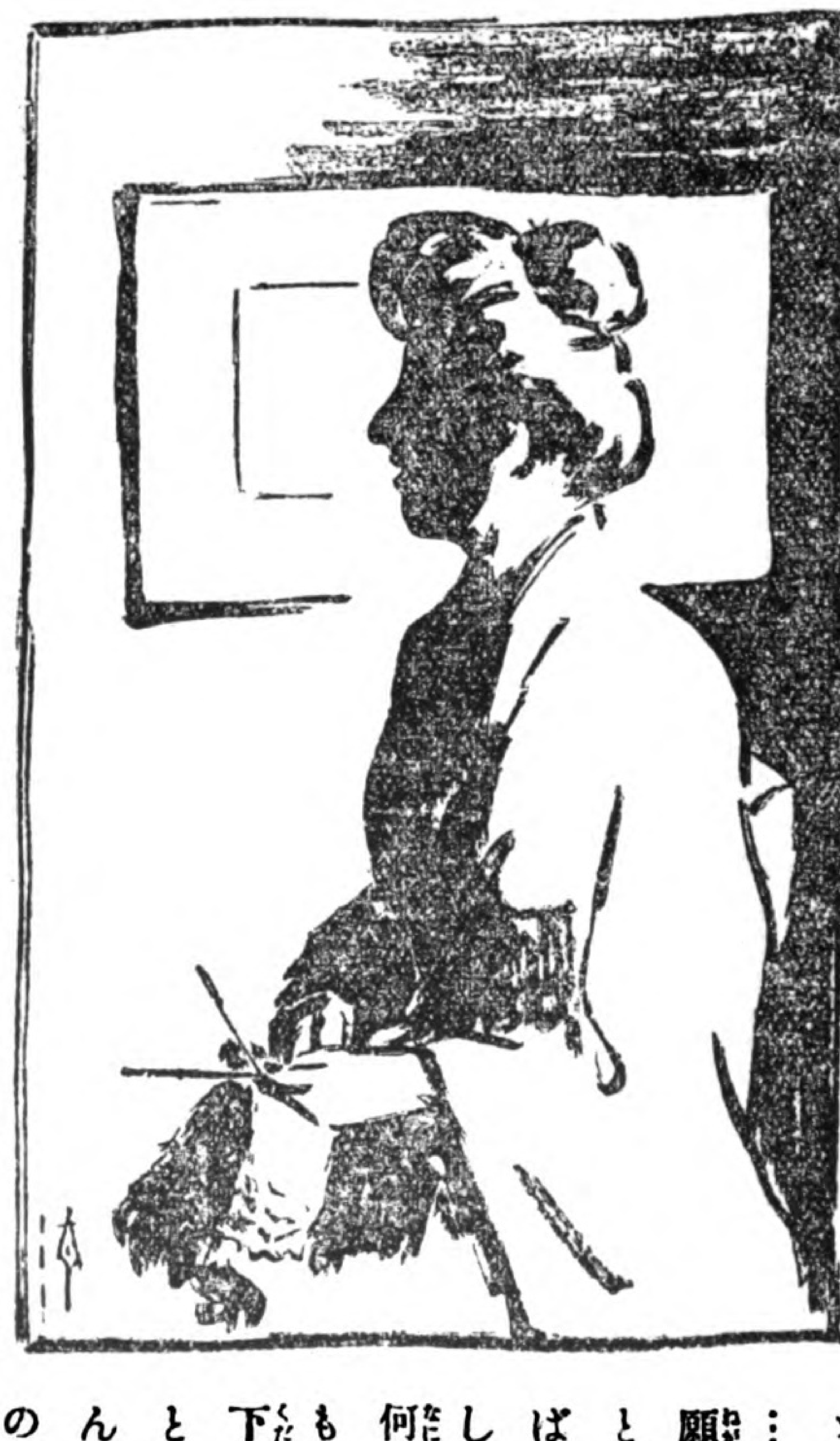
やがて園部さんのお話が、拍手の裡に終ると、今度は私に何か話をしてくれと、森さんが強つてお頼みになる。でも私は、今日は叔母の家へ行つてゐたので、來るのがおそくなつた位だから、何の準備もして參りませんでしたと、好い加減なことを言つて、體よく斷つた。が、森さんは、なか〳〵承知なさらない。

『何と言つたつて駄目よ、あなたがお話をして下さるツて、もう皆さんが待つてゐらツしやるんですもの。ね、好いでせう、何かして頂戴な。』

『だツて私、今日はホントにそんなつもりで參つたんぢや無いんですもの。』

『あら、あんなことを。ハガキでよくお願ひ申しておいたでせう。あなたのことですもの、準備なんかなくツても大丈夫よ。……さ、どうぞお願ひ申します。』

と、もの〻十分間ばかりも押問答をした上、それでは何か考へますからもう少し後にして下さい、といふことにして、芳子さんと久美子さんとのお琴がはじまる



私は、あくまでも物靜かに、自分で考へると可笑しい位、上品に姬樣然と控へて居つた。

「八千代獅子」が濟むと、いよ〳〵私の番だといふの

で、森さん、安田さん、松本さんなどから、手厳しい催促を受ける。それでも私は、まだ外見を裝つて、どこまでも「出來ません、出來ません。」と言ひ張る、併し、お話をするといふことは、もう兼て心得ても居たし、また自分からも望むところなので、今朝、ローラン夫人の傳記を、三度までも讀み返して、チャアンと用意はして居た。思へば、森さんに對して、氣の毒なほどのだれやう！　自分ながら濟まないと思はぬでもなかッた。

さん〴〵森さんに氣を揉ませた後、「それでは、つまらないお話ですけれども……。」と起ち上つて、「革命婦人ローラン」のお話を、熱誠こめた口調で述べ立てた。聽衆は、水を打つたやうに鎭まり切つて、私の口から出る一言一句も漏らさじと、熱心に耳を傾けて居る。私は得意になつて、三十分間以上も話しつゞけ、拍手喝采の響きとゝもに演壇を下りた。その時の愉快さ、得意さ、思ひ出しても誇りの色が頰にあらはれる。

お話を終つて、もとの席に復すると、また皆さんに四方から取り卷かれて、まるで私は會場の花のやう！　御交際を願ひますと言つて、わざ〳〵席を離れて私の傍へ入らしたお方も、十人以上はあつた。はじめて會つたのだから、一々お名前は覺えてゐないけれども、たしか學習院のお方もあッた、跡見のお方もあッた、會場第一のハイカラと思はれる川上さんは、女子學院のお方だと、自分から言つてゐらした。私は、それこそ何も知らないものゝやうに裝つて、こちらから求めて口を利くやうなことは、つゆほどもしなかッたけれども、斯ういふ風に皆さんから立てられて、鄭重に取り扱はれると、何だか言ふに言はれぬ氣持ちがした。會の終るのを待たずに、「今日は急ぎますから」と言つて、皆さんが總立ちになつて引き留められるのを振り切り、待たせておいた俥に乘つて、玄關を出た時には、何ものにか勝ち誇つたといふ感じが、私の胸に充ち滿ちてゐた。

けれども、歸つてから靜かに考へると、何とはなしに、森さんに濟まぬことをしたやうに思はれて、お氣の毒で仕方がない。これは、私の小さな誇りと、心の奥にひそむ謙讓との闘ひなのかも知れません。



勤倹の秘訣

上田いく子

山里も近頃は大分都の風が吹き込んで一寸出るにも秩父の羽織位は着るといふ風に成つて參りました。

しかし我家はなほ平生は木綿で足るとして居ります、仕立屋もこの頃はちよい〱出來ましたが衣服の仕立を外に出したといふことは嘗て一度もありません。宅で縫ひますと綿入などは古い綿をもつぱらとして丁寧に入れて置きますが外に出しますと、そんな手間な事はしてくれませんから、つい新らしい綿を添へればならぬ、添へた、その殘りは歸つて來ぬといふ風に經費が幾ら、ちがふか知れません。

それに自分で織つて自分で仕立て上げて着る衣は都の人の錦の衣にも勝る氣がして誠に其何ともいへぬ心地よさ、ですから仕立てます時にも、きしめ〱には必ず當て布をあて且後日縫ひなほしの時を思ふて十分念を入れて置きますから保存の點に於ても大變な差があります。

元來私は常々母より廢物利用といふことを耳いたい程聞かされて衣服や其他によらず解きらのないたします時はなるべく糸を長く引きまして皆揃へ置き後日縫ふ時強味のいらぬ處へ再び使ひます。そして其節五寸より短い糸は別に貯へなり と取つて置き夜分などひま〱につぎ合せ置き、たまればヘタに掛けるのです、私が只今着て居る衣も敷いて居る座ぶとんも皆かうして溜つた糸くずを織つたものです。

次に手拭の古いのやシャツの地薄くなつて用に立たぬ布は雑布の格好にして常に針さしの上にのせ置き縫ひものをして針に糸の殘つた節度手がるに、ぬひつけて置きますと知らず〱の中に雑布がさせて居ます。

障子をはりかへ、その古い紙も決してむだにしません、手がるにはしなとじて置いて内ら同志の一寸した手紙は大抵これですませて置きます。

しかしいくら金錢や物品の儉約をしましても時間の儉約といふことを知られば眞の儉約とは申されますまい、ですから何によらず出し入れになるべく手數のかゝらぬ樣に心掛けて居ります。

例へば古布の樣な物でもかすり類、しま類、白無地類といふ風に半端より紐布類まで、分類してそのたとがみに一々明記してしまつて置きますから、さあ何々にする布がほしいと思へば、そのたゝ紙さへ出せばどんな布でもあるといふ風にし又厨の方もこの通り入れ處置き場所を一定して置きますからくらがりでも取つて參る事が出來ます。

それと共に又一方に物品を大切に扱ふといふことがかんじんだらう

と思ひます、さうでなければ折角の倹約も、臺なしに成つてしまひます。

例へば庖丁類でも使用後は直に洗つて、よく乾し置き、うすなべで物を煮た時は、すぐお鉢か何かに移しかへ煮物を入れたまゝ幾日も置くといふことのない様に、いさゝかのことにまで目をつけ氣を配つて置きますと長の年月どれほどちがふか知れません。

次に食物につきましては野菜は裏の畑に餘るほど有、魚は門前の川でとれますから家内中が食べる位は澤山ですし又果實は裏の空地にいろいろの木を植ゑてありますから秋は澤山みのり、又御佛に捧げ床に生ける草花なども皆裏に植ゑてありますからすべてこれらにお銭を出した事はなく大抵の場合方々への進物らもこれ等ですませて置きます。

扨又身の廻りにつきましても母のつゞましい風がしみ込んで居りますから奢りといふほどの事はありませんが競爭心を出してハンカチの様なものまで變つたのが持度くて月々兩親より頂く小使ひ銭はいつも不足勝でしたがふと、かゝる夢さめてよりは、一さいリボン貯止といふ様な無くても足る品は買はぬ事に決心して居ます。

最初しばらくは誠に辛い事に思ひましたが只今では以前辛く思つた事が却つて不思議に思ふ様に成りました。

先日も小間物屋が參りましていろ〳〵と變つた品を見せ、とや角言葉巧に勧めますものですからつい、「これ一ッ位」とかあれは餘り珍らしいからなどゝ、すんでの事で決心を崩さうといたしましたがイヤ〳〵と思ひ反して「今日あのリボン一ッ買つたと思つて」と隣の嫂さんに施してやりましたら其のよろこびといつたらありませんでした。（二等）

三文の徳

美登利

早起は、三文の得と昔から申升が宅等の様に主人が時間を定めて出勤するではなし、小さい子供の多い、家は寒いのに下女を早く起し、彼處此處へランプを點たり、火を起したり致すのは、反つて不經濟に存じ升夫ゆゑ朝は當時で六時位、仲働が雨戸を明け、手水を運ひ、はたきをかける頃。御飯焚が臺所を啓け顔を洗ひ、焚付る時分、明るく成る様に起します。

一　ボール箱、古はがき、かまぼこ板は焚付に宜しう御座い升、庭の落葉や枯枝も干して焚付に成り升。

一　家族の衣服も數を定めて置くのが至極宜しう御座い升、常着が何枚着替へが何枚と定めて、段々下して不足を新調して參り升、無暗に數を増すと取扱ひが粗略になり、手入も自然行屆かなく成ります。

一　子供のメリンスの衣服も、當節のは直き色が剝脱升から三度目は上着に成兼ます、胴着や下着にも致し升が、自分の羽織の裏や襦袢の袖を新調致さうと思ふ時、夫をはお合せ下前の綺麗な處を、入つ口に出す様に致し升と、輕くて却々よろしう御座い升、而して其金子を子供の衣服料に廻します。

一 洗濯日を定め升と時と金の經濟に成り升、每日少しづゝ洗濯物を出し升と、下女も折角仕立物を致しかけて、立れば成らずお湯も每日餘分に沸騰す樣に成り升、夫より一週間に、一日を定めて月曜日大釜に一ぱい、お湯を沸騰し灰汁を出し一同にて致させます。

一 子供に絹入の胴着を着せるより、イメリヤスネル襦袢を二枚着せますと、一枚は中襦袢一枚は着丈と同じ、裁縫も洗濯も樂で、更紗に致して裏と綿が入りますが、イメリヤスネルは、更紗と同じ直段で單衣でも暖で御座い升。

一 足袋つぎやほころび縫は下女にさせない方が能い樣に存じます、運座仕事は誰しも厭でつい居眠りも出るもので御座い升から、夫は自分でした方が堅固と爲も善し、下女にはまとまつた衣服を縫せた方が都合が出來て勉强致し升。

一 勝手元や物置は、時々見廻り、炭の殘れや野菜の遣ひ殘しを注意して、無駄の無い樣に心掛升。

總て主婦は心身共にまめ〳〵敷働かれば成ません、不精に致すと萬事に無益な費が出ます、殊に自分を節して、家族の滿足をはかり、人の喜びを我家の喜びとする樣でなければなりませぬ。(二等)

貯金箱の利用法

岡山 久子

私共の樣に每月きまつた月給を頂いて日々生活して參ります者は、萬事質素を旨と致して勤儉の上にも勤儉をして行かなければなりませんから、皆樣方の樣に時の流行を追ひ遲し物見遊山などゝ氣儘にやつて面白をかしく日を送くるなどは夢にも出來ない事で御座います。私共の家では、高さ一寸五分長さ八寸位幅五寸位の白木の箱を作りまして、其の中を從橫に割りますと、四角な處がいくつも出來ますでせう。其の四角に出來た箱に日常使用致します米代を始め薪炭油代、八百物代、お肴代(牛肉)、お酒醬油代、牛乳代、新聞代、其他お家賃、交際費、下女給金、お小遣、雜費(お子樣のお有の處は筆墨代)として一ヶ月又は半月分を見積つて箱の中に入れて置きます。さうして一々一寸見てわかり易い樣お米代八百物代と上の方でも橫の方でも見える處へ、名を書いて置きます。右の樣に致しまして每日青物買ひました時には八百屋の處からお金出して拂ひ、肴買ひましたならばお肴屋としてある處から出して拂ひまして、外の分には手を付けません。こんな工合に致しまして日々暮して參りますと、自然不用な費ひもなく、月末になつてから一々仕拂ひの面倒もなく、呑氣にして居られます。そして月末になつてから一錢でも二錢でも殘りましたならば皆一緒に取り集めて貯金するので御座

います。

若しも月末になつてから八百屋とかお肴屋とかゞ不足致しました場合には、前から貯金して置きました分から引き出して補ふ樣にして居ります。中に始めの内は思ふ通りに參りませんで困りましたけれども、經濟と云ふ事をいつも心に思ひまして注意して行きますと、さほど六ケ敷いものでも御座いません。此樣な風にして日々暮して參りますと、お餘ひには面白味が出て、先月はいくら餘つたから今月は今少し餘したいなどゝ思ひまして、不用な處へは全く使はぬ樣になります。來客の時でも料理屋からなど取り寄せずに、皆手製料理で出す事に致して居ります。又お友達など入らつしやいました時でも、いやに上品振つた上等のお菓子など出すよりも、珈琲にお蜜柑位、又は澁茶に駄菓子でも出して、お腹一杯呑んだり食べたりして愉快に面白く遊ぶと云ふ風に致して居ります。どんなお人でも人情として立派なお馳走出したり、お茶菓子出したりするのが體裁もよくつて好む處でせうけれども、其樣事して虚榮をはつても、誠に無益な事で、却つて月末になつてから、今月は何圓不足しましたから濟ませんけれども出して下さいなど申て主人にせまる樣では、折角經濟を重じて作つた白木の箱は何んの役にも立たん樣になりますから、其樣事のない樣にくれ〴〵注意して居るので御座います。それから人間は衣服と云ふものがありまして、食べる計りでは世の中は渡れません。それで私共では左に申上ぐる通りにして衣服を作る事に致して居ります。宅の主人は會社の方へ出て居りますので、每年六月と二月に賞與を頂く事になつて居りますから、六月頂いた時には夏物洋服衣服、二月頂いた時には春着を作ると云ふ風に致して居ります。此の時こそは時の流行ものなどと思つて呉服屋一杯見て歩るきます。日常用ふる化粧品や館お香料の類とか、袖、下駄などゝいふものは、每月頂くお小遣ひから買ふ事に致して居ります。（三等）

拔髮の用法

野菊

一體婦人の髮と申しますものは、頭にある間こそ實に立派なもので御座いますが、之れに反してぬけた髮がわづか一筋でも散亂して居るほどきたない事は御座いません。私はどうした故か誠に髮毛がよくぬける性で御座いまして、殊に秋などゝ來ると其れは〳〵悲しく成るほどぬけるので御座います。一筋でも多くあつてほしいものが、かうムザ〳〵拔るのですもの、いくら拔髮がきたないからつてやたらにすてるのも何だか惜しい樣な氣が致しますので、遂に之れを箱の中にためておく事に致しました。扨十日ほど經ちました時ソット箱を出して見ましたら、マアどうでせう、私は泣きたい樣に澤山ありました、そこでぬるま湯に極めて少量の硼砂抹を溶かし一寸ヌル〳〵する位にしてさつと洗ひました乾いた時は實にサラ〳〵として、氣持のいゝ根があれば再び頭に植みつけたい樣なのになりました。扨之を日曜日などの暇をひさしに骨を折る時

その氣持めいゝ自分の拔毛で以てすき櫛にはめてすいて使ふたので、御座います。ほんとに心持がよう御座います。そして又大切に用ゐます。衞生にもいゝと存じます。月に拔毛代五錢要るものとすれば、二錢五厘ですみます。些細な事ながらおそれ多き　天上の大御心の萬分の一つにも適ふ事かと存じます。（三等）

廢物利用

登利

只今私共では木綿着物で澤山でございますから古くなれば又古物で色々用ゐて居りますそれで大人の古物を繼合して　帶の敷布にします子供がありますと、どうしてもかけがひが要りますから二三枚も作つておきますれば古物でもなか〳〵長くつかはれます　又四角に繼合しますれば大風呂敷が出來まして引越しなどには大變便利でございます又おさんも何も一人でやる私共には古物で前掛の長着を作り　水仕事をする時着ますれば衣類はいたまず、汚れる事は少ないし運動するにもしやすく重寶でございます。夫から前商人の拂ひは　悉く現金でいたしますから晦日でもいそがしいなど云ふ事はなく　それに品物もよくて安い樣です今一つ皆樣がけちとお笑ひなさるか知らぬが　私は魚を買ひましても決して魚屋に拵はせません頭も腹のものも　骨取り捨てるではありませんか頭とてもなか〳〵馬鹿になりません　殊にむつの目の玉などは格別に節約でございます鯛の頭でも十と二十もあれば　それはいゝ煮出になりましてそれに豆腐やねぎを入れますれば、立派なおいしいお汁が出來ます又腹の子や腸や腑など一々取りて洗ふて味噌とお醬油で煮付ますれば其の汁では野菜でも煮られおいしく頂かれて　捨てる所ではございませんそれから夏分になりますと蚊に　困りますが一々蚊やり香を買へば夏中には容易でありませんから蜜柑や柚子の皮を取つておいて　其の時蚊いぶせにしますと重寶であります　寒い中は炭か澤山要りまして困りますから私は火鉢の中に　炭團をたやさずうづめておきますからお湯はすめず必用の時炭を加へて用ゐますればお炭が餘程儉約になります。（三等）

懸賞　豪奢生活の内容

實業勤儉の美風數ケ月に亘つてよく其の要を得たり、翻つて更に奢侈豪華なる生活の一面を見るは先きの節儉生活をして一層價値あらしむる所以なり。蓋し事物には表裏あり、表面のみを見て裏面を知らざるは事の眞相に到り難し、是を以て豪奢生活の内容を募る。

一等　五圓（一名）　二等　參圓（二名）

三等　貳圓（三名）（圖書切符）　〆切四月十五日

春の庖厨



◎甘藍のサラダ

一升二三合の細長く刻みたる甘藍を取り、別に大匙二杯の食鹽と同量の砂糖と大匙一杯の胡椒粉及び同じ分量の芥子粉と、四個の卵の黄味とを混和し、更に半杯のバタを溶きこみ、其の中にて右の甘藍を和へ、ませ、再び茶匙一杯の酢を注ぎ、煠鶏卵の薄く輪切りにしたるを二三片添へ又牛乳及び酢を別々の鍋にて温め酢の沸騰したる時バタ及び砂糖と鹽、胡椒粉とを加味し、刻みたる甘藍を投じ能く攪き廻して二三分蓋をして熱し少量の牛乳を加へて暫時冷まし、卵の黄身をかきませ、これを漉して其内に混和し再び沸騰せしめて右の甘藍に注ぎかくるなり。

右チキンサラダを製らへんとならば一羽の鶏肉をよく煮て軟らかになりたる時、笊に引あげて適宜に細かく切り、一個分のキャベツと胡椒粉及び芥子粉とを加へ共によくかき廻したる後ち温めたる三合の酢を混和して冷ますなり。

◎鯛のフライ

中位の鯛を淡鹽にし、一夜過ぎてその鹽を洗ひ落し、よく鱗及び腸を去り、脊より庖丁を入れて三枚におろしこれにメリケン粉と鶏卵の黄身を溶かし、少量の水を加へて、少し硬加減に煉りたるを附け、上にパン粉をまぶしてヘット又はバタを沸騰せしめたる中に入れて揚ぐるなり。

フライは鯛に限らず何魚にてもよろしけれど、なるべくは、淡泊にして脂肪分の少き方を撰ぶがよし。

◎芝鰕のコロッケ

芝鰕を鹽煠して皮を剝き更に賽の目に切り、別にバタを鍋に溶かし、適量のメリケン粉と牛乳とを加へよく攪拌して丸めらるゝほどの加減にし、右の鰕類をバ

タにて煎りて此中に移し、冷却したる後長さ二寸ほどの楕圓形に固め、之にパン粉をまぶし其上に卵の黄液を塗り再びパン粉をまぶしてヘットにて揚ぐるなり。

◎牡蠣のスチウ

まづ牡蠣の汁を煮て泡渣を去り、食鹽、胡椒粉及びバタを加へ、其後ち牡蠣を入れ沸騰さすれば出來上りたるなり、これは最も手輕な料理にて其味も又美なるものなり。

◎牛肉ロール

牛肉一斤を細かに切るか又は挽肉機械にかけしものをよく敲き、胡椒、芥子にて加味し、それに玉葱一個を細かに切りて肉にまぜ、鹽少し加へて味をづけ、饅頭の如くに圓く平くして鍋にラードを沸かして其中に入れて揚げるなり。

◎チキンカレー

まづ一羽の鷄の肉のみを取り、これを骰子目に切り、玉葱三つを薄く刻み、鍋にバタ大匙一杯入れて溶かし、其中へ前の二品を入れて煎りつけ、スチウ鍋にうつし入れ三合ほどの肉汁を注ぎこみ、文火にて三四十分間も煮たる後、中匙一杯のバタとカレー粉とメリケン粉を大匙一杯入れよく攪拌せ、又文火にて三四十分間も煮て、食鹽とレモン汁を小匙に一杯づゝ加へて、冷めざる温き米飯と共に、別々の容物に入れて出す。

◎鮭の蒸燒

まづ鮭をよく洗ひ清め、布巾にて拭ひ乾かし、鍋に入れ、それに焦げざるだけの水を注ぎ、そろ〳〵と蒸燒にするなり、出來上りたる時は、肉汁にバタ、クリーム、或は牛乳などを加へ、洋芹を刻みてこれに混じ魚を皿に移して其上に肉汁を灌ぐなり、若し生鮭を得ざる時は、鹽出しして使ふべし。

◎蛤スープ

蛤の剝身五合ばかりを水に浸し、牛乳五合鹽豚半斤バタ大匙二杯、玉葱二個、馬鈴薯四個の皮を剝き小さく骰子目に切りたるもの、食鹽、胡椒粉少量、以上の諸品を用意し置きまづ深さ大なる鍋に鹽豚を入れて火にかけ黄色になるまで燒き其内へ玉葱を入れてこれも燒

を持ち蛤を浸したる水をそゝぎ入れ、さて沸きたる時に蛤肉を入れ十分間煮て乳を加へ、馬鈴薯、鹽、胡椒粉を入れ、十分煮て下すなり。

◎波形焼鶏卵

パン粉を牛乳又はスープにて濕ほし直ぐに多量のバタを塗りたる深皿に移し、別に一杯のバタと大匙一杯のメリケン粉とをよく捏ね合せて、少量の食鹽と熱湯とを混和し更に鶏卵を入れて掻き廻したる液に固く煮たる鶏卵の殻を去り、輪切にしてこれを浸し、これを前のパン粉の上にうつし、ハム又は鶏肉の薄く切りたるを加へて次にパン粉を撒布し斯くすること數回の後よく上面にパン粉をふり置き、竈に入れて蒸焼するなり。

◎蛤のスチウ

凡そ二升ほどの殻蛤をよく洗ひ、一杯の水を加へてこれを蒸焼にし、其殻を剥がし、汁を漉して再び火上に架け、五合の牛乳、少許のバタに、葱の細かに刻みたるを混じ食鹽と胡椒粉とにて加味しメリケン粉の餡ひたるを加へてよく煮込むなり。

もし甘藍のスチウを作らんとならば、葉を細かに切り、バタとサラダ油とにていため、別に牛肉若しくは鶏肉をバタにていため兩方を相混じ、スープにて煮て其の中へ胡椒及び食鹽を混和し、一時間ほど煮たるものにて其の分量は十人前に大なる甘藍一個の割合なるべし。

◎馬鈴薯料理

馬鈴薯の皮をむき、鹽湯にて煠で、其煮汁を棄てゝ暫時火上にかけ、其の水分を蒸發せしめ、クリーム、又はバタと牛乳及び適宜の食鹽とを加へ、よく搗き碎きて、これを皿に圓形に盛り、其中央を凹くして中にバタの塊を置き胡椒粉をまぶし、或は攪拌したる鶏卵の液をそゝぎ、ナイフにて其上部を滑かに擦り、二十分間ほど熱き竈の中にて炙るなり。

◎鯛の味噌づけ焼

鯛のよきほどに切りたるを擂鉢の平なるに味噌を薄くしき、其上に鯛の切身の皮を下にし、身を上にして

並べ、其上に鹽を少しふりかけ、美濃紙を鯛の上に置き、又味噌を薄く敷き、鯛を並べて前の如くし、上には味噌を少し多く敷き紙をはりて空氣の入らざる樣にし、冷かなる場所に置き、一晝夜計りして用ふ、但しこれを燒くには普通の魚を燒く時より火を細くして、こげざる樣にすべし。

何故なれば、味噌はこげやすくして表面のみ燒けて切身の中へは火の通り難きものなればなり。

◎鯛のふか〳〵

鯛を三枚におろし、皮を去りてよく摺り、是に長芋をすりおろして少し交せ、さて煮出しに醬油を加へて澄汁の如くして煮立て、其中に右の摺りたる鯛をいれてかき交せ、一と煮えしたる時、杓子にてよきほどすくひて椀に盛り、これに針生姜、又は山葵を添へて出すべし、但しあまり汁を多くする時はすり身惡しくなるものなり、大抵卵のふか〳〵する分量にてよろし。

◎鯛の餡かけ

鯛の切身を蒸してこれに餡をかけ、山葵を添へて出すなり、さて餡は葛粉を摺りつぶし水にて溶き、煮だしに醬油、砂糖を交せて煮立て其中に葛のときたるを入れてかき廻しながら煮たるを、杓子にてよきほどに掬ひ、前の蒸したる切身にかけて用ふるなり。

◎鰕なます

海老の鹽煮したるを皮をさり、小口より斜めに薄くそぎて切れば花びらの如く見ゆるなり、斯くしたるを酢に浸け置き大根の摺り卸したるを例のごとくしてかたく絞り、前の海老を浸置きたる酢に味醂醬油を少し加へ、大こんを交合せて皿にもり、靑海苔を燒て少しふりかけて出す又海苔をはぶき瓜白菜、よめ菜杯氣色計りあしらふもよし。

◎烏賊の木の芽和へ

いかを湯煮して細かに切置き、さて味噌に山椒の葉を摺交せ、裏ごしをなして砂糖味醂を加へ、前の切置きたる烏賊を和へるなり、皿に盛りたる上には玉あられなど少しふりかけ用ふるをよしとす。

肥える法と痩せる法

醫學士　大森柳二

肥えて居る婦人必ずしも健康ではない。從つて痩せて居る者を目して、病人だとは斷言することは出來ない。寧ろ病人たるがために痩削の體格を有するのである。現時の婦人の希望は肥滿に過ぎず、さりとて痩せ過ぎない。この二者の中間の容姿を得たいと云ふのであるが、これは却々容易ならぬ希望で、一々その手段方法を教示する事は不可能であるから、肥える法痩せる法及び容姿を美しくする法に就いて、最も平易な手段を申上やう。

▲最も必要な條件▼

肥えたいと望む婦人にも、痩せたいと願ふ者にも、最も必要な條件は、「意志の堅固」と云ふ事である。僅に一日や二日位、其の方法を守つたからとて、急に肥えたり痩せたりするものではない。少くとも三ヶ月は、堅忍不抜の意志を以て規則正しく行はなくてはならぬ。故に先づ意志の堅固なるや否やが、第一の要件であるこれを忘れてはならぬ。若し意志の薄弱な忍耐力のない人は、初めから斷念するがよろしい。

▲食物の注意▼

先づ痩せたいと思ふ場合には、毎日々々同一の食物或はよく似た食品を用ゐるがよい。併しこれでは飽きて困ると思ふなら、日本人として誠に容易で、且つ多くの人の嗜好物となつて居る漬物を副食物とするがよろしい、漬物なら大抵の人は毎日々々續けて用ゐることが出來るであらう。これ以外には痩せるために有効な食品と云へば、昆布、わかめ、海苔等である。併し御承知の通りこれ等の食品は、不消化物であるから、決して多食してはならぬ。且つ三度々々の食事は、食量を減じる必要がある。食ひたいのを我慢し、且つ比較的不味い食物に、二三ヶ月の間甘んじなくてはならぬのだから、意志が堅固でなくては、行ひ難い所であ

る。要するに痩せるには、食量を減じて不消化物を用ゐることである。

次に肥えるのは、右の痩せる法とは正反對で、且つ實行がし易い、食物は消化し易い、脂肪分に富んだ者例令へば牛肉、豚肉、鷄肉、魚等を多量に食べる。尙ほ食事は一日に三回とは限らず、心の向いた時には一日に五度でも六度でもよい。たゞそれがために胃を惡くしない樣に心掛けて、滋養物に富んだ消化し易い、美味い食品をのみ用ゐればよろしい。併しこれでは經濟が許さないから、もつと廉價でこの目的に適ふ者と云ふのなら豆腐等は比較的適當な材料だと思ふ。それと同時に肝油等を用ゐてよろしい、尙ほ消化不良で苦しんで居る人には、ヂアスターゼ等の藥劑を用ゐるのも結構である。

▲運動の注意▼

そして痩せる爲めには、運動を盛に行はなくてはならぬ。ロンテニスでもピンポンでも、或は體操でも踊の稽古でも、その種類は何であらうとも、婦人として適當な、全身を運動させる方法に依つて、盛に運動をするがよろしい。併し運動を行ふ結果として、必ず空腹になるが、例令へ苦しくともそれを忍んで、食物を多量に用ゐてはならぬ。一日三度、而もそれが少量であるから、苦痛ではあらうが、こゝが我慢の爲所で、この困苦に負けては百日の希望も水泡に歸して、何んの得る所もない事になる。

肥えるには、運動を減じなくてはならぬ。運動を盛に行ふと、皮膚の下に在る脂肪が減じて來る。從つて痩せる事になる。脂肪に富んだ食物を澤山に食べて、運動を減じて居ればこの二の方法のみでも、肥える事は受合である。併し運動を今まで盛に行つて居た者が、突然運動を廢するのは、却て身體に害を貽す恐があるから、次第々々に運動を少くして行くがよろしい。

▲睡眠の注意▼

健康な人は一日に平均八時間の睡眠が必要である。併し痩せるためには、それよりも更に睡眠時間を減少して、平均一日に六時間か五時間位にするがよろしい。

或る人は三時間位より多く眠るなと云ふけれど、それは云ふに易く行ふに難く、到底實行の出來るものではない。だから余はブルーメンタール博士の所説に從つて五時間乃至六時間の睡眠を適當だと信ずる。如何に眠くとも六時間以上の睡眠はよろしくない。尚ほ睡眠不足のため、晝寢をしない様に、常に心掛けるがよい。併し五時間乃至六時間宛の睡眠時間は、人體に害を來す樣な事は、殆どないと云つて差支はない。



右とは正反對に、又肥える目的には、夜、出來るだけ長く熟睡して、床に入つてから色々の妄想や雑念や悲哀の追想等を行ふことなく、精神を安靜にして安らかに就床するがよろしい。心に心配や苦勞が有つて、それがために身を攻められる樣では、決して肥えることは出來ないから、先づそんな精神上の苦痛を追ひ拂はなくてはならぬ。蓋し生活上の苦痛は、如何に注意して居ても、日に増し身體を痩削せしめるものである事は、

幾多の實例に依つて、動かすべからざる事實である。

却說、肥えるために必要な睡眠時間は、何時間位が適當かと言ふに、これは一定の時間を限る必要はあるまい。健康な人は大抵一日平均十時間乃至十三時間位より以上は、眠れまいと思ふが、肥えるには、眠い間は何時間でも眠るがよろしいから、時間の制限はない。

▲入浴の注意▼

痩せたい婦人は、入浴の度數を多くするがよい。日に何度でも湯に入つて差支はない。併し湯に入る度毎に、石鹸や洗粉を用ゐるのは却て皮膚を荒す恐があるから、一日に何回でもよいが、入浴毎に御化粧をする必要もなく、たゞ一度だけ洗粉を用ゐて全身を洗へばよい。その他の時は單に湯槽の内に入つてさへ居ればよろしい。肥えて居る人は石鹸を用ゐる方がよいが、或は單に洗粉だけでも差支はない。尙ほ注意迄に言つて置くが、湯に入つて上氣易い人は、入浴の際に心得て置くべきことがある。即ち段々に身體を湯に入れる、先づ脚だけ湯に入れ、次で胸まで、最後に肩まで入ると決して上氣るものではない。或は口の内に水を含んで入るのもよろしい。次に湯上りに感冒を引き易い人は、湯から出て身體の濕氣を拭ひ、全く乾いて肌が少しばかり寒くなる位になつて、初めて衣類を纏へばよろしい、感冒を引くからとて、湯から出て溫い内に直に衣類を着ると、却て感冒に罹り易いものである。

次に肥えるには、これと反對に、出來るだけ入浴度數を少くするがよい。然しこれがために肌が不潔になり、且つ感冒に罹り易い者は、冷水摩擦を行ふがよろしい。或は二日か三日に一度位入浴すればよい。入浴度數が少くなれば、嘸ぞ肌が汚れるだらうと思はれやうが、左迄心配する程の事はない。毎日入浴する人は肌を荒し易いが、二日や三日に一度位の入浴では、決してそんな恐はないから、安心してよろしい。

▲精神狀態▼

昔から呑氣な人は肥えるとは、人のよく言ふ所であるが、これは事實である。心の持ち方に依つて實際肥えたり痩せたりするものである。故に痩せたいと思ふ

婦人は、精神を勞する必要がある。併し單に精神を勞するがよいと云つても、その意味が明白であるまいが、數學の如き學科に依つて、難解の問題を試みたり、又は解し難い英文を飜譯して見る等は、この目的に對して有効な手段である。而してこの學科を終つたなら、直に庭前又は郊外に出て、盛に運動を行ふがよろしい。次で入浴をして食事をすると云ふ順序にせば、大に効がある。こゝに忘れてはならぬ注意は、難解の學科のために腦を苦しめる程度の甚しいため、神經衰弱等を起すことのない樣に、學科の後には必ず運動を行ふ事である。



肥えるには精神を出來るだけ安靜にして、心配や苦勞をせぬ樣に心掛けなくてはならぬ。殊にヒステリーや神經衰弱等に罹つて居る婦人は、その病氣から治さなくては肥えることは出來ぬ。元來、ヒステリーや神經衰弱と云ふ病氣は、神經の病氣であるから、全身の營養が害せられて、その病が治らない間は、如何に苦心しても如何に滋養物を用ゐても何の効をも奏するものではない。俗に云ふ婦人の血の道は、一種の神經病の事が多い。そんな人も右と同樣の注意を忘れぬ樣にして、その病氣から治す必要がある。

▲瘦せる藥▼

肥えるために酒を用ゐるのは有効であるが、瘦せたいと思ふ人は、決しい酒を飮まぬがよい、新聞

紙上には瘦せる藥の廣告が出て居るが絕對的に信用をすることは出來ない。現今西洋で行はれて居る信用のある瘦せる藥と云へば、沃度知林であるが、これは一日に大人には三デシグラムを與へる、その翌日には六デシグラムを與へる、その又翌日には九デシグラムを與へる、と云ふ風に每日增量をして行くのであるが、これを如何程迄增してよいかは、その人の體質にもよるから、一應醫者と相談をするがよろしい。

▲後の始末▼

以上說明した肥える法瘦せる法を行つて、その効あるのを見留めたなら、其の程度で止めて、當分の間は今まで行つて居たのと大差なき生活を續けて居るがよろしい。然し突然に運動を廢し或は多食すると、病氣を惹起し易いから、急激に生活法を變更するはよろしくない。次第々々に舊の生活狀態に歸へるがよろしい。これで身體を肥えさせたり又は瘦せさせたりする事が出來るのである。併し容姿を美しくするには、他の方法に依らなくてはならぬ。

▲容姿を美しくする法▼

容姿を美しくする第一の要件は、姿勢を正しくすることで、如何に美しい顏であつても、如何に立派な衣類を着して居たとても、所謂猫脊であつたならば、甚だ不調和であるばかりではなく、却て天成の美貌を打消して、他人より侮辱の眼を以て過せられ、自身も亦自卑するものであるから、古來から色々の方法が考へられて、殊に近來はコルセットと云ふ一種の器械を用ゐる風になつた。併し病氣のために猫脊になるものは兎に角として、普通は小兒の時よりの注意一つで直す事が出來る。その方法の一として今日にも行はれて居るのは、踊の稽古である。踊は古來より日本婦人の體操であつて、容姿を美しくする爲めには、大に効のあるものであつたが、近來は花柳社會又は小部分の婦人か子供に限られて居て、多くの女子は學校に於ける體操、遊戯に依つて、容姿の美を助けて居る。學校敎育を受けない婦人のため、左に平易なる容姿を美しくする方法を揭げる。女學生等もこの方法を參考すれば効

あるは勿論である。

一、直立の姿勢をとる事。

壁又は柱を後にして立ち、兩方の踵臀部、兩方の肩及び後頭部を壁又は柱に接ける。これを一日數回行つて、机に向ふ時にも道を歩む時にも、必ずその姿勢を忘れてはならぬ。

二、毎朝庭に立ちて深呼吸を行ふ事。

右の姿勢をなし、兩手は腰骨の上に接けて、二十回位深呼吸をする。息氣を吐く時は少し前に屈み、吸ふ時には後へ少し仰向く。

三、手を伸して肩の高さにする事。

左右の腕と手とを上げて肩と水平にする。足は踵の内側に於て相接して、三十度位の角度を保た



せる。馴れゝば次第に擴げて六十度位迄にする。手の指を擴げて丁度十字形になる樣に肩や手を伸ばす。その手を下げて直立の姿勢になる。再び十字形になるまで肩と水平に手と腕を伸して上げる。この運動を疲勞する迄行ふと、肩の形がよくなつて來る。

四、歩き方を正しくする事。

甚しい内輪の歩き方はよろしくない、されぱとて甚しい外輪も見惡いものだから、婦人は少し内輪に歩くがいゝので、花柳社會の婦人の樣に態と内輪に歩くはよろしくない。



春の家庭

美登利

お手紙拝見致し候、カステーラお氣に入り候由、製法御問合せ、なか〳〵の秘傳に候へども、外ならぬ御許様の事故特別御傳授申候。

原料 一玉子大七個、一浮粉八十匁、一砂糖八十五匁、一レモン油八滴。

用器 一平鉢（可成摺鉢形が宜し）一大鉢一小鉢一ブリキ罐（瀬戸引鍋にても宜し）

先づ、浮粉と砂糖を篩ひながら大鉢へ入れ、よく混せ置き、玉子を白味と黄味と分け黄味を小鉢へ白味を平鉢へ入れ泡立器にて雪の様になる迄泡立黄味を入れまた泡立其中へ大鉢の粉を入れレモンを落し約四十分泡立ブリキ罐へ移し蒸籠にて四十分蒸す。

熊本の姉様から此手紙を頂いたのは去年の四月のはじめ、早咲の庭の山櫻が眞盛の頃で有つた、青葉繁り木枯に落葉してもう芽ぐんで來た、かれこれ一年間何度製造たらう玉はカステーラが大好で此製法を覺える迄お土產は風月堂のカステーラと定て居たが之がお氣に入つて風月の御用も少なくなつた。

けふは本家の嫂様が敎へてくれと仰つて午後から來入る御約束だ。

一郎は未だ學校から歸らず、外の子供は、お晝飯後守と遊びに出て珍らしく家の内が靜だ。

寂とした茶の間の火鉢に炭をついで居ると、時計のセコンドと、堀貫井戸の水音が耳立つ女中部屋で藤と竹が針仕事をして居るかして時々糸卷の衝突る音と鋏のチリンといふ音がする。

緣側でペスがクン〳〵鳴て居るお友達が居ないので

お前も淋しいのかと障子を啓けると、まあ。いつの間にやら椿が一輪眞紅な。なんといゝ色だらう常磐木計りの冬枯の庭に紅一點いひしらぬ風情だ。お書齋の掛花瓶に切らうか、暫し待て露霜を凌ぎ寒風に堪へて折角咲初めたものを、むざ〳〵切るも心ないわざと思ひ止まる。

門の鈴が鳴つて靜かな駒下駄の音がする、嫂樣の樣だと玄關まで行と「御免なさい」と肩掛を取りながら被入る。

濡羽色の洗髮をお町の手際で丸髷のまあいゝ格好今朝お上げになつて「え〻今結ましておそくなりましたわ」と細い奇麗なお手を鳥渡鬢におあてになる「まあおかざし遊せ」と火鉢の向ふへ座蒲團を直す「お百合さんの御婚禮ももう直きねえ嫂樣いらつしやつて」「ええ昨日御祝ひに行ましたら丁度高島屋からお仕立が出來て來た處でしたわ鶴と松の江戸褄模樣のよい御紋付よ、おみ帶が眞實によう御座いましたゴブラン織でせう兄樣のお見立だつて、ハイカラなほんとにいゝのでしたわ「其樣にお氣に入つたら兄樣におねだり遊せな私もつて申度いが今月は新舊のお正月が衝突つて却々經濟難ですものそこへいくと嫂樣は結構だわ」「でもねえ」つて笑つて被居る私が嫂樣の身分なら「ねえ郎君」つてねだるのだが。

どれ子供の歸らぬ内に始めませうと、料理前掛を締める。

お鉢を三つ並べ白味と黄味と分け、「嫂樣この白味を眞白に成迄攪立て頂戴な」泡立器でさら〳〵とお攪立になる手つき流石千家の名人だけ茶筌をお持ちになる呼吸で縮緬沫が立つ。自分は浮粉とお砂糖を混る「この位でいゝでせうか」まあ奇麗に、夫では黄味を入れて、もう一きりして頂きませう。

不斷着の銘仙の上へ龜甲くづしの大島のお羽織に白の前掛もうつりよく、熱心に泡立てゐらつしやる横向き。色のくつきりと白い中高の細面ふつくりとした鬢からよく揃つた襟元丁度女學世界の口繪の樣。眞實に嫂樣はいつ見ても御美しいいつぞや嫂樣は眞實に美人

ねえつて云つたら主が「御前だつて美人だつて仰る思はず莞爾したら「おい〳〵左樣自惚ちやあいけない嫂樣は畫の樣な美人お前は衞生美人だつて大笑ひした。

「もう宜しう御座い升之を混せませう斯樣いふ風に、徐々混ぜ升而して疲勞れても左の方へ逆に廻しては不可ませんのよと」大層先生振る「まあ大變重く成てねえ」「左樣で せうお疲勞に成つたら私代り升わ、もう焚付させませう藤や」と呼で見たが折角今日中に仕上げ樣つてせつせとしてゐるのに立せるも氣の毒と自分で立つ、前掛がずれて浮粉が袵から裾へ丁度裾模樣の樣「嫂樣鳥渡御覧遊せ江戸褄い〻でせう」「まあ振つてるわねえ勅題雪中松」と大笑ひ。



お釜へ水を半入れて焚付る。白い煙が霞の樣に棚びく引窓から日影が映して春の野の陽炎の樣だ。

ほんとに貴女はお幸だつて他の方は仰るが夫は流行の衣裳が出來たりお舅樣の御相手とは云ひながら、五人の子持ちが師匠を呼んで稽古三昧成程結構に違ひ無い、だが自分はもつと幸福である、舅樣も姑樣もほんとにお優しい方で

自分の様な行屆かない者でもついぞお叱言等仰つた事なく娘の様に可愛がつて下るし、嫂様もよい方で他家の嫂の様に意地悪を爲たり皮肉等仰つた事は無い自分も眞實の姉様の様に家事のことでも何でも打明けて御相談申他所へ行のも大概御一緒に着物は何れに仕ませう半襟もお揃ひにあなたも丸髷私も左様しませうと。だから自分は隔と云ふもの頓と無く親身も同じ様である。

此頃の雑誌を見ると嫁と姑又は嫂の衝突の記事の多には驚く。自分の様な無教育な者でも、斯う平和に治まつて行のに、増して高等教育をお受けに成つた秀才方が如何して中が悪いのだらう、お姑様とて旦那様の大事なお母様至誠天に通ずと云ふでは無いか、誠を以て仕へ申したら、可愛いゝ息子の嫁何でお憎みに成らう夫は聖人も何とやら、まして、以下の私定めて欠點だらけで有うが寛大に見て下さる千人に一人のよいお姑様を持つた自分の幸福で皆様の心配遊す舅 姑や嫂の苦勞等仕た事は無い。

フウッ／＼とお湯が沸騰して來た時計を見ると丁度四十分。『嫂様最早宜しう御座い升』とブリキ罐へ移し蒸籠へ入れて蒸す。

藤が、お仕事出來上りましたから、致し升といふ、薪をよく燃しておくれと頼む、宅のをこしらへませう『嫂様「女學世界」が參つて居升から御覧遊ばせ』姉様は雑誌を自分は平鉢を暫し無言。

主の書齋で御自慢の鶯が鳴く高音のいゝ事嫂様もまあいゝ聲と耳をすまして被居る床の間の梅も薫つてるで有う。學校が放課したと見え子供が『雲に聳ゆる高千穂の』と唱つて行く。おゝ紀元節も近づいた、龜井戸も盛りで有う主と大森へ梅見に行た事が有つたが何年の紀元節であつたらうと。又しても思ひは東京に馳せる。『只今』つと一郎が學校から歸つた。カバンとお辨當箱をバタリと下に置く『伯母さん被入い、ヤア、カステラ拵へてるの出來たら僕にも下さいよ』と云ひながら部屋へ這入る『蜜柑が棚に有升よ』『おや四十分過ましたよ』と嫂様が仰るまあ燥然して居升たと急ぎ蒸

籠を見る上等に出來ましたかとブリキ鑵を取り出しお皿へあげる、いゝ匂ひおいし相ねえと嫂樣も仰る平鉢の原料を前の通りにする『冷ない内にお舅樣にお上申度から竹を遣つて頂戴』と仰る切つては菓子鉢へ入れ本家へ持せて上る。

藤に手傳はせあたりを片付て居る内に四十分過つて跡のも出來上る嫂樣も召し上れとお茶を入れ一郎も呼び自分も加減を見る。

遠くで紙鳶の唸りが聞える、車が止まつて牛乳屋が來た『もう四時ねえ嫂樣晩の御馳走は何？お定りになつて』『えゝ今朝鯛が有ましたから潮と鹽燒にするつもりよ、あなたは』『うちではお寒いから茶碗蒸しと子供達と一緒に五月御飯を焚升の』『もうお暇しませう』と仰るお送りながら田圃の方へ行て見ませうと連れ立つ。

十日程籠つて居た間に麥の青々した事菜種も大分大きく成つた。

山際に淡紅色の雲が漾つてゐる。鎭守の森のはのぼのと霞込めたるとろ〳〵と春らしい奇麗に耕た麥畑を眺めて寛やかに煙草を吹して居るのは小作頭の老爺だ自分達を見ると鉢卷を取つて低頭をする『百姓が鉢卷を取つて挨拶するのは帽子を取る積りなのでせうかと笑ふと左樣ねえ矢張り女の人が肩掛を取るのと同じ心なのでせう』つては笑ひなさる。まあ蓬が大きくなつてねえと菫色のハンケチへ摘で被居る。

麥畑に雲雀が巣を作り菜の花が咲くのも遠くないと思ふと嬉しい。

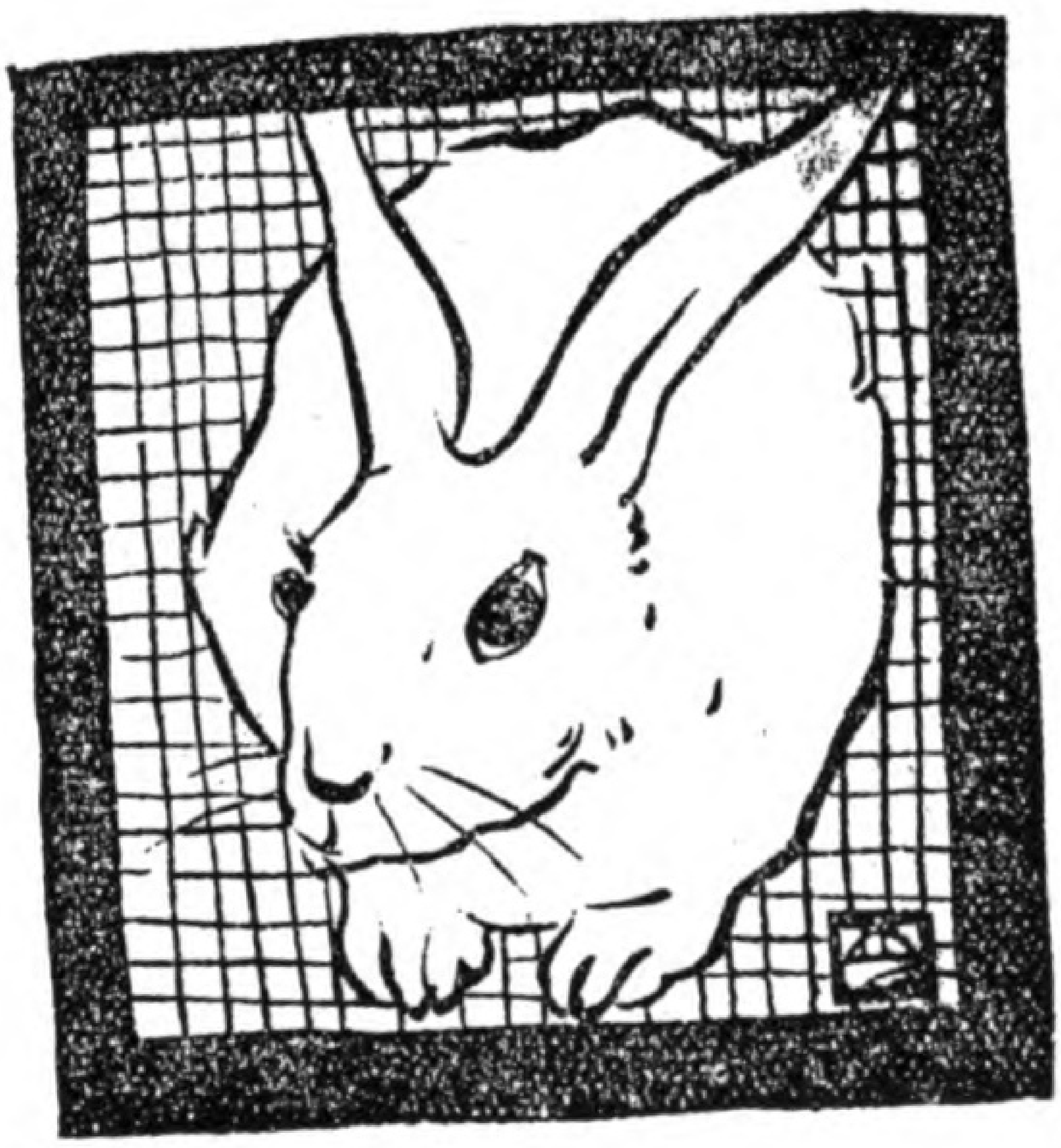
遇然振返ると、今し太陽が地平線を離れる處で有る赤い〳〵金色の鞠は我勤め終りぬと靜に西へ沈んだ。

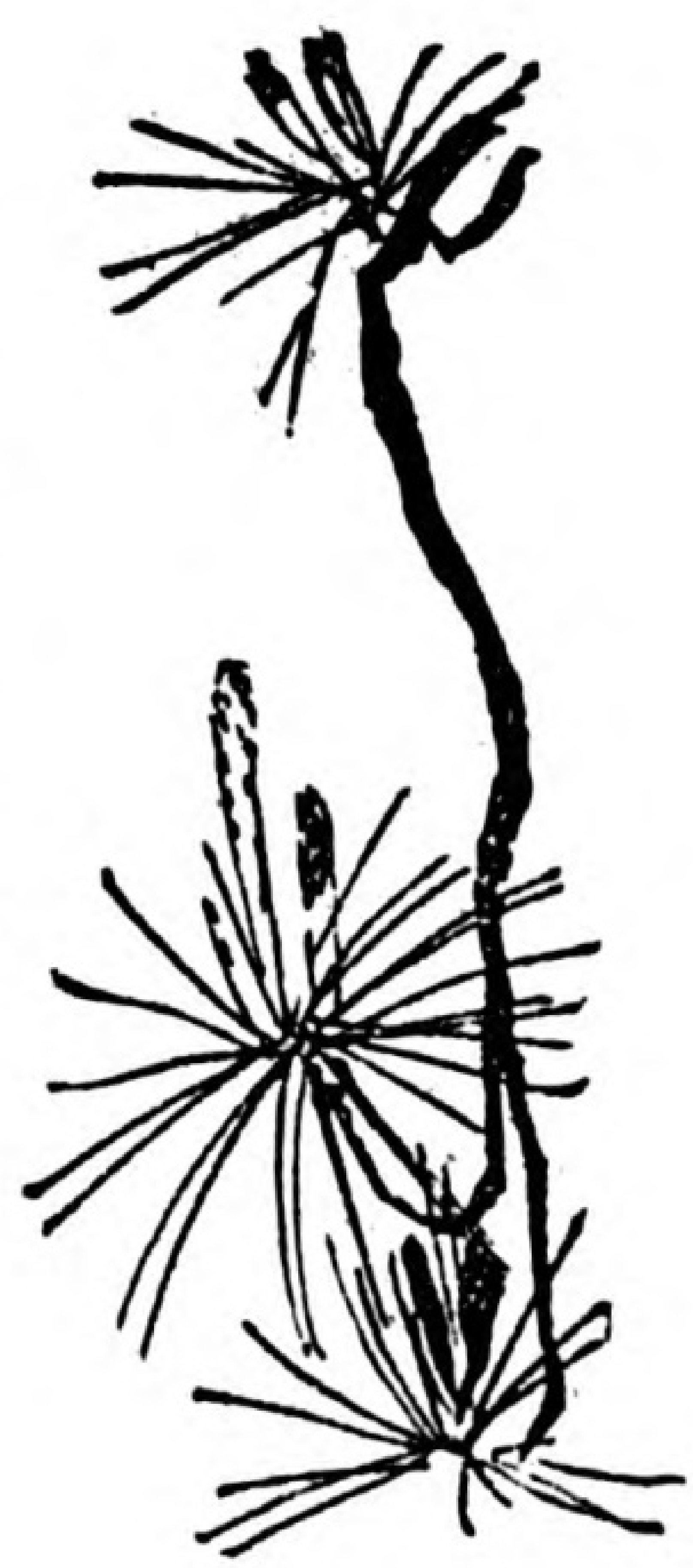
光なき十三日の月が中空に高い今二時の後には千里迄照らん月も時來らねば人には知られず嗚呼時なる哉時機なる哉時をこそ待てと思ひはあらぬ方へ反れる。

彼所に見えるのは良人と孝秋さんでは無いかしらと嫂樣が仰る。松原つゞきの岡の方から蟻の樣に見えるあゝ玉突からお歸りねえもう歸りませうと引返す。春とは云へど夕風が身に泌て寒い。嫂樣は蓬を大事さ

うに包でお持ちに成る『晩に遊びに被入いな』『難有うよせて頂き升』と御挨拶をして居ると出入の家の老婆が來かゝり『若旦那方がお見えに成ましたよお新造樣も御一緒で何んとお睦まじい結構な事だ』と呟乍ら行過た。

　門まで來ると夕靄に包まれた町の方から黒と茶のインバチスが肩を並べて被入る家の中からお母ちゃんお歸りとカタ〳〵下駄の音をさせて子供が出て來た。





結婚當日の記

清水はな子

幾度か胸とゞろかせた結婚の日もいよ〳〵今日となつた。五時床をはなれて豫々氣にかけて居た天氣はどうかと雨戸を開けて見ると、音もない春雨がしと〳〵と庭の山吹を濕ほして居る。婚禮の日に雨が降ると其本人は幸福だと或人が話されたが果してさうなら嬉しいけれど、宴席に來て頂く方には御氣の毒だから、午後からはどうか霽れてほしいと思つた。

　朝飯後式服の襦袢の襟をかけて居ると、從姉の時さんが來られて、『今日は御目出度う忙しいでせう』と、いつもの快活な調子でいそ〳〵用を手傳つて下さる。

父上は今日おつけになる勳章の綬を求めに、上野までいらしたが、十時頃御歸りになり私の大好なお菓子をおみやに下すつた。送別の意で、わざ〳〵寄り道をして、買つて來て下さつたかと思ふと、ほんとにありがたい。十一時頃妹と二人で入浴した。『姉さんもうこれから二人でお湯にもはいれないのね』と云ふので『そんなことないわ近いのですものいつでも亦はいりに來てよ』とは云つたもの丶、獨り殘る妹の心が何となくかあいさうであつた。御母樣がいらして『よく御洗ひなさいよそんな



こすり方ではだめだね』と自分で糠袋を取つてごし〳〵洗つて下さる。御晝飯には、私を祝ふためと云つて、母上が御忙しい中から鯛を料理して下さつた。嗚呼處女として食事するのもこれが終り、夕食の時はもう松井家の娘ではない、責任重き人の妻となつて、なつかしき我夫と共に多くの來客に接せねばならぬと思ふと、心配なのか、氣まりが惡いのか、嬉しいのか、悲しいのか、自分ながら譯の分らぬ感が胸に充ちて、折角の御馳走も母上に滿足をあたへるほど頂けなかつた。午過ぎ髮結ひ

が來て化粧から着物をきる事まですべて手傳つて呉れた。お母樣はしきりに氣をもんで、おつくりを幾度も直して下さるので二時頃まで仕度にかゝつた。姿見に向ふと何だか他人のやう、皆島田が好いといふけれど、私はやはり束髮に袴の方がすきだ。父上も見にいらして『おゝ立派なお嫁さんが出來た、よく落ちついてやらねばいかぬぞ』とおつしやる。どこまでも案じて下さる親の心は有がたいものと、今日に限つて身に染みるやうに思ふ。其内に車が來たので、改めて父上と母上とに、今迄育てられた限りない御恩の御禮と、これからは敎を守つて夫の家のために一身を捧げる覺悟とを思ひきつて述べると、父上は滿足さうに、にこにこして居らした、母上は『今迄は假りの家にゐたので、これからお前の誠の家に往くのだからよく〳〵今の覺悟をお忘れなさるな』とおつしやつたが、少し其聲は濕るんで居た。嗚呼、私は何だつて女などに生れて來たのだらう、二十年間何の不自由もなく、何の苦痛も知らず育てられ、多くの費用をかけて、女としては普通以上の敎育まで受けさせてもらひ、其上我緣談については勿體ない程の御心配をかけながら、何の報ゆる所もなく今日から他家の人となつて仕舞はねばならぬ、男子であつたらいくら意氣地がなくとも少しは恩がへしが出來やうものをと、今更らしく淚がこぼれる、よいあんばいに雨は霽たが人が見るのがうるさいからほろをかけて車に乘つた。近所のものはわざ〳〵出て見て居る、見せ物でもないのにほんとに憎らしい。車の內では最早何の悲しい感もない、たゞ〳〵樂しい華かな未來の空想が胸にあふれるばかりである。三時頃日比谷の大神宮に着いた、早仲人の吉野樣御夫婦をはじめ、親戚の伯父樣伯母樣方は來揃つて居られた、やがて案內者に導かれて、吉野奧樣と共に扣所に入つた。式場には淸水家松井家の親族が席につかれたらしく神官の祝詞をあげる聲が嚴かにきこえた、それが終つてから神の御前に出て御拜をすると、吉野樣は我等二人にかはつて誓詞を讀んで下すつた。御みきのお下りで一同御盃を頂きしばし休憩の後、赤坂の八百勘に

赴いた。これは云ふまでもなく披露の爲めなのだ。お客も揃はれたので、皆樣に御挨拶した後、御酒が始まつたが、人數が多いので大變賑かだ。夫の知人や親友の方々に一々紹介されたけれども、のぼせて居るせいか、どなたが何とおつしやるのかさつぱり分らなかつた。衣服を着かへて再び席に出ると、工學士の花房さんとか云ふ方が、新郎新婦のためにといつて「夫婦相和す」といふことについて經驗談をして下さつた、何事も理想と現實は難いこと〻は知つて居るけれども、とにかく今日神前にちかつた詞を忘れず相互に誠心を元として、いさ〻かの秘密もなく、夫は夫、妻は妻たる本分を守り、相愛し、相助けていつたなら、どうして不和となる事があらう、ことに、我夫はよく理非の分つた、同情の念にも富んでゐらつしやる方だと信じて居る、だから私さへ夫のために全力をつくしたなら、きつと「相和す」所ではなく、模範的家庭を作る事が出來はすまいか、あ〻どうかさうなりたいものであると、つく〴〵思つた。仲人から注意があつたので一同の客に先ちて夫の家……否



我家にかへつた。
今日終日の事を心にくり返せばまるで夢のやう、此夢の間にわたしは人世の一段落がついたのである、新生涯にはいつたのである、と思ふと何となく恐ろしい樣な氣もするが、これからは夫といふ大なる味方ができたのだから、如何なる困難にも、如何なる苦痛にも、勇ましく打勝つ事が出來るであらうと、嬉しかつた。
嗚呼この四月六日は忘れる事のできぬ一生の紀念日である。このさき毎年此紀念日は、どんな心持ちで迎へるであらうか。





悲慘な滑稽

なぎさ

二三日前からの心の懊惱と言つたら掻き破りたい樣な心地、詰らぬ運命の御手に支配さるゝ自身は非常な不幸女の樣に思はれて、實は內心兩親をも御恨み申したい程です、殘念なのは○○女學校を三年で廢學る事、兩親も兄さんも今更ら女に學問は要らぬとの仰せには……何うしても服從は出來ませんが、有り餘つた世帶、此頃の不景氣に思はしからぬ商賣の事もチヨイ〳〵小耳にはさむ一家の事、妾よりも將來長き弟二人の學資……の事抔考へると、無理に學校生活を楯にする勇氣もなく、さりとて學校を無理に廢めて見ると急に暗闇

の裡へ投げ込まれし氣もして行く末のこと抔色々考へて二三日はいつも枕紙を濡らしました……が第二の問題として家事躾の爲といふ美名の下に奉公を勧められた口惜しさ……サアそれを諾と承知した妾の今更自分の抵抗心のないのと言はゞ意志の弱いのが自分乍ら腹立しく、承知はしたものゝ、家庭の壓迫……無理押附……意志の束縛などゝ自分勝手の氣も起るのですもの、ホントに女といふものは損なものだとつく〴〵思ひました、父母や兄の意見通りになつて孝悌な女と世間は呼ぶのなら妾は立派な孝悌な女なんですもの、併し大體内氣な妾には世間の孃の樣に目上の意に逆ふて飛び出したり、好きな眞似したり、自分の意志を頑固につき通す事は出來ませんもの、併し一つにはあまり裕でない家庭に育つたからでもありませうがこれが浮世の義理とでも言ふのでせうかしら、併し、老い先短き兩親の安堵、收入より支出の多き此頃の活計、兄と嫂への遠慮、二弟への犧牲、さう〳〵妾は色々と自分で氣が濟む口實の中にも兩人の弟へ充分學問を仕込む代りに自分は學校を中途で止める口も減らす爲奉公にも往く、といふのが一番自分で氣が濟み何か非常に善い行でもした氣で今回の事も人樣から見れば何でもない樣なものゝ、自分ではなる丈境遇を悲慘に考へそして餘り連絡もない弟への愛情を無理に結び付けたのですもの、これ許りは自分でも悲みの裡に一寸可笑しい氣もしましたの、また實際を言へば一寸自暴氣味も面當氣味もないとは申されませんでした。

今日はお目見え。

行く先は父が出入の○○のお邸、十歳の坊樣と六歳の孃樣のお傅がてら（自分丈では一廉家庭教師の樣な心算、誰がお傅なんぞ……）奥樣のお侍として（母樣が小間使と仰せられた時ツイ理窟を申上げました）奉仕る事になつたのです、今朝は六時の呼鈴に醒まされて朝餐もそこ〳〵お湯を使ふて少々お化粧して、多くもあらぬ衣裳をあれかこれかと母樣が撰ばるゝ慈愛も五月蠅く拗ね氣味の妾は、まだ一時間暇が有るからとの事にその儘二階の書齋に這入つて一閑張の机に凭れ、

覺えず忍び音に啼きました、覺悟と言へば大層ですが何んだか今になつて悲しうなつて充分泣かねば氣が濟まぬ樣で、机の上の同窓の友から來ました公會堂の音樂會、誘引狀も自分を嘲弄る樣に見え、アノ毎々傲慢の○○さんや△△さんが嘸いろんな事を御噂なさるだらうと思へば、何とも言へぬ嫌な氣になりました、其內八時の時辰器に忽卒と淚を納めて、階下へ降りますと末弟が『アラ姉ちやん泣いたのだよ……』と大聲を揚げた時の妾のキマリ惡さ、中弟は流石に大人びて『姉樣御奉公に……何日歸つて來るの、明日から淋しいの子ー』抔とサモ遠方へ行くもの丶樣に申すのですもの、思はず淚がさしくまれましたの、兄も今日は莞爾と『ホントに善いお家だから心配はない、學校なんかの生意氣女學生よりいくら宜い歟知れあしない、ナニ少しの辛抱だから跡は氣樂なものよ、何か入用の者が有つたら直ぐ電話でも言ふて異れるがよい』抔と、常ならば口小言も申したい處今日は慈愛が籠つて居る樣に嬉しかつたのですもの、母上は猶こま〲と學校に入てをつたからとて爲に掛けて下々へも横柄にして憎まれぬ樣、少し字の讀める子は兎角無愛嬌で困る、精々柔和で起居もしとやかに勤める樣妾はお前の事を太融寺の愛染さまへ信心してあるからお前も信心すること、濟着して風邪病くな抔とくど〲敷仰しやるも今日は自身生れ變つた樣に有難淚に暮れました、途遙ければとて車二挺來る、父と妾と二人皆々に別れを告げて韋駄天走り、電車の辻の賑しく、河添ひの柳枯れて物淋しき冬の空、いくつの町を過ぎて大きな洋館と日本造りの角構へ、高塀越しに名物の大銀杏の裸姿、これぞゆく先と車上より見上げた時思はず胸に波うちましたの。

朝淨めしたる甃を音もなう、父の跡について玄關先に兩手をつかえて取次の視線……襖の細合ひに數多き視線を一身に集めた時思はず面を赧めました、次の間の其次の間の六疊敷許りな薄暗い室に父と二人、水仙の投げ入れに墨繪の寒山拾得も、靜もつ妾の身の上歟と可笑しく悲しく、暫し待つ間にこなたへと召使の誘

る、儘、二間三間、お居間の襖をスルリと明けた時ハッと頭が上りませんでした。

伏目勝になつた自分には花やかな緞子の座布團と美しい曲線を現した奥様の膝の上にキチンと正しう置かれた眞白なお手が見える許り、紅差し指のダイヤが折々チラリ〳〵と眩し相に輝く許り、傍の父が何事か申上げるとハイ〳〵と應揚な奥様の返事も夢の樣耳に留らず、左樣ならばお前もお禮を申さぬかと父の言葉にハッと氣が付く刹那、自分もモウ此儘歸りたい氣持でした、其時思はず奥さんの目と衝突！氣の弱い妾にもユッカリ頓心ましたの、美しいとは申すものゝクッキリ蒼白いお貌、一の字に結むだ口許には些の愛嬌も無う、お扮裝も年の割にけば〳〵しう、險しい目元に無理に笑を裝ひ給ふお貌には、自分乍ら怖々と、御禮申上ぐるも口の裡でした、父が追從笑ひを殘して立ち去る跡にバタ〳〵と足音がして妾の後に人の立つ氣勢お靜かになさい！との奥樣のお聲は嚴しい裡に滅法美しう聞えました、頓でおづ〳〵と奥樣の傍に一人二人小さい坊樣と孃樣が立ち乍ら此方を見詰めらるゝ樣子、最前から稍々落付いた自分はニッコリとお見上げ申した時小さいお兩人はニッコリともなさらないのには少



少テレました。
サア此方へお出で旦那樣に御挨拶申上げるんだからと奧樣の仰する儘、跡について廊下を右に、木枯寒き庭を橫目にズット洋館つゞきの大きな扉を閉めしなにパタンと音せしにハッと思ひ乍ら、窓帷眩しう飾りたてた一間、こなたを向いた石膏の裸體像、ストーブに熱したる空氣の氣も上りさう、織物垂れし卓子近う安樂椅子にどつかりと徐に葉卷燻らし給ふは旦那樣、デップリと脂切つた脊の低いお方、お言葉も寬濶に、オー左樣歟、善い娘だのう、ウム年は十九……ハア〇〇學校に、イヤ當世の女は學問も無ければ無益だ、私も若ければ奧を廢して此娘を貰ふのぢやにハッ〳〵〳〵とお笑ひなされてヂロリと此方を見詰められた氣味の惡サ、何だか悚然しましたの、嗚呼奧樣もいや〳〵旦那もいや〳〵何だか今迄習た學問に非常に屈辱を與へられた氣がしました……ホントに今日の一時間の永かつた事！



寄宿舍の半日

すゞしろ

一週間の內で最も樂しい土曜日の午後は來た、終業の鐘が鳴ると同時に靴の音と草履の音が入亂れて響く、其中を私は仲好しの前田さんを例の如く通用門迄見送つて、『明日は屹度お遊びにいらつしやいね』と幾度も念を押し握手をして別れる、後姿が段々小さくなる迄立つくしてると舍生の佗しい境遇が本當に情けなくなる何時の間にか同室のお美津さんが後へ來て居て『姉樣お部屋へ歸りませう』と云はれて我に歸る。

お美津さんは寄宿舍に入つてから一月にもならない極く內氣な仇氣ない娘である、私の部屋は此他室長の

奥村さんと同級の近藤さんなど〆めて四人の家族なのだ。

近藤さんは急用が出來て先刻保證人の家へ行つたといふ事、奥村さんは卒業間近だから此頃は餘り部屋に落付く間も無い程忙しいのだ、部屋に居たつてあの人は鹿爪らしい顔していやに氣取つてるからちつとも面白くはないが、近藤さんが居ないと騒ぐ相手がなくて本當に淋しい。



少し許りの復習を濟ませて私は襦袢の襟の掛け替や明日の朝の洗濯物をまとめたり行李の中を片付けたりする、お美津さんは何をしてるのかと思へば、奥村さんに足袋の繕ひを頼まれたと云てセッセと遣つて居る、奥村さんもいくら目下の者にだつて餘り失禮な事を云付ける人だ、可愛さうに家に居れば人の足袋の繕ひ處か自分の身の廻りさへおッ母樣だの姉樣だのゝ手を借りて居る事だらうに、私等も今こそ馴れ了つて隨分圖々しくなつたとは云ふものゝ始め此處へ來た當分は部屋の窓か

ら星を眺めて、家の戀しさに泣き、優しい言葉かけられても意地の惡い事云はれても直ぐ涙計り溜して居た、今は全級を通じて最も呑氣な無責任な三年級に籍を置いて先生に下らぬ質問をしかけて困らせては一寸功名をした積りで威張つたり運動と云ふ名稱の下に兎角學問より庭球だの何だのと遊びの方を先にしては叱られてゐる、本當に何時までも此時代で居たいものだ、奥村さん等のやうに上級になつて幾分か責任と云ふものが肩に掛つて來ると自然あゝいふ風に澄し込まなくちやならなくなるんだらう、おゝいやな事た。

「入つてもよくつて？」田中さんらしい聲。

「カムイン」と云ふと「御大將のお留守を當て込んで來たのよ」と奥村さんとは犬と猿の間柄、云はなくてもさうに極つてよ、此人は舍內五大家の一で能辯家の名稱を奉つられてゐる丈けにしやべり出したら限りがない、內心恐縮してると案の定出るわ／＼先生の棚下し生徒の惡口、立板に水だ、お美津さんは目をまん圓くして田中さんの口元計り見つめて居る、私は餘りこんな事聞かせ度ないから、

「誰かあなたを呼んでるやうよ」といゝ加減に切上げさせやうと出鱈目を云て遣るとやう／＼腰を浮かしかけたが又思出した樣に、

「ちよいと／＼愈々水野さんも退校らしい噂ね」

「知らないわ、私」と突慳貪に云ふと、

「まア隨分だ、同級生の死活問題だと云ふのに何て冷淡なんだらう、憤慨に堪へない」と云ふかと思へばガタピシ飛出して行了ふ。

本當に田中さんのやうでも困るけれ共水野さんと云へば今度の不仕末は如何だらう、舍生の面目を傷付けた計りか全校の名聲を毀損したと云てもいゝだらう。

寄宿舍設立以來日尚淺く規則も不完全なのに附込んで舍生の身であり乍ら不品行を働く等は以ての外だと私は思ふ、私等は日頃校長先生より自治の精神と云ふ事に就ては他校の幾倍も深く膽に銘じて敎へられて居るのではないか。

食事に十分前の鐘が鳴る、私等は此間に髮の亂れを

解き上げ手を洗ひ容を整へて食堂に集まるのである。

平生よくも見ぬ鏡を何の氣なしにじつと見る、まあ隨分色の黒くなつた事、家に居るとおッ母様が白粉をつけろの油をつけろのと仰有るから幾分か奇麗にも見えたが今は垢こそ着けね、油けなしの束髪にむき出しの眞黒な顔、着物も舎内の規則とて銘仙以上は着けた事なし、私達の目から見れば却つて淡白でいゝとも思ふがおッ母様は久し振りで御覧になつて如何思召すかしら、きつとそれでも十七や八の娘盛りといふ容かと仰有るだらう。



食堂へ入つて第一目に付いたのは水野さんの泣腫した顔だ、私があの人なら此場合とても食堂へは出られたものぢやないと思ふけれど亦あんな人の考へは別なのかしら。

舎監先生はお見えにならないから各自勝手に始める、皆ちよい〳〵水野さんの方を盗み見ては首をす込めたり耳擦りをしたりす

るのですがの水野さんも辛くなつたのかお先へとも云はずお箸置く手もそこ〳〵に席を立つ、障子の外へ身體が出るとたん誰だか大きな聲で「隨分驚いた大膽な人ねえ」と云ふ尾について、

「おゝ左樣、我々は彼の爲に顏に泥塗られる可く餘儀なくされつゝある間に彼は飯を食する程左樣に圖々しくあり得るであらう」長つたらしい直譯で滑稽家の佐藤さんが冷罵を浴びせ掛ける、皆一齊にどつと笑つた、四年の級長さんの一喝に遇つて少し靜まる。

食後小山さんと裏の銀杏の木の下で唱歌を唱つてると音樂室から得も云はれぬ妙なピヤノの音が洩れて來る、暫くウツトリしてたが急にお美津さんの事を思出して急いで部屋に歸る、加藤さんの部屋の前を通ると奥村さんが英語の暗誦か何か頻りにアクセントたつぷりで遣つてるのが聞える。

「只今」と云ひ乍ら障子を開けるとお美津さんは机に向つて悄然と坐つてる、此薄暗いのに勉強かと思つて前へ廻れば何だか手紙らしいのを擴げた上へポタリポタリと涙を滴してゐる、國からの手紙で例の想鄉病が起つたのだらうと何とも云はれず可愛想になる、急に慰める言葉も出ずぼんやり立つてるとくしや〳〵と手紙を圓めて鼻をかむ、私は一緒に泣いて遣り度い樣な氣になつて思はずお美津さんの手を握るとたんに障子の外から奥村さんが「お風呂ですよ」と怒鳴聲、又目付るとうるさいからと手早く涙を拭はせ金盥やタオルを持て廊下へ出る、奥村さんは早や影も形も見えない、庭を隔てゝ向ふを見ると湯殿の窓から湯氣が淡く立のぼつて十日餘りの月影はおだやかな光を投げてゐる。

靜かな淋しい寄宿舍の夕暮、誰かの部屋で「思へば似たり故鄉の空」と細い透る聲で唱つてるのが何とも云へず身に沁みて聞える。



金子薫園選

（天）○

見つむれば弱き光のそがなかに
　物あるけはひ日はしづみけり

若狭　津田汐汀女

評、讀んで、軽い哀愁を覚えしめる。よく瞬間の感じをあらはした作。

（地）○

ことさらにわすれむとして忘れえぬ
　この心こそおもくるしけれ

尾張　月岡久美子

評、女のものに熱したあとの心持が、つゝましやかな中に、蔽ひがたく、あらはされて居る。

（人）○

ふみゆくになよらよき野やわが素足
　青みてらしぬ春の日の色

芝區　矢島ゆる枝子

評、白い素足に若草色の春の日が射したといふ、いかにも色彩のとり合せが美くしい。

秀逸

○

花ちる日ひき入れられてわれも泣く
　命をはると君がなげくに

安房　木村しのぶ

○

二心なきあかしとを指やぶるより
　強き力を我は知らなく

本郷　金井直子

○

町はづれ雪どけ路の片側は
　芥たくなり春の夜の月

八王子　鈴木ゆき子

○

わが山の焼石の上に春の雨
　なま暖かうしと／＼ふる日

出雲　長崎春子

○

石白き脊戸の流れに衣洗ふ
　母が面みゆ山吹の花

京都　木俣津夜子

○

空黒し水又黒し白鳥の
　一むれ行くに海ほのあかる

千葉　齋藤清子

○白き花なまあたゝかく息吹する垣根に立てば月おぼろなり　青森　中村よね子

○吹く風のなまめく夜なり春月をかすめて白き雲の流るゝ　福岡　大庭たか子

○潮ゆたに寄する相摸のさゝる磯に春月ふみて君をこそ思へ　下總　岩瀬不二野

○たゞ遠き國とのみ知る姉思ひ仰ぐみ空の寒き星かな　東京　櫻木やよひ

佳作

○春の川ゆめの國をば流れゆく如くもゆるう白帆浮べぬ　下野　新村しげ

○春の月物なつかしむ若き子の息凝りしとも菜の花に照る　伊勢　多氣藤子

○君が御手肩にかゝれる心地して春の夜ありぬ花のかげかな　千葉　村越芳美

○大空は深き愁にしづむごと雲ひろごりぬ夕ぐれ時を　若狹　津田たき子

○二十にて母となりにしこの春の花見の衣袖のちひさき　長野　山本さくら

○刀根の朝あけぼの染の衣すゝぐうす紫の水の流れよ　下總　野　百合子

○春の雪ふり出でしより紅梅の門淋静かに鳥もなかぬ日　宮城　鈴木きく子

○川添の柳かくれに月いでぬ君と分れてかへるさの路　宮城　鈴木ちとせ子

○亡き姉を送る御經の今はてゝ庭の白梅またみたれちる　名古屋　森井ますみ

○いそ山の梅が吐く息春の朝こもりておぼろおぼろの月夜　横濱　鈴木まつ子

○紫にかすむ大野のあけぼのよ人まだ生れぬ世の姿して　東京　黒部せい

○我胸の戀の焰の水に落ちて燃ゆらむさまの夕やけの雲　栃木　鈴木いつ子

○美しう涙をさめて嫁ぎゆく姉をおもひぬ春雨の窓　伊勢　佐々木らく子

○うき戀の天の女神が頰にさむう涙流しゝ如き夕雨　豊後　菅原尾花子

○春の日の君はいと美し百花のかをれるまどに琴ひきてゐぬ　豊後　吉貝靜子

○わたしもりかしぐ夕げのけぶりより霞みそめたる川ぞひの里　埼玉　荻野くに子

○尋れましかげろふもゆる春の野に君とうたひし聲の行方を　芝區　松本美枝

○　香川　三村早子
雛の前ひなのやうなる御二人といはれにし日の戀しかりけり
○　豊後　立川つや子
南國の春の日に見る長閑さを胸に覚えぬ君とある日は
○　島根　櫻智子
すゞろかに冷たき影ぞ迫り來る病む君若く灯かげ淡れぬ
○　大阪　沖ふく子
千木の櫻さきみつ明けがたを胸なべて來る公達を見ぬ
○　東京　片岡晶子
漁村は貝屋根ならびあか〱とすゝけ障子に夕日するかな
○　横濱　吉川香都子
燕一羽まゆをかすめて矢のやうにもゝ咲く藁屋の軒にかくれぬ
○　美濃　芳翠敏子
そことなく梅が香ぞする心いまときめきおぼえ夕雲を見る
○　京都　伊藤あき子
相共に泣きて涙のたふとさも知りぬいつはりあらぬ一時
○　靜岡　根岸錄子
春さむきあしたを君は素足して野芹つむなりゑまひ美し
○　臺灣　林筆子
春の夜の月のおぼろにうかされて來しとぞいはむ君が門の前
○　伊豫　重松朋子
夕つく日水にしづみて金色のながれしづかに渡船ゆく
○　赤坂　和久美智子
其の初音此の窓に惜し黄鳥よ我れいたつきて歌なきものを
○　京都　實岡いゑ子
青によし奈良の都は木々の芽に小雨けぶりてつばくらめ飛ぶ
○　石狩　磯女
春くれど雪の最中の石狩は吹雪を花となかめ暮しつ
○　山梨　靜江
ねもやらで歌おもひすれば夜は更けて一番鷄のなきわたるかな
○　尾張　月岡久美子
大寺のあらゝぎ雲にそゝるあたり高輪をゑがく朝晴れのそら
○　信濃　清水あや子
梅早くちりかゝりたる湯の宿に母みとりつゝ春をむかへぬ
○　後志　霊谷夢子
夕雁は故郷のかたになきゆけり心この時母をおもひぬ
○　東京　まがき
黑髪と古藻みだれて渦まきてにえまつ如き底なしの池
○　千葉　村越芳美子
鶯の片羽をかりて細文字に書きし送らむ君戀ふる歌
○　京都　竹内緇雲
くれなゐの玉のやうなる花椿春のやま路に見いでつるかな
○　大阪　今西春江
高野山比丘尼數住む御堂の灯更けぬ山ほとゝぎす
○　芝　眞崎靜子
忘れな草蒔きしならねど花萌えて心うれしき春の一日よ
○　牛込　塚原けん子
山姫の笑める唇落つるごと緋桃の花は徐ろにちる
○　栃木　露子
たえがたく故郷思ふ夕ぐれは母の玉章いだきてぞ泣く

○　大阪　田邊松華

春の月花さく窓に美しき絹織りまさむ君をしおもふ

○　埼玉　宮倉いれ子

春なれや秩父の山の山奥に炭燒きをれば鶯のなく

○　埼玉　香津子

夢に見し君の俤偲ばれて胸安からぬ今朝の我哉

○　赤坂　和久美智子

佐保姫は春雨の曲や奏づらし小夜の扃に餘韻傳ひ來

○　飛騨　萬つゆ子

春の夜や惜くぺつゝも麿守の翁がいたる戀ものがたり

○　大阪　田中義子

春雨の夕の窓のしめやかさこの世の外の母の御名呼ぶ

○　岩代　城田市子

春がすみ君すむ丘もほのみえて風なつかしく青柳なびく

○　信濃　目瀬ふじえ子

蝶となりて名殘の花に舞はんかな歌にやせたるちひさきわが身

○　下總　岩瀬不二野

檢非違使は南に過ぎて菜種咲く十戸の小村月おぼろなり

○　岩代　木口よし子

朧夜は櫻散り入る古池に玉藻食みつゝ龜なくと云ふ

○　韓國　廣田こすゑ

かの空の青きをかつき草しきてうたゝねすれば逢はん君はも

○　香川　三好靜江

菜の花の中に家あり三月の筑波より來る風に吹かれて

○　佐賀　遠田あや子

山の村落葉焚く火の煙より暮ほ濁ごり暮れにけるかな

○　後志　海野いさみ

鶯のぬれ羽のいろの野の川は流れぬ朝の日のさす方へ

○　岩代　岸野常子

くしき香やそよ吹く風にわが魂の春はるゝごと人の戀しき

○　東京　齋藤みどり子

朝ぎりに曇染の袖しめらせて山を下りくる一むれの僧

○　日本橋　早川いな子

涙するさびしき胸の谷捨てゝ歡樂去るや花もちるなり

○　長野　古賀喜久子

雨はれしあした和ぐ日の前に若草にほひ小鳥うたふよ

○　岩代　岸野常子

春の日や青柳つゞく川原道四つ手かすみて鷗のなく

○　上總　糸久日佐子

流水にうつるわが影君がかげ見ませ若葉の山もうつれる

○　尾張　竹谷しづよ

破れたる絃琴抱きてさびしさにひとり泣きたり夕月の家

○　信濃　吉川多奘子

神のまなごいま山上に花環なげ遊ぶとおもふ春の暉

○　淡路　富田ひさゑ

この思ひ大天地に君ひとり知ると思ひぬなつかしきかな

○　伊豫　渡邊梅子

一もとの柳を笠の地藏尊春三月をもの足れるさま

○　仙臺　南もり子

春風はつばくらめ飛ぶ青柳の町の紺屋の暖簾を吹きぬ

○　　大阪　大村露子
たわ〳〵と藤の花咲く噴水の飛沫よろこび黒髪えとく
○　　廣島　藤田千瀬代子
友禪の袖そよ〳〵と風ふけば蝶舞ふに似て花のちりくる
○　　長崎　天野春子
緋のやの字あでなる姿三五人さゞめきわりぬ川添の宿
○　　播磨　森中よし
菜の花の路ゆく君が肩越しにかすみて見ゆる白旗の山
○　　本郷　富田文子
梅日和村の祭と若衆等がすまふ太鼓の遥なる社
○　　周防　八千代
何となくさびしきおぼえ戸によりて暮れ行く空を仰ぎ見るかな
○　　大阪　西戸政江子
いつまでも黒き髪して赤き頬の少女なりせばいかに嬉しき
○　　攝津　和久かつ子
風呂すると背戸に傘さす夕小雨草野すべりてくれの鐘なる
○　　下谷　久川内裕子
まとゐして研り興ずる歌人の心にしむる春の夜の雨
○　　牛込　重子
たそがるゝ里川堤茅花ぬくうなゐ等かへり雨のそぼふる
○　　佐賀　野菊
夕川の梅ちるほとりさまよへば三日月ほさう雁ひくゝなく
○　　埼玉　荻野くに子
朧夜にかゝる野路をとめくれば梅花つゞけり雲のやうにも
○　　美濃　田中文子
花守の小唄も夢と聞きすてゝまどろみがちよ春雨の宿
○　　越後　野本操子
母上のひざにもたれて物語りきゝし世こひし蛙なく夜
○　　大阪　あい子
兄君の都がたりに夜はふけて春の雨する濱寺の里
○　　名古屋　中島とみえ
化粧せる少女姿にさも似たりおもはゆげなる紅梅の花
○　　茨城　門倉こう子
骨やすめ鍬を杖にしながめやる櫻が岡をあて人のゆく
○　　越後　松永松葉子
童の鐘ゆるう響ける夏木立なほ鶯の殘りてぞ鳴く
○　　德島　平岩照子
戀人が御手にかざしゝ白梅の去年をしのべと春風の吹く
○　　神戸　越川たけの
花かげを歌思ひつゝさまよへばおぼろ〳〵と春の月しぬ
○　　神奈川　飯田榮子
紅梅の花さくあたりほゝゑみて君たちませり畫にもかゝまく
○　　下野　外塚みち子
花ちらす夕の雨のすげなさにわれとしもなく袖ぬらしけり
○　　埼玉　船津千代子
春の宵鐘の手とめし若き尼の墨の衣に花散りかゝる
○　　東京　山茶花
途すがらふとかひまいし破垣にいと麗しき山櫻花
○　　青森　三浦愛子
春の日は暮むらさきにたそがれてをち方遠く京の鐘なる



(甲) 鐘の聲

千葉 齋藤清子

鐘がなる、夕靄を分けて餘韻は長く靜かな浦に響く、聞きながら、思ひながら、春淺い夕まぐれ、五年ぶりに懷しい故鄕の汀を彷徨ふ、空には五彩の雲、地には眞砂子の金砂に波の花散らして、美しい自然は榮あれと香を包む、包まるゝ香胸に穢ありや、遠く吹き合はす松風に、逝きにし人の戀しく、幽なる潮の音に、追懷の涙しげし、夢は五年の昔となりぬ、果敢ない虛榮の幻影にかられて、親の情も仇に聞き、乙女心の一筋に都へとは志しゝものゝ、事想ひに添はず、夢は現實と違ひ、空う歸れば慈世巳に在さず、あゝは末後に言ひ殘しゝと云ふ義理結のエンゲーヂ、之のみは諧ふべきか、べからざるか、思ひは思ひを生みて七情かはるがはる五體を襲る、女はかゝるものか。

鐘がなる、香思ひを追ふて或は高く、或は低く、絶えむとして絶えず、細く長く、一杵、又一杵。

(乙) 亡兒

遠江 ゆき子

ゐる時は其れ程にも思はなかつたが、死ぬ子みめよしとやら、ほんとうに雪子はいゝ子であつた、そして物事がよく分つて、之れでも私の子だかと思ふ位であつた、おとなりの靜ちやんなんかは、同じ年でも、朝から晩まで分らぬ事ばかり言つて親を困らせられる樣子だが、それにつけても雪子の優しい聲が耳につくやうである、かうなると何でもかでも雪子より外にいゝ子はないと思はれて、私がかいなきぐちをくり返すと、母樣は聞きあいたと云はん計りに、花子の樣に云はれたつて仕方がないよと仰しやつたが、やつぱり言尾はうるんできこえたふり返へつて見ると母樣のくぼんだ目に一ぱい涙が浮んでゐた。

(丙) 玄關

東京 銀波

ワアツと隅の方で子供が泣き出すと、まだ却々かしらと母親らしいのがこぼす「本當に此處は上手でいゝけれど待たせるので困りますね」と老人が相槌を打つ「あなたお手は御怪我ですか」と後に居た婆さんが訊くと「え、小刀で」と答へる「さうですか、其なら荒神樣に鹽を少し上げると速ぐ治りますよ」と云ひながら婆さんは歸つてしまふ。隣に居た書生が馬鹿にして居る、其樣事で治つたら醫者は食へやしないと大きな聲

で云ふ、皆一時に突ひ出した。

祈願

大阪　中村玉枝

聳つくばかりの大杉は、月の光も洩さず生ひ茂つて居る、夜露にシツトりとぬれた朽葉を踏んで、幾つかの石段を一息に上ると、白糸のやうな筧の水が、小さい音を立てゝ、御手洗に小波を寄せて居る、つと寄つて、手に受けると、むせるやうな苔の香が、鼻を打つ、折からサッサッと衣づれの音がして、若やかな女が口に何か念じながら、足袋はだしのまゝ石段を下りて行く。私と同じ境遇の人かと思ふと、其の淋しい姿が妙に胸にしみる。(入賞)

待つ夜

本所　木村歌

鐵瓶の湯は徒らに水蒸汽と化し、お鍋の煮は崩れさうだ、炬燵にはお召物が暖まつて居る。

車の音がする、今度こそはと衣紋つくろつて立かけると、アヽヅンヅン行き過ぎてしまう、又かとガッカリして坐りこんで、「一體今晩はどうなすつたのだらう」と火箸で火を積んだり崩したりして居ると、今日新聞で見た櫻井少將令息の事が心に浮ぶ、若しやと思ふと、どうも氣になつてゝ仕方がない、馬鹿なと自分で自分を叱つて、編みかけのレースを手にしたが、心此處にあらざればなかく針が動かぬ、時計のチクタクが個り冴えて、外は死んだ樣に寂しい、常には見向た事もない廣告まで讀んで了まつた新聞を無意識にとりあげるとたん、頭の上で俄然恐ろしい物音がして、チユーく、鼠の戰國開始だ、ぎよつとして縮み上つた折柄、何時起つたか車の響が正しく門前に止つて、待ちに待つた良人の快活なる聲で「お待ち遠う」、私はホントニ生返つた樣な氣がした。(入賞)

故郷の天使

相模　婦美子

故郷の事を思ひ出して泣く時に、妹の事を考へると、直ぐ又思はずほゝゑむのである去年の夏歸省した時、私は其大きくなつたのにおどろいた、母上がさあれーちやんが歸つたからと云ふと、ひよいとこちらをにこつきながら見た顔は宛で畫にある天使の樣だつた、私が御出でと云ふと、目を細くして白い洋服の裾を小さな手で一寸つまみ上げながら、よたよたあるいてくる、なかしくてくすぐおんぶすると、後から私の顔をのぞいて居た。(入賞)

春の夜

小石川　高橋ちか子

庭の白梅は雪と見まがふばかりにいみじう咲き匂ひて、床しき香の、風ならで身にしむ心地、照りもせず、くもりも果てず、朧に匂ひて月はいと床し、夜も更けゆきてしづけき折ゆるく吹く風に梅が枝のゆらぐさまなど此の世の物ともおぼほえず梅こそ春の匂ひなれ、月こそ宵の光りなれ。(入賞)

失題

知多の里　月岡久美子

○今日は日曜だからと云つて名古屋の中學に居らつしやる兄樣がお友

達をつれていらつしやつた、三時頃おしるこを作つて出したら、兄樣は相變らずよく召上る、隨分召上るのねと云つたら、ナアニ此れでも僕が一番少ない量さと仰しやる、マアそれでも？　と云つて思はずわらつた。

○明日お雛樣にかざるのだから美ちやん（人形の名）のお被布をぬつて吳れと文さんに賴まれたので、此間大丸で買つた紫地に蝶を白でぬいた縮緬で作つてやつたら、文さんは大喜びで、幾度もお禮を云つた。

○昨日久しぶりでお島田に結つたら、從姉の光さんがあそびに來て、マア大層よく似合つてよ、はやくお嫁さんにおなりなさいなと相變らず口のわるい事ばかり云ふので、ほんとうにきまりがわるかつた。（入賞）

なつかしい妹

播磨　小寺いさを

此間故鄕の妹に手紙を認むる時とふと思ひ出して、「鶯のさゝなき聞ゆ手洗ひの鉢にさしたる梅の梢に」と書いて送つたら、「鶯のさゝなき聞きて歌よめる君のすがたの偲ばるゝかな」と返事が來た、調はいと拙いけれども自分には何ともいはれぬ嬉しさを覺えた、暫く相見ぬ妹が戀しく親はしうて妹からの便りが何より待たれる。（入賞）

寒紅梅

牛込　平塚白百合

水晶の粉を篩ぶるひにでも掛けたやうな雪は、ほんのりと寒紅梅の色をとかして輕らかに積つてゐる。寒さうに羽ぶるひしながら築山の石燈籠の中へはいつた雀は、首をすくめてぢつとしてゐる、梅枝がかしいだのか、雪が一かたまりはら〳〵と落ちると、先の雀は云ひ合せたやうに泣きながら下を見下した、雪はた

やみなく降りつゞいて木立のふりがいろ〳〵に變つてゆく。（入賞）

片　昔

熊本　淺井千代子

引つ切り無しに忙しい體を、やつと幸子を寢かし付けて、昔なつかしい文机によつて料理の本を繙いた、暖な春の日が窓近う散り行く櫻を繪の樣に照らして、其の美しい影が机の上へ落つる、吁這麽日で有つた、思へば四年前の春！、校庭の桑樹の下で、親友の花さんと、お定りの先生の惡口、さては未來の希望等を語り合つた時、吁、其時、私は源氏徒然草の類を讀まうとこそ思ふたけれど、まさかたまに手にする本が割烹の本で有るとは夢にも思ひ設けなかつた、噫花子さんは。と恍惚と思出に耽つてる耳もとへ、ピアノならぬマーチならぬ幸子の泣き聲。（入賞）

或る夜

長崎　古賀喜久子

良人は今夜宿直でお留守である、お夕飯を一人淋しく頂いてしまふと、つい四五日前お宮參りをした香が、さも乳ほしさうに泣き出したので、靜かに乳房を含ませると、チュッ〳〵と猩紅の可愛らしい口で吸ひながら、やがて又うと〳〵と眠つてしまつた、田舍の夜は又格別に淋しい耳がズーンと遠くなる樣な氣になる今の中に洗濯物でもと思つて、燈を一寸細め、むつき片手にそつと裏口へ出ると、冷い夜の氣はサット肌をなでる樣で、川岸の漁家も霞の中に包まれて、灯ばかりチラ〳〵と見える渡場の方で「オーイ」と呼ぶ聲が次第に細つて、朧の月に消え入る樣である、盥の水が靜かな波紋を造ると、春の月影が其中でゆら〳〵と搖れた（入賞）

移轉

四谷　石田まき子

臺所は北向きで寒かつたし、庭は藪で蚊が多くて、隨分住み難い家だつたが、いざ去るとなると何となくなつかしい、流し元に植ゑた山椒には香ばしい若葉が出かゝつて居るが、私共が退いた後には誰が摘む事やら此棚も越して來た時に、ビールの空き箱で造つたんだが、まだ確つかりして能く持つてゐる、此家に眠るのも最う今晩限りだ。(入賞)

亡き人

播磨　森中よし子

土橋を渡つて三本杉を通りぬけると、伯母樣の家は早一町にも足らぬ、鼠色の壁の塀に配合のよい緋桃が春の雨の中に、薄絹に包まれた樣に見える、おー美しい緋桃、優しい春の雨、それが妾には却つて悲しい、去年の事である、霧のやうな細い雨の中に從姉と手を把つて塀を出たとき妾は「まア奇麗！」といつた、從姉は「緋桃ッ？」とにつこり笑、それから「あなたにならう！」と美しい指先に力をいれて、桃の枝を、一寸眉根を寄せてゐます。

あゝ其優しいお聲、美しい眉根、緋桃は咲いて、絹の雨も去年のまゝであるに、其人は早世に逢へぬ人となつてゐる。

嫁ぎし都の友へ

麹町　大町まさを

いかに在しまし候や、此日頃花の都にスヰートホームの御暮し、さこそと御羨しう存じ居候、當地はまだ灰色の空より時に白き物の落ち來るを見るにつけ、春は何處にあるかと思はれ申候、さあれ時には春雨のそぼ降る宵、歸省中の兄が尺八と、私が琴との合奏に、過ぎにし春を思ひ偲ばする事も御座候、オヽヽ永久に幸多く在り給ふ樣陰ながら御祈り申上候。

小猫

山形　阿部英子

長い緣がはを奇麗にふいて仕舞つて、後をふり返へると、丁度梅の花を散らした樣な小さな足跡をつけて、私の最愛の虎は、圓い大きな眼を見張つて其美しい鬚を動かしながら、尾を振つて一心に私の手の動くのを見詰めて居る、私は思はずほゝ笑んだ。

發車

滋賀　さみどり女

もう去年の事である、妾は神戸の觀艦式を拜觀して、伯母がもう一日と止めるのも聞かず三の宮驛へ來た、雜踏の中を押しつ押されつして漸く乘車したが、もう鮓詰同樣、身動きも出來ぬ、汽車が重さうな響して搖ぎ出す剎那、改札口から走り出でこれに乘らうとする婦人がある、よく見れば妾の親友の山添定子さんである、妾は人を押し除けて、窓口から手を出して此處へと招んだ、友は覺つて此方へ走つて來る、髮は亂れ、手に持つ風呂敷は解けた、無情な汽車は刻々に遠くなつた、妾は窓から顔を出して乘り損れた友の樣を見つめて居たが、神戸の市街は段々遙かになつた。

午砲

京都　美智子

やっとのことで釜の下がもえだした、大喜びで先程肴屋がもってきた御魚を料理する、折から豆腐屋のこゑがしたから、走ってかど口へ出ると、もう行きすぎたあとであった、よび戻す勇氣もなくかへると、三毛猫が一目散ににげだす、何かと見れば鮑だゝしや、肴は影も見えぬ、釜の下はくすぼる、御座敷では御手の音がする、午砲はドンとなった。

桃咲く里

靜岡　齋藤芳江

家の人はみんな耕作にでもいったのであらう、緣側に婆さんが一人、何か縫物をしながら燈台守をしてゐる。

門前には桃の花が眞赤に咲いてゐる、時々ヒラ〳〵と散っておちる、その下に家鷄が二三羽クッ〳〵と餌を漁ってゐる、「こんちはえゝ鹽梅で――」、肴屋が籠を舁いでやって來た、籠を卸して緣側へ腰掛け、ぷかぷかと煙草をふかし始めた、何處からかチャン〳〵といふ機織る音がきこえてくる。

老いたる心

遠江　野末玉蕋

「空に轉る鳥の聲」、細い透き通る樣な聲で歌ひ乍ら緣側に腰を掛けた。妹のあどけ無い姿が。大きく障子に映る、折々訪れる風に、下髮の先きがパラ〳〵と散る、私も一度は遭際時代が有ったのだと思ふと、夢の樣に過ぎ去った昔が一層懷しく、何でも無い事に笑ったり怒ったりする。妹の身が羨しい、あゝ年の瀨の齎す千摑は。かうまで人を變らせるものだらうか、若い心の花は、もう失ったのではあるまいか、未だ廿年に足らぬ此身で、あまりに萎れ樣が早過ぎはしまいか、と種々考へて思はず淚を流した、心付いて妹はと。見るとおき忘れた人形のみが淋し相に力の無い夕日をあびて居た。

爺やの家

麻布　豊島君江

日本晴の暖かな日に、お竹を連れて、昔召使たった田舍の爺やの家を訪れた、胡蝶を追ひながら、絹布の樣な軟い若草の上を行くと、軈て岩の間を清水が流れて、あぶない丸木橋が懸って居る、昔爺やに手を引かれて渡ったことを思ひながら渡るとそこが爺やの家で、大きな牛が繋て居たのに驚かされて、胸をドキつかせながら家へ入ると、爺やは「オヽ嬢樣か、立派な奥樣になんなすったなア」と、暫し見つめて嬉し淚、樂しい話に一日を暮らして、桃の花を澤山貰って歸った。

花のもと

紀伊　松島双葉

いたつきの身を慰めんとて友のたまひし櫻の一枝、色美しうも咲きいでしかな、花は眞盛り、風和ぎ、庭の午を、ひら〳〵とまひくる胡蝶追ひかけて、紅もゆるおさげのリボン落してなきしよ汀のほとり、月夕のにほひこぼるゝ花の下、歌ふ唱歌の聲も妙に、へだてぬ友と手をとりつ、打さまよひし學びの庭の春の宵、樂しかりしも三年の昔、來ん年はから、そろって吉野山にものせんとこそ契りしものを、母君はとはに去りてかへりきまさず、身はやみて病の床にすぎし幾年の春をしのぶ、あはれ小瓶の花や花や、堪へがたきわが思ひを知るや知らずや。

令嬢倶楽部

○[illegible]　竹石はるよ

私の日記も大分年を老りました、つけ初めてですか、小學校の避暑避寒の時、師の君から、いひつけられたが元ですよ、おかげで趣味多き日毎日毎の樂みの習慣がつきました、書くのは初は一寸した事ですが苦しく忘れ勝ですよ、夫が習慣となつて今は書かんと何か物足らぬ心地がしてまゐりました、外に出た時は手控えにして置いて轉載して居ます、「習ひ性となる」とは誠によくいはれて居ますね。

改良も出來ましたよ、初は朝食を食べた、晝食した、夕食を終えた、晩た起きた、手水を使つた、なんて書いて居ましたが、是は常のことゝ今は書いて居ます、夫から例外に重な事なぬき書きしてハツキリとさせ、後には月の終り、年の終りにも重要の記事や感想を表記して置きます。

利益ですか、字も上手になれますが、已往數年間の事を較べれば、眼の前にそれがチラツいてなかなか樂しみです、年若き日記の今でさへ、斯うですもの、老後折々開いたら若い過去もいろいろ回顧されて、今昔の感多々だらうと獨り微笑して喜んで居ます、なが生きでもして妾が筆が鈍かなかつたら子供につけて貰はうと、まだ子供も無いですが考へてますよ、さうお笑ひ遊ばすな、實際ですもの、今は心地よくてたまりませぬ、親しき友にも大分すゝめて居ます、皆様に若し記けられて居ない方がありますなら、お思ひ立ち遊ばしたらどうですか、隨分面白いものですよ、おすゝめ申します。(乙賞)

○大和すみれ

櫻花爛漫たる好時節となりました、皆々様益々御達者で文壇の爲め大慶に存じます、本誌も愈々發展して誠に結構で厶いますが、もう少し讀者文藝に文學的の論文、叙事文、韻文などを加へては什麼でせう、それから體裁はどうか知りませぬが、表紙畫を讀者から募集しては如何です、隨分趣味が多からうと思ひます、記者様どうかお願ひしますよ。(丙賞)

○四谷銀波

女は本當に損なものね、兄様なんかは始終お友達と旅行したり歡留多會にいらしつたりするから私も行きたいと云ふと、女なんかと直ぐお父様にしかられてしまふんだもの、兄様と喧嘩するといつも私が悪くなくつても女のくせにときつとお小言。

そのくせ靴下を編んでくれとか花を生けてくれなんてよく頼むんだのに。

本當に男はづるいわれ。(秀逸)

○むらさめ

ほんとうに東京へ行きたくてしかたがないわ、どうせ一生に一度しかない青春の血潮躍る時代を、華々しく東京で暮したいと思ふ、それもここが自分の故鄕ででもあるならあきらめるけれども、なんぼお父様のお務だつていやになつてしまふ、去年中には歸京するかと思つてたのに、澄子さんなんどほんとうに羨しいわ、昨日は某子爵家の園遊會に行つたの、今日は某伯爵家の夜會に招待されたので、一々私へあてこすつたやうに報告するんだもの、ほんとうに癪に觸るわ、お父様に言へば「なーに東京へ行つてごらん、華族なんて掃くほどある、地方になればこそ鳥なき里のかうもりとやらで、いばつてならるるぢやないか」なんて仰有る、隨分だわ、人の心もしらないで。

笑話

○まづい菓子

神田　花子

母「花子さん、お客樣に御茶を差上げて下さい其れから此のお菓子も」、花子はかしこまつてそれを客間に運ぶ。

父「さあ一ツお摘み下さい」、客「どうぞおかまひなく」、父「花さん是れは母さんが作つたカステーラだらうれ、どうもまづくつて食べられないよ」、花子「あら、お父さん、是れは今此の御客樣が下さつたのですわ」。（丙賞）

○離縁の復活

福岡　竹石はるよ

大そう仲の好い夫婦が、何か事が破裂して離縁する事となつた、妻君美々敷粧ふて将に辭せんとすると、先生曰く、「お前はよく拵え晴れのする女だれ、モー歸る事を止めたらどうぢや」（丙賞）

○饅頭

秋田　大澤登久子

武ちやんに赤ちやんのお守を頼んで奥の間で遊戯をして居ると、却て泣き出したから「武ちやん、どうして赤ちやんが泣くの？」と、訊いて見ると、武ちやんは、「僕がネー、赤ン坊の持つてる御饅頭の食べ方を教へてヤツたら泣きだしたの」と言つた。（秀逸）

○時計のハイカラ

山形　村井紫子

妹「姉さん、時計の針が一緒になつてまはつてゐるよ。」

姉「アラ、ほんとに、だん〳〵開けて來たんだから、時計の針も新婚旅行をして居るとこなんでせうよ。」

妹「オヤマア、時計も餘程ハイカラになつたのれ。」（秀逸）

○無聊

伊勢　尾北つじえ子

或る妻君が旅行先の主人の許へ、「妾何んにも爲すべきこと、御座なく候故、一筆示しまゐらせ候、妾は何んにも申上ぐべきこと御座なく候故、玆に筆止めまゐらせ候かしこ。」

○割算

大阪　みどり

兄が今年入學した花子に算術の復習をさせる、「此皿に蜜柑が六つ有るが、兄ちやんとお前と分けるのに何個づゝ分けたらよからう」。花子「二つづゝ」。兄「違ひませう、ほら、兄ちやんが二つ　お前が二つ、まだ二つ殘るでせう」。花子暫く考へたが　花子「わかつてよ、小兄ちやんに上るのだわ」。

○日が永くなつたから

播磨　森中美津子

土曜日の晩に、お湯からあがつて、中の間の柱時計を見ますと、五時三十五分の所で止つてゐますので、母さんにさういつたら。「オヤ、何時も日曜にネヂをまくのに、何故、一週間もたなかつたのかしら。」とおつしやると、今年二年生の鈴ちやんが物知り顔に、「此頃は、だいぶ、日が永くなつたから、一週間もたないのだわ。」と申しました。

○三ツ子に淺瀬

尾張　榊原幸子

母「なみ子やお前、頸の迷子札を知らないかえ」

子「阿母ちやんが失くさないやう、氣を付けてやれと仰有つたから、私が取て藏つて置いたの」。

懸賞募集　驚く手紙（〆切四月廿五日）

僞はらざる心の籠もれる手紙文の募集

師父の與へし教訓、長上よりの警告は、踏み迷ふ孤獨の心に前途の光明を與へ。月は雲に隠れ、花は嵐に挫かる、這の斷腸悲慘の詩的信翰は又よく萬人の心を悼ましむ。朋友親善の間無限の慰藉を籠め、慈母の眞情筆端涙あり。これを披いて人情の秘密を味ひ、これを收めて世路の艱嶮をさとる、蓋し一片の至情よく神明に通じ、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるものあればなり、書翰の功德亦大ならずや。

來る增刊號に於ては本誌が多年秘藏せる婦人の手紙十數種を一括して「驚く手紙」と題して世に示さんとす、此の機會を以て普く淑女の心血に成りたる書翰文を募り、集めて錦上更に花を添ゆるの盛觀を期せんと欲す、江湖の諸姉冀くは其麗はしき感情を披攊して以て本誌の志を成さしめ給へ。

募集の手紙文は成可く廣義のものたるべし、廣く人事に亘り、人情の委曲を盡し、感ずべく、驚くべく、泣くべく、笑ふべく、悲しむべく、喜ぶべき人生の奥秘を捉へ來つて微細を洩さず、單に美文として價値あるのみならず、又よく婦人の社會觀、人生觀を察するの好資料たるべし、文體は候文體、口語體、隨意たるべきも、大要書翰文の例に擬へて人に寄するの體裁を具ふべし。

賞金

一等	貳拾圓	一名
二等	拾五圓	二名
三等	拾圓	三名
四等	七圓	五名
五等	五圓	十名

規定

▲紙數は長短隨意なれども半紙約十枚內外を程度とす

▲當選したる文は五月十五日發行定期增刊に掲載す

▲賞金は發表の當日爲換券にて送達の事

▲原稿は「增刊手紙文」と表記して女學世界宛の事

學校消息

◎奈良女子高等師範學校

今度新設されたる同校は、東京女子高等師範學校とは學科の區分、入學の方法等に於て少しく異なる所あり、學科は未定なれども豫科及び本科に分ち、本科に國語漢文科、地理歷史科、數物化學科、博物家事科を置き、選科として圖畫、裁縫、手藝、園藝等を置きて生徒に其の一科を修めしめ、修業年限は豫科四ヶ月、本科三年八ヶ月の見込の由、入學者は、普通、師範學校高等女學校の優等卒業生中年齡十七年以上二十二年未滿、夫を有せず、地方長官の薦擧せるものゝ中より選拔すれども、尙ほ其他に特別の取扱を許す者もあり、入學期は四月下旬の見込なりと云ふ。

◎東京音樂院

三宅響樹氏の校長なる神田區今川小路二丁目十二番地同院にては、敎授の熱心と成績の佳良とに依りて日々隆盛となりつゝあるが、四月四日新學期を開始し、普通科、高等科、唱歌科、ピアノ、オルガン、ヴアイオリン及び受驗科の各科へ女生徒五十名を募集する由、因に同院講師は東京音樂學校敎授十數名なり。

◎東洋高等女學校

村上專精氏の經營に係る小石川區丸山町の同校は、來る新學年には、第一年一百名無試驗入學を許し、二三四の各級も缺員若干名募集する由、尙ほ同校は豫て壯大なる講堂を新築中なりしが、其の落成は近々の中ならんと云ふ。

◎東京女子音樂傳習所

麴町區飯田町二丁目三十一番地の同所にては今四月、唱歌科生四十名、ヴアイオリン科生二十名を募集する由なるが、入學出願期日は四月七日迄にして、音樂の素養無き者も入學を許すと云ふ。

◎東京實用女學校

麴町區飯田町四丁目三番地の同校にては、今度公爵夫人二條洽子の方が總長として盡力せられ、新に校外生科を設くる事となり、親しく登校する事能はざる者の爲に講義錄を發行して實用的智識技能を授くと云ふ、講義錄は每月二回にして一年半にて修業、授業料は一ヶ月金四十錢。

◎興風會女塾

米國文學士田添幸枝女史は、今度本鄕區駒込淺香町七十番地に婦人興風會と云ふを創立し、其の附屬事業として小石川區林町八十一番地に塾の如き女塾を設けられたり、其の目的は、廣く女子に會話、家事、英語、裁縫其の他の手藝を敎ふると共に、寄宿舍を置きて他の學校へ通學する女生徒をも收容し、その素養の足らざる所は親切に授け、及び其の監督を爲すにあり、月謝は一圓五十錢、寄宿生は食費七圓、舍費一圓五十錢以上。

◎白牡丹の手藝展覽

京橋區南傳馬町の大西白牡丹にては、各所の女學校へ交涉して生徒の製作品を集め、本月一日より同店樓上に其の手藝品の展覽會を催すとの事なるが、これには一般婦人の出品もありて審査の上夫々賞牌を贈るとの事なれば、定めし學校派、非學校派の美を競ひし出品を見る事ならん。

◎和歌新辭典　金子薰園著

この書は新時代の和歌を作らうといふ人の爲めに一の參考書として作られたものである。それ先づ四季、無季、人事の三大門に別たれ、それが又幾つかの小部門小類題に區分せられてある然うして一題每に新しい類語が作り集められてそれには簡明な解釋と用途とを示して居る。別に「類語の扱ひ方」といふものを添へて、容易に一首に纒られ得べき方法を說いてある。尙、此類語の次には、必ず作例が附せられて居るが、ほぼ當代の重立つた作家たちの代表的のものは、こゝに網羅せられて、一々鼇頭で評釋を加へてある。簡潔に要旨を說き明して、本書の一特色を爲して居る。(飯田町三新潮社發行、定價六拾錢)

新刊紹介

▲新編オルガン教科書　天谷秀著

本書は著者が多年東京音樂學校に於て實地教授上の經驗に依り、在來の師範學校、高等女學校教科用書の教授上の不便尠なからざるを鑑みとして編まれたるものにして、教材の選擇、順序及び運指法等に至る迄嚴密の注意を用ゐあり、印刷鮮明、裝釘優美、又家庭用としても適宜ならん、定價金五十錢、神田區錦町修文館發行。

▲常識道德　佐治實然著

著者が物に觸れ、事に處して得たる經驗に基きて說きたる一種の處世法にして、項を分つ事十數章人生、常識、時間、約束、名刺、郵便、訪問、談話、姿勢、服裝等の事項に就て述べられたるが孰れも著者獨特の所說にして有益なる文字なり定價金一圓、本鄕區駒込東片町新公論社發行。

▲少女の操　宮地竹峰譯

本書は佛蘭西の作家ベルナルザン、ド、サントピールの著作「ポールとバージニア」を譯したるものなり、原作の出でたるは既に百年の昔なれども、其の趣味は今日尙ほ淸新なるを失はず、惜むらくは譯文に今少しく力を入れられたらばと云はる節なきにあらず、定價金四十錢、府下巣鴨町內外出版協會發行。

▲男子東京遊學案內　今井翠巖著

先づ上京の準備より說き起して、學校の種類と選擇、受驗と入學の心得、各學校修業年限、學費の豫算、上京の注意、着京後の心得、宿所の選擇、圖書館　博物館等を述べ、次に各種學校の詳細なる規則を揭げ、附するに東京實測明細地圖を以てする等、苟も遊學者が知らんとする所は殆んど收めて漏すなし、定價金五十錢、博文館發行。

▲田鶴子　篠原嶺葉著

農度か苦境に陷りしも常に奮鬪と努力を續け居る一靑年が一時嫉妬と同情の的となりしも、途に消き愛が勝利を制して二人相携へて目出度留學の途に上ると云ふ筋の小說なり、定價金九十錢、日本橋區下槇町如山堂發行。

▲墓場　木下尙江著

先に懺人の自白、火の柱等を出して世を驚かせる著者は、其後暫く消息を斷ちしが、今や又此の著を出して世に其の所信を問はんとす、久久にて故鄕に歸りて吾人の働く感は、此の著に於て最もよく描かれたり、定價金三十五錢、本鄕區弓町昭文堂發行。

▲汲泉（第廿二號）　跡見校友會發行

こは跡見女學校卒業生に依りて維持せらるゝ雜誌なるが、口繪には跡見花蹊女史が古稀の頌影、及び女史の筆に成る老松、其の他生徒の寫眞等を揭げ、記事は歷史上より見たる日本の婦人と家庭、新帝の御聖旨、其の他校友諸氏の名作佳什を以て充たされ、孰れもゆかしき本校の校風を發揮し居れり、非賣品なり。

▲女子蠶業講義錄（第一號）

男爵松平正直氏を會頭とする大日本蠶絲會が女子蠶絲教育の普及を計らんが爲に發行せるものなり、內容は何れも專門者の擔任にて蠶絲通論、栽桑法、桑樹栽培法、製絲法、屑物整理法、家事經濟、育兒衞生、裁縫、料理法、野蠶法、其他數項あり、每月一回、十ヶ月にて修業、講習料は會員は金貳圓、其他の者は金參圓を一時に納むるを要す、神田區錦町三丁目大日本蠶絲會發行。

▲淑女の美德　博士シアラー原著　皆川正禧譯

淑女として當に具ふべきの美德を說きたるものにして、他愛、快活、愛と犧牲、態度　衣服の嗜好、音聲と談話、家庭の生活、思慮なき娛、書籍並に讀書等皆面白し、定價金五十錢、府下巣鴨町內外出版協會發行。

讀者文藝 懸賞募集（〆切四月十五日）

▲婦人盛裝の寫眞（結婚前後）

▲大家族の集合寫眞

▲婦人會婦人團體集合寫眞

▲才媛筆蹟

▲家庭重寶日用百事便

▲食卓日記（晩餐の時を材料として）

▲各地風俗の變遷

▲笑話 ▲短文 ▲和歌

▲令嬢倶樂部（投稿隨意）

投稿規則◎笑話、和歌、短文、令嬢倶樂部、百事便は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎筆蹟は口繪の寸法に依る◎名宛は博文館内「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品

△寫眞は甲參圓、乙貳圓、丙壹圓

△食卓日記、筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、丙五拾錢

△和歌、短文、笑話、百事便、令嬢倶樂部甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢、秀逸參拾錢

△風俗の記事甲五圓乙參圓

每月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢

四册（三ヶ月分）……前金七十五錢

八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢

十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢

內（定刊數……十二册 增刊四回……一、五、九、十一月價格同一）

郵稅 一册 二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

不許複製

明治四十二年四月一日發行 第九卷第五號

編輯兼發行人 松原岩五郎

印刷人 山田英二

印刷所 博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

電話 本局 三百三番 二千六百二十番
千十八番 三千二百二十九番

電氣帶發明者



サンデン博士之像

奇効可驚

主治効能

アクチナ



登録商標

眼、耳、鼻、咽喉、船暈頭痛ニ奇効を奏す（説明書無代進呈）

サンデン電氣帶

主治効能

神經衰弱諸症－腦神經衰弱－不眠症－胃擴張－胃腸病－常習便秘－消化不良－生殖器衰弱及無氣力－遺精－夢精－早漏－遺尿－腎臓炎－糖尿病－其他一般内臓の衰弱－腕部及腰部神經痛－諸神經痛－坐骨神經痛－頭痛－顔面神經痛－リユーマチス－腰痛－脚氣－婦人諸病－ヒステリー－貧血症－月經不順－子宮病－憂鬱症－脊髓－中氣－産後及病後一般の衰弱症

●本具に依り慢性不治の難病を根治したる數百萬

（説明書無代進呈）

定價

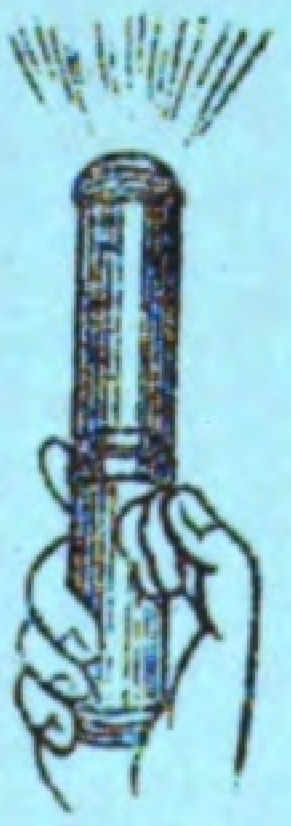
舶來品

三號帶	附屬共	金八圓
四號帶	同	金拾五圓
[illegible]號帶	同	金貳拾圓
六號帶	同	金貳拾五圓
七號帶	同	金參拾圓

和製品

戊號帶	附屬共	金五圓
丁號帶	同	金七圓
丙號帶	同	金九圓
乙號帶	同	金拾壹圓
甲號帶	同	金拾參圓

懷中電燈 探見燈 電燈





●定價

最上	金四圓半
上等	金參圓半
並品	金參圓

大形

最上	金四圓半
上等	金四圓
並品	金參圓半

小形

最上	金四圓半
上等	金參圓半
並品	金參圓

サンデン電氣商會

●横濱支店 横濱市相生町四丁目六十三番地電話一九三一

●大阪支店 大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側

●本店 東京京橋區尾張町二ノ一五 電新四一二二 振替口座東京一八四七三

見よ数百萬の難病者を全治せしめたる

女（後付の一）

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱君撰

日本歌選

上古の卷 洋裝四六判總クロース（正價八十錢）上製紙數約三百餘頁（郵稅六錢）

上下二千載、我が國文學の精髓として、國民か趣味好尙の中心たりし和歌は、その載錄の傳はれるもの凡そ幾千卷。その歌數に至つては無慮幾萬首。爲にこれを悉く涉獵せむこと、專門の士と雖も容易ならず。研究に志ある士をして、むなしく望洋の嘆あらしむ。佐々木氏乃ち日本歌選の計畫あり。古來の選集家集は諸書に散見するものゝうちより、各時代各作家を代表すべき作品を選出して、わが國歌の精髓を示さる。氏が該博の學識と、嚴密なる批評眼とは、よく傳統あり歷史ある我が二千年の和歌を縮撮し、選出し得て餘蘊なかるべし。茲に第一卷上古の卷。稿成りて刊行せらる。即ち上世歌史の第一期第二期、紀元前より天武帝までの歌謠を輯錄す。而してこの兩期の作は其數少く、かつ普く諸書に涉りて採錄せるものなきを以て、本卷は特に例外として、撰擇を用ゐず、紀記を始め風土記その他の古書よりすべて輯錄せり。從つて本書は、上古歌謠を研究せむとする士にとりて最も完全なる資料たり。かつ卷末に、上世歌謠の概觀といへる論文を附し、第一に出處製作時代に就いて論じ、古來の假託の作を辨別し、第二に兩期の歌謠の性質とその變遷とを論じ、第三に祝詞壽詞語詞に就いて論じ、第四に兩期の歌謠研究の歷史を記述せり。又附錄として、研究の參考書目、及び時代句數歌體等によりて分類せる表、時代と作者とによりて分類せる表等を添ふ。わが國文學を研究せんとする人和歌に志あり、歌學を學ばむとする人の爲に必須の書なり。

佐々木弘綱翁遺著 佐々木信綱君校訂

和歌 世々のあと

全一冊

洋裝四六判美本 紙數百四十六頁 正價二十八錢 郵稅四錢

和歌世々の跡は明治の歌壇に多大の功勞ありし佐々木弘綱翁の遺著にして、國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、和歌の小歷史として、作歌の模範として、獨習用に又高等女學校の教科書等に、最も適當なる書なり。長く草稿の儘秘藏せられしを、昨年翁が十七年祭に、翁の鄕里伊勢石藥師村に紀念碑を建設するに際し、その紀念として、息信綱氏の嚴密なる校訂を經、かつ近世歌人年表和歌系統圖を附し、添ふるに井上、小杉、木村、芳賀博士、本居侍講の追悼の文章を以てす。國文和歌に志ある人々の、必ず座右に備ふべき書なり。

東京本町 博文館

佐々木信綱君著

歌學論叢

全一冊

洋裝四六判總布製 美本紙數五八〇頁 正價金壹圓 郵稅八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歷史を講ぜらる、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て「和歌と時勢」「和歌の將來」「歌學の根本」「上世の和歌」「歌格の研究」等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て「人麿と赤人」「貫之」「西行」「實朝」「景樹」等を論評し、或は「仙覺以前の萬葉研究」「戶田茂睡」等精細なる考證あり。或は「萬葉集の女歌人」「建禮門院右京太夫」等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又「六人部是香」「大隈言道」「野村望東尼」等未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國文學史上に一新事實を提供せるもの。其他「萬葉集私見」「近世歌人雜話」「家集のいろ／＼」等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博なる識と淸新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より新世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べくして苟くも和歌に志あり。國文に興味を有する人々にとりて必讀の好著なり。

女（後付の二）

最近調査

女子東京遊學案内

森鷗外君　嚴谷小波君　坪谷水哉君　大町桂月君　序

今井翠巖君著

●附錄　東京實測明細地圖

全一冊洋裝四六判美本
紙數……約四百頁
各學校寫眞版十頁挿入

（近　刊）

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替東京二百四十番



女子遊學の好指針

近時女子教育の勃興と共に、各種の女學校年を逐つて其數を增し現今都下のみにても實に百を以て算するに至れり然り而して從來地方の女子が是等の學校に遊學する案内として刊行せられたるもの甚だ多きも、而も此種の編作は概ね粗漏杜撰單に各學校の規則を拔萃配列したるが如きものに過ぎず甚だしきに至りては、數年前既に廢滅せるものをも其儘記載し却て遊學者を惑らしむるの恐あり概して遊學者の良指針たり、好伴侶たるべきものなかりしは、著者の夙に遺憾とせし處なり、是に於て本書は此缺陷を補はん爲めに、普く都下各學校に亘りて其最近の組織、學則、校風等を詳細に調查し、凡ての遊學に關する事項は細大漏さず左の各項に區別說示せり、されば女子が將來志望する學校撰擇の上に好指針たるは勿論亦敎育界の一斑を窺ふことを得べければ各學校の經營上絕好の良參考書なり。乞ふ一本を備へよ。

▶本書目次◀

●遊學者指針‖上京の準備遊學の目的、遊學の時季、志操と決心◉學校の種類と撰擇‖學問の早道、學校の撰擇、官公私立高等女學校、官公私立專門學校◉受驗と入學の心得‖受驗の各科目、答案の書方、身體の檢查、年齡の制限、身元保證人◉各學校修業の年限‖高等師範學校と女子大學、學習院女學部、官公私立高等女學校、官公私立專門學校◉學費の豫算‖入校金及授業料、寄宿又は下宿料、書籍及諸雜費、袴及制服費、月額及年額比較◉着京の注意‖各學校入學期と學費、東京迄の汽車旅行、各港汽船便、旅行中の注意◉着京後の注意‖市內の交通、停車場と人力車賃、電車、鐵道、需要品と勸工場、寄留屆と區役所、書信と郵便局、學友と交際◉宿所撰擇‖下宿の種類と位置、完全の寄宿舍と學校、嚴肅懇切なる監督、特に本書愛讀者に告ぐ、本書購讀者の特典◉衛生上の注意‖健康の要素、運動と體育、公園と動植物園、精神的衛生、疾病と豫防、醫師と病院◉卒業後の心得‖理想と實際、品性の修養、婦人の天職、新婦の務、處世の長法、女子と職業◉圖書館と博物館
●各種學校規則部別‖高等普通女學校△技藝及裁縫△美術及音樂△醫學△外國語△宗敎△商業及簿記
△雜種△各種學校清國留學生部

同君著●最近調査 女子東京遊學案内

附錄……東京實側明細地圖

洋裝四六判美本紙數五百八十頁
定價五拾錢、郵稅八錢

女（後付の三）

中野丈夫君編

中學校 高等女學校 入學試驗問題集

凡そ何等の受驗者たるを問はず受驗者は受驗に相當する豫習の必用なるは勿論なるも前受驗者に與へられたる問題を知り其試驗の程度を究め其難易を探ることは受驗者の最も必用なる呼吸たるものと信ず本書は一應三府三十縣の中學校高等女學校に於て施したる入學試驗問題を蒐集したる者にして受驗者が其探究上に鴻大なる便益あるのみならず試驗官も其施行に尠なからざる參考たることを疑はず。

全一册

洋裝四六判並製
紙數百八十余頁
正價金拾五錢
郵稅四錢

女(後七の四)

名和昆蟲研究所長 名和靖君
少年世界記者 木村小舟君
合著

新式 昆蟲標本製作法

春は來たれり!!山笑ひ水亦笑ふ、蟄蟲新たに戸を啓きて嫩草の野、菜花の園、蜂蝶千百日毎に舞踏す、正に之人生の和樂苑、自然の秘密藏たり、此時に當り昆蟲裝成の一書生る、說は斯道の泰斗として、三十餘年を其研究に委ねたる老手、筆は當代少年文學界此種の記述に獨特の妙技ある人、書中採集の秘訣を說き、特別製作式を記せる如き、蓋し讀者を利する事多大ならん、加ふるに二百數十種の實物寫眞は、之を昆蟲圖譜として見るも愉快なるべし、あゝ錦上に花を添へ、更に蝶を舞はすとは、夫れ此書の謂か。

全一册

織田一磨君圖案
洋裝四六判紙數二百五十頁
口繪實物寫眞百數十種
挿書木版百十數個
近刊

販賣用電話 本局二六二〇番
東京 博文館 本町
振替貯金口座 東京二四〇番

永井荷風著

ふらんす物語

全一冊洋装四六判
紙數五百七十頁
石版畫寫眞版挿入

定價七十五錢
郵税八錢

日本の純詩作家として西歐藝術の中心たる佛蘭西に遊んだ人は我文學史上永井荷風氏一人しかない。されば著者がふらんす物語一卷に收めた小説脚本散文詩等多様の形式を取つた幾多の名篇は今日までの日本人が經驗した事のない愛慕歡喜悲哀絶望及内心の憂悶等あらゆる近代的鋭敏の感想の最高潮を示したもので其の文辭の幽婉典雅なる恰もヴイオロンの哀調を聽く思ひがある附録に添へた西洋音樂及オペラの評論は是亦我評論に氏を俟つて初めて聞くを及べき問題であつて兎角に經驗趣味に乏しく狹隘に陷らんとする今日の我文壇この『ふらんす物語』は正しく漠々たる砂漠に望む椰子樹の綠陰である。

東京本町 博文館

永井荷風君著

あめりか物語

三版出來

洋装四六判美本
紙數四百九十頁
毎編二色版寫眞口畫入

正價六十五錢
郵税八錢

本書は著者が明治三十六年の秋より米國に遊びて其四十年の夏佛國に向ひて紐育を去るに莅み前後五年間の見聞實歷を書き綴りたるものを取り集めたるものにして文明國の裡面を描きて遺すなし

目次

發兌元 東京本町 博文館

文學博士　箕作元八君序

現代お伽作家十二名執筆



▼口繪…武内桂舟君畫▼表紙…高村眞夫君畫

お伽テーブル

全一冊洋裝
四六判頗美本
紙數三五〇頁
近刊

天より降りしか地より湧きしか、こゝに一個の圓卓あり、名づけてお伽テーブルと云ふ、大さ太陽に及ばずと雖、和氣六合に充つべく、之に從ふ文界の明星、十指に餘ること二、思ふ昔しアーサー王の朝廷に、卓を圍みし豪傑十二名と注せられ、當時圓卓の武士とし聞かば、人々畏敬の念を起せしとかや、之は圓卓の武士にはあらで、お伽文壇の文士の團欒、お伽テーブルの名を聞かば、天下百萬の少年少女は、吾も〳〵と走せ進じて、忽ち可憐の人山を築き、喝采の聲、拍手の響、地下のアーサーの眠や覺さん、吁快又快!!!

((目次))

東京博文館本町

女(後付の六)

農業世界 第四卷第五號 增刊

蠶業手引

洋裝菊判紙數二百四十頁三色版口繪其他例號の通

正價金廿錢　郵稅貳錢　四月二十日發行

全國何れの地も將に春蠶飼育の準備を爲さんとする四月二十日を以て、蠶業手引なる好著書を發行し、以て蠶糸業家の好師友ならんことを期す、本書は專ら實驗を基礎として、之に學理を參照して記述し、しかも一冊の內に春夏秋蠶飼育の方法より、桑樹の栽培、製糸法、病蟲害の驅除豫防に至る迄、苟も蠶糸業に關する一切有用の事を網羅して餘すなく、有益にして廉價なる他書に比類なく、行文又平易にして何人にも判り易し、蠶糸業に關する士は必ず是れを一讀するを要す。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　振替口座東京二〇四〇番　博文館

女（後付の八）



オペラ香水
オペラ香油
植物性
オペラはみがき
オペラハミガキ
植物性
發賣元
東京日本橋區米澤町一ノ一
鳳舞園
電話浪花四千三拾九番

女學世界

(明治四十二年四月一日發行 毎月一回一日發行)

第九巻第五號

(明治卅三年十月二十五日 第三種郵便物認可)



小林寫眞館特製(禁轉載)

(定價金貳拾錢◎郵税貳錢)

VOL. IX. (東京市日本橋區本町三丁目博文館發行) No.5